

潤遺跡群 II

— 県道泊波多江線拡幅に伴う潤番田・潤古屋敷遺跡の調査 —

糸島市文化財調査報告書

第 6 集

2012

糸島市教育委員会

潤遺跡群 II

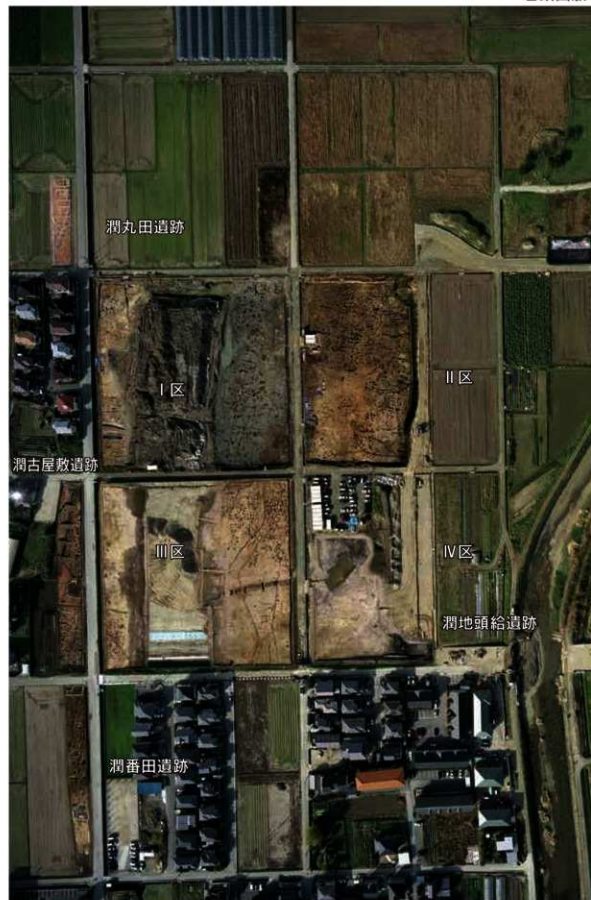
— 県道泊波多江線拡幅に伴う潤番田・潤古屋敷遺跡の調査 —

糸島市文化財調査報告書

第 6 集

2012

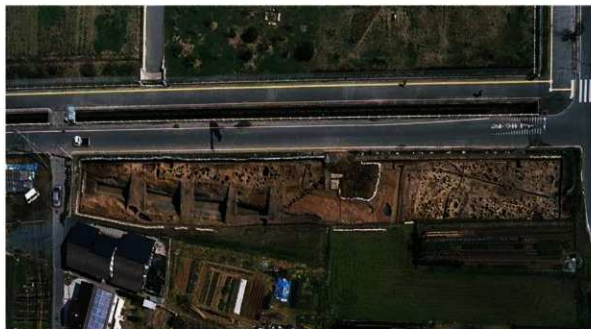
糸島市教育委員会



洞番田遺跡・洞古屋敷遺跡と洞地頭給遺跡



a 潤番田遺跡全景



b 潤古屋敷遺跡全景

序

本書は県道泊波多江線の拡幅に伴い、旧前原市教育委員会が平成21年度に発掘調査を実施し、整理は一市二町が合併して誕生した糸島市教育委員会で行った潤番田・潤古屋敷遺跡の調査記録です。

潤番田・潤古屋敷遺跡が所在する糸島市は3世紀の歴史書「魏志」倭人伝に登場する「伊都国」が所在したと考えられる場所で、古来より、中国・朝鮮半島との積極的な交流が展開され、当時の政治・経済・外交の拠点として、我が国の文化形成に重要な役割を果たしてきました。そのため、市内には弥生時代・古墳時代の遺跡を中心に、国指定史跡7箇所をはじめとする数多くの貴重な文化財が点在しており、歴史と自然が息づく素晴らしい景観を含めて、その保護と活用が必要であり、開発による活気あるまちづくりとの調整が図られているところであります。

さて、本書に収められた潤番田・潤古屋敷遺跡は県道泊波多江線の拡幅に伴う発掘調査で確認された遺跡で、弥生時代と中世を主体とする遺構・遺物が確認されています。なかでも豪族の居館の堀と思われる遺構の検出や国内で十数例のみの確認である象嵌青磁方枕の出土などは特記すべき事例で、中世の糸島の様相を解き明かす重要な情報を含んでいると考えられます。

最後になりましたが、発掘調査にあたり、ご理解とご協力をいただきました周辺住民の方々、ご指導とご助言を賜りました先生方、また、暑さや寒さを厭わず調査に参加された作業員のみなさんに、心から感謝申し上げます。

平成24年3月31日

糸島市教育委員会
教育長 菊池 俊秀

例 言

- 1 本書は糸島市潤字番田・古屋敷にて実施される県道泊波多江線拡幅事業に伴い実施した文化財調査報告書である。
- 2 本書に使用した遺構の実測は瓜生秀文・平尾和久が行った。
- 3 現場における写真および出土遺物の撮影は瓜生・平尾が行った。
- 4 現場における空中写真撮影は有限会社空中写真企画(代表 檀睦夫)に委託した。
- 5 本書に掲載した遺構図および全体図で使用した座標は国土座標系第2系を用いている。方位に関しては磁北で示している。
- 6 遺物の復元は友池真由美・木益真奈美・池村留美・津上裕子が行った。
- 7 潤番田遺跡の遺物実測は蔵田和美・田中悠太(福岡大学学生)・平尾が行い、潤古屋敷遺跡の遺物実測は蔵田・内山久世・田中・瓜生が行った。なお、潤番田遺跡出土碧玉剥片の実測は江崎靖隆が行った。
- 8 製図は藤野さゆり・蔵田・内山が行った。また、遺物断面は、須恵器を■で示した。また、器表面の■は黒斑、◎はコゲ、■はスス、■は丹塗りを示す。
- 9 遺物写真撮影は蔵田・内山の協力を得て、瓜生・平尾が行った。
- 10 本書の写真版番号は挿図中の遺物番号と統一している。なお、写真版中の遺物は主なものを選択して掲載した。
- 11 本書に掲載した遺物や記録類は、順次、伊都国歴史博物館にて収蔵管理する予定である。
- 12 本書で報告する陶磁器の分類などは、先行研究に従っており、その出典は第3章2遺構と遺物の末尾に参考文献としてまとめて掲げる。
- 13 遺物のうち、木製品は株式会社委文化に保存処理を委託した。
- 14 潤番田遺跡から出土したガラス玉類は福岡市埋蔵文化財センター田上勇一郎氏に分析を依頼し、分析結果を第4章Ⅲに収録している。
- 15 本書の執筆について、潤番田遺跡は平尾が行い、潤古屋敷遺跡は瓜生が行った。また、第4章まとめについては文末に執筆者を明記している。なお、全体の調整と編集は平尾が行った。

本文目次

| | |
|------------------------|-----|
| 第1章 はじめに | 1 |
| Ⅰ 調査の経緯 | 1 |
| Ⅱ 調査の組織 | 1 |
| 第2章 位置と環境 | 2 |
| 第3章 調査の記録 | |
| Ⅰ 潤番田遺跡 | 7 |
| Ⅰ 調査の概要 | 7 |
| Ⅱ 遺構と遺物 | 7 |
| (1) 掘立柱建物 | 7 |
| (2) 甕棺墓 | 9 |
| (3) 土坑 | 12 |
| (4) 井戸 | 33 |
| (5) 溝 | 57 |
| (6) 包含層出土遺物 | 72 |
| Ⅱ 潤古屋敷遺跡 | 78 |
| Ⅰ 調査の概要 | 78 |
| Ⅱ 遺構と遺物 | 78 |
| (1) 住居跡 | 78 |
| (2) 土坑 | 80 |
| (3) 井戸 | 81 |
| (4) 大溝 | 87 |
| (5) 溝 | 114 |
| (6) その他の遺構 | 131 |
| 第4章 まとめ | 134 |
| Ⅰ 潤番田遺跡出土象嵌青磁方枕について | 134 |
| 1 象嵌青磁方枕について | 134 |
| 2 国内出土高麗青磁方枕との比較 | 134 |
| 3 象嵌青磁方枕出土遺跡の分類と出土傾向 | 139 |
| 4 おわりに | 140 |
| Ⅱ 潤古屋敷遺跡の大溝について | 142 |
| Ⅲ 糸島市潤番田遺跡出土のガラス小玉について | 145 |

挿図目次

| | | | |
|------------------------------------------|-----------------------------------------------|--------------------------------|-----------------------------------|
| 第 1 図 糸島市の所在地 | 第28図 潤香田道跡1号井戸出土遺物実測図3(1/4) | 第60図 潤古屋敷道跡2号住居跡出土遺物実測図(1/4) | 第 9 6 図 潤古屋敷道跡2号溝土器群出土遺物実測図2(1/4) |
| 第 2 図 糸島市内道跡分布図 | 第29図 潤香田道跡2～5号井戸実測図(1/60) | 第61図 潤古屋敷道跡1号土坑実測図(1/40) | 第 9 7 図 潤古屋敷道跡2号溝土器群出土遺物実測図3(1/4) |
| 第 3 図 潤香田・潤古屋敷道跡周辺の道跡分布図 | 第30図 潤香田道跡2号井戸出土遺物実測図(1/3・1/1) | 第62図 潤古屋敷道跡2号土坑実測図(1/20) | 第 9 8 図 潤古屋敷道跡2号溝土器群出土遺物実測図4(1/4) |
| 第 4 図 潤香田道跡1・2号掘立柱建物実測図(1/60) | 第31図 潤香田道跡2号井戸出土遺物実測図2(1/3) | 第63図 潤古屋敷道跡2号土坑出土勾玉実測図(1/2) | 第 9 9 図 潤古屋敷道跡2号溝土器群出土遺物実測図4(1/4) |
| 第 5 図 潤香田道跡3号掘立柱建物・3号井戸実測図(1/60) | 第32図 潤香田道跡3号井戸出土遺物実測図(1/3) | 第64図 潤古屋敷道跡1号井戸実測図(1/60) | 第 9 9 図 潤古屋敷道跡2号溝土器群出土遺物実測図1(1/4) |
| 第 6 図 潤香田道跡4号掘立柱建物・榎・17号溝実測図(1/200) | 第33図 潤香田道跡4号井戸出土遺物実測図(1/3) | 第65図 潤古屋敷道跡2～4号井戸実測図(1/60) | 第100図 潤古屋敷道跡2号溝土器群出土遺物実測図2(1/4) |
| 第 7 図 潤香田道跡5・6号掘立柱建物実測図(1/100) | 第34図 潤香田道跡5号井戸出土遺物実測図(1/3) | 第66図 潤古屋敷道跡井戸出土遺物実測図(1/3) | 第101図 潤古屋敷道跡2号溝土器群出土遺物実測図3(1/4) |
| 第 8 図 潤香田道跡掘立柱建物出土遺物実測図(1/3) | 第35図 潤香田道跡6・7号井戸実測図(1/60) | 第67図 潤古屋敷道跡井戸出土木製品実測図(1/3) | 第102図 潤古屋敷道跡2号溝土器群出土遺物実測図4(1/4) |
| 第 9 図 潤香田道跡7・8号掘立柱建物実測図(1/100) | 第36図 潤香田道跡6号井戸出土遺物実測図(1/3) | 第68図 潤古屋敷道跡井戸出土木製品実測図2(1/3) | 第103図 潤古屋敷道跡2号溝土器群出土遺物実測図5(1/4) |
| 第10図 潤香田道跡9～11号掘立柱建物・24号溝実測図(1/100) | 第37図 潤香田道跡6号井戸出土遺物実測図2(1/3) | 第69図 潤古屋敷道跡大溝実測図(1/200) | 第104図 潤古屋敷道跡2号溝土器群出土遺物実測図6(1/4) |
| 第11図 潤香田道跡喪棺墓実測図(1/20・1/6) | 第38図 潤香田道跡6号井戸出土遺物実測図3(1/3) | 第70図 潤古屋敷道跡大溝土層図(1/50) | 第105図 潤古屋敷道跡2号溝土器群出土遺物実測図7(1/4) |
| 第12図 潤香田道跡1～5号土坑実測図(1/30) | 第39図 潤香田道跡6号井戸出土遺物実測図4(1/3) | 第71図 潤古屋敷道跡大溝出土弥生土層実測図(1/4) | 第106図 潤古屋敷道跡2号溝土器群出土遺物実測図8(1/3) |
| 第13図 潤香田道跡1・2号土坑出土遺物実測図(1/3) | 第40図 潤香田道跡6号井戸出土遺物実測図5(1/3) | 第72図 潤古屋敷道跡大溝出土生活雑器実測図1(1/3) | 第107図 潤古屋敷道跡2号溝土器群出土遺物実測図9(1/3) |
| 第14図 潤香田道跡3～5号土坑出土遺物実測図(1/3) | 第41図 潤香田道跡7号井戸出土遺物実測図(1/3) | 第73図 潤古屋敷道跡大溝出土生活雑器実測図2(1/3) | 第108図 潤古屋敷道跡2号溝土器群出土遺物実測図10(1/3) |
| 第15図 潤香田道跡6～21号土坑実測図(1/30) | 第42図 潤香田道跡1・2号溝実測図(1/60) | 第74図 潤古屋敷道跡大溝出土生活雑器実測図3(1/3) | 第109図 象嵌青磁方枕各部名称 |
| 第16図 潤香田道跡5～9号土坑出土遺物実測図(1/3) | 第43図 潤香田道跡1・2号溝出土遺物実測図1(1/3) | 第75図 潤古屋敷道跡大溝出土生活雑器実測図4(1/3) | 第110図 潤香田道跡方枕実測図、想定復元図(1/2) |
| 第17図 潤香田道跡10・11、13～24号土坑出土遺物実測図(1/3・1/6) | 第44図 潤香田道跡2号溝出土遺物実測図2(1/3) | 第76図 潤古屋敷道跡大溝出土陶磁器実測図(1/3) | 第111図 象嵌青磁方枕集成(1/3) |
| 第18図 潤香田道跡22～30号土坑実測図(1/30) | 第45図 潤香田道跡3～12・14号溝実測図(1/100) | 第77図 潤古屋敷道跡大溝出土陶磁器実測図2(1/3) | 付図1 潤香田道跡全体図(1/200) |
| 第19図 潤香田道跡12・25～36号土坑出土遺物実測図(1/3) | 第46図 潤香田道跡4・5号溝出土遺物実測図(1/3) | 第78図 潤古屋敷道跡大溝出土陶磁器実測図3(1/3) | 付図2 潤古屋敷道跡全体図(1/200) |
| 第20図 潤香田道跡31～46号土坑実測図(1/30) | 第47図 潤香田道跡5・6号溝トレンチ・6号溝出土遺物実測図(1/3) | 第79図 潤古屋敷道跡大溝出土陶磁器実測図4(1/3) | 付図3 潤古屋敷道跡大溝実測図(1/200) |
| 第21図 潤香田道跡47～59号土坑実測図(1/30) | 第48図 潤香田道跡7・10～14号溝出土遺物実測図(1/1・1/3) | 第80図 潤古屋敷道跡大溝出土陶磁器実測図5(1/3) | |
| 第22図 潤香田道跡38～55号土坑出土遺物実測図(1/3) | 第49図 潤香田道跡13・15・16・18・19号溝実測図(1/100) | 第81図 潤古屋敷道跡大溝出土木製品実測図(1/3) | |
| 第23図 潤香田道跡60～65号土坑実測図(1/30) | 第50図 潤香田道跡20・22・23・25号溝実測図(1/100) | 第82図 潤古屋敷道跡大溝出土木製品実測図2(1/3) | |
| 第24図 潤香田道跡土坑出土金属器・土製品・石器実測図(1/3) | 第51図 潤香田道跡17号溝出土遺物実測図(1/3) | 第83図 潤古屋敷道跡大溝出土木製品実測図3(1/3) | |
| 第25図 潤香田道跡1号井戸実測図(1/60) | 第52図 潤香田道跡18・20・22・24・25号溝出土遺物実測図(1/3) | 第84図 潤古屋敷道跡大溝出土木製品実測図4(1/3) | |
| 第26図 潤香田道跡1号井戸出土遺物実測図(1/3) | 第53図 潤香田道跡包含層出土遺物実測図1(1/3) | 第85図 潤古屋敷道跡大溝出土木製品実測図5(1/3) | |
| 第27図 潤香田道跡1号井戸出土遺物実測図2(1/3) | 第54図 潤香田道跡包含層出土遺物実測図2(1/3) | 第86図 潤古屋敷道跡大溝出土木製品実測図6(1/3) | |
| | 第55図 潤香田道跡包含層出土遺物実測図3(1/3) | 第87図 潤古屋敷道跡大溝出土木製品実測図7(1/3) | |
| | 第56図 潤香田道跡包含層出土鉄器・銅銭・青銅器・ガラス玉実測図(1/1・1/2・1/3) | 第88図 潤古屋敷道跡大溝出土木製品実測図8(1/3) | |
| | 第57図 潤香田道跡包含層出土石器・土製品(1/3) | 第89図 潤古屋敷道跡大溝出土木製品実測図9(1/3) | |
| | 第58図 潤古屋敷道跡1号住居跡実測図(1/40) | 第90図 潤古屋敷道跡大溝出土木製品実測図10(1/3) | |
| | 第59図 潤古屋敷道跡2号住居跡実測図(1/40) | 第91図 潤古屋敷道跡大溝出土木製品実測図11(1/3) | |
| | | 第92図 潤古屋敷道跡1・2号溝実測図(1/100) | |
| | | 第93図 潤古屋敷道跡1号溝土器群実測図(1/40) | |
| | | 第94図 潤古屋敷道跡2号溝土器群実測図(1/40) | |
| | | 第95図 潤古屋敷道跡2号溝土器群出土遺物実測図1(1/4) | |

図版目次

| | |
|-----------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------|
| 巻頭図版1 潤香田遺跡・潤古屋敷遺跡と 潤地頭給道跡 | 図版 19 a. 大溝土層 b. 1号溝全景 c. 2号溝全景 d. 2号溝土器出土状況 e. 3号溝全景 |
| 巻頭図版2 a.潤香田遺跡全景 b.潤古屋敷遺跡全景 | 図版 20 2号住居・井戸・大溝出土遺物 |
| 図版 1 a.潤香田遺跡調査区南側遠景 b.潤香田遺跡調査区南側全景 | 図版 21 大溝出土遺物 |
| 図版 2 a.潤香田遺跡調査区北側遠景 b.潤香田遺跡調査区北側全景 | 図版 22 大溝出土遺物 |
| 図版 3 a.潤香田遺跡調査区南側谷部全景 b.2号溝・1・2号井戸全景 | 図版 23 大溝・2号溝出土遺物 |
| 図版 4 a.4・5・8～10号竪立柱建物全景 b.8～10号竪立柱建物全景 | 図版 24 2号溝出土遺物 |
| 図版 5 a.糞棺検出状況 b.24号土坑検出状況 c.2号溝完掘状況 | 図版 25 2号溝・3号溝・表採出土遺物 |
| 図版 6 a.潤香田遺跡出土象嵌青磁方枕 b.潤香田遺跡出土象嵌青磁 | 図版 26 表採・その他の出土遺物 |
| 図版 7 1号～3号井戸出土遺物 | |
| 図版 8 4号～6号井戸出土遺物 | |
| 図版 9 6号・7号井戸出土遺物 | |
| 図版10 7号井戸・2号・5号溝出土遺物 | |
| 図版11 5号・6号・17号・24号溝出土遺物 | |
| 図版12 糞棺・土坑・包含層出土遺物 | |
| 図版13 ビット・包含層出土遺物・各遺構出土象 嵌青磁方枕 | |
| 図版14 各遺構出土象嵌青磁方枕 | |
| 図版15 a.潤古屋敷遺跡調査区全景(南より) b.潤古屋敷遺跡調査区全景(西より) | |
| 図版16 a.潤古屋敷遺跡調査区北側全景 b.潤古屋敷遺跡調査区南側全景 | |
| 図版17 a.2号住居跡全景 b.2号住居跡土器出土状況 c.1号土坑全景 d.1号土坑土器出土状況 e.1号土坑土器出土状況 | |
| 図版18 a.2号土坑全景 b.2号土坑勾玉出土状況 c.1号井戸全景 d.2号井戸全景 e.大溝全景 | |

第1章 はじめに

I 調査の経緯

平成21年10月7日に福岡県前原土木事務所所長近藤伸幸より文化財保護法94条に基づく埋蔵文化財発掘の通知が前原市（現糸島市）教育委員会に提出されたため（21前土第1875号平成21年9月25日）、試掘調査を実施し、工事区間のほぼ全面に遺構が確認された。その後、発掘調査の委託契約を締結し、発掘調査を実施した。

発掘調査は平成21年11月1日から平成22年3月31日まで行った。調査終了後から平成23年度にかけて、出土品の洗浄・接合ならびに実測・製図等を行い、平成24年3月31日に報告書を刊行した。

II 調査の組織

平成21年度に調査を実施した潤香田・潤古屋敷遺跡の調査組織は以下のとおりである。

| | 平成21年度(前原市) | 平成21年度(糸島市) | 平成23年度 |
|---------|--------------|----------------|----------|
| 総括 教育長 | 中原一憲 | 中原一憲 | 菊池俊秀 |
| | | 菊池俊秀(H22.3～) | |
| 教育部長 | 古川泰永 | 古川泰永 | 宗 哲夫 |
| 文化課長 | 池田龍司 | 池田龍司 | 池田龍司 |
| 文化課長補佐 | | 洞龍二郎 | 洞龍二郎 |
| 文化振興係長 | 平野弘志 | 洞龍二郎(兼任) | 洞龍二郎(兼任) |
| 発掘調査係長 | 角 浩行 | 角 浩行 | 角 浩行 |
| 主幹 | | 村上 敦 | 村上 敦 |
| 庶務 同 主査 | 犬丸智之 | 犬丸智之 | 犬丸智之 |
| 調査 同 主査 | 瓜生秀文(H21.9～) | 瓜生秀文 | 瓜生秀文 |
| | 主任主事 平尾和久 | 平尾和久(H22.1～主査) | 平尾和久 |

発掘作業員

土居正幸・井上優子・松永良信・河野恵津代・滝口幹子・西内章浩・下川尚江・油比武臣・池田幸介・樺島さおり・山崎聡・太田順子・蔵田和美・中野智子・三苦節代・恒次久徳・三角洋子・仲西和豊・武末幸子・西嶋佑介・芳司久美子・三島美枝子・内山久世・藤井満・西内崇浩・山本裕和・加藤鈴加・吉田るみ・佐々木聡・山下泉音・宮崎真美・日高遼太郎・小川美穂子・伊藤和雅・濱田涼子・和田治子・柏田睦子・藤森啓子・吉田弘・馬場義照・中山健介・米山八重子・川上久美子・市丸千賀子・藤木和子・末松繁光・杉山寛司・柴田敏一
整理作業員

友池真由美・末益真奈美・池村留美・津上裕子・内山久世・蔵田和美

本調査及び報告書の作成にあたっては、下記の方々から多くのご助言・ご支援を賜りました。記して感謝申し上げます（敬称略・順不同）

高正龍・片山まび・大庭孝夫・小田和利・岡寺良・大庭康時・小田富士雄・武末純一・桃崎祐輔・

木村幾多郎・谷畑美帆・山口裕平・安武憲史・藤島志孝・主税英徳・辻田淳一郎・永田史子・北島大輔・田上勇一郎・国生知子・堀本一繁・高山英朗

第2章 位置と環境

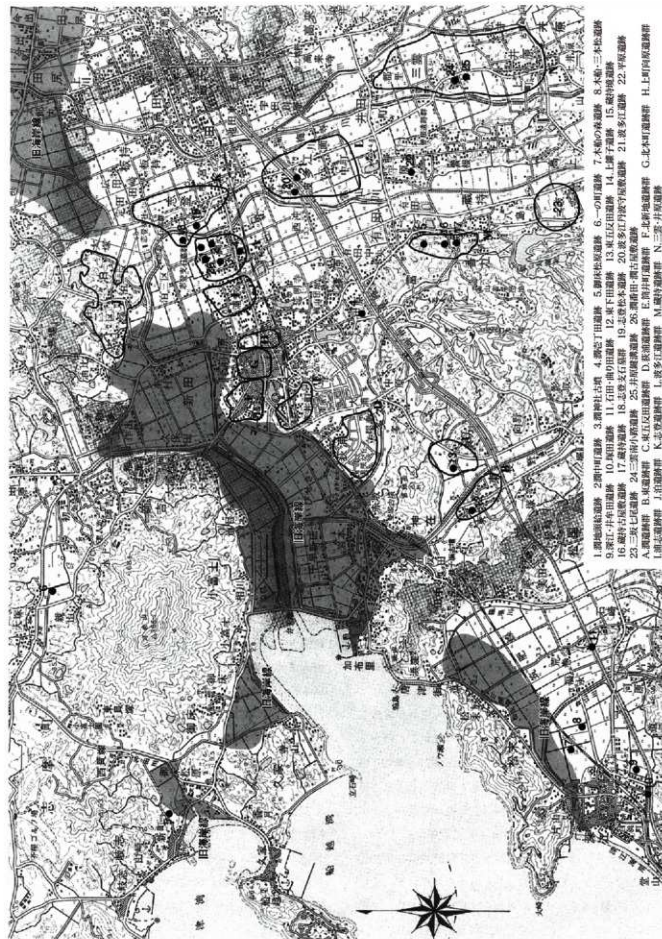
糸島市は福岡県の西端に位置する。本市も近年の市町村合併の流れを受け、平成22年1月1日に前原市と二丈町、志摩町が合併し誕生した。その結果、東は福岡市、西は唐津市、南は佐賀市と境を接することとなった。なお、文化財調査報告書も平成21年度刊行分から糸島市文化財調査報告書と名を改め、第1集から刊行を開始した。

さて、今回報告する潤香山・潤古屋敷遺跡は、糸島市の中央部、標高2.7～4.5mの低地に位置する。現在、遺跡は水田に囲まれているが、これらは近世の干拓地であり、本来は起伏にとんだ地形であったことが潤地頭給遺跡など周辺の遺跡の調査から明らかとなっている。特に北側については、潤丸田遺跡の調査において、中世の石敷道路遺構を確認するとともに、段落ちも検出し、潤遺跡群の北端の一部を確認することができた(平尾編2011)。なお、この低地帯は干拓以前、東の今津湾から西の加布里湾へ通じる海峡(糸島水道とよばれた)であったと考えられていたが、近年、下山正一氏が行った貝化石層の分布調査により、縄文時代後期以降において泊～志登の間は陸地として繋がることが確認されている。また、日野尚志氏によると、中世末期までは加布里湾から入り込んだ潟状の内海が存在し、干拓地には新開北、新開南などの地名が残る。ちなみに本調査の原因となった道路建設の計画に伴い、北側の泊地区から南の潤地区までトレンチを入れる形で事前の試掘調査を行ったが、遺跡が確認されたのは南端の潤丸田遺跡のみであり、それより北側では黒灰色粘質土の堆積がみられ、1mほど掘削すると、砂層が検出され湧水も認められた(平尾編2011)。これらのことから、潤丸田遺跡は海浜部に面していることが明らかとなった。



第1図 糸島市の所在地

潤地頭給遺跡は潤香山・潤古屋敷遺跡と道路を挟んだ東側に位置する。調査面積は22,000㎡で、これまでに約半分の調査成果を報告した(Ⅲ・Ⅳ区)。遺構は弥生時代中期の甕棺墓群と弥生時代終末期～古墳時代前期の玉作り集落跡を主とするが、Ⅰ区とⅢ区の南北には大きな谷の西側では中世の遺構が確認されている。Ⅰ区については現在整理中であるが、写真を見ると東西方向に延びる大溝が2条あり、掘立柱建物も認められる。Ⅲ区では溝1条、掘立柱建



第2図 糸島市内道路分布図

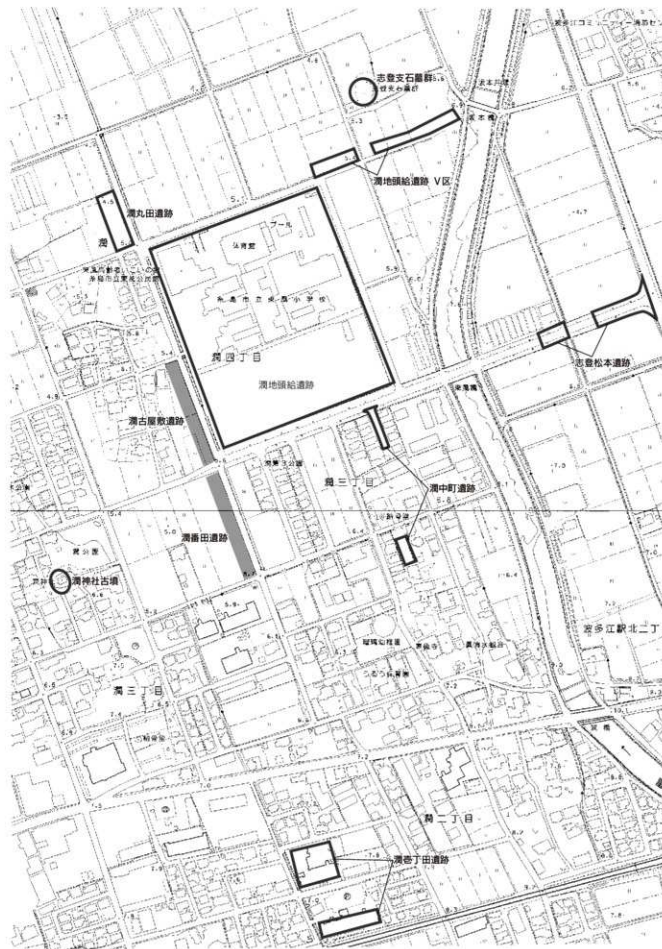
物1棟、井戸8基が確認され、石鍋や挿鉢、白磁碗、象嵌青磁、土釜などが出土している。出土品から遺構の時期は14世紀から16世紀に位置付けられる(江野編2006)。ちなみに、潤地頭給遺跡は1区西側調査区は本書で報告する潤古屋敷遺跡に東接しており、両者は一体のものとして評価する必要がある。

糸島地域では堀に囲まれた方形居館もしくは居館の堀と思われる溝が数多く確認されている。岡寺良氏は中世居館を①13世紀後半を中心とするもの、②14世紀代が中心で、15世紀後半〜継続しないもの、③16世紀代を中心とするもの、の3つに分類する(岡寺2009)。糸島地域では居館の可能性のあるものを含め11例ほど確認されている。出土遺物の関係で時期不明の居館もあるが、岡寺分類①類に含まれるものは木舟の森遺跡(村上編1995)、木舟三本松遺跡(村上編1997)、石崎曲り田遺跡(古川編2001)、二丈中学校校内遺跡(古川編2009)、熊野神社東遺跡(古川編2009)がある。その中でも12世紀後半など古い時期に該当する事例が多い。岡寺分類②類には木藤久遺跡(河合編2006)と蔵持古屋敷遺跡(瓜生編1993)が、岡寺分類③類には波多江丹波屋敷(橋口編1982)があり、糸島地域では岡寺①類に該当する古い段階の方形居館が多い。しかし、溝の一部のみが確認される事例が多く、内部構造がわかるものはほとんどない。今後、明らかにされていくであろう中山山城との関連が注目される。その他、生活関連では先述した潤地頭給遺跡Ⅲ区で掘立柱建物と井戸8基が確認されている。

一方、中世の墳墓も数多く確認されている。市内では三雲・井原遺跡にひとつの核があり²¹⁾、堺地区で木棺墓1基、松井地区で土壇墓2基(川村他編1985)、宮ノ下地区で木棺墓1基(牟田編2003)などが確認され、いずれも龍泉窯系青磁碗や白磁碗、短刀などの鉄器類が認められる。その他、加布里湾沿岸部と深江平野地域、吉井地区中山間地域の3か所に核が認められる(古川2006)。その中でも、瀬崎・中牟田遺跡の木棺墓には龍泉窯系青磁碗1、龍泉窯系青磁小皿1、同安窯青磁小皿3、陶器水差の6点を副葬している(古川編2006)。このように6点以上の陶磁器を副葬する事例は少ない。佐藤浩司氏は中世墓の副葬品の組合せから大きく7つに分類するが(佐藤2001)、糸島地域では陶磁器と土器を副葬するE1、F1タイプが多く、次に陶磁器と鉄器が伴するB4タイプが続く。そのほか、火葬土壇29基、土壇墓1基が確認され、土壇墓には象嵌青磁碗を副葬する上町木下遺跡(瓜生編1993)や陶磁器と銅銭(当十銭)を副葬する森田遺跡(村上編2000)など特異な例も存在する。また、木舟・三本松遺跡1号木棺墓からは白磁碗1、管状土鍾17、有溝石鍾6点が出土している。そのうち有溝石鍾は滑石製で石鍋の再加工品である(村上編1997・夏木2008)。なお、糸島市内では潤古屋敷遺跡などで石鍋再加工品が出土している。そのほか、近年、五輪塔などの石塔類の調査も行われ、成果を上げつつある(山内2008、山内他2008、西野2008)。

なお、糸島市内では5箇所中世山城が確認されており、縄張園などの作成・公開が進められ(山崎1998)、個々の概要もまとめられている(古川2009)。そのうち、二丈岳城跡では山岳信仰との関連も指摘されている(岡寺2011a・b)。原田氏の居城とされる高祖城跡では発掘調査が行われ、報告書も刊行されている(瓜生編2003)。

以上、糸島地域で行われた中世遺跡の調査成果を概観したが、墳墓に比べ、集落の様子が見えにくいことや山城の調査がほとんど進んでいないことなど課題も多く、今後の調査・研究の進展が期待される。



第3図 潤番田・潤古屋敷遺跡周辺の遺跡分布図

【註】

- 1) 三妻・井原遺跡について、以前は三妻（もしくは）井原+小字遺跡で表現していたが（例：三妻下遺跡）、現在は三妻・井原遺跡+小字地区（例：三妻・井原遺跡下地区）という表現で統一している。しかし、井原遺跡遺跡のように学史上、別名名詞化しているものは、その限りではない。

【参考文献】

- 瓜生秀文編1993『前原地区遺跡群Ⅲ』前原市文化財調査報告書第45集
瓜生秀文編2003『尙祖城』前原市文化財調査報告書第85集
江野道和編2006『潤地頭給遺跡1』前原市文化財調査報告書第93集
岡寺 良2009『北部九州の方形城館について—筑前市の事例を中心に—』『中世城郭研究』23
岡寺 良2011a『筑前二丈岳城の北側平坦面群の評価—山岳遺跡の遺構読み込みの観点—』『史城』8
岡寺 良2011b『山岳堂場遺跡における縄張調査・分析—平面構造の分析について—』『北部九州の山岳堂場遺跡』
佐藤尚司2001『豊前地域における中世墳墓の調査』『中世土器研究論集—中世土器研究会20周年記念論集—』
佐藤 信1998『周防系瓦質土器の分布とその背景についての検討メモ』『七隈』35
夏木大吾2008『木舟・三本松遺跡木棺墓出土滑石製土子の考察』『七隈史学』10
西野元勝2008『福岡県糸島郡二丈町千人塚の中世近世石造物』『七隈史学』10
横口達也編1982『波多江遺跡』今宿ハイパス関係埋蔵文化財調査報告書第6集 福岡県教育委員会
平尾和久編2011『潤地頭群1』糸島市文化財調査報告書第4集
古川秀幸2006『糸島地域の中世木棺墓』古川秀幸編『瀬崎・中牟田遺跡』二丈町文化財調査報告書第35集
古川秀幸2009『二丈町の中世山城』資さとも編『宝珠岳城周辺遺跡』二丈町文化財調査報告書第45集
古川秀幸編2001『石崎曲り田遺跡』二丈町文化財調査報告書第27集
古川秀幸編2009『熊野神社東遺跡』二丈町文化財調査報告書第43集
古川秀幸編2009『二丈中学校校内遺跡』二丈町文化財調査報告書第44集
牟田肇代子編2006『池田井田遺跡』前原市文化財調査報告書第91集
村上 敦編1995『木舟の森遺跡』二丈町文化財調査報告書第12集
村上 敦編1997『木舟三本松遺跡』二丈町文化財調査報告書第15集
村上 敦編2000『森田遺跡』二丈町文化財調査報告書第24集
山内亮平2008『糸島郡域における中世石塔の展開』『七隈史学』10
山内亮平2009『前原市金龍寺所在の中世近世石造物について』『金龍寺開創五百年記念誌』
山内亮平・西野元勝・桃崎祐輔2008『福岡県糸島郡二丈町一貫山・前原市東地区の中世近世石造物』『福岡大学考古資料集』2
福岡大学考古学研究室調査報告書第7冊
山崎龍雄1998『糸島地方の中世山城採集資料について』『福岡市博物館研究紀要』8

第3章 調査の記録

I 潤番田遺跡

1 調査の概要

潤番田遺跡は潤古屋敷遺跡の南側に隣接する。調査区内は本来、現状よりも起伏に富んだ遺構面であったと思われるが、中世段階に整地が行われ、この段階にある程度平らにならされたと考えられる。遺構は、甕棺墓1、掘立柱建物1棟、土坑65基、井戸7基、溝25条等確認されているが、弥生・古墳時代の遺構は甕棺と土坑に限られ、そのほかすべては中世後期に該当する。

2 遺構と遺物

(1) 掘立柱建物

1号掘立柱建物（第4図1）調査区中央部西寄りで確認された掘立柱建物である。調査区内で2間×2間確認できるが、西側は調査区外に延びている。規模は南北5.55m、東西(3.00+ α)mで、柱間は芯々で南北3.60mと1.80m、東西1.95mを測る。主軸をほぼ南北方向にもつ。

2号掘立柱建物（第4図2）調査区中央部東寄りで確認された掘立柱建物で、調査区外東側に延びて思われる。規模は2.4m×3.0mを測り、主軸は北西-南東方向にもつ。

3号掘立柱建物（第5図）調査区中央部で確認された1間×1間の小型の掘立柱建物である。その中心に3号井戸が存在することから、井戸の覆屋の可能性もある。柱間は約2.2mである。

4号掘立柱建物（第6図）調査区北側西寄りで確認された大型の掘立柱建物である。調査区内で5間×2間確認できるが、西側は調査区外に延びている。規模は南北22.20m、東西5.00mを測る。柱間は南北で約4.50m、東西で2.50mを測る。なお、この建物が正方形を呈するとするならば492.84㎡となる。建物の周りには柵が巡り、その外側には17号溝が逆L字状に屈曲して配されることから、この柵と17号溝は3号掘立柱建物に付随するものと思われる。17号溝からは青磁椀・象嵌青磁椀・因産陶器・土師器環・瓦質播鉢・土鍋などが出土している。17号溝の時期は15世紀代で掘立柱建物も近い時期に建てられたものと思われる。

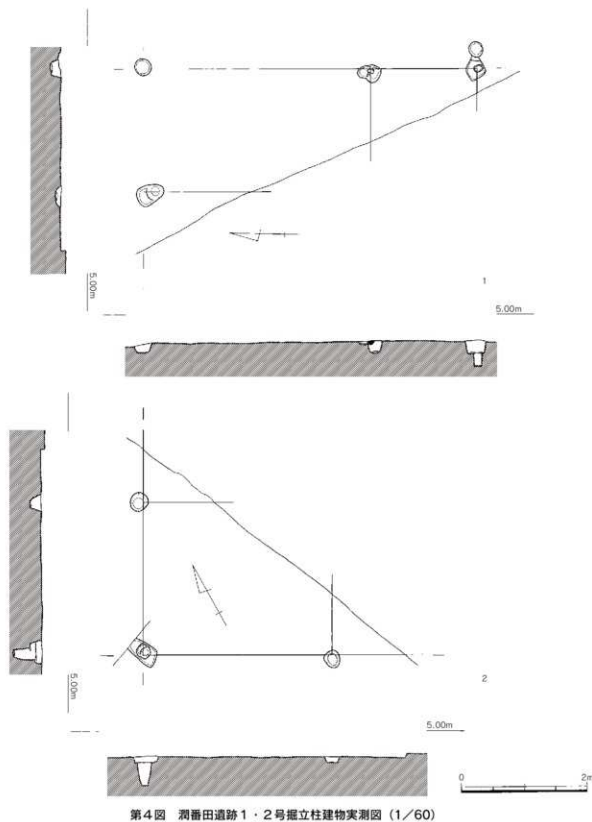
出土遺物（第8図1）1は4号掘立柱建物に伴う柵の387ピットから出土した象嵌青磁の椀である。復元口径は13.0cmで、外面に白象嵌で直線を描く。灰色の胎土の上に黄緑色の軸をかける。

5号掘立柱建物（第7図）調査区中央部西寄りで確認された掘立柱建物で4号掘立柱建物と一部重複する。調査区内で3間×2間確認できるが西側は調査区外に延びている。規模は南北6.25m、東西(8.25+ α)mを測る。柱間は2.25m～3.30mである。東西方向に主軸をもつ。

出土遺物（第8図2）2は5号掘立柱建物の柱穴の一つである220ピットから出土した土師皿である。復元口径9.4cm、器高1.8cmを測る。底部は回転切削痕を残す。

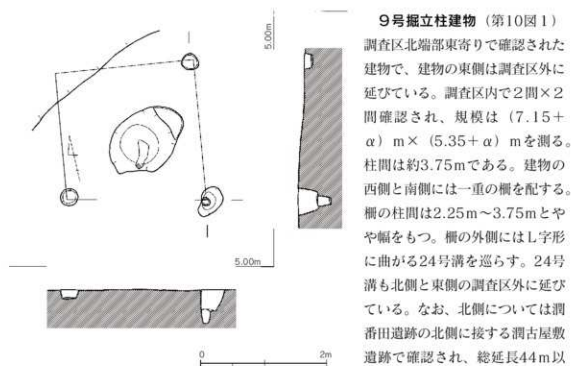
6号掘立柱建物（第7図2）調査区北側中央部で確認された掘立柱建物で、17号溝に一部切られる。東西方向に長軸をもち、2間×3間の建物である。規模は南北5.50m、東西7.50mを測るが形態的にややいびつである。柱間は2.00m～2.75mである。

7号掘立柱建物（第9図1）調査区北側西寄りで確認された掘立柱建物であるが、西側は調査区外に延びている。調査区内では1間×1間のみ確認され、柱間は東西3.50m、南北5.75mである。長軸は東西方向にもつ。



第4図 洞番田遺跡1・2号掘立柱建物実測図 (1/60)

8号掘立柱建物 (第9図2) 調査区北側東寄りで確認された掘立柱建物であるが、建物の東側は調査区外に延びている。現状で1間×2間確認され、規模は6.75m×4.50mを測る。柱間は2.35m、4.50mである。主軸は南西-北東方向にもつ。



9号掘立柱建物 (第10図1)

調査区北端部東寄りで確認された建物で、建物の東側は調査区外に延びている。調査区内で2間×2間確認され、規模は $(7.15 + \alpha) \text{ m} \times (5.35 + \alpha) \text{ m}$ を測る。柱間は約3.75mである。建物の西側と南側には一重の欄を配する。欄の柱間は2.25m~3.75mとやや幅をもつ。欄の外側にはし字形に曲がる24号溝を巡らす。24号溝も北側と東側の調査区外に延びている。なお、北側については洞番田遺跡の北側に接する洞古屋敷遺跡で確認され、総延長44m以上になる。この内側に9号掘立柱建物が見えれば、大型の建物になりそうである。24号溝からは褐釉陶器・象嵌青磁壺・瓦質押鉢・火鉢などが出土しており、時期は15世紀代に位置づけられる。

第5図 洞番田遺跡3号掘立柱建物・3号井戸実測図 (1/60)

10号掘立柱建物 (第10図2) 調査区北端東寄りで確認された建物で、建物の東側と北側は調査区外に延びている。また、9号掘立柱建物と主軸をずらしながらも、ほぼ同じ位置に存在することから建直しの可能性も考えられる。建物は住居内で2間×2間確認され、規模は調査区内で7.35m×6.50mを測る。柱間は南北方向で3.50m~3.85m、東西方向で2.25m~3.35mである。主軸は南北方向にある。なお、10号掘立柱建物は9号掘立柱建物に作る欄とはぶつかるものの、24号溝とは切り合いが無いため、24号溝の存続時期に10号掘立柱建物が営まれた可能性がある。

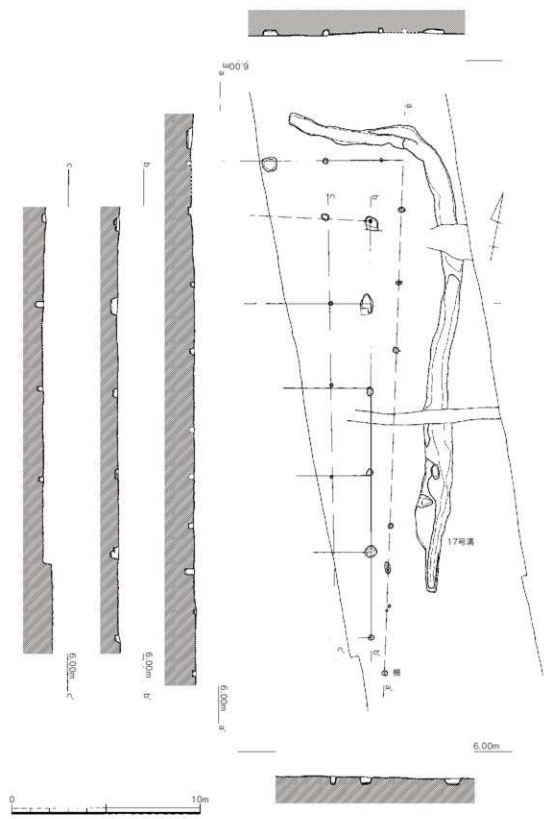
11号掘立柱建物 (第10図3) 11号掘立柱建物は調査区北端西寄りで確認された建物で、建物の西側は調査区外に延びている。調査区内では1間×2間確認され、柱間は2.35m~3.00mを測る。主軸は南北方向にもつ。

(2) 甕棺墓 (第11図)

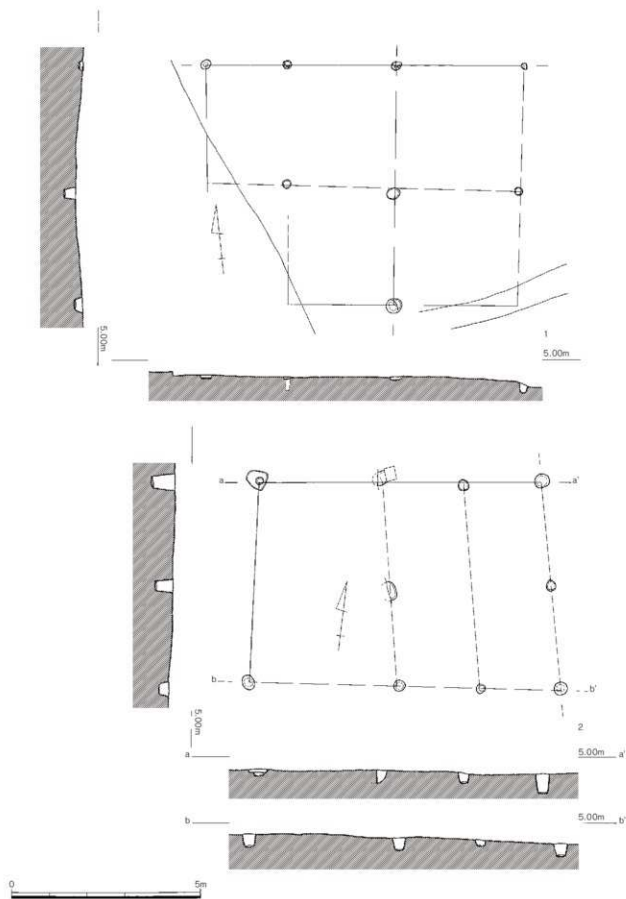
調査区南側中央で確認された小児棺で、5号溝に切られる。甕棺墓は標高4.6m付近で検出され、下甕に甕、上甕に鉢を用いる。主軸はN-60°-Eで、埋地角度は10°である。

上甕 上甕には外面丹塗りの鉢を用いる。内面にも丹が垂れている。口縁部から胴部の半分と底部を5号溝に切られ欠く。口縁部は垂れ気味で、口縁部下には三角突帯を巡らす。口径32.1cm、残存高20.0cmを測る。

下甕 下甕には甕を用いる。口径29.0cm、器高33.8cm、底径8.0cmを測る。やや跳ね上げ気味の口縁部をもち、口縁部下に低い三角突帯を巡らす。外面は縦ハケを残し、内面はナデの痕跡を



第6図 洞番田遺跡4号掘立柱建物・柵・17号溝実測図(1/200)



第7図 洞番田遺跡5・6掘立柱建物実測図(1/100)



第8図 濁番田遺跡堀立柱建物
出土遺物実測図 (1/3)

残す。なお、内面下部はスのようなものが付着し黒灰色を呈する。

(3) 土坑
1号土坑(第12図1)調査区の中央部で確認された円形土坑で、東西を他の土坑に切られる。直径144cm、深さ19.5cmを測る。

出土遺物(第13図1～3) 1は弥生時代後期の甕の口縁部か。

小片のため、口径に不安が残る。2は弥生時代中期の甕の底部である。外面は縦ハケを施し、平底である。3は器台の脚部か。外面は縦ハケ、内面下部は斜ハケを施す。傾きにやや不安が残る。

2号土坑(第12図2)調査区の南側で確認された楕円形の土坑で、南北方向に主軸をもつ。長軸198cm、短軸91cm、深さ27cmを測る。

出土遺物(第13図4～14) 4～11は弥生時代中期の甕の口縁部である。4は外面に斜ハケ、内面にナデを施す甕である。器壁を薄く仕上げる。5は口縁部直下に突帯状のふくらみをもつ。6は口縁部がやや内傾する甕で、口縁下に三角突帯を巡らせる。7・8は跳ね上げ気味の口縁部をもつ甕である。9は小型の甕で、口縁部は平坦である。外面は縦ハケ、内面はナデを施す。10はやや口縁部が傾く甕である。器壁を薄く仕上げる。11は跳ね上げ気味の口縁部をもつ甕で、口縁部に突帯状のふくらみをもつ。12～14は甕の底部である。残りが悪いものもあるが、いずれも平底で、外面に縦ハケを施す。

3号土坑(第12図3)調査区やや南寄りて確認された隅丸方形の土坑である。長軸123cm、短軸115cm、深さ16.5cmを測る。

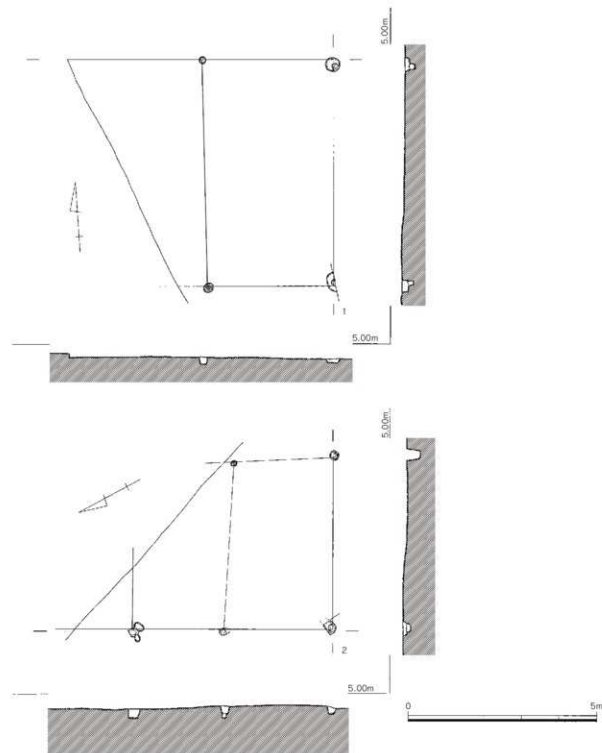
出土遺物(第14図1～9) 1～9はいずれも弥生時代中期に属する。1は発達しない、脚先口縁をもつ広口壺の口縁部である。口縁端部に黒斑をもつ。2～6は甕の口縁部である。いずれも口縁部下に突帯をもたないもので、口縁部が水平なものと、跳ね上げ気味のものに分かれる。7・8は甕の底部である。7は平底、8は上底で、いずれも外面は縦ハケを施す。9は器台の上半部である。器壁を薄く仕上げ、外面には縦ハケを施す。7・8は甕の底部である。7は平底、8は上底で、いずれも外面は縦ハケを施す。9は器台の上半部である。器壁を薄く仕上げ、外面には縦ハケを施す。

4号土坑(第12図4)調査区の南側で確認された楕円形の土坑で、北側を他の遺構に切られる。長軸は北西-南東方向にあり、現存長133cm、短軸105cm、深さ7.5cmを測る。

出土遺物(第14図10・11) 10・11は弥生時代中期の甕である。10は甕の口縁部で、やや内傾する口縁をもつ。11は甕の底部で平底である。

5号土坑(第12図5)調査区やや北寄りて確認された長楕円形の土坑である。主軸を南北方向にもつ。長軸322cm、幅76cm、深さ28.5cmを測る。

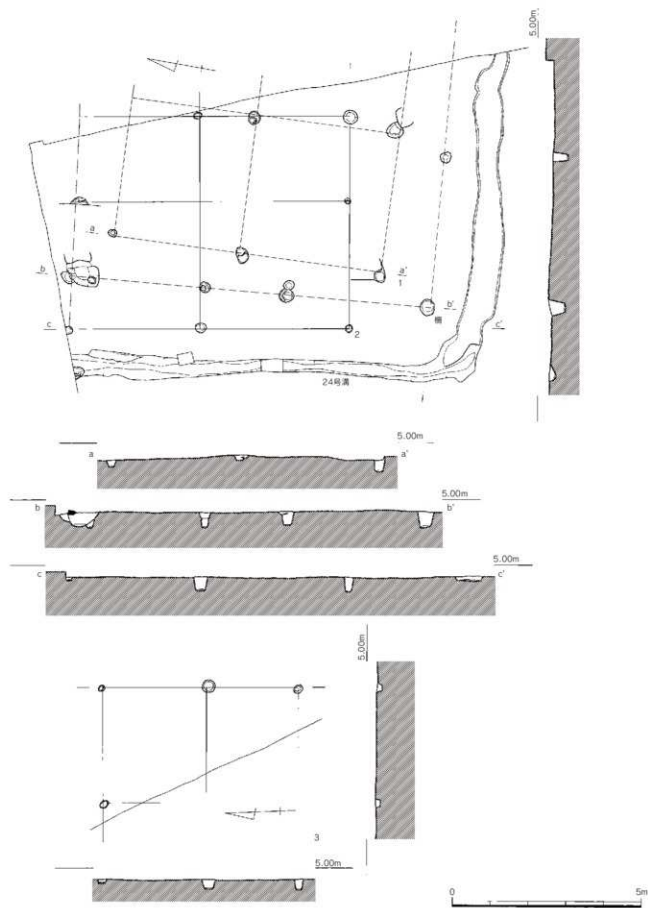
出土遺物(第14図12～15、第16図1～5) いずれも弥生時代中期の土器である。第14図12・13は甕の口縁部で、いずれも跳ね上げ口縁をもつ。14・15は甕の底部で、上げ底気味の底部で、外面に縦ハケを施す。第16図1～5は甕の口縁部である。1はやや大型の甕で、跳ね上げ気味の口



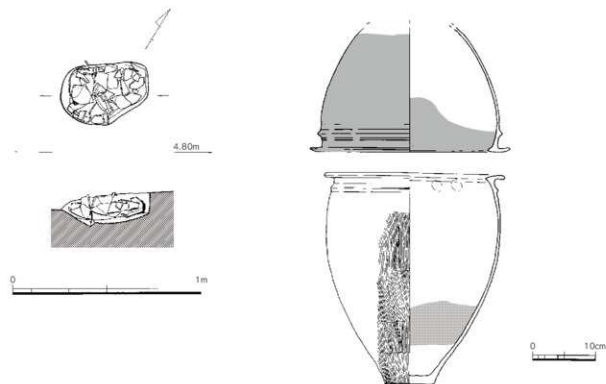
第9図 濁番田遺跡7・8号堀立柱建物実測図 (1/100)

縁部の下に三角突帯を巡らせる。2もやや跳ね上げ気味の口縁部をもつ甕で、口縁部を丸くおさめる。3は1と似た形態の甕で、低い三角突帯の下に縦ハケを施す。4はやや器壁が薄い甕で、口縁部が少し内傾する。5は小型の甕で、跳ね上げ口縁をもつ。外面は縦ハケを施す。

6号土坑(第15図1)調査区の南側で確認された隅丸方形の土坑で、南北方向に主軸をもつ。長軸115cm、幅52cm、深さ7.5cmを測る。



第10図 洞番田遺跡9～11号建物、24号溝実測図 (1/100)



第11図 洞番田遺跡墓棺墓実測図 (1/20・1/6)

出土遺物(第16図6)6は弥生時代中期の蓋の天井部小片である。天井部はナデで平滑に調整し、外面はハケを残す。

7号土坑(第15図2)調査区の中央部で確認された土坑で、東側半分を溝等に切られる。主軸は南北方向にもち、現存で長軸97cm、幅42cm、深さ16.5cmを測る。

出土遺物(第16図7)7は弥生時代中期の甕の口縁部片である。やや跳ね上げ気味の口縁部の下に三角突帯を巡らせる。

8号土坑(第15図3)調査区のやや南寄りで確認された土坑で隅丸方形を呈する。主軸を南北方向にもち、長軸112cm、短軸45cm、深さ27cmを測る。土器等は出土せず、鉄鍬が出土した。

出土遺物(第24図4)4は鉄鍬である。断面方形で厚さが8.0mmと肉厚で、先端部は平坦なる方頭式の鉄鍬である。茎部は円形で直径5.0mmを測る。

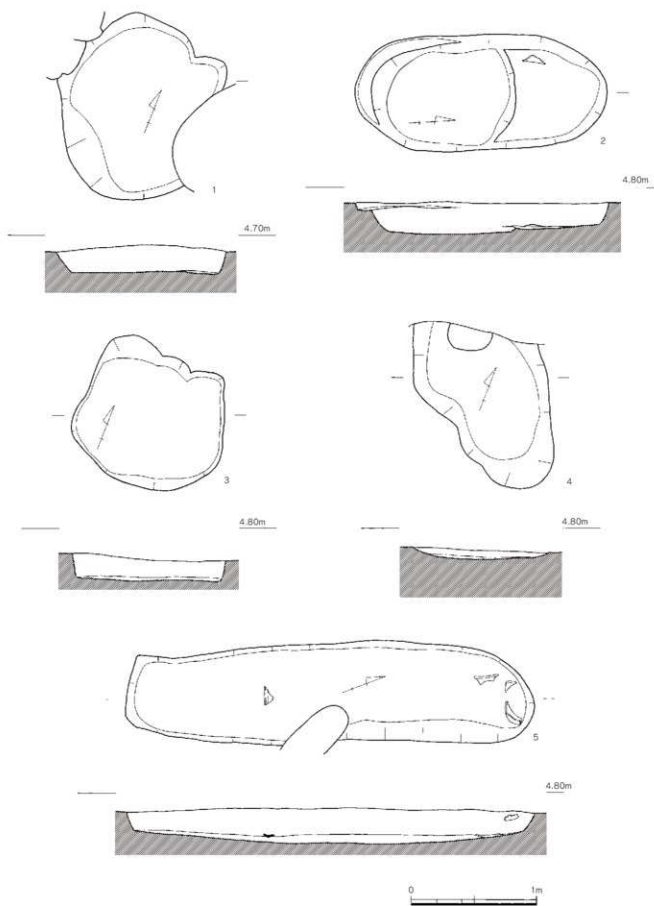
9号土坑(第15図4)調査区のやや南寄りで確認された楕円形の土坑で、南側を8号土坑に切られる。長軸64cm、短軸57cm、深さ57cmを測る。弥生土器と土師皿が出土した。

出土遺物(第16図8～11)8は弥生時代中期の甕の口縁部である。口縁部はやや垂れ下がり、ナデを施す。9は甕の底部である。小片のため底径はやや不安がある。10・11は土師皿である。10は復元口径9.0cmを測り、底部は回転系切り痕を残す。11は口縁端部を欠くため、正確な口径は不明であるが、底部は回転系切り痕を残す。

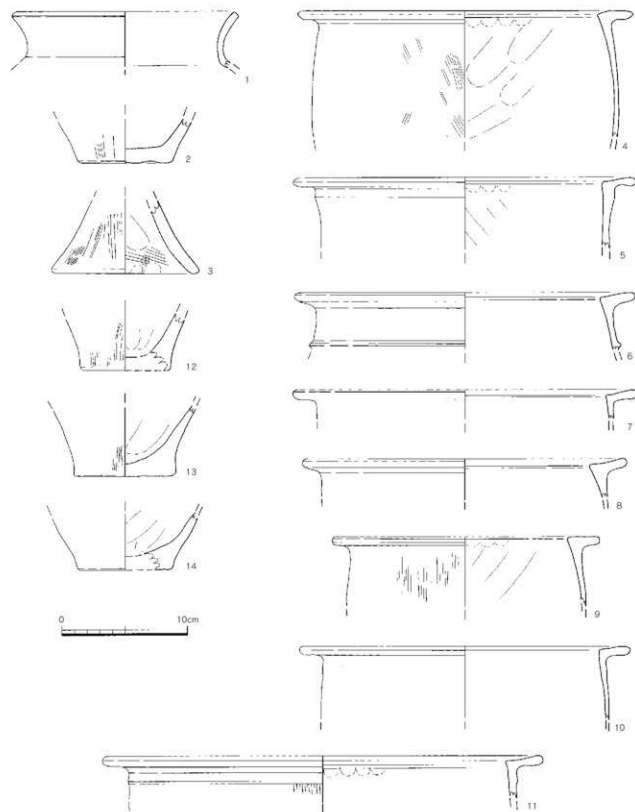
10号土坑(第15図5)調査区南寄りで確認された土坑で、東西両側を土坑等に切られるため、平坦面の形状は不明である。現存で長さ72cm、幅35cm、深さ4.5cmを測る。

出土遺物(第17図1)1は弥生時代中期の甕の口縁部である。跳ね上げ気味の口縁の下には低い三角突帯を巡らす。

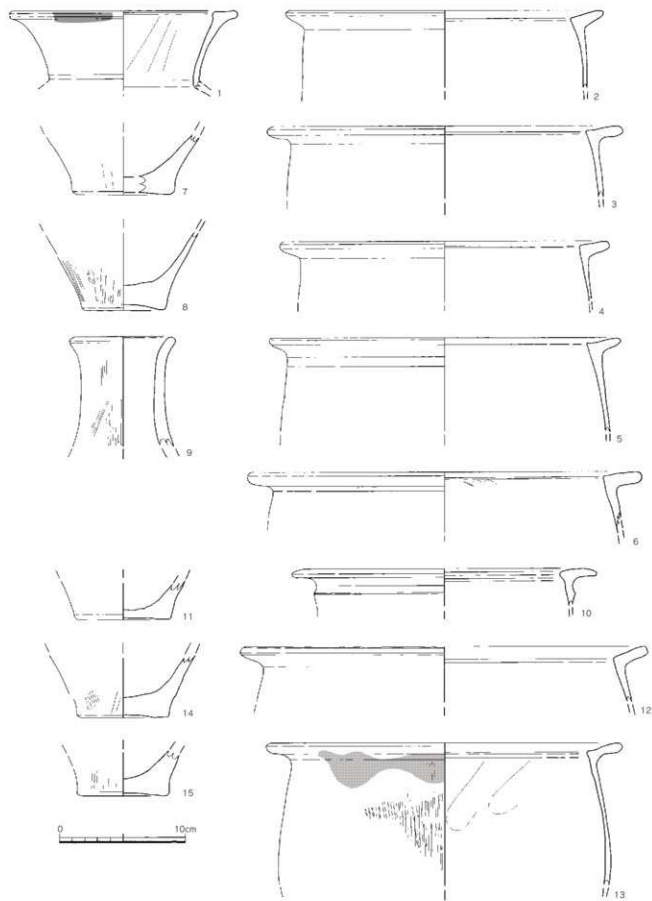
11号土坑(第15図6)6は調査区南側で確認された円形土坑で、土坑内に2つの小ピットをもつ。



第12図 洞番田遺跡1～5号土坑実測図 (1/30)



第13図 洞番田遺跡1・2号土坑出土遺物実測図 (1/3)



第14図 瀬番田遺跡3～5号土坑出土遺物実測図(1/3)

直径69cm、深さ24cmを測る。

出土遺物(第17図2)2は弥生時代中期の甕である。やや垂れ下がる口縁部をもつ。

12号土坑(第15図7)調査区の中央部西寄りで確認された土坑で、13号土坑を切る。南北方向に主軸をもつ、隅丸方形の土坑である。長軸70cm、幅48cm、深さ24cmを測る。

出土遺物(第19図1)1はゆかみの大きい土師器の坏である。口径13cm、器高2.1cmを測る。底部は回転糸切り痕と板状圧痕を残す。また、底部約1/3に黒斑をもつ。

13号土坑(第15図8)12号土坑に切られる土坑で、長軸102cm、幅76cm、深さ10.5cmを測る。

出土遺物(第17図3)3は弥生時代中期の甕の底部である。底部を欠くが、平底と思われる。

14号土坑(第15図9)調査区の北寄りで確認された楕円形土坑で、南北方向に主軸をもつ。長軸45cm、短軸39cm、深さ9.0cmを測る。

出土遺物(第17図4)4は弥生時代中期の甕の底部である。外面は縦ハケを施し、底部は上げ底である。

15号土坑(第15図10)調査区の北寄りで確認された土坑であるが、ピットに切れられ、平面形態は不明である。長さ48cm、幅20cm、深さ4.5cmを測る。

出土遺物(第17図5)5は弥生時代中期の甕の口縁部である。跳ね上げ口縁の下に三角突帯を巡らす。胴がやや張ると思われる。

16号土坑(第15図11)調査区中央部で確認された土坑であるが、西側を溝等に切られる。長さ48cm、幅36cm、深さ7.5cmを測る。

出土遺物(第17図6)6は弥生時代中期の甕の底部である。底は上げ底気味で、外面に縦ハケを施す。底部付近に黒斑をもつ。

17号土坑(第15図12)調査区中央部で確認された楕円形の土坑である。東西方向に主軸をもつ。長軸42cm、短軸33cmを測る。

出土遺物(第17図7)7は弥生時代中期の甕の底部である。底部は上げ底気味で、やや内湾しつつ広がる。外面は丹塗りである。

18号土坑(第15図13)調査区北寄りで確認された土坑であるが、西側を別の土坑に切られ、平面形態は不明である。現存で長さ55cm、幅45cm、深さ18cmを測る。

出土遺物(第17図8)8は弥生時代中期の甕の底部である。やや上げ底気味であるが、中心部を欠くため詳細は不明である。

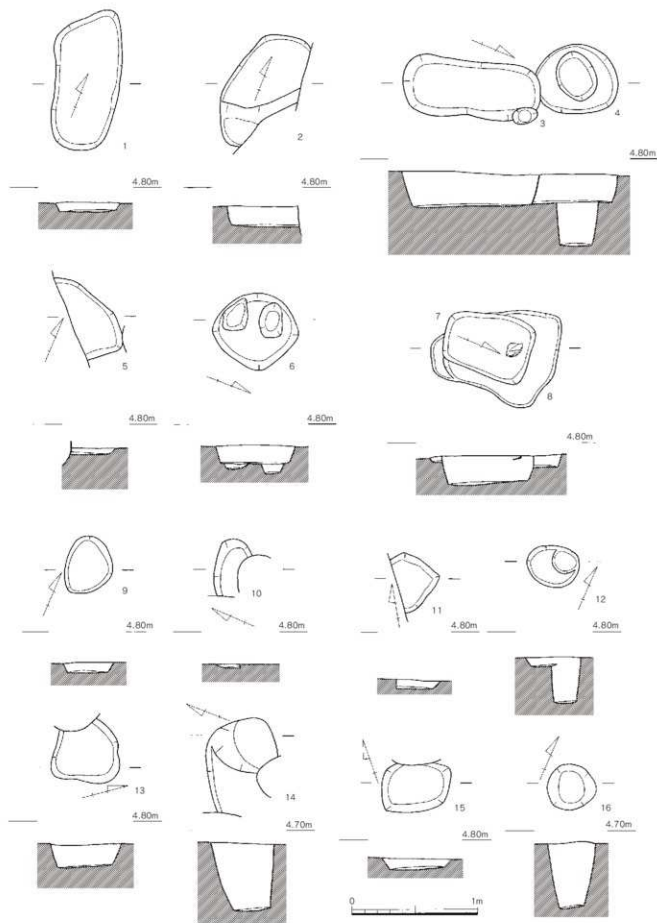
19号土坑(第15図14)調査区北寄りで確認された土坑であるが、南側が別の土坑に切られ、平面形態は確認できない。現存長75cm、幅60cm、深さ54cmを測る。

出土遺物(第17図9)9は弥生時代中期の甕の口縁部である。口縁部断面は三角形で、口縁部下に三角突帯を巡らす。器壁は比較的薄く仕上げる。

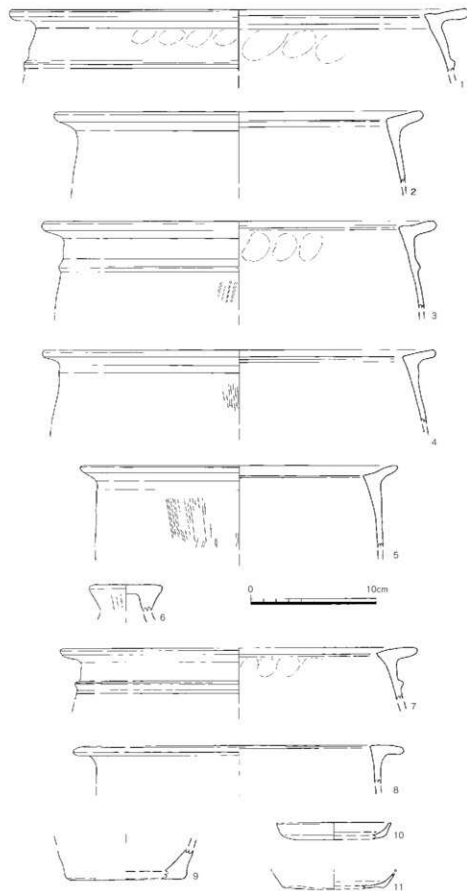
20号土坑(第15図15)調査区南側で確認された土坑で、北側の一部を別の土坑に切られる。主軸は東西方向にもち、長軸55cm、短軸39cm、深さ10.5cmを測る。

出土遺物(第17図10)10は弥生時代中期の甕棺と思われる大型甕の口縁部片である。小片のため径は復元できなかった。

21号土坑(第15図16)調査区中央部付近で確認された土坑で、平面円形で柱穴的である。直径37.5cm、深さ54cmを測る。



第15図 洞番田遺跡6～21号土坑実測図 (1/30)



第16図 洞番田遺跡5～9号土坑出土遺物実測図 (1/3)

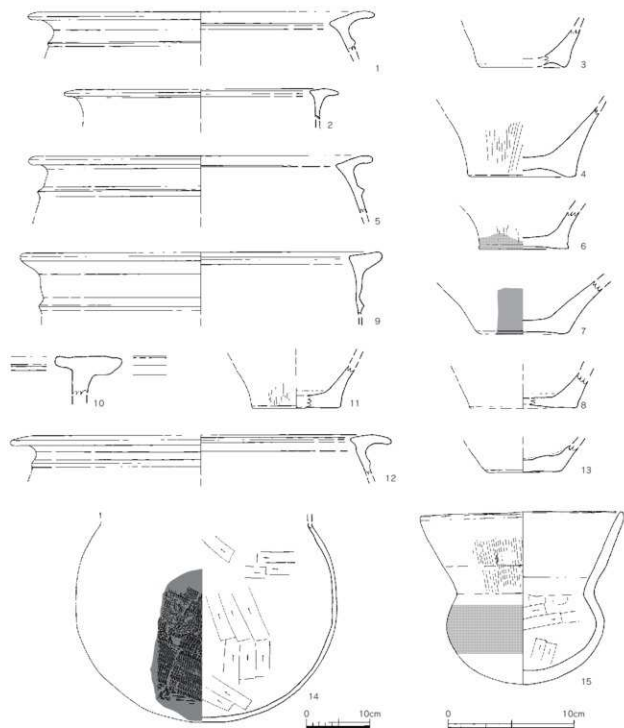
出土遺物(第17図11)は弥生時代中期の甕の底部である。外面は縦ハケを施し、平底である。

22号土坑(第18図1)調査区中央部で確認された小さな楕円形土坑である。長軸24cm、短軸19cm、深さ39cmを測る。

出土遺物(第17図12)は弥生時代中期の甕の口縁部である。やや垂れ下がる口縁の下に低い三角突帯を巡らせる。

23号土坑(第18図2)調査区北寄りで確認された小型の円形土坑である。直径24cm、深さ30cmを測る。

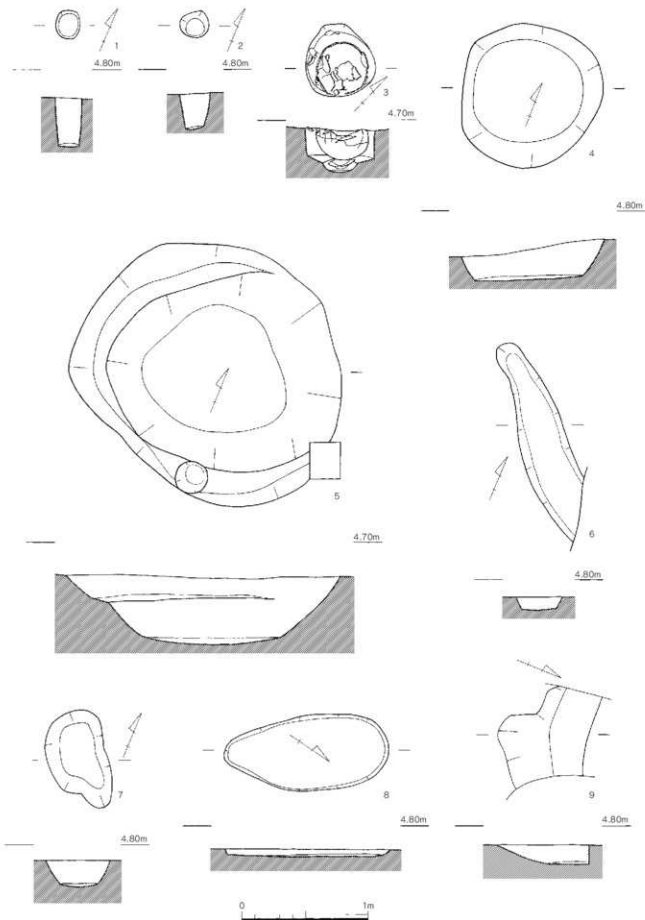
24号土坑(第18図3)調査区南側で確認された楕円形土坑で、東西方向に主軸をもつ。長軸58cm、短軸57cm、深さ33cmを測る。土坑にはまり込むようにして大型壺が確認されたので、当初、甕棺と思い調査を行ったが、壺の下から小型丸底壺が出土したため土坑と判断した。



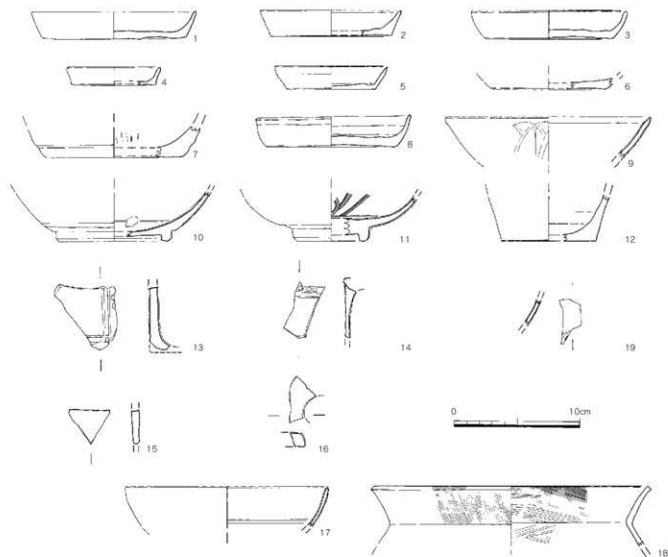
第17図 洞番田遺跡10.11、13～24号土坑出土遺物実測図(1/3・1/6)

出土遺物(第17図14・15)14は胴部最大径41.7cmを測る土師器の大型壺か。内面はヘラケズリ、外面は斜ハケを施す。底部は丸底で、胴部下半部に黒斑をもつ。15は小型丸底壺である。口縁端部の調整の粗さや器壁の厚さからやや新しい時期のものである。外面の口頸部には縦ハケを残し、胴部内面はヘラケズリを施す。なお、胴部外面にはスガが残る。

25号土坑(第18図4)調査区北寄りで確認された円形土坑である。長軸117cm、短軸112cm、深さ25.5cmを測る。



第18図 洞番田遺跡22～30号土坑実測図 (1/30)



第19図 湖番田遺跡1・25～36号土坑出土遺物実測図(1/3)

出土遺物(第19図2)2は土師器の坏である。復元口径11.2cm、器高2.0cmを測る。底部は回転系切り痕を残す。

26号土坑(第18図5)調査区のやや北寄りで確認された円形土坑である。直径282cm、深さ52.5cmを測る。当初、井戸と考えたが、断面が逆台形で、深さも比較的浅く湧水もなかったため、土坑と判断した。

出土遺物(第19図3・4、第24図5・6)第19図3は土師器の坏である。復元口径12.2cm、器高2.2cmを測る。4は土師皿である。復元口径7.5cm、器高1.4cmを測る。いずれも底部は回転系切り痕と板状圧痕を残す。第24図5・6は鉄滓である。それぞれ重さ15.29g、14.12gを測る。

27号土坑(第18図6)調査区の中央部やや北寄りで確認された溝状の土坑である。長軸は東西方向で、東側を別遺構に切られる。現存長150cm、幅39cm、深さ12cmを測る。

出土遺物(第19図5)5は土師皿で復元口径9.0cm、器高1.8cmを測る。底部は回転系切り痕を残す。

28号土坑(第18図7)調査区の南側で確認された土坑で、北西-南東方向に主軸をもつ。長軸81cm、短軸48cm、深さ22.5cmを測る。

出土遺物(第19図6、第24図13)第19図6は土師器の坏の底部片である。底部は回転系切り痕を残す。第24図13は双穴の駒か。直径1.5～1.7cm、厚さ6.5mm、重さ1.8gを測る。白色を呈し、その重さから骨製と思われる。

29号土坑(第18図8)調査区の南側で確認された楕円形土坑である。主軸を北西-南東方向にもつ。長軸132cm、短軸61cm、深さ6cmを測る。

出土遺物(第19図7)7は土師質の楕鉢底部片である。5本1単位の桴をもつ。底部は板状圧痕が残る。

30号土坑(第18図9)調査区北側で確認された不整形土坑で、東西ともに別遺構に切られる。現存長さ72cm、幅69cm、深さ15cmを測る。

出土遺物(第19図8)8は土師器の坏である。口径12.2cm、器高2.6cmを測り、底部は回転系切り痕と板状圧痕を残す。

31号土坑(第20図1)調査区中央部付近で確認された隅丸方形の土坑である。東西方向に主軸をもち、長軸102cm、短軸93cm、深さ30cmを測る。

出土遺物(第19図9)9は龍泉窯系青磁碗の上半部で口径は16cmに復元される。外面は鎔蓮弁文を施す。白灰色の胎土の上に淡緑色の釉が掛かる。

32号土坑(第20図2)調査区北寄りで確認された円形土坑で、直径63cm、深さ52cmを測る。

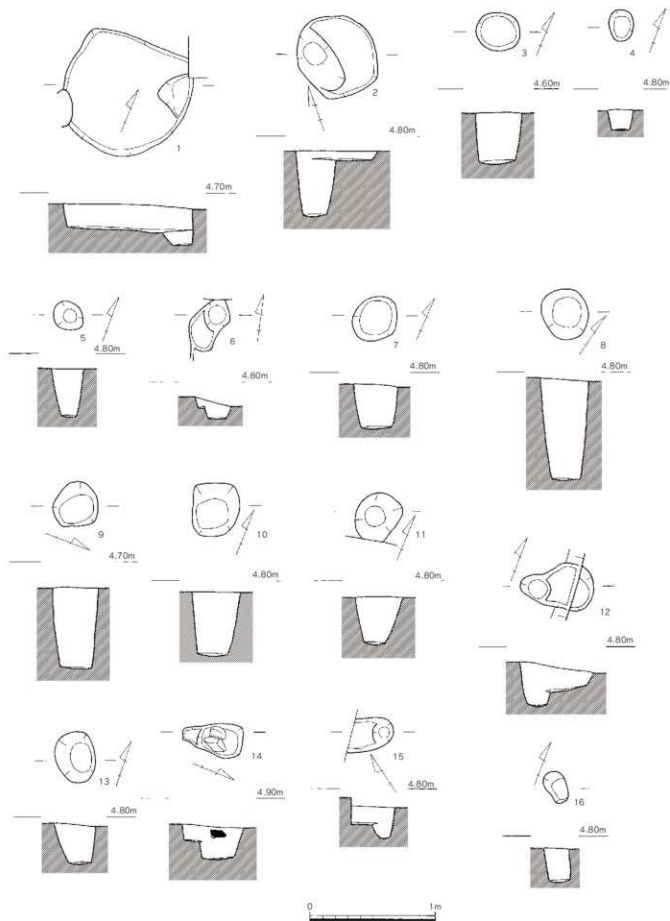
出土遺物(第19図10)10は青磁碗の下半部で、底径は8.6cmに復元される。内面には白色土による目地が残る。外面の軸は高台まで及ばず、高台から内側には回転ヘラズリが施される。黄灰色の胎土の上に、黄緑色の釉が掛かっているために、全体的に黄味を帯びている。

33号土坑(第20図3)調査区中央部付近で確認された円形土坑で、直径36cm、深さ42cmを測る。

出土遺物(第19図11・12)11は青磁碗の下半部で、底径は5.4cmに復元される。白灰色の胎土に淡緑色の釉が掛かるが、外面は高台畳付までには及ばない。高台内面の割りは浅く、底部は肉厚である。内面は片切彫で花文を描く。12は陶器の壺底部片か、復元底径は7.4cmで、内外面ともに回転横ナデが施されるが、全体的に灰を被っているため、詳細は不明である。底部には砂目地が1箇所残る。

34号土坑(第20図4)調査区中央部で確認された小土坑で長軸25cm、短軸19cm、深さ16cmを測る。

出土遺物(第19図13～15)13～15は象嵌青磁方枕の小片である。いずれも接合しないため、個々に報告する。13は方枕の角部片で5.0cm×4.6cmほど残り、厚さは8.5mmを測る。胎土は淡灰色でその上に淡緑色が掛かる。ただ、釉の透明度が高いのか、胎土の灰色が表面にでて、全体的に灰色味が強い。内面にも釉が及ぶが、厚くかかっているため発色がよい。象嵌は二重の界線を白象嵌で表現するほかは認められない。14は4cm×2cm程度の小片で色調的な特徴は13と同じである。しかし、13よりも端の部分が残っており、二重界線の外側に直径4mmほどの円文を施し、その外側に再び界線を巡らせることが確認できた。また、器壁は4～5mm程度と薄く仕上げられている。15は象嵌等が認められないが、屈曲がない板状の青磁は方枕の可能性が高いことから図を掲載しておく。平面は一辺3.3cm程度の三角形を呈し、厚さは6mm程度である。なお、34号土坑からは方枕のほかに出土遺物が無いことから、方枕の時期は特定できない。



第20図 洞番田遺跡31~46号土坑実測図(1/30)

35号土坑(第20図5)調査区中央部で確認された円形小土坑で、直径27cm、深さ39cmを測る。

出土遺物(第19図16)16は象嵌青磁方枕の側面円形透かし付近の小片である。厚さは1.1cmほどである。内外面ともに軸が厚くかかる。なお、35号土坑からは方枕のほかには出土遺物が無いことから、方枕の時期は特定できない。

36号土坑(第20図6)調査区南寄りで確認された不整形土坑で、長軸43cm、短軸24cm、深さ13cmを測る。南北方向に主軸をもつ。

出土遺物(第19図17・18)17は象嵌青磁の椀の上半部である。復元口径は15.8cmで、灰色の胎土の上に、鈍い緑釉をかける。内面には白象嵌で二重界線を巡らす。18は弥生時代後期の甕の口縁部である。流れ込みか。

37号土坑(第20図7)調査区北側で確認された円形小土坑で、直径37cm、深さ36cmを測る。

出土遺物(第19図19)19は象嵌青磁の碗か壺である。小片であるため傾き等不明である。図の下部に白象嵌と黒象嵌で花卉状の模様を描く。

38号土坑(第20図8)調査区の北側で確認された円形小土坑で、直径34cm、深さ81cmを測る。

出土遺物(第22図1・2)1は瓦質の播鉢で、復元口径は26cmである。口縁端部は外傾する。外面は横ナデを施すが、接統痕が残る。内面は横ハケの後に、播目を入れるが剥離しているため詳細は不明である。2は土師皿である。復元口径9.0cm、器高2.0cmを測り、口縁端部を内側から打ち欠く。底部は回転糸切り痕を残す。

39号土坑(第20図9)調査区の中央部で確認された円形小土坑で、直径37.5cm、深さ66cmを測る。

出土遺物(第22図3)3は瓦質の播鉢で、図上で完形で復元される。復元口径26cm、底径8.4cm、器高10.3cmを測る。口縁端部は外傾し、底部には板状圧痕を残す。外面は横ナデと斜ハケを施すが接統痕が残る。内面は横ハケのあとに5本1単位の播目を入れる。

40号土坑(第20図10)調査区北寄りで確認された隅丸方形の土坑で、南北方向に主軸をもつ。長軸45cm、短軸39cm、深さ52cmを測る。

出土遺物(第22図4)4は瓦質の播鉢である。復元口径27.6cmを測る。口縁部は肥厚しつつ膨らみ、口縁端部は外傾する。外面は横ナデとオサエで調整するが接統痕が残る。内面は横ハケの後に4本1単位の播目を入れる。

41号土坑(第20図11)調査区南側で確認された円形小土坑で、南側を別の遺構に切られる。直径37.5cm、深さ37.5cmを測る。

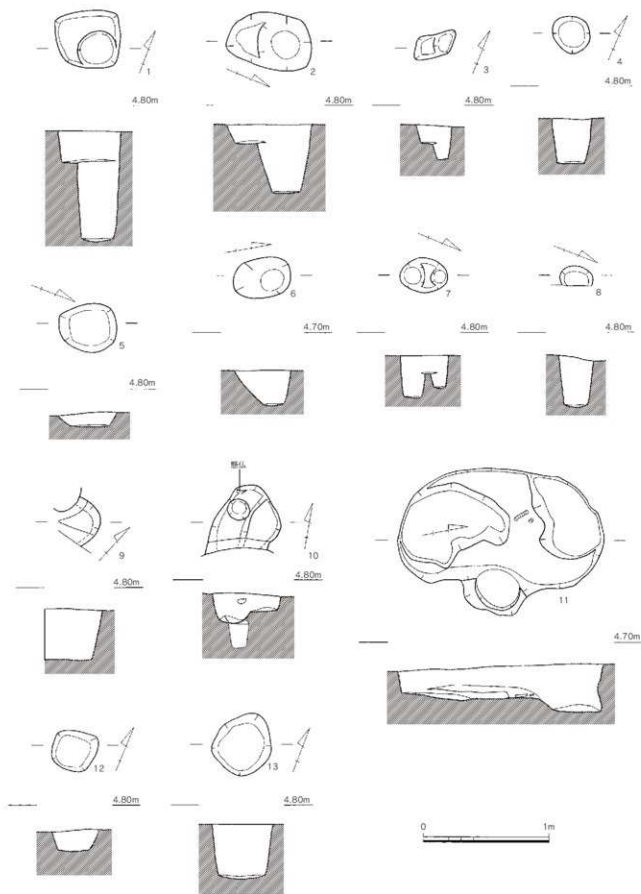
出土遺物(第22図5)5は土師質の茶釜である。肩部には耳が伴い、外面の3箇所にスタンプ文で円文を配する。内面は横ハケを施す。外面はスガが付着している。

42号土坑(第20図12)調査区の南側で確認された不整形土坑で、東西方向に主軸をもつ。長軸60cm、短軸36cm、深さ34cmを測る。

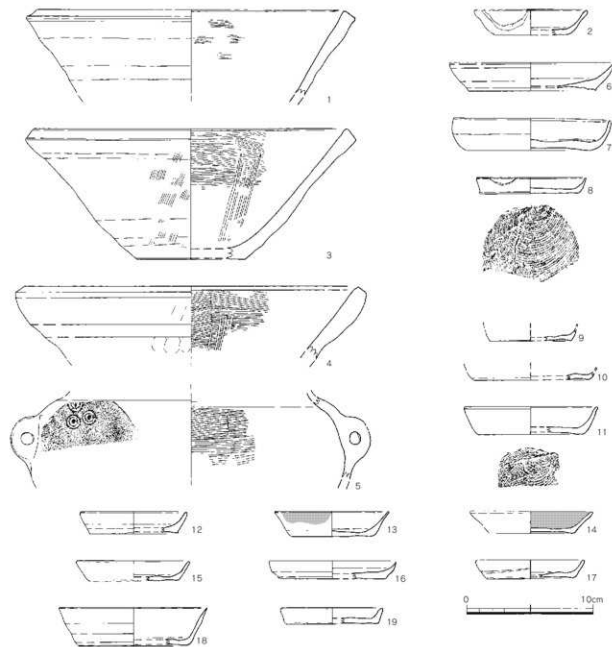
出土遺物(第22図6)6は土師器の坏である。復元口径13.0cm、器高2.2cmを測る。底部は回転糸切り痕を残す。

43号土坑(第20図13)調査区の南側で確認された楕円形小土坑で、南北方向に主軸をもつ。長軸40cm、短軸33cm、深さ33cmを測る。

出土遺物(第22図7)7は土師器の坏で口径12.5cm、器高2.6cmを測る。底部は上げ底気味で



第21図 洞番田遺跡47～59号土坑実測図(1/30)



第22図 洞番田遺跡38～55号土坑出土遺物実測図 (1/3)

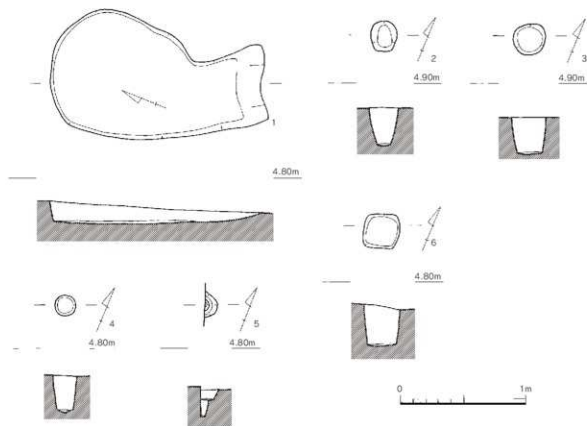
回転系切り痕を残す。

44号土坑(第20図14)調査区の中央部で確認された不整形土坑で、南北方向に主軸をもつ。土坑の上層には二つの石が並置されていたことから、本来は柱穴と思われる。長軸50cm、短軸28cm、深さ25cmを測る。

出土遺物(第22図8)8は土師皿である。口径8.2cm、器高1.3cmを測り、口縁部を一部打ち欠く。底部は回転系切り痕を残す。

45号土坑(第20図15)調査区の南側で確認された楕円形土坑で、西側を別遺構に切られる。東西方向に主軸をもち、現存長34cm、幅25cm、深さ25cmを測る。

出土遺物(第22図9)9は土師皿片である。口縁部を欠くために口径は不明である。底部は回転系切り痕を残す。



第23図 瀬番田遺跡60～65号土坑実測図 (1/30)

46号土坑(第20図16)調査区の南側で確認された小土坑で、長軸27cm、短軸16cm、深さ28.5cmを測る。

出土遺物(第22図10)10は土師器の坏である。底部のみの小片で、回転系切り痕を残す。

47号土坑(第21図1)調査区中央部や北寄りで確認された土坑で、平面が隅丸方形を呈し、東壁際が深くなる。主軸を東西方向にもち、長軸52cm、短軸46cm、深さ88cmを測る。その形態から本来は柱穴であったと思われる。

出土遺物(第22図11)11はやや大型の土師皿である。復元口径10.6cm、器高2.2cmを測る。底部は回転系切り痕を残す。

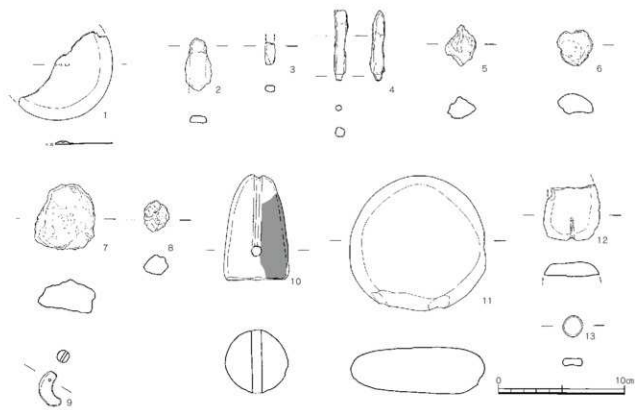
48号土坑(第21図2)調査区南側で確認された楕円形の土坑で、北側が一段深くなる。主軸は南北方向にあり、長軸69cm、短軸45cm、深さ55cmを測る。

出土遺物(第22図12)12は土師皿である。復元口径8.5cm、器高1.7cmを測る。底部は回転系切り痕を残す。

49号土坑(第21図3)調査区南側で確認された小土坑で、東側が一段深くなる。長軸30cm、短軸20cm、深さ27cmを測る。

出土遺物(第22図13)13は土師皿である。復元口径9.0cm、器高2.0cmを測る。口縁部にスガが付着し、灯明皿として用いられたものか。底部は回転系切りの後にナデを施す。

50号土坑(第21図4)調査区の北側で確認された円形の小土坑である。直径30cm、深さ37cmを測る。



第24図 瀬番田遺跡土坑出土金属器・土製品・石器実測図 (1/3)

出土遺物(第22図14)14は土師皿である。復元口径9.7cm、器高1.7cmを測る。口縁部にスガが付着し、灯明皿として用いられたものか。底部は回転系切り痕と板状圧痕を残す。

51号土坑(第21図5)調査区北寄りで確認された楕円形の土坑で、主軸を南北方向にもち、長軸48cm、短軸39cm、深さ13cmを測る。

出土遺物(第22図15)15は土師皿である。復元口径9.0cm、器高1.6cmを測る。底部は回転系切り痕を残す。

52号土坑(第21図6)調査区南寄りで確認された楕円形の土坑である。主軸を南北方向にもち、長軸45cm、短軸33cm、深さ30cmを測る。

出土遺物(第22図16)16は土師皿である。復元口径8.4cm、器高1.5cmを測る。底部は板状圧痕を残す。

53号土坑(第21図7)調査区北側で確認された楕円形の小土坑で、主軸を南北方向にもち、長軸37cm、短軸30cm、深さ34cmを測る。

出土遺物(第22図17)17は土師皿である。復元口径8.6cm、器高1.5cmを測る。底部は回転系切り痕を残す。

54号土坑(第21図8)調査区の北側で確認された小土坑。東側を別遺構に切られるが、直径25cm、深さ42cmを測る。

出土遺物(第22図18)18は土師器の坏である。復元口径11.6cm、器高3.1cmを測る。底部は回転系切り痕を残す。

55号土坑(第21図9)調査区の中央部で確認された小土坑で、その大半を別遺構に切られる。深さ40cmを測る。

出土遺物(第22図19)19は土師皿である。復元口径8.0cm、器高1.3cmを測る。底部は回転糸切り痕を残す。

56号土坑(第21図10)調査区の中央部で確認された土坑で、南側を別遺構に切られる。現存長51cm、幅54cm、深さ24cmを測る。土坑の上層から懸仏が出土した。

出土遺物(第24図1)1は銅製の懸仏である。円盤状の部分が約1/2残存し、鈕も欠く。重さ16.95gを測る。

57号土坑(第21図11)調査区の北側で確認された大型の土坑である。主軸を南北方向にもち、長軸163cm、短軸117cm、深さ40cmを測る。土坑中央部床面から馬もしくは牛の歯が並んで確認されたが劣化が進んでおり取り上げることはできなかった。このことから牛馬の埋葬土坑の可能性がある。

出土遺物(第24図8)8は鉄滓である。長さ2.4cm、幅2.0cm、厚さ1.5cm、重さ8.9gを測る。

58号土坑(第21図12)調査区の南側で確認された方形の小土坑である。一辺36cm、深さ18cmを測る。

出土遺物(第24図3)3は扁平な板状の鉄製品である。上部を欠くが、現存長1.8cm、幅0.8cm、厚さ6.0mm、重さ1.43gを測る。刀子の茎部か。

59号土坑(第21図13)調査区の北側で確認された土坑で、東西方向に主軸をもつ。長軸49cm、短軸45cm、深さ45cmを測る。

出土遺物(第24図9)9は土製勾玉である。長さ2.8cm、幅1.0cmを測る。

60号土坑(第23図1)調査区中央部付近で確認された不整形土坑で、南北方向に主軸をもつ。長軸168cm、短軸58cm、深さ15cmを測る。

61号土坑(第23図2)調査区北側で確認された楕円形小土坑で南北方向に主軸をもつ。長軸25cm、短軸22cm、深さ31.5cmを測る。

出土遺物(第24図10)10は石鐘の形状に似た土鍾である。底部は平坦で、石鐘に見られる穿孔部に繋がる溝も表現している。右側面に黒斑をもつ。長さ8.5cm、幅5.0cmを測る。

62号土坑(第23図3)調査区の北側で確認された円形小土坑で、直径27cm、深さ30cmを測る。

出土遺物(第24図2)2は棒状の鉄製品で、下部を欠く。全体的に錆に覆われるが、現存長4.3cm、幅1.3cm、厚さ6.0mm、重さ15.65gを測る。

63号土坑(第23図4)調査区の中央部で確認された円形小土坑で、直径16cm、深さ30cmを測る。

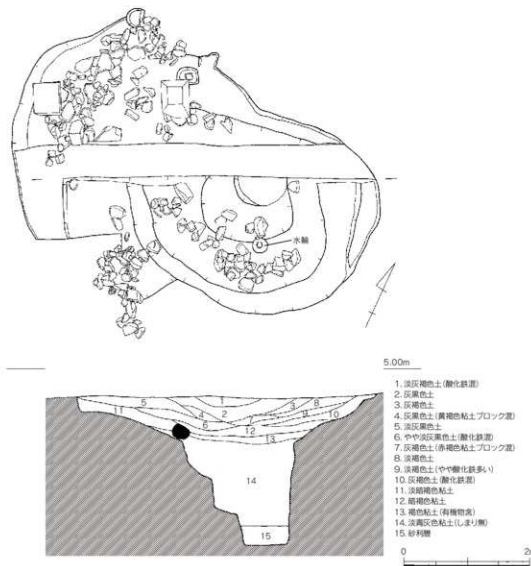
出土遺物(第24図7)7は鉄滓である。長さ5.1cm、幅4.6cm、厚さ2.5cm、重さ93.88gを測る。

64号土坑(第23図5)調査区の北側で確認された円形小土坑で、西側は調査区外に延びている。直径19cm、深さ22cmを測る。

出土遺物(第24図12)12は石鐘の破片である。穿孔部は貫通していないため、未製品である。現存長4.0cm、幅4.4cm、厚さ1.2cm、重さ36.29gを測る。

65号土坑(第23図6)調査区の中央部で確認された土坑で、隅丸方形を呈する。一辺30cm、深さ33cmを測る。土坑の上層で石材が出土したことから本来は柱穴と思われる。

出土遺物(第24図11)11は扁平な丸石の縁を打ち欠いた石鐘である。直径10.7cm、厚さ3.7cm、重さ668.7gを測る。



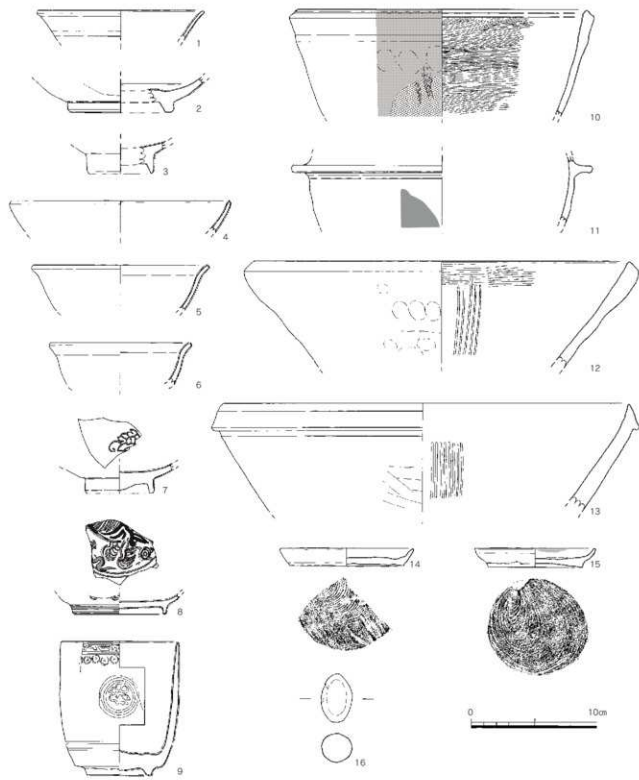
第25図 洞番田遺跡1号井戸実測図(1/60)

(4) 井戸

1号井戸(第25図)調査区南寄りに中央部に位置する井戸で、検出面で東西3.96m、南北3.24mを測る。深さは2.34mで、標高2.2m付近が井戸底である。井戸の検出面から検出面下60cmぐらいまでの間には拳大から人頭大の石材が多く出土した。この中には五輪塔の水輪も含まれる。そのため調査当初、石組の井戸と考えたが、下部ではほとんど石材が確認されなかったことから、素掘りの井戸と判断した。出土遺物は白磁、青磁、青花、象嵌青磁、土鍋、土師皿等が確認された。

出土遺物(第26~28図)第26図1~3は白磁である。1は白磁皿区類で口先げである。復元径13.2cmであるが小片のため数値はやや不安がある。2は碗の底部である。外面は釉が高台まで及ばず、内面は見込部分の釉が掻き取られる。その部分には白色土の目地が残る。3も碗の底部片である。外面は高台まで釉が及ばない。高台内側の裂りは浅く、底部は肉厚である。

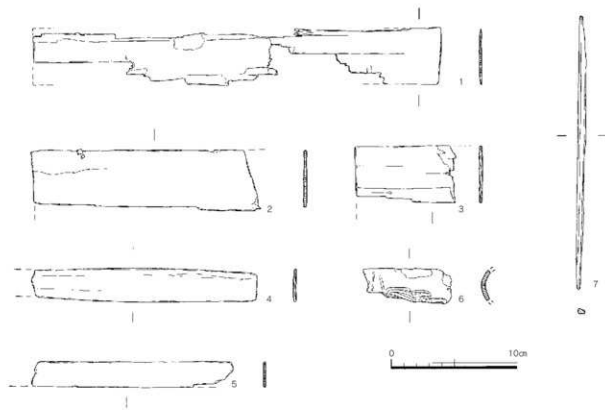
4~7は青磁である。4は碗の口縁部片で、白灰色の胎土に淡緑釉をかける。口径は17.3cmに



第26図 瀬番田遺跡1号井戸出土遺物実測図1 (1/3)

復元される。5・6は口縁端部を外反させる椀である。いずれも小片であるため、復元径に不安がある。7は椀の底部片で、溝2から出土した破片と接合した。外面は高台置付部分のみ露胎で、軸は高台内側まで及ぶ。内面は中央部に花と思われるスタンプ文を施す。

8は青花の皿である。内面中央部には龍文を配し、その外側には二重の圓線を巡らす。外面は高

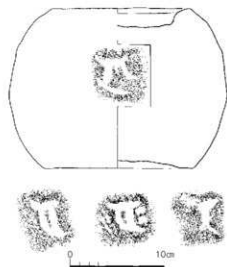


第27図 瀬番田遺跡1号井戸出土遺物実測図2 (1/3)

台部に二重の直線文を配する。透明軸は全面に及び、高台置付には砂目地が残る。小野分類Ⅷ類の皿か。(小野1982)

9は象嵌青磁の筒茶碗である。形態的には低い高台とやや丸みを帯びつつ立ち上がる椀部をもつ。また、高台内側の削りは浅く、底部は肉厚である。この筒茶碗は1号井戸と2・5・6号溝から破片が出土し、それぞれ部分的に接合する。結果的に底部は約1/2、椀部は約1/3程度残存し、図上では口径9.2cm、底径5.1cm、器高10.6cmに復元される。胎土は緻密で、その上にやや黄味を帯びた緑釉が茶碗全体にかかる。軸は高台内側にて及ぶが、椀下部や高台置付付近では軸がうまくまわらない箇所もある。象嵌は口縁部側から雷文・直線文・直径0.65～0.70cmのスタンピング文を廻らし、椀部の中央に植物らしき模様を囲む直径3.4cmの二重凹文を四方に配す。その下にすこし間を空けて2本の直線文を廻らせる。象嵌はいずれも白象嵌である。筒茶碗の国内出土例は少なく、降矢哲男氏が行った全国的な高麗青磁出土例集成でも挙げられていない(降矢2002)。しかし、伝世例は若干存在し、根津美術館所蔵品はほぼ同形品である(稲垣ほか編2003)。また、象嵌青磁ではないが、雑軸の筒茶碗が根来寺坊院跡から出土している(茶道資料館1990)。

10は土銅の口縁部で、口径24.0cmに復元される。内面は横ハケ、外面はオサエと縦ハケを施すが、全体的に黒色化し、特に下部は炭化物が付着しているので詳細は不明である。口縁部端部はやや外反する。11は土師質の羽釜である。口縁部と底部を欠く。全体的に薄く作られており、外面下部には黒斑をもつ。12は土師質の楕鉢で口径30.8cmに復元される。外面はオサエを施すが、所々に接痕を残す。内面は横ハケのあとに5本1単位の楕目を入れる。内面下部は剥離のため



第28図 瀬番田遺跡1号井戸
出土遺物実測図3 (1/4)

調整不明である。13は備前焼の播鉢口縁部片で口径は33.0cmに復元される。口縁端部傾斜し、外部に横ナテを施し、内面はナテの後に8本1単位の播り目を入れる。

14・15は土師皿である。14は口径10.6cm、器高1.3cmに復元される土師皿で、口縁部はやや開き気味である。底部は回転系切りと板状圧痕を残す。15はやや上げ底の土師皿で、焼成はやや甘い。口径9.5cm、器高1.5cmに復元される。口縁部の一部にはスガが付着する。燈明皿として用いられたのか。底部には回転系切りと板状圧痕が認められる。

16は弥生時代の投擲である。完形品であるが流れ込みである。

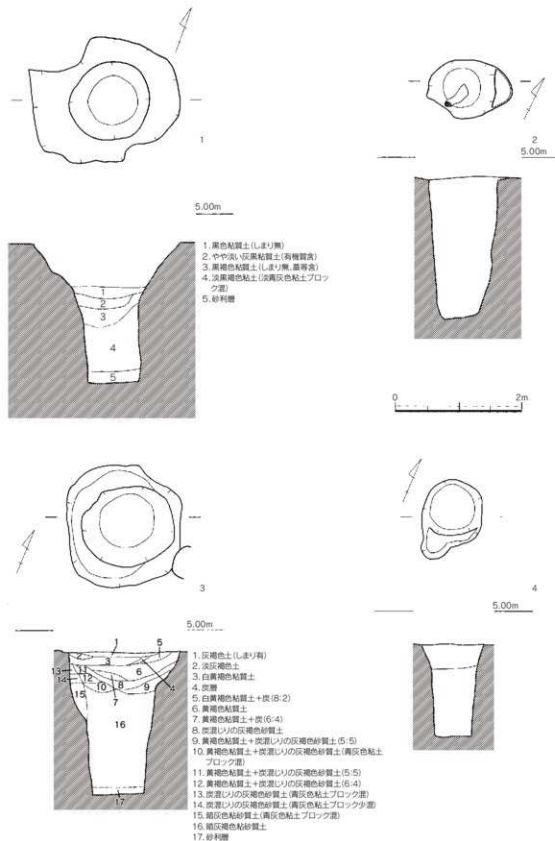
第27図1～7は木製品である。1は薄い板状加工品で、欠損部分が多いが、両端部は残っている。長さ39.1cm、幅4.5cm、厚さ2.5mmを測る。2も板状加工品である。実測図右側と下側は欠けている。また、上側左寄りには樹皮による連結痕が残る。現存長17.6cm、幅4.3cm、厚さ2.5mmを測る。3は現存長7.8cm、現存幅4.6cm、厚さ3.0mmを測る板状加工品で、右側と下側を欠く。4は板状加工品である。現存長17.8cm、幅2.7cm、厚さ3cmを測る。5も板状加工品である。現存長15.6cm、幅2.1cm、厚さ2.0mmを測る。6は筒形加工品である。生きている面はないが、表面に彫刻刀状の工具で鳥羽根状の模様を彫りこむ。現存長6.7cm、現存幅2.7cm、厚さ4.0mmを測る。7は管である。断面は多角形であるが、先端部は角が丸め、丸みを帯びる。長さ21.4cm、断面6.0mm×4.0mmを測る。

第28図は五輪塔の水輪である。上端部径14.5cm、下端部径15.7cm、最大径23.0cm、高さ16.8cmを測る。重さは12.5kgある。水輪の上部と下部は葎打により掘り窪め、最大径部分の四方に梵字を一文字ずつ配する。

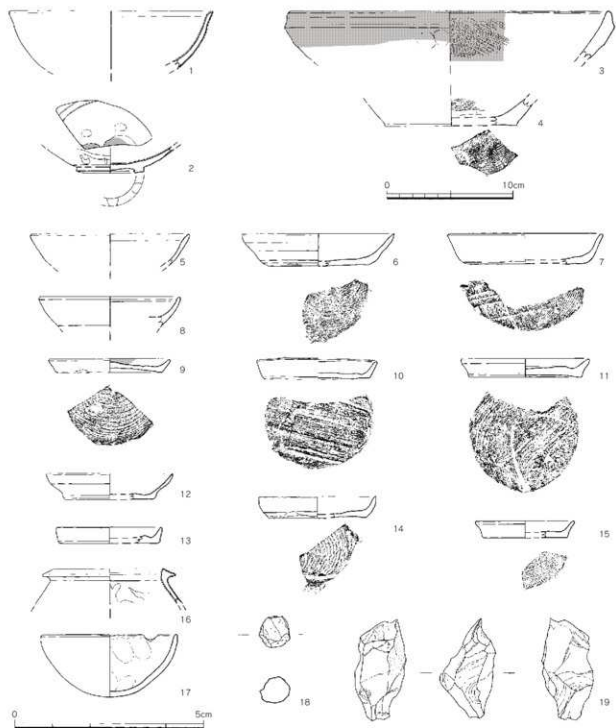
2号井戸(第29図1) 調査区南側の西際で確認された素掘りの井戸で、上端部平面が東西2.37m、南北2.01mを測る。深さは2.22mあり、標高2.3m付近が井戸底である。発掘調査では遺構検出面から遺構を半裁し土層を確認していたが、雨のため崩落したため、下部断面のみ図化している。また、下部も湖水が著しいため土層の細分ができなかった。井戸筒の径は0.90cmである。出土遺物は青磁、白磁、土師器杯、土師皿、播鉢のほか、木製品も確認されている。

出土遺物(第30・31図) 第30図1は青磁の椀で口径は16.0cmに復元される。灰色の胎土に濃い緑釉が厚くかかり、口縁端部を弱く外反させる。2は磁州窯系の椀である。外面は乳白色の釉が全体には及ばず、ヘラケズリの痕跡をよく残す。内面は中央部に鉄絵で花文様、見込部分に二重の團縁を配する。内面見込と高台畳付に砂・白土目地が認められる。

3は瓦質の播鉢で、口径は26.0cmに復元され、白灰色を呈する。外面はオサエ、内面は斜ハケを施すが、小片のため播目は確認できない。内外面ともにスガが付着する。4は瓦質播鉢の底部片である。内面は横ハケを施す。小片のため播目は確認できない。



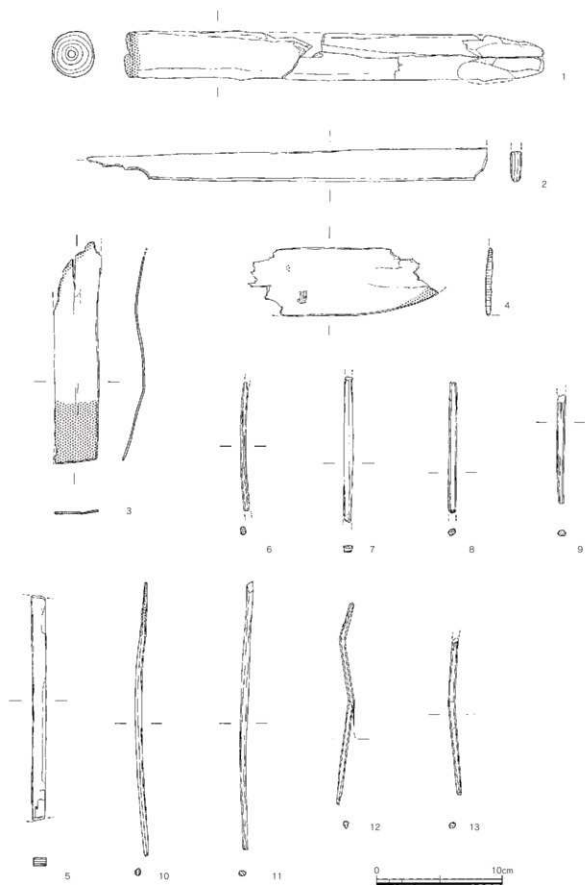
第29図 瀬番田遺跡2～5号井戸実測図 (1/60)



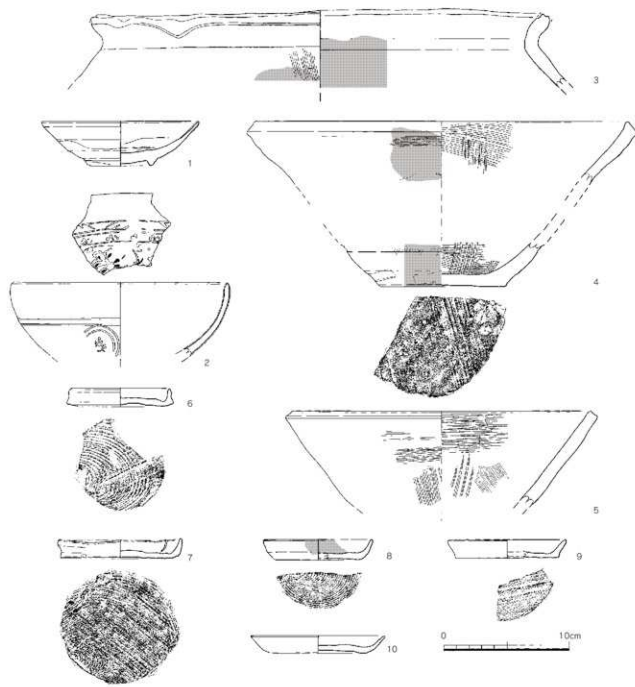
第30図 洞番田遺跡2号井戸出土遺物実測図1 (1/3・1/1)

5～8は土師器の坏である。5は口径12.6cmに復元される坏の口縁部片である。6は口径12.0cmに復元される坏で、底部は回転系切り痕を残す。7は坏の破片で口径12.3cmに復元される。底部は回転系切り痕と板状圧痕を残す。8は坏の口縁部片で、口径は11.2cmに復元される。

9～15は土師皿である。9は口径9.6cm、器高1.1cmに復元される土師皿で、底部は回転系切りを施し、上げ底気味になる。口縁端部は黒斑がある。10は口径9.5cm、器高1.7cmの土師皿で底部に回転系切り痕と板状圧痕を残す。11は口径10.1cm、器高1.5cmの土師皿で底部に回転系切りを



第31図 洞番田遺跡2号井戸出土遺物実測図2 (1/3)

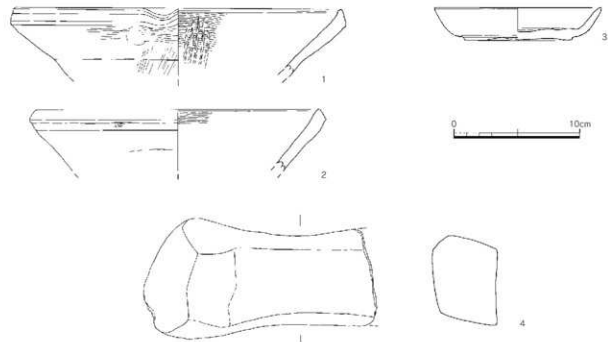


第32図 洞番田遺跡3号井戸出土遺物実測図 (1/3)

施し、板状圧痕を残す。12は口径10.0cm、器高2.0cmに復元される土師皿で、底部に回転糸切り痕と板状圧痕を残す。13は口縁部が直立する土師皿で底部に回転糸切り痕を残す。口径は8.4cmに復元される。14は口径9.1cmに復元される小型の土師皿で、底部には回転糸切り痕を残す。15は口径7.8cmに復元される小型の土師皿である。底部には回転糸切り痕を残す。

16は褐輪陶器の小壺で口径は10.5cmに復元される。口縁部断面は三角形で、胴部の器壁は薄い。褐色釉は全面に及ぶが、内面は釉の厚さに差がある。

17は弥生土器の椀である。口径9.8cm、器高4.9cmを測り、底部は丸底である。内面はオサエの痕跡をよく残す。



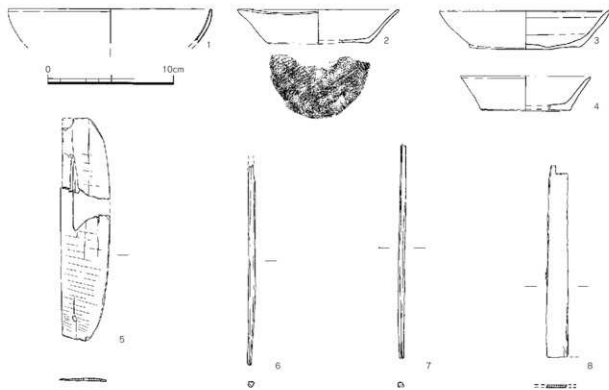
第33図 洞番田遺跡4号井戸出土遺物実測図 (1/3)

18は球状の鉄滓である。重さ18.65gを測る。

19は碧玉剥片である。荒削素材を作り出した際の残欠で、一部、自然面を残す。長さ2.6cm、幅1.3cm、厚さ1.4cm、重さ4.55gを測る。18は球状の鉄滓である。重さ18.65gを測る。

19は碧玉剥片である。荒削素材を作り出した際の残欠で、一部、自然面を残す。長さ2.6cm、幅1.3cm、厚さ1.4cm、重さ4.55gを測る。

第31図1～13は木製品である。1は陽物形木製品である。杭状の木材の先端部を加工し、陽物形に整える。基部は炭化していることから、火を受けて折れたものか。井戸からは5片に分かれて出土した。現存長32.8cm、直径3.7cmを測る。なお、陽物形木製品断面中央部に直径6mmの管状の穿孔を施す。2は板状の加工品で上部を欠く以外は、みな加工面を残す。左側には雲気状の塊りを入れる。組合品の部材か。現存長31.5cm、幅2.6cm、厚さ6.2～8.5mmを測る。3は曲物部材片で、上部を焼失する。下部も表面が黒色化する。現存長17.2cm、幅3.4cm、厚さ2.5mm。4は曲物側板片である。火を受けた曲物が部分的に残ったもので、裏面は炭化している。左側には樹皮による緊縛が認められる。現存長15.0cm、現存幅5.3cm、厚さ9.0mm。5は棒状を呈する加工品であるが、両側面ともに削れており、円盤状を呈するものか。現存長17.7cm、幅1.1cm、厚さ7.0mm。6～13は箸である。6は箸の中央部付近の破片である。現存長10.3cm、断面4.0×6.0mmを測る。全体的に面取り痕をよく残す。7も箸の中央部片で両端部を欠く。現存長さ11.4cm、断面8.0×6.0mmを測る。8は箸の上部片である。中央部以下を焼失する。現存長10.3cm、断面6.5×5.5mmを測る。9は箸の先端部片である。先端部は細くなり、丸みを帯びる。左側には樹皮がむか欠損がない箸である。長さ21.4cm、断面6.0×5.0mmを測る。上端部に火を受け炭化している。先端部は細く丸みを帯びている。11も箸の完形品である。長さ21.0cm、断面5.5×4.5mmを測る。上端部は面取りを施し、先端部は細く丸みを帯びている。12は力か加わり折れてしまった箸である。先端部は残っている。13は箸の先端部である。現存長12.4cm、断面4.0×5.0mmを測る。



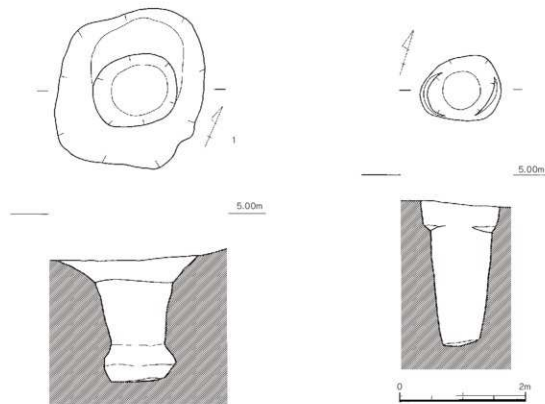
第34図 瀬田遺跡5号井戸出土遺物実測図 (1/3)

3号井戸 (第29図2) 2は調査区中央部で確認された素掘りの井戸で検出平坦面が東西1.08m、南北1.11mを測る。深さは2.25mで、標高2.5m付近が井戸底である。土層の実測はできなかったが、基本的に黒褐色粘質土が埋土で、最下層に砂利層が確認された。また、井戸の中に立てかけるようにして丸太材が1本出土した。出土遺物は青磁、象嵌青磁、国産陶器大甕、播鉢、土師皿等が確認された。井戸を開むように3号掘立柱建物があり、井戸の覆屋の可能性もある。

出土遺物 (第32図) 1は白磁の浅形碗である。口径12.4cm、器高3.5cmに復元される。焼成不良の黄灰色胎土に淡黄緑釉をかけるが、外面下半部と内面中央部には釉が及ばない。外面はハラケズリを施すが、高台内面の割りは浅く、底部は肉厚である。

2は象嵌青磁の碗で口径17.0cmに復元される。灰色の胎土に灰緑釉をかけるが、外面は部分的に釉が及ばないところがある。また、内外面ともに象嵌を施すが、焼成時の問題のため部分的に文様を欠くところがあり、不良品と思われる。外面は口縁部下に2本の直線文を配し、その下に花状のスタンプ文を囲む2重の凹面を置く。いずれも白象嵌である。内面は象嵌の部分的な欠落のため詳細は不明であるが、口縁部下に2本の直線文を引き、その間を斜めの直線で結ぶことにより三角文を表している。その下にスタンプ凹文、直線文を配する。いずれも白象嵌である。内面中央部には白象嵌・黒象嵌で花文を描く。3は瓦質の大甕である。胴部片も多く残存し本来は一個体を投げ込んでいたと思われるが、いずれも強い熱を受け器表面がひどく剥離し、接合関係が確認できなかったため、口頸部のみを図化している。また、口縁端部も欠く。外面は縦ハケ、内面は横ナデを施す。

4・5は播鉢である。4は瓦質の播鉢で、口径は30.5cmに復元される大型の播鉢で、内外面ともに白灰色を呈し、外面にススが附着する。内面は横ハケを施したのち、5本1単位の播目を入



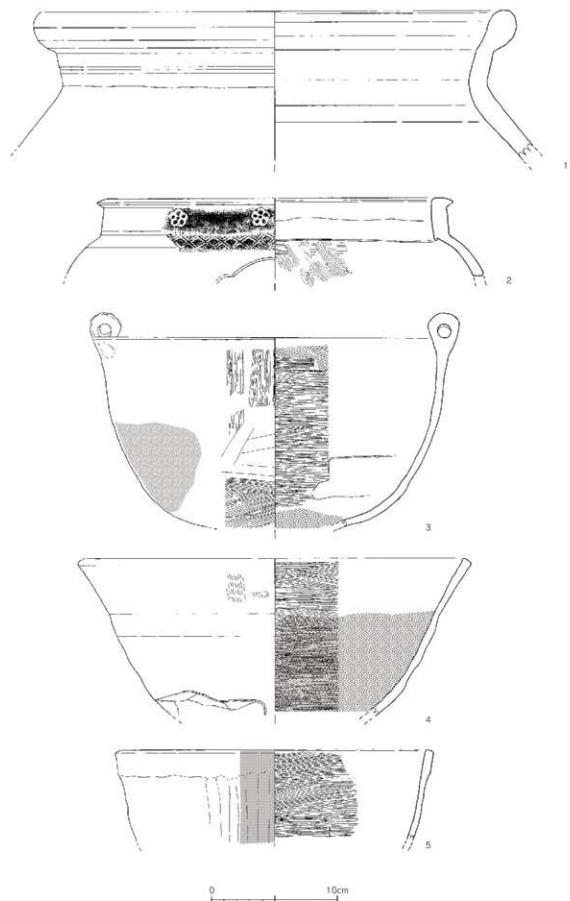
第35図 瀬田遺跡6・7号井戸実測図 (1/60)

れる。外面は口縁部付近にオサエと横ハケ、底部付近は斜ハケと横ナデを施す。口縁部は傾斜し、端部に平坦面をもちつつ、上下に摘み出しが認められる。なお、口縁部と底部は繋がるころはないが、色調や胎土から同一個体と判断される。底部は板状圧痕が認められる。5は土製の播鉢で、口径2.4cmに復元される。外面上半部に横ハケ、下半部に縦ハケを施し、内面は横ハケの後に4本1単位の播目を入れる。

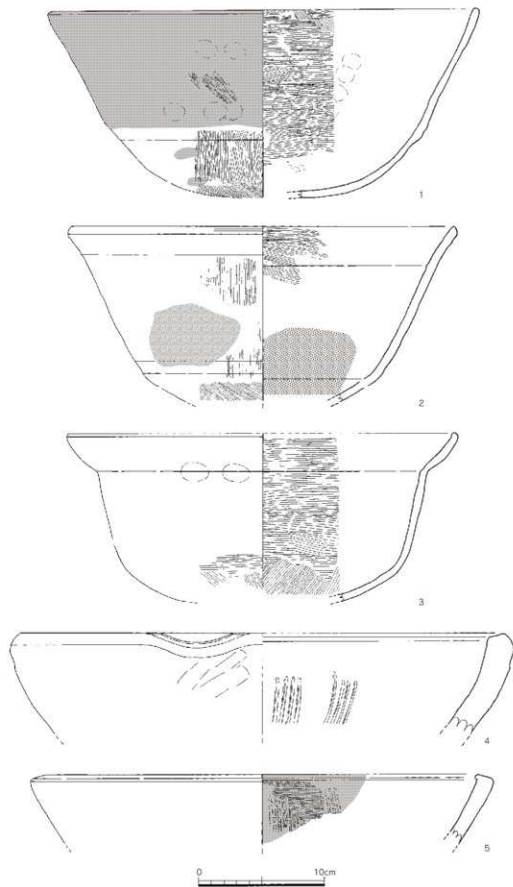
6~10は土師皿である。6は口径7.7cm器高1.5cmに復元される土師皿で、口縁部は直線的に立ち上がる。底部に回転系切り痕を施し、板状圧痕を残す。7は完形品の土師皿で、口径9.8cm、器高1.5cmを測る。口縁部はゆがみか大きく、ひびも入る。底部は回転系切り痕と板状圧痕を残す。8は口径8.6cm、器高1.6cmに復元される土師皿で、内外面にススが附着、燈明皿として用いられたと思われる。底部は回転系切り痕を残す。9は土師皿の小片で、口径9.4cm、器高1.45cmに復元される。底部は回転系切り痕と板状圧痕を残す。10は口径10.6cm、器高1.4cmに復元される土師皿で、底部に回転系切り痕を残す。

4号井戸 (第29図3) 調査区中央や西寄りで確認された素掘りの井戸で、14号溝に切られる。検出面で東西1.71m、南北1.95m、深さ2.25mを測り、標高2.4m付近が井戸底になる。調査では検出面から断面図を作成していたが、井戸下部は湧水が著しく図化ができなかった。また、最下層には砂利層が確認された。出土遺物は播鉢や土師器片が出土しているが、量は少ない。

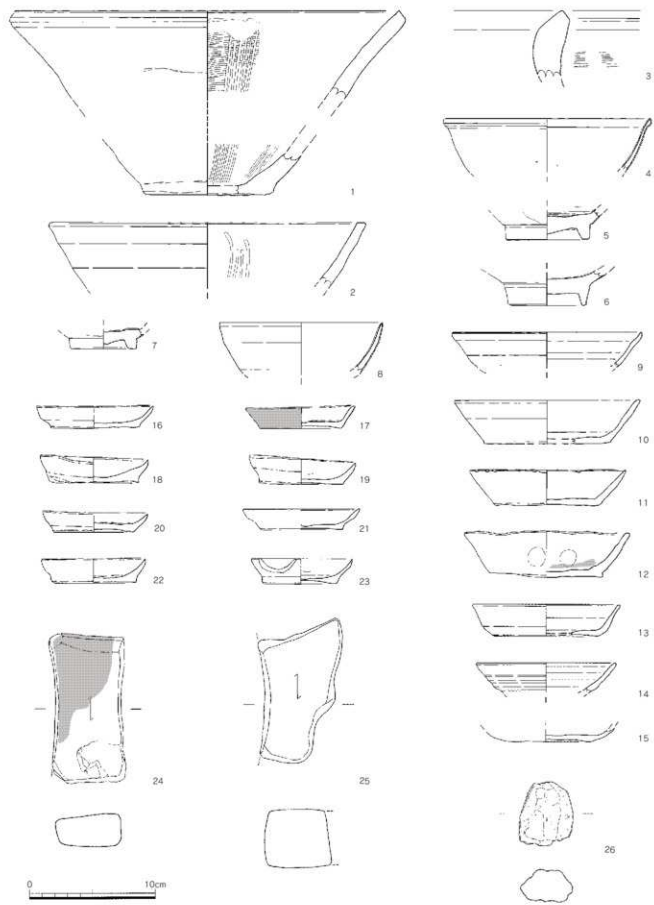
出土遺物 (第33図) 1は瓦質の播鉢である。口径26.3cmに復元され、白灰色を呈する。外面は口縁部下に横ハケ、胴下半に縦ハケを施す。内面は横ハケの後に5本1単位の播目を入れる。口



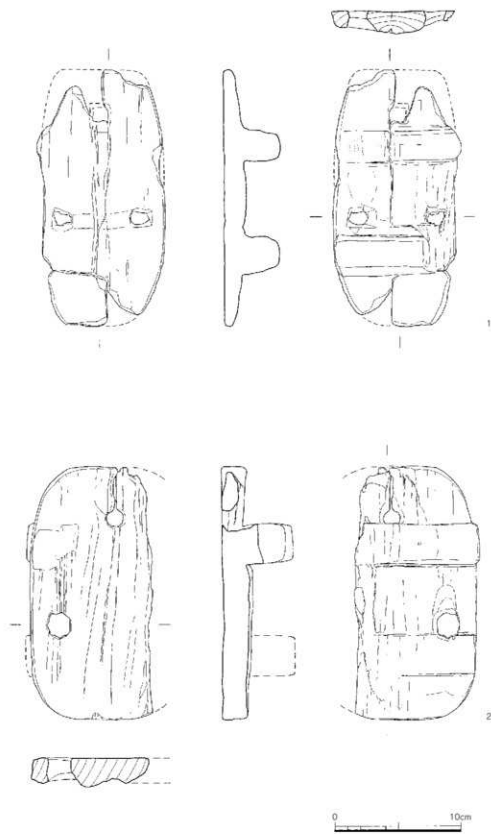
第36図 瀬番田遺跡6号井戸出土遺物実測図1 (1/3)



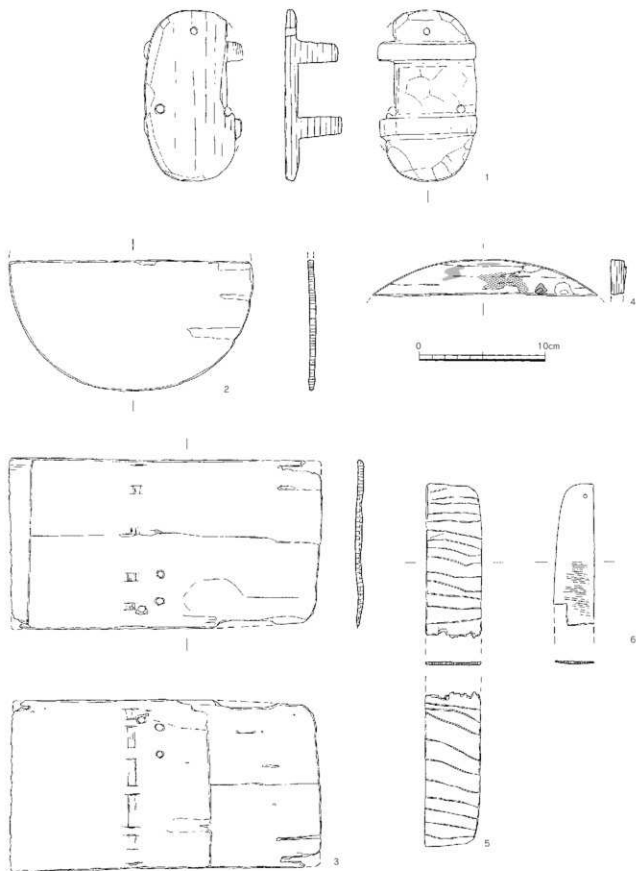
第37図 瀬番田遺跡6号井戸出土遺物実測図2 (1/3)



第38图 澁番田遺跡6号井戸出土物実測図3 (1/3)



第39图 澁番田遺跡6号井戸出土物実測図4 (1/3)

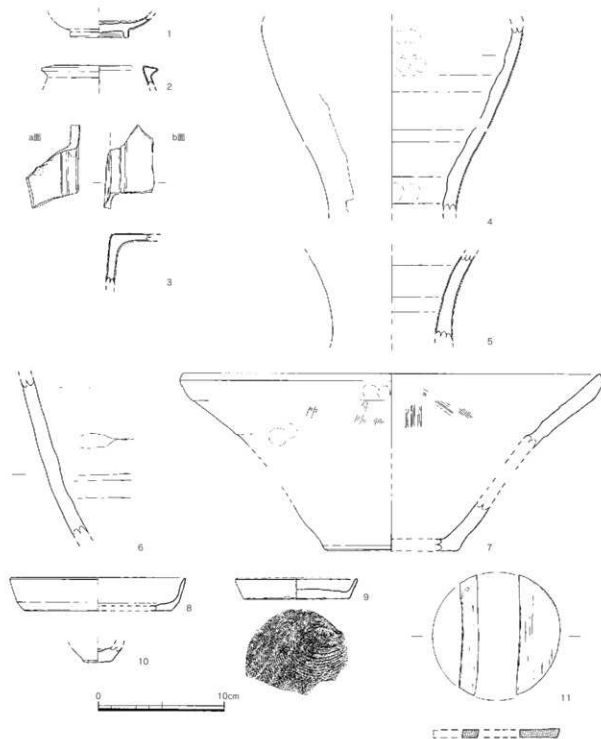


第40図 酒番田遺跡6号井戸出土遺物実測図5 (1/3)

縁部は肥厚し、注口をもつ。2は黄灰色を呈する瓦質の播鉢で、口径は23.2cmに復元される。外面はナデ、内面は横ハケ施すが、内面下部が剥離し、播目は確認できない。口縁部は傾斜し、口縁端部は平坦面をもつ。

3は土師器の坏である。口径13.1cm、高さ2.6cmに復元され、底部は回転糸切痕と板状圧痕が残る。

4は砥石で右側1/3程度を欠く。長軸の中央部分が特に使われており、断面鉄アレイ状の形態となる。横断面はゆかんだ五角形であるが、いずれの面も砥面として用いている。やや粗い砥石



第41図 酒番田遺跡7号井戸出土遺物実測図 (1/3)

である。重さ1700gである。

5号井戸 (第29図4) 4は調査区中央部東寄り出土した素掘りの井戸である。検出面で東西0.96m、南北0.90m、深さ1.50mを測る。標高3.0m付近が井戸底になる。出土遺物は朝鮮雑軸陶器や土師器環などがある。

出土遺物 (第34図) 1は朝鮮雑軸陶器椀で、口径は16.0cmに復元される。灰色の胎土に灰緑釉をかける。

2～4は土師器環である。2は口径12.7cmに復元される環で、口縁部はゆがみ大きい。底部は回転系切りの後にナデを施す。3は口径13.4cmの環である。底部には回転系切り痕と板状圧痕を残す。底部中央がやや盛り上がり、安定しない。4は口径10.2cm、高さ2.75cmに復元される環である。底部は回転系切りである。

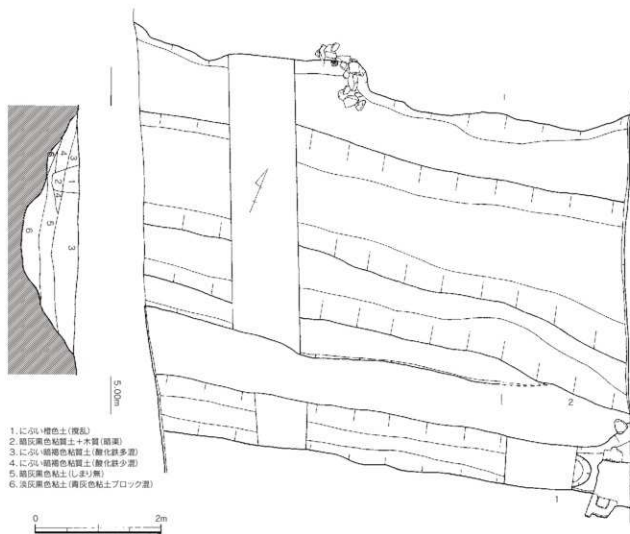
5～8は木器である。5は平面横櫛形の木製品で、長さ17.5cm、幅3.85cm、厚さ1～2.5mmを測る。曲物の部材か。6は箸の先端部片である。先端部は角がなくなり、丸みを帯びる。現存長15.6cm、断面5.5×5.0mmを測る。7も箸の先端部である。先端部は細くなり、丸みを帯びる。現存長16.8cm、断面5.0×4.5mmを測る。8は板状加工品である。製作当初の面が残っているのは下端面のみである。現存長15.0cm、現存幅1.65cm、厚さ2.5mmを測る。

6号井戸 (第35図1) 調査区の中央部東りに位置する素掘りの井戸で上端面は東西2.34m、南北2.49m、深さ1.96mを測る。標高2.3m付近の井戸底の湧水部で側面の青灰砂粘質土層が崩壊し、断面が算盤玉状になる。また、現段階でも湧水著しい。出土遺物は播鉢、青磁、白磁、褐釉陶器、土師器環、土師皿などがある。

出土遺物 (第36～40図) 第36図1は備前焼の大甕で、口径38.0cmに復元される。口縁は玉縁で、胴部上部には自然釉がわかる。頭部にはしまりが無い。2は陶質の風がでにふい橙色を呈する。口縁部は直立し、端部を掴み出す。口縁部にはスタンプで梅花文を配し、頭部には×印文を施す。胴上半部には窓を開ける。内面は横ナデの後に弱いケズリを施す。胴内面はハケが残る。胴部と頭部の境目の調整は悪く、段状になる。

3～5は土鍋である。3は耳付きの土鍋で底部を欠く。口径28.0cm、残存高16.9cmを測り、外面上部は縦ハケ、下部は横ハケを施し、内面は全面に横ハケが残る。外面は全面にススが付着し、胴部中位は二次焼成によって赤褐色化している。内面は底部付近で剥離がみられる。4は口径31.0cm、残存高12.5cmの土鍋で、外面は全面にススが付着する。外面の口縁部付近に縦ハケを施し、底部付近に剥離がみられる。内面は口縁部付近にオサエを施すほかは、全面に横位のハケが残る。5は口径25cmの土鍋で、外面全面にススが付着する。外面は強い縦ナデを施し、内面は横ハケが残る。

第37図1は口径33.8cm、器高約15.0cmの土鍋で、底部を欠く。底部から下半部は丸みをもち、下半部から口縁部に向かって直線的に広がる。外面は上半部にススが付着し、下部は所々にススが付着する。外面はオサエと縦ハケを施し、内面は横ハケが残る。2は底部を欠く土鍋で口径30.6cm、器高約15cmを測り、胴下半部から口縁部に向かってやや内彎しつ立ち上がり。外面は縦ハケ、内面は横ハケを残す。外面には二次焼成痕を残す。3は底部を欠く土鍋で、口径30.8cmを測る。底部は丸底と思われる、胴下部から上部にかけて直線的に立ち上がり、口縁で反転しつ立ち上がる。口縁部は丸く、内面にやや突出する。外面は全体的にススが付着し、調整ははつ



1. 灰色褐色土(段土)
2. 褐色灰色粘土+赤質(備前)
3. 灰色褐色粘土(磨化跡多量)
4. 灰色褐色粘土(磨化跡少量)
5. 褐色灰色粘土(赤質)
6. 赤褐色粘土(褐色灰土ブロック状)

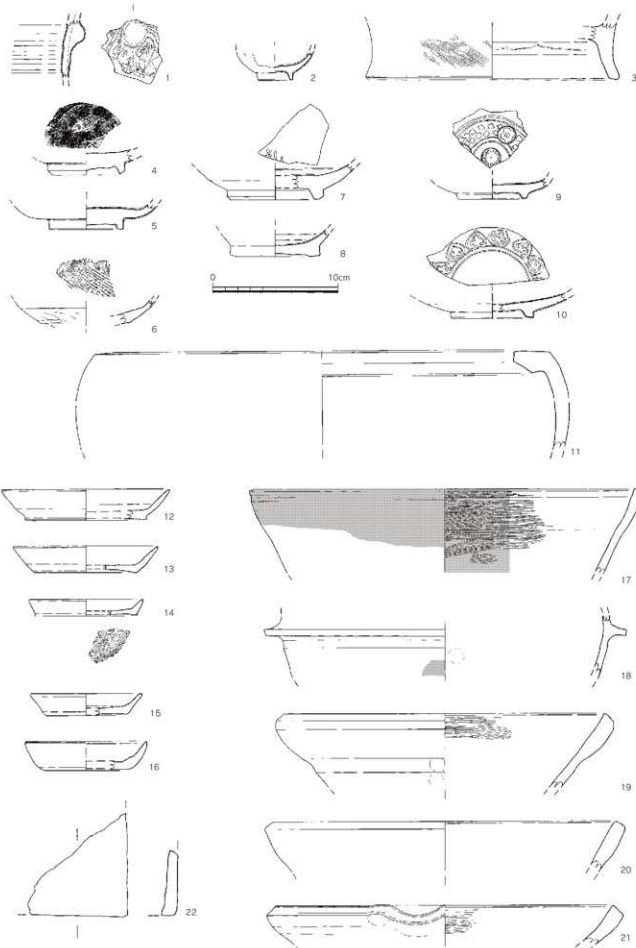
第42図 潤田道跡1・2号溝実測図 (1/60)

きりしないが、内面には横ハケをよく残す。

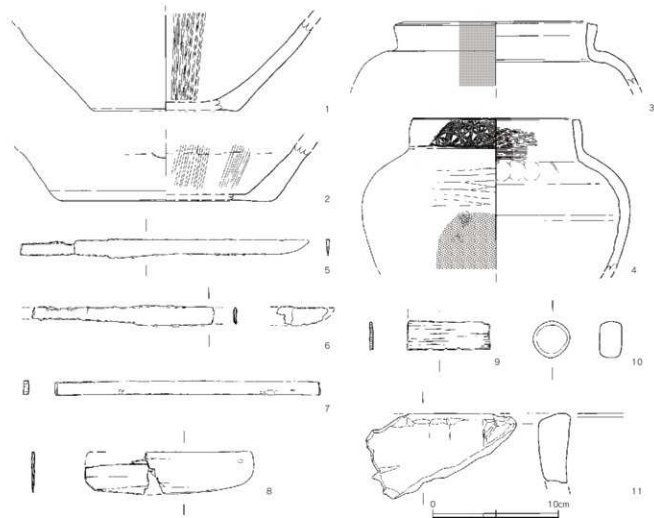
4は備前系の播鉢で口径39.6cmに復元されるが、小片のためやや不安がある。全体的に肉厚で、口縁部には注口も有する。内外面ともにナデを基調とし、内面には4本1単位の播目を入れる。5も備前系の播鉢で口径36.4cmに復元される。口縁部は傾斜し、端部に平坦面をもつ。外面はナデを施し、内面は横ハケの後に4本1単位の播目を入れる。なお、内面にはススが付着する。

第38図1・2は播鉢である。1は瓦質の播鉢で口縁部と底部が出土している。両者は接合しないが、色調や胎土、器壁の厚さから同一個体と判断した。口径は31.1cmに復元される。外面は横ナデを施すが、接縫痕を完全に消すまでには至らない。内面は横ハケのあとに5本1単位の播目を直線的に入れる。口縁部は傾斜し、口縁部は平坦面をもつ。黄白灰色を呈する。2は備前焼の播鉢で口径25.0cmに復元される。内外面ともに横ナデを施し、内面に4本1単位の播目を入れる。器壁は比較的薄く、口縁部は水平で、口縁部は平坦面をもつ。3は瓦質土器の大甕である。小片のため口径は出していない。断面は灰色、外面は黒色を呈する。

4～7は青磁と白磁である。4は白磁製の口縁部で、口径16.4cmに復元される。口縁部を外反させる。内外面ともにピンホールが多い。5は白磁製の底部片である。外面は高台付近まで軸



第43図 酒番田遺跡1・2号溝出土遺物実測図1 (1/3)



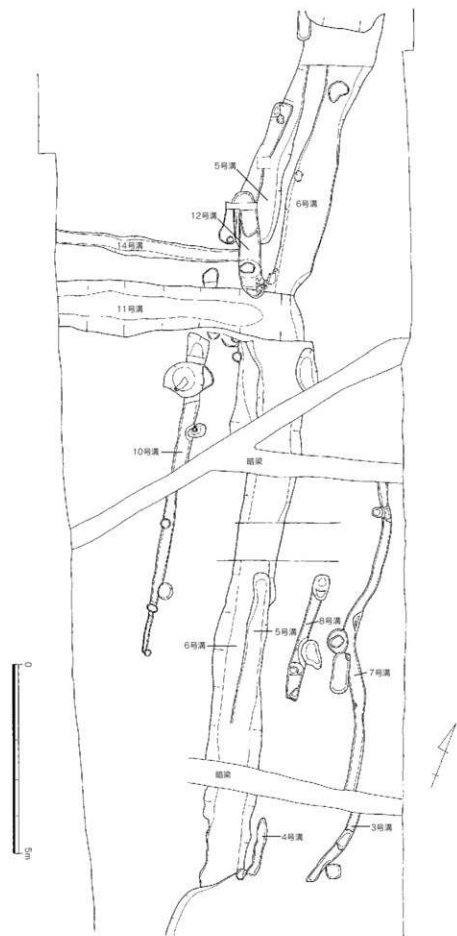
第44図 酒番田遺跡2号溝出土遺物実測図2 (1/3)

が及び、内面は全面に及ぶか見込部分は掻き取り、白色土の目地を残す。6も白磁碗の底部片である。やや高台が高い、内面にのみ軸が確認される。7は青磁碗の底部である。内面にのみ軸が確認される。高台断面は方形である。

8は褐釉陶器の椀で、口径12.7cmに復元される。火を受けており、内外面ともに軸につやがない。また、断面には欠継が認められる。

9～15は土師器の坏である。9は口径14.8cmに復元される坏で、口縁端部がやや反する。10は口径14.5cm、器高3.4cmに復元されるが、底部中央を欠く。11は口径12.2cm、器高3.8cmの坏で、底部は回転系切り痕と板状圧痕を残す。13は口径11.6cm、器高2.6cmに復元される坏で、底部は回転系切りの後にケズリを施す。14は坏口縁部で、口径11.0cmに復元される。胴部に強い横ナデを施し、凹凸が目立つ。15は底部片である。回転系切り痕を残す。

16～23は土師皿である。16は口径9.2cm、器高1.8cmを測り、底部には回転系切り痕を残す。17は口径8.6cm、器高1.8cmを測り、底部には回転系切り痕を残す。外面は全面にススが附着する。18は口径8.5cm、器高2.2cmを測り、底部は回転系切りである。19は口径8.3cm、器高2.3cmを測り、底部は回転系切り痕を残す。口縁部は傾斜する。20は口径8.3cm器高1.7cmを測る土師皿である。底部は上底で、回転系切り痕を残す。21は口径9.2cm、器高1.6cmを測る土師皿である。底部は回転系切りを施し、板状圧痕を残す。22は口径8.4cm、器高1.9cmを測り、底部は回転



第45図 澁田道路3～12・14号溝実測図 (1/100)

糸切り痕を残す。23は口径7.9cm、器高2.0cmを測る土師皿で、器壁が薄い。口縁部は一部打欠きがあり、底部は上底で回転糸切り痕を残す。

24・25は砥石である。24は長方形の砥石である。長軸下部を欠くが、中央部より厚く、端部付近であると思われる。4側面とも使用痕が認められる。残存長11.6cm、幅5.2cm、厚さ2.5cm、重さ345.75gである。25はやや大型の砥石片である。実測図の上下ならびに右側を欠く。現存長さ10.0cm、幅5.5cm、厚さ4.6cm、重さ530.36gを測る。

第39図1・2は下駄である。1は全長20.2cm、幅10.0cmに復元された下駄で3つに割って出土した。歯を含む厚さは4.5cmである。目は裏面から刀子状の工具を用いて開けられており、平面方形を呈する。2は全長20.0cm、復元幅14.0cm、歯を含む厚さ5.0cmを測る下駄で、側面1/3程度を欠く。目は前方と後方で大きさが異なる。台部が比較的肉厚である。

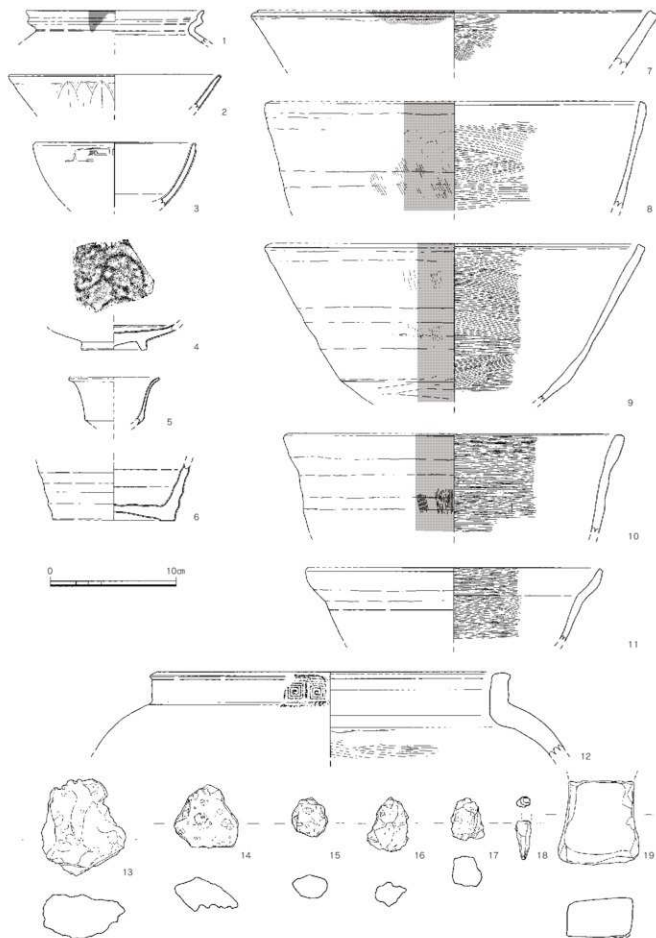
第40図1は小児用の下駄か。長さ13.6cm、幅7.5cm、歯を含む厚さ4.7cmを測る。右側側面を一部欠くが遺存状態は良い。目は錐状の工具で開けてあり、3か所ともほぼ同じ径である。台の裏面は工具痕が残るが、丁寧な加工を施す。特に前端部と後端部は薄く仕上げる。2・3は曲物の部材である。2は曲物の底板である。直径19.0cm、厚さ5.0mmを測る。3は曲物のあわせ部分の側板である。残存長さ24.5cm、幅13.3cmで、土圧のため、曲物本来の丸みはなく扁平な板状で残る。合わせ部分は樹皮を用いて連結する。4は円形の板状加工品である。現存長17.8cm、厚さ1.1cmを測る。部材の厚さから桶状の底板と思われる。5は板状加工品である。長軸端部を欠くが、現存長12.0cm、幅4.5cm、厚さ3mmを測る。両面ともに釘状の工具で線を引く。6も板状の加工品である。一部を欠くが、平面横楕状を呈し、端部に穿孔を施す。現存長11.0cm、幅3.3cm、厚さ3.0mmを測る。

7号井戸 (第35図2) 調査区の中央部で確認された井戸で上端部平面が東西1.29m、南北1.08mの楕円形を呈し、深さ2.28mを測る。標高2.3m付近が井戸底である。出土遺物は青磁、褐陶器、象嵌青磁、備前焼、土師器坏、土師皿等がある。特に象嵌青磁の方枕の出土が特筆される。

出土遺物 (第41図) 1は青磁碗の底部片である。白灰色の胎土に淡緑色の釉がかかるが、内面見込部分は掻き取られ、外面は高台置付より内側には及ばない。高台内面は回転ヘラズリを施すが、高台の厚さは異なる。また、高台置付付近にはスガ認められる。

2は褐陶器の壺口縁部である。口縁部の断面は三角形で、軸は全面に及ぶ。

3～5は象嵌青磁である。3は方枕屈曲部片である。淡灰色の胎土に釉をかける。しかし、釉が薄くかかるため、地の色が透け、にぶい淡灰緑色を呈する。内面にも釉が及ぶが、外面よりも釉が厚く明淡緑に発色している。外面は屈曲部から7.0mm程度離れた箇所自白象嵌で2重の界線を表す。a面、b面とも同様な文様構成であるため、この破片は狭面と広面の屈曲部に該当すると思われる。なお、a面の左側断面のみ黒色物質が塗布されていることから、欠損痕と思われる。屈曲部はやや鈍角で鋭く曲がり、屈曲部が丸みを帯びる福岡県太宰市観世音寺出土例などとは比べるとやや違和感を感じる。現存長5.3cm、現存幅4.2cm、厚さ6.5mmを測る。4・5は梅瓶片である。4は梅瓶の下半部である。灰色の胎土ににぶい緑色の釉が厚くかかるが、内面には及ばず、外面は大きく剥がれる箇所がある。内面はオサエと横ナテを施す。5も梅瓶の底部付近である。灰色の胎土淡緑色の釉が内外面ともにかかる。



第46図 瀬番田遺跡4・5号溝出土遺物実測図 (1/3)

6は備前焼の大甕胴部片である。小片のため径等は復元できない。外面は灰赤色、内面は淡褐色に自然軸がかかる。7は瓦質の揃鉢で、白灰色を呈する。口径は33.4cmに復元され、外面はオサエと縦ハケ、内面は剥離が多く詳細は不明であるが、横位のハケを施した後、摺目を入れる。口縁部片と底部片は接合しないが、胎土や色調から同一個体と判断した。

8は土師器の坏である。口径13.8cm、器高2.65cmに復元される。底部は回転糸切り痕と板状圧痕が認められる。9は土師皿である。口径9.7cm、器高1.65cmを測る。底部は内厚で、回転糸切り痕と板状圧痕が認められる。10は手捏土器の底部片である。

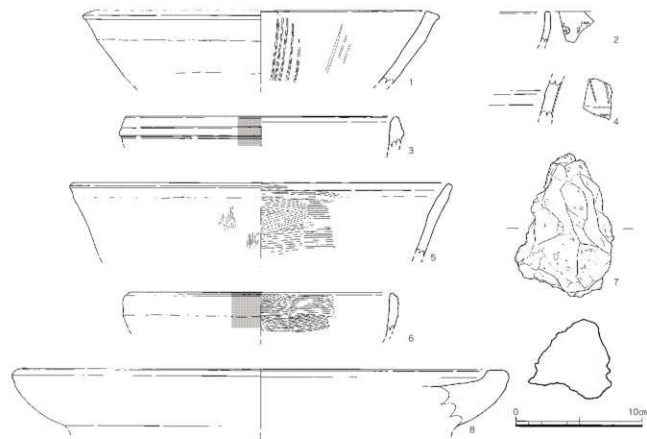
11は円形板状加工品である。2片に別れ、互いに接合しないが、厚さや質感から同一個体と判断した。直径10.0cm、厚さ6.5~7.0mmを測る。手桶の底板か。

(5) 溝

1号溝 (第42図1) 調査区の南側で検出した東西方向に延びる溝である。幅0.81m、深さ10.0cmを測る。埋土の状態から新しい時期のものと思われ、掘り進めるとコンクリートブロック塊が出土した。

出土遺物(第43図1~3) 1は褐色の軸が全面にかかる陶器である。外面に布袋を貼りつけ、内面は横ナデを施す。貧乏徳利か。2は褐釉陶器の小椀である。高台皿付を除き、全面に軸が及ぶ。3はにぶい橙色を呈する火鉢の脚部である。外面は斜ハケ、内面はナデを施す。

2号溝 (第42図1) 1号溝に隣接して確認された幅3.69m、深さ0.90mの大溝である。北側の



第47図 瀬番田遺跡5・6号溝トレンチ・6号溝出土遺物実測図 (1/3)

潤古屋敷遺跡で検出された大溝との関連が想定される。出土遺物は青磁、白磁、象嵌青磁、土師器、土師皿など出土する。

出土遺物 (第43図4～21、44図) 第43図4～6は青磁である。4は椀の底部片である。白灰色の胎土に淡緑釉をかけるが、高台置付より内側には及ばない。また、内面は中央部に双鱼文をスタンプしているもの釉が及ばず不良品といえる椀である。5も椀である。にぶい緑釉が厚くかかるが、高台置付より内側には及ばない。また、高台内側の割りが浅く、底部は内厚である。6は却皿の小片である。外面に緑釉をかける。瀬戸か。7・8は白磁椀である。7は灰色の胎土の上に白灰色の釉をかける。内面見込み部分は釉を掻き取り、白色土の目地を残す。中央部には植物のスタンプ文を配する。外面は釉が底部付近に及ばずヘラケズリの痕跡をよく残す。8も椀の底部片である。内面にのみ黄乳白色釉がかかる。外面はヘラケズリの痕跡をよく残すが、高台内面の割りはほとんどない。

9・10は象嵌青磁の椀の底部片である。9は内外面全面に淡緑釉がかかり、内面に白・黒象嵌を施す。内面中央部から菊花文、二重圈線文、花文、二重圈線文を施す。花文の間には直径1.5cmの花文とそれを囲む円文を配する。中央部の菊花文と二重圈線文に挟まれた花文はスタンプと思われる。10は内外面ともに雑釉に近いにぶい緑釉を全面に施す。内面は二重圈線文の外側に蓮弁文を配し、外面は椀下部に沈線を巡らす。

11は瓦質の火鉢で、丸味を帯びた浅鉢形を呈する。口縁部は内側へ強く屈曲し、その上端は面をなす。丁寧に作られており、屈曲部の角は鋭い。外面は光沢をもつ灰色、内面は白灰色を呈する。出土部位が小片であるため、口径は類例から求めている。

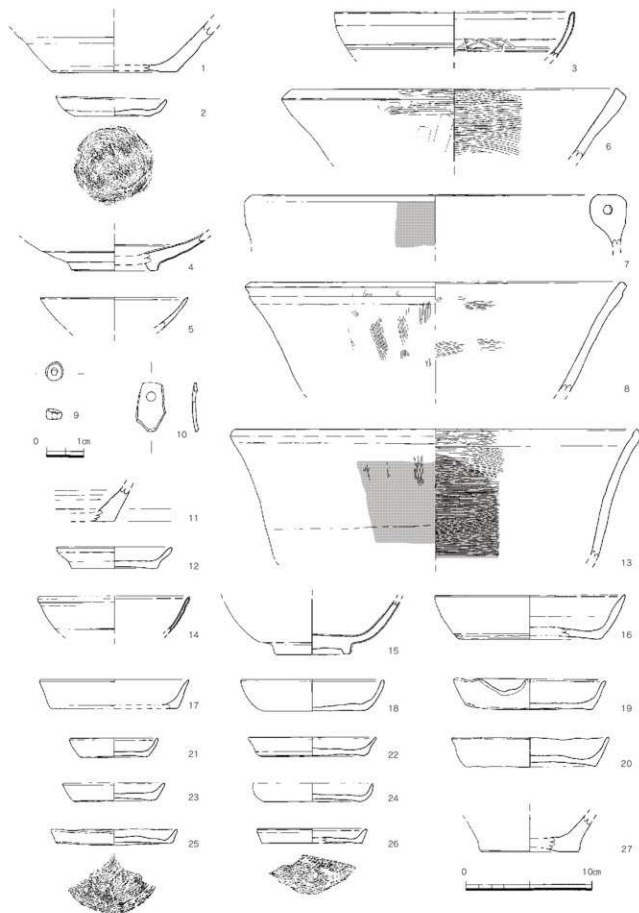
12～16は土師器の杯・皿である。12は杯で口径13.1cm、器高2.5cmに復元される。底部は回転糸切りである。13も杯である。口径11.4cm、器高2.0cmに復元される。底部は回転糸切りで上げ底気味である。14～16は土師皿である。14は口径9.0cm、器高1.3cmに復元され、底部は回転糸切りを施す。15は口径8.8cm、器高1.8cmに復元され、底部は上げ底気味で回転糸切り施す。16は口径9.7cm、器高2.4cmに復元され、底部に板状圧痕を残す。

17は土鍋で口径30.6cmに復元される。内面は横ハケ、外面はナデを施し、口縁部付近にはスガが付着する。口縁部は傾斜し、口縁端部は平坦面を有する。18は羽釜の胴部片である。口縁部、底部を欠くが、全体的に薄手で丁寧に作りである。外面下部にはスガが付着する。

19～21は播鉢である。19は瓦質の播鉢口縁部で、口径は26.6cmに復元される。口縁部は肥厚しつつ傾斜し、端部は平坦面をもつ。外面はオサエとナデ、内面は横ハケを施し、内外面ともに灰白色を呈する。20は土製の播鉢で、口径28.3cmに復元される。口縁部付近の小片であるため播目は確認できない。21は瓦質の注口をもつ播鉢で、口径28.0cmに復元される。外面はオサエとナデ、内面は横ハケを施し、内外面とも灰白色を呈する。

22は板状の土製品である。2側面だけ残り、全体の形状や大きさは確認できない。色調は橙色を呈する。

第44図1・2は備前焼の播鉢である。1は播鉢の底部片で、底部の中央部を欠く。にぶい赤褐色を呈する。外面は横ナデを施し、内面は横ナデの後に7本1単位の播目を入れる。2も播鉢の底部片で中央部を欠く。外面は横ナデで、内面は横ナデの後に7本1単位の播目を入れるが、内面は磨減が著しい。外面は赤褐色、内面は灰色を呈する。



第48図 潤古屋敷遺跡7・10～14号出土遺物実測図 (1/3・1/2)

3・4は瓦質の風炉の上半部である。3は口径16.0cmに復元される風炉で、直立気味の口縁部をもつ。内外面ともに横ナデを施す。色調はにぶい橙色を呈するが、外面は全面にススが付着する。4は口径が13.1cmに復元される小型の風炉である。外面は口縁部にスタンプで菊花文を配し、胴部は横ミガキを施す。内面は口縁部に横ハケ、胴部に指オサエとナデを施す。色調は黄灰色を基調とするが、外面は焼きたたか全面黒色化している。また、外面下部にはコゲが付着する。

5・6は刀子である。5は完形品の両側の刀子で、2号溝の最下層から出土した。刃部は使用により内湾し、茎は折れ曲がる。全長22.6cmを測る。6は刀子の破片で、2号溝の最下層から出土した。刃部を欠くが、同一個体と判断される。刀子そのものは錆に覆われ状態は悪い。

7は棒状の加工品である。左側端部のみを欠くが、残りの側面は加工痕を残す。現存長21.0cm、幅1.3cm、厚さ3～4mmを測る。漆木か。8は平面横楕形の板状加工品である。2片に分かれるが、全長13.4cm、幅3.3cm、厚さ3.0mmを測る。9は板状加工品である。上側側面を欠くが、残りの側面は加工痕を残す。下側面には3か所の切り込みを入れる。全長6.5cm、幅1.0cm、厚さ3.0mm。

10は胴部が張る円盤状の黒石で、直径3.0cm、厚さ1.8cm、重さ27.6gを測る。双六の駒か。11は耳付石鍋口縁部片である。外面にケズリ痕を残すが、剥離部分も多く詳細は不明である。

3号溝 (第45図) 調査区の中央部南側寄りで確認された細い溝で、北東方向に延びる。途中東西に延びる暗渠に切られ、少しずれた箇所から7号溝が北進するが、幅や深さから同一の溝とも考えられる。

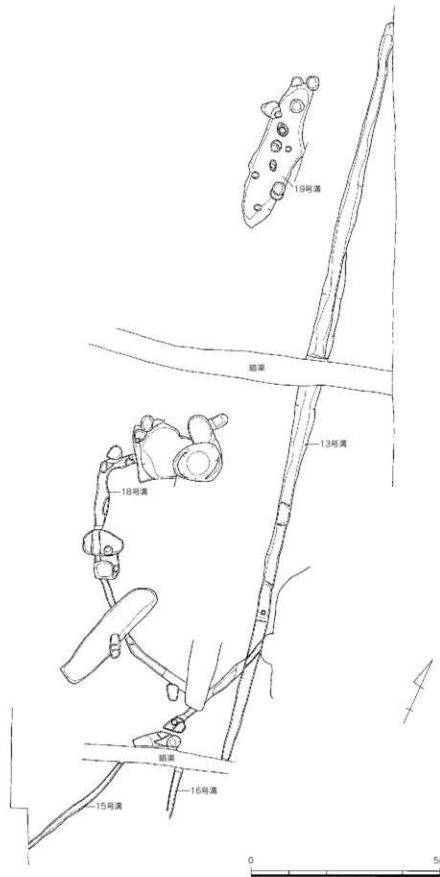
4号溝 (第46図) 調査区中央部で確認された細い溝で南北方向に延びるが、1号井戸に切られる。
出土遺物 (第46図1) 1は弥生時代終末期から古墳時代初期にかけてみられる東海系のS字口縁甕である。口径は14.0cmに復元されるが、小片であるため口径の復元にやや不安がある。

5号溝 (第45図) 調査区の中央部で南北に走る溝で、6号溝とぶつかりながら北進する。部分的に両者の区分ができなかった箇所もある。多くの暗渠に切られるとともに、11・12号溝や1号井戸に切られる。

出土遺物 (第46図2～19) 2・3は青磁の椀である。2は鍋蓮弁文をもつ青磁椀で口径16.8cmに復元される。口縁部を若干外反させ、にぶい緑軸が厚くかかる。3は口径12.8cmに復元される小ぶりの青磁椀で、口縁部下に雷文帯を配する。白灰色の胎土ににぶい緑軸をかける。4は白磁椀の底部片である。内面見込部分に唐草文を弱く押し出しているが、青白色の軸がゆかり不明になっている。外面は高台置付から内側は露胎である。5は白磁の小椀である。口径は7.2cmに復元される。器壁は薄く、胴部の屈曲部から口縁部に向かって内湾しつつ立ち上がる。

6は黒釉陶器の瓶の底部片で、底径は11.6cmに復元される。底部置付部分は露胎で、灰色の胎土が見えている。内外面ともに横ナデを施し、底部は上げ底である。

7は瓦質の挿鉢の口縁部で、口径は32.0cmに復元される。外面は強い2次焼成を受け、淡い桃色と黒色を、内面は褐灰色を呈する。外面はナデを、内面は横ハケを施す。挿目は小片のため確認できない。8は土鍋である。底部を欠くが、やや丸みをもちつつ立ち上がり口縁に至る。外面は縦ハケ、内面は横ハケの後に横ナデを施す。なお、外面はスス等が付着し黒色化し、内面はにぶい黄褐色を呈する。9も土鍋である。外面はススが付着し黒化するものの、上半部で縦ハケ、下半部で強い横板ナデを確認できた。内面は横ハケを施す。底部を欠くが、胴部下半の屈曲部から口縁部まで直線的に広がる。口縁端部は傾斜し、平坦面をもつ。10も土鍋である。口縁部



第49図 瀬田遺跡13・15・16・18・19号溝実測図 (1/100)

付近はやや開き、口縁端部は肥厚する。外面はスカが付着し黒色化し、内面は灰黄色を呈する。外面は縦ハケ、内面は横ハケを施す。11は口縁部が広がる上鍋である。外面はナデ、内面は横ハケを施す。口縁端部の調整は丁寧に行われるが、使用の結果、外面は灰黄褐色、内面はにぶい赤褐色を呈する。12は瓦質の風炉で濃い灰色を呈する。口径28.4cmに復元される。張りの強い胴部に直立する口縁をもち、口縁端部は外側にやや摘み出される。口縁の直立部にはスタンプで雷文を巡らせる。胴部外面から口縁部内面にかけては丁寧な横ミガキ状のナデを、胴部内面は横ハケを施す。

13～17は鉄滓である。13は長さ7.5cm、幅6.5cm、重さ213.83gを測る。14は長さ4.9cm、幅5.0cm、重さ91.17gを測る。15は長さ3.2cm、幅2.8cm、重さ15.25gを測る。16は長さ4.4cm、幅2.6cm、重さ30.60gを測る。17は長さ3.4cm、幅2.4cm、重さ26.86gを測る。18は鉄釘片である。19は磁石で端部が厚くなる。4側面とも磁石として用いている。

6号溝 (第45図) 調査区の中央部で5号溝とぶつかりながら南北に延びる。暗渠と11号溝、1号井戸に切られる。

出土遺物 (第47図1～8) 1～3は5号溝と6号溝の前後関係を確認するために設けたトレンチから出土したものである。1は瓦質の播鉢で、口径28.0cmに復元される。口縁部は傾斜し、端部を外に摘み出す。外面はナデ、内面はナデの後に5本1単位の播目を入れる。色調は白灰色を呈する。2は瓦質土器の椀か。口径も復元できないほどの小片であるが、口縁部下にスタンプ文が認められる。3は滑石製石鍋である。直径21.6cmに復元され、小型の一類に含まれる。外面にはスカが付着する。

4～8は6号溝出土遺物である。4は象嵌青磁の梅瓶の小片である。灰色の胎土に淡緑釉がかかるが、内面には及ばない。外面には直線文2本と、蓮弁文を白象嵌で表す。象嵌はいずれも細く丁寧に施されている。これら象嵌の文様と器壁の厚さから、梅瓶の底部付近と思われる。5は土鍋の口縁部片である。口径は30.0cmに復元される。外面は縦ハケ、内面は横ハケを施す。口縁部は傾斜し、平坦面をもつ。6は土鍋で、口径21.6cmに復元される。外面はスカが付着し、調整の詳細は不明である。内面は横ハケを施す。

7は鉄滓である。長さ11.4cm、幅7.6cmで、重さは497.41gである。8は茶臼である。最大径39.0cmで、丁寧に作られている。

7号溝 (第45図) 調査区の中央部東側で確認された細い溝である。南北に延びるがそれぞれ暗渠に切られる。南端部は暗渠に切られるが、3号溝につながる可能性がある。

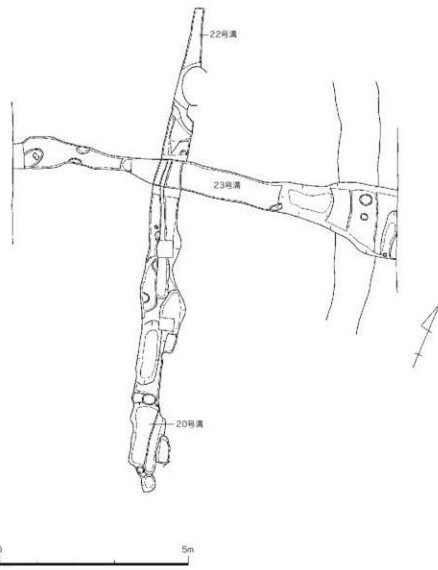
出土遺物 (第48図1・2) 1は瓦質の播鉢で外面は淡黄褐色、内面は白灰色を呈する。内外面ともにナデを施すが、小片のため、播目は確認できない。2は完形の土師皿である。口径8.8cm、器高1.5cmを測る。底部は回転糸切り痕と板状圧痕が認められる。

8号溝 (第45図) 調査区の中央部で確認された短い溝である。6号溝と7号溝の間に挟まれる。出土遺物はない。

9号溝 新しい時代の擾乱と判断されたため欠番とする。

10号溝 (第45図) 調査区中央部で確認された幅が狭い溝で、南北に延びる。暗渠と3号井戸に切られる。

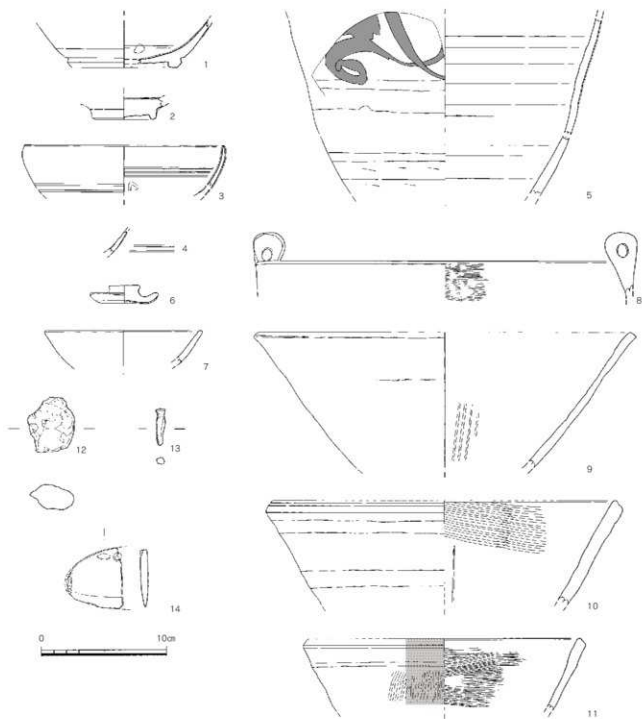
出土遺物 (第48図3) 3は象嵌青磁椀の口縁部片で、口径18.8cmに復元される。灰色の胎土に



第50図 溝番田遺跡20・22・23・25号溝実測図 (1/100)

にぶい緑釉をかけている。外面は2本の直線文、内面は三角文を白象嵌で表す。

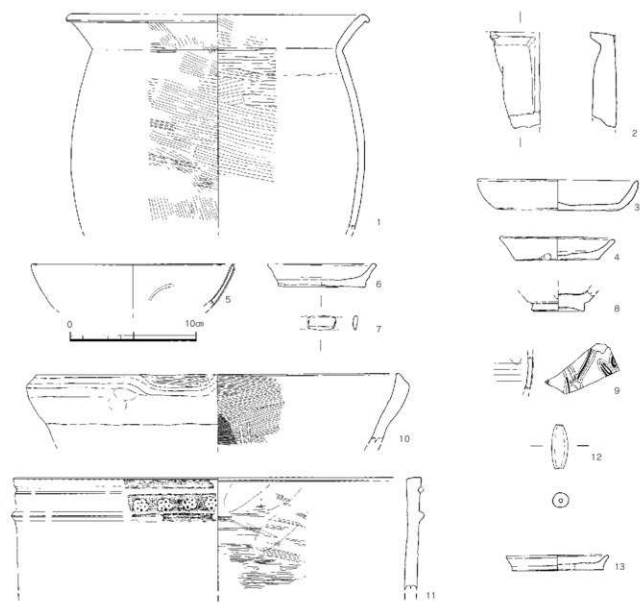
11号溝 (第45図) 調査区の中央部で確認された東西に延びる溝で、幅1.2m、深さ35.0cmを測る。5・6号溝を切り、12号溝に切られる。



第51図 洞番田遺跡17号溝出土遺物実測図 (1/3)

出土遺物 (第48図4~10) 4は象嵌青磁の椀の底部片であるが、底部中央が欠く。暗灰色の胎土にふい緑釉をかけるが、外面高台付近から高台内部にかけて露胎である。内外面ともに白象嵌で直線文を表す。

5は坏で、口径は11.6cmに復元される。焼成は瓦器的である。6は瓦質の播鉢で口径27.2cmに復元される。外面は横ハケと縦ナデ、内面は横ナデを施す。小片のため挿目は確認できない。口縁端部は傾斜し、平坦面をもつ。7は内耳竈である。口径は30.0cmに復元されるが、耳部付近の小片であるため、やや不安がある。外面はススが大量に付着する。内外面ともにナデを施す。8は土鍋で口径は30cmに復元される。外面は縦ハケ、内面は横ハケを施す。口縁端部は断面方形で



第52図 洞番田遺跡18・20・22・24・25号溝出土遺物実測図 (1/3)

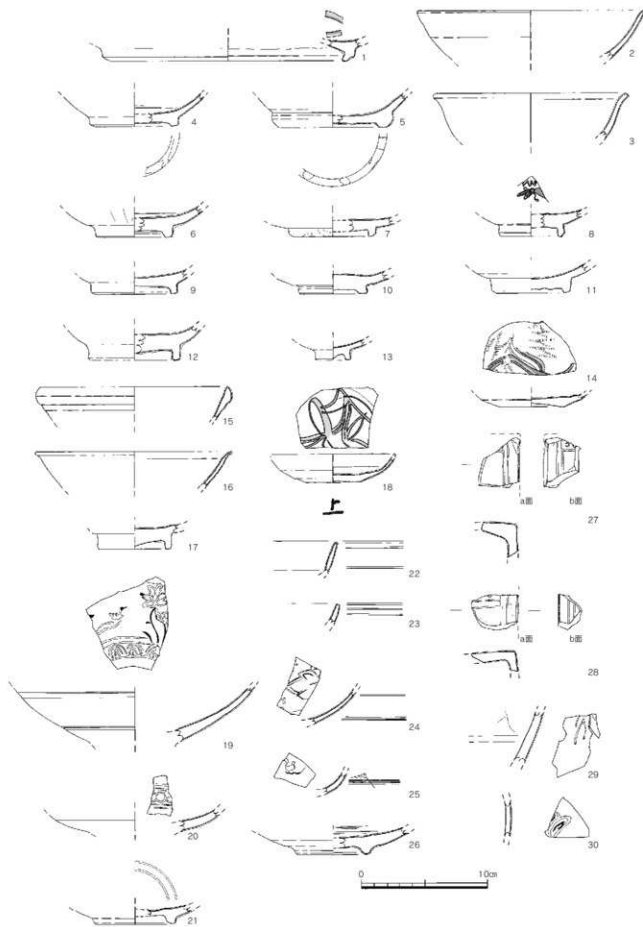
傾斜する。

9はガラス小玉で色調はコバルトブルーである。直径6.5×5.7mm、厚さ4.1mmで、やや歪みがある。10は銅製の歩挿状金具である。剣筈形に加工した小銅板に直径2.5mmの穿孔を施し、長さ1.3cm、幅8.0mm、厚さ1.0mmを測る。

12号溝 (第45図) 調査区中央部で確認された短い溝で、5・11号溝を切る。幅0.6m、深さ30.0cm程度を測る。

出土遺物 (第48図11~13) 11は常滑と思われる陶器の底部片である。小片のため反転できない。内面は黄灰色、外面はえんじ色を呈する。12は土師皿である。口径9.0cm、器高1.7cmに復元され、底部は回転糸切りを施す。13は土鍋で口径32.3cmに復元される。底部から内湾しつ立ち上がる。内外面ともにススやコゲが付着する。外面に縦ハケ、内面に横ハケを施す。

13号溝 (第49図) 調査区の北側東よりで確認された溝で、南北方向に直線的に延びる。北側は調査区際付近で端部を確認できたが、南側については暗渠に切れ詳細不明である。幅0.34



第53図 瀬番田遺跡包舎層出土遺物実測図1 (1/3)

m、深さ6.0cm程度を測る。

出土遺物 (第48図14~26) 14・15は青磁碗である。14は口縁部片で、口径12.0cmに復元される。白色の胎土に淡緑釉をかける。外面の口縁端直下と下部に沈線が認められる。15は底部片で、高台径6.0cmに復元される。灰色の胎土にぶい緑釉が掛かる。外面は高台畳付より内側には釉は及ばない。底部はやや肉厚である。

16~20は土師器の坏である。16は口径15.0cm、器高3.5cmに復元される坏で、底部中央部を欠く。やや上げ底気味か。底部は回転糸切り痕を残す。17は口径11.8cm、器高2.3cmに復元される坏の口縁部片である。底部は回転糸切り痕を残す。18は口径11.3cm、器高2.5cmの坏で、底部は回転糸切り痕と板状圧痕を残す。19は口径12.1cm、器高2.4cmの坏で、口縁部を一部打ち欠く。底部は回転糸切り痕と板状圧痕を残す。20は口径12.5cm、器高2.4cmを測る坏である。底部は回転糸切り痕と板状圧痕を残し、やや上げ底気味である。21~26は土師器である。21は口径6.4cm、器高1.5cmに復元され、底部は回転糸切りを施す。22は口径10.2cm、器高1.5cmに復元され、底部は回転糸切りを施す。23は口径8.2cm、器高1.5cmに復元され、底部は回転糸切りを施す。24は口径9.4cm、器高1.5cmに復元され、底部は回転糸切りを施し、やや上げ底である。25は口径10.1cm、器高1.3cmに復元されるが、全体的に歪みが大い。底部は回転糸切りを施す。26は口径8.8cm、器高1.26cmに復元され、底部は回転糸切りを施す。

14号溝 (第45図) 調査区中央部を東西に走る幅0.5m、深さ5~7cmの溝である。溝の西側は調査区外に延び、東側は12号溝に切られる。また、4号井戸を切る。

出土遺物 (第48図27) 27は弥生時代中期の壺の底部片で、底部はやや上げ底である。おそらく流れ込みと思われる。

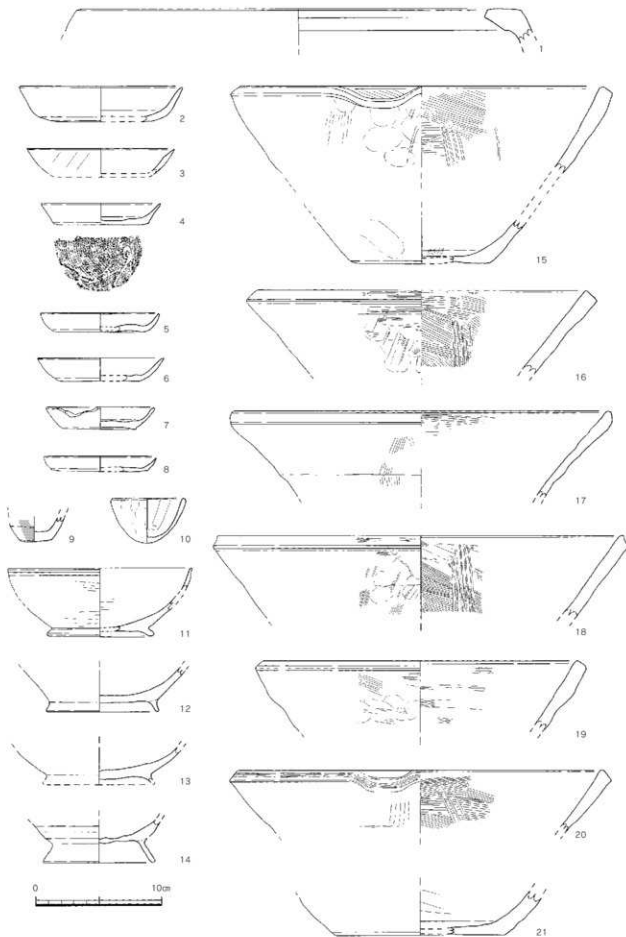
15号溝 (第49図) 調査区中央部を南西から北東に向かって延びる幅0.45m、深さ5.0cm程度の細い溝である。溝の南西側は調査区外に延び、東側は13号溝と17号溝に切られる。

16号溝 (第49図) 調査区中央部で南北に走る幅0.4m、深さ5cm程度の細い溝である。溝の北側は攪乱に切れ、南側は地形の造成により削平されている。

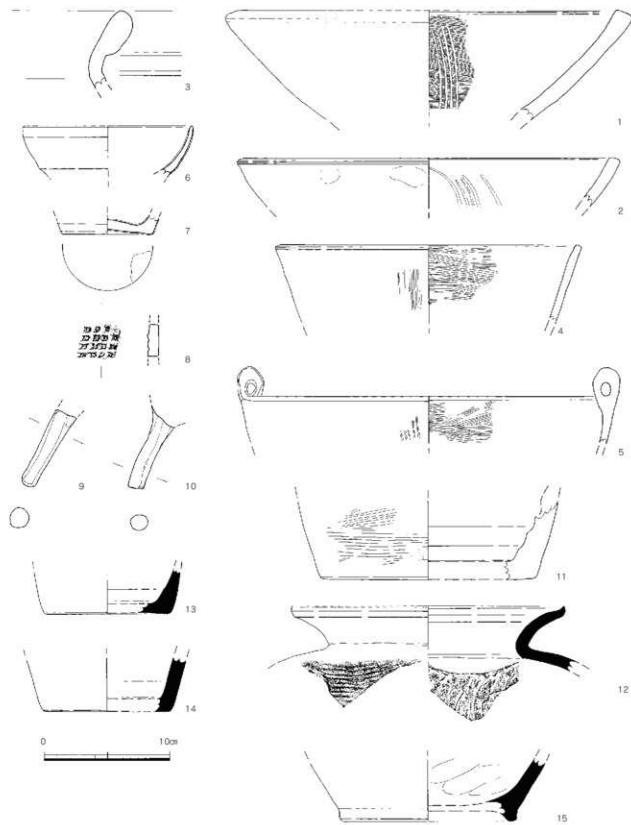
17号溝 (第6図) 調査区北側で確認されたL字に屈曲する溝である。溝の内側には4号建物と柵が存在し、これらは一体のものとして捉えることが可能である。幅0.8m、深さ30cm程度を測る。本来は建物を方形に巡る溝と思われる。

出土遺物 (第51図1~11) 1は青磁碗の底部片である。黄灰色の胎土に黄緑色の釉をかける。外面底部付近は露胎である。内面見込み部分には段があり、白色土による目地がある。越州窯系か。2は青磁碗の底部片である。釉は高台畳付より内側には及ばない。また、高台内面の削りは浅く、底部は肉厚である。3は象嵌青磁碗の口縁部片である。口径は15.6cmに復元される。灰色の胎土に緑釉が掛かる。内外面ともに白象嵌で直線文を表す。4は象嵌青磁片で柄か。小片のため、土器の傾き等は若干不安がある。灰色の胎土に黄緑釉が掛かる。外面に白象嵌で2本の直線文を表す。5は粉青沙器梅瓶の胴部下片である。軟質の胎土の上に、鉄絵で模様を描き、その上に透明釉をかける。釉は下半には及ばず、横ケズリ痕をよく残す。内面は横ナテを施す。

6は国産陶器片である。当初は燈明皿として図化したしたが、緑釉が底部平坦面にかかることやヤスガ確認できないことから、天地逆の蓋の可能性もある。

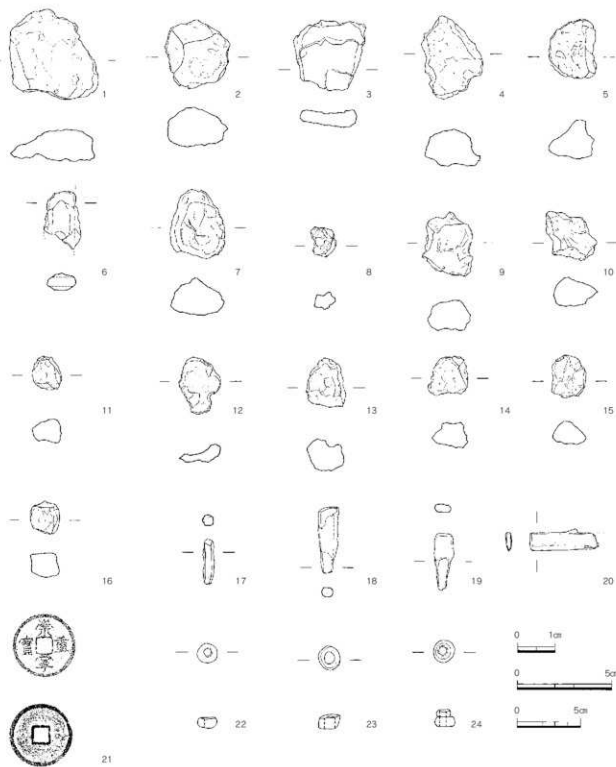


第54図 洞番田遺跡包含層出土遺物実測図2 (1/3)



第55図 洞番田遺跡包含層出土遺物実測図3 (1/3)

7は土師器の杯の口縁部片で、口径は12.4cmに復元される。8は耳付の土銅である。耳部付近のみ残存していたので口径には不安が残る。外面はナデ、内面は横ハケを施す。内外面ともにススの付着はない。9は瓦質の播鉢である。口径30.0cmに復元されるが、小片のため径にはやや不



第56図 酒番田遺跡包舎層出土鉄器・銅銭・青銅器・ガラス玉実測図 (1/1・1/2・1/3)

安が残る。内外面ともに剥離が著しく、内面の4本1単位の挿目がわずかに確認されるにすぎない。10も瓦質の挿鉢で、口径は28.0cmに復元される。口縁端部は傾き、平坦面をもつ。外面はオサエトナテ、内面は横ハケを施したのち、挿目を入れる。しかし、内面下部は剥離しており、挿目の単位はわからない。11は土鍋で、口径22.4cmに復元される。外面は縦ハケ、内面は横ハケを

施し、外面にはススカが大量に付着する。

12は鉄葺である。49.09gを測る。13は鉄釘である。上部がやや広がり、断面は方形である。14は輝緑凝灰岩製の石包丁片である。孔は両面穿孔で、穿孔部分から割れている。この石包丁は流れ込みであろう。

18号溝 (第49図) 調査区中央部西寄りで確認された半円形に弧を描く溝である。幅約0.40m、深さ約5.0cmの細長い溝である。本来は潤地頭給遺跡で確認されたような住居を囲む溝を想定したが、住居等は確認されなかった。

出土遺物 (第52図1) 1は弥生時代後期の麩の口縁部片である。外面は口縁部が縦ハケ、胴部上半が横ハケ、下半に縦ハケを施す。内面は横ハケを施すが、接統痕も残す。口縁部端は外に突き出す。

19号溝 (第49図) 調査区中央部のやや北寄りで確認された溝である。幅1.1m、深さ13.0cm程度を測る。

20号溝 (第50図) 調査区の北部で確認された南北に延びる溝であるが、暗渠に切られており不安定な形状となる。22号溝に接する。幅0.68m、深さ20.0cmを測る。

出土遺物 (第52図2) 2は硯の1/4程度の破片である。色調は小豆色で赤間石製の可能性が高い。重さは89.67gである。

21号溝 新しい時代の擾乱と判断されたため欠番とする。

22号溝 (第50図) 調査区の北部で確認された南北に延びる溝であるが、西側を暗渠に切れ不安定な形状である。20号溝に接し、23号溝に切られる。

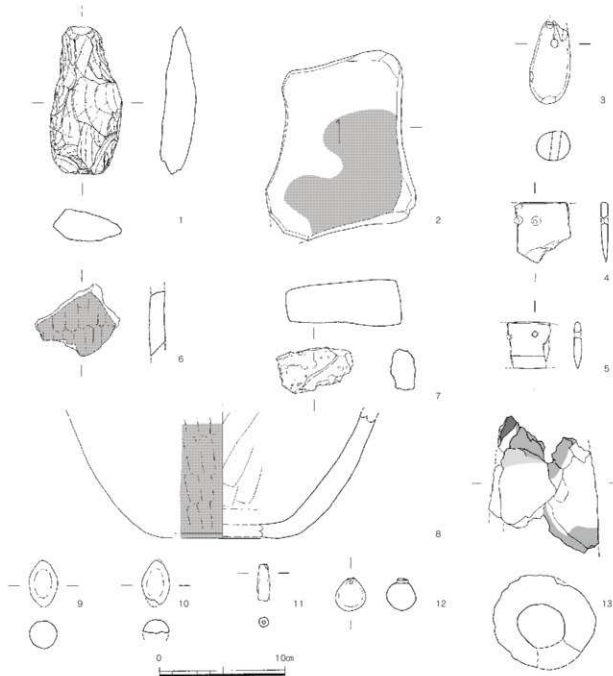
出土遺物 (第52図3・4) 3は土師器の坏である。口径12.1cm、器高2.4cmに復元される。底部は回転糸切り痕を残す。4は土師皿である。口径9.1cm、器高1.9cmを測る。底部は回転糸切り痕を残す。底部から口縁部に向かって直線的に開きながら立ち上がる。

23号溝 (第50図) 調査区の北部で確認された溝で、東西方向に延びている。17・22号溝を切り、調査区の外側へ延びる。

出土遺物 (第52図5～7) 5は青磁碗で口縁部片である。口径は16.0cmに復元される。灰色の胎土に淡緑釉をかける。6は土師皿である。口径8.6cm、器高1.85cmに復元される。底部は回転糸切り痕を残し、やや上げ底である。7は鉄製刀子の刃部小片である。

24号溝 (第10図) 調査区の北端部で確認された溝で、北側と東側は調査区外に延びている。溝の内側には9・10号建物があり、本来はこれらを取り囲む方形の溝であったと思われる。幅0.34m、深さ10cm程度を測る。

出土遺物 (第52図8～12) 8は褐釉陶器の椀底部片である。底径4.2cmを測る。内面は褐釉が厚くかかるが、外面は黄灰色の素地が露胎している。外面は回転ヘラケズリを施し、底部は上げ底である。9は象嵌青磁壺の胴部片か。外面は黒象嵌と白象嵌で花文を表しているが、小片のため詳細不明。内面は上から垂れてきた緑釉が均かくなる程度で、基本的に露胎である。また、内面には強い横ナテを施す。10は瓦質の挿鉢の口縁部片で、注口をもつ。口径は30.2cmに復元される。外面はオサエトナテ、内面は横位のハケの後に挿目を入れるが、残りが少なく単位は不明である。また、色調は白灰色を呈し、内面下部には黒斑を有する。11は瓦質土器の火鉢口縁部片で佐藤分類D類である (佐藤2006)。直線的に立ち上がる口縁部で、口端部下の突帯と突帯の間にス



第57図 酒井田遺跡包舍層出土石器・土製品 (1/3)

タンブで梅花文を施す。なお、上の突帯は外れているが、接続のため溝状に器壁を窪ませている。内面は横位のハケとナデを施す。口径は32.0cmに復元される。12は管状土錘である。長さ3.5cm、最大径1.3cmを測る。

25号溝 (第50図) 調査区の北川東寄りで確認された細い溝で24号溝に切られる。

出土遺物 (第52図13) 13は土師皿の小片である。口径8.1cm、器高1.2cmを測る。底部は回転糸切り痕を残す。

(6) 包舍層出土遺物

第53図1~14は青磁である。1は盤の底部片である。小片からの復元であるため、高台径19.8

cmはやや不安がある。全体的に厚く軸がわかり、内面見込部分には片切彫が施される。2・3は碗の上半部片である。2は赤口縁であるが、3は端部を外反させる。4~13は碗の底部片である。4は内面見込と高台畳付に白色土の目跡を残す。黄灰色の胎土に薄く軸がわかり、表面は黄緑色を呈する。軸は高台畳付より内面には及ばない。5も4と同様に内面見込と高台畳付に白色土の目跡を残す。淡褐色の胎土にふい灰緑色の軸がわかる。6は厚く軸がわかる碗の底部片である。椀部外面には竊蓮弁文が施される。軸は高台畳付より内側には及ばない。また、高台内面の割りは浅く、底部は肉厚である。7は外面の軸のかけ方が雑で、高台部はムラがあり、高台内面には及ばない。白灰色の胎土に淡緑色が薄くかかる。8は白灰色の胎土に淡緑軸をかけた底部片である。内面見込中央部には花文のスタンプが施される。軸は高台畳付より内面には及ばない。9は灰色の胎土にふい灰緑色の軸を施し、軸は高台畳付内面には及ばない。10は灰色の胎土にふい緑色の軸を施す。軸は高台畳付より内側には及ばない。また、高台内面の割りは浅く、底部は肉厚である。11は黄灰色の胎土に淡緑色の軸を施したもの。外面では軸が確認されず、高台内面はヘラケズリが粗く施されている。12は白黄色の胎土に淡緑色の軸が全面にかかる。高台内面の割りは浅く、底部は肉厚である。また、高台内面には白色土の目地が現れる。13は小碗の底部である。14は同安室系青磁の皿片である。灰色の胎土に透明度の高い淡緑軸が施される。口縁部を欠くが、内面にはZ字状の劃花文を配し、中央部には片切彫で草花文が施される。

15~18は白磁である。15は玉縁口縁の碗である。16は口縁端部を外反させる碗である。17は碗の底部片で外面は露胎、内面には乳白色の軸を施す。18は白磁の皿である。口縁端部を欠くが、内面には片切彫で草花文を描く。内外面ともに乳白色の軸を施すが、底部は露胎である。底部には墨書があり、「上」と書かれる。酒井田遺跡で唯一の墨書陶磁器である。なお、福岡市博多遺跡群での墨書陶磁器分類では「上」は意図不明な漢字に含まれる(佐伯1996)。

19~30は象嵌青磁である。19は碗の底部付近の破片で、緑色の胎土に黄緑軸が薄くかかる。内外面ともに白・黒象嵌が認められる。内面は中央部付近に蓮弁文を配し、その外側に水鳥と花文を描く。花の茎と葉、水鳥の嘴を黒象嵌、鳥の体部と花を白象嵌で表現する。内面見込の上部と下部にそれぞれ2本の直線を白象嵌で表している。20も碗下半付近の小片である。内外面ともに白象嵌が認められる。内面は2本1単位の直線文を2箇所にしたのち、その間を直径1.0cmの円文で充填し、外面は1本の直線文を施す。21は碗の底部片である。黄灰色の胎土に淡緑色の軸を施すが、高台畳付より内側には及ばない。高台内側には白色土の目跡が残る。内面見込部分には白象嵌で2本の直線文を表す。火を受けたか器表面がざらつく。22・23は碗の口縁部片。いずれも小片であるため、径が復元できない。22は灰色の胎土に黄緑軸をかけ、23は灰色の胎土にふい緑軸をかけるが、ピンホールをもつ。また、口縁端のつくりが良い。いずれも外面に白象嵌の直線文を施す。24は碗の小片である。外面に白象嵌で直線文を施し、内面に白象嵌と黒象嵌で木の葉状の文様を描く。胎土は灰色でふい緑色の軸をかける。25は碗の小片。淡灰色の胎土に透明度の高い緑軸を施す。外面に白象嵌で3本の直線文を施す。直線文の上にも円文状の白象嵌が認められるが、欠失部分が多く、詳細不明である。内面は水鳥が泳いでいる風景が象嵌されてお、水鳥の嘴と波を黒象嵌で、水鳥の体を白象嵌で表現している。26は碗の底部片。灰色の胎土にふい緑軸がわかり、やや雑陶器にちかい。内面に白象嵌で直線文を施す。27・28は方枕片で、おそらく同一個体である。27は広面と狭面の屈曲部に位置する小片である。屈曲部は

やや鈍角である。胎土は灰色で、外面はa・b面ともにややぶい緑灰軸をかける。内面にも軸が認められ、部分的に厚くかかることがある。なお、内面には一部角の部分が残っており、この破片が方柱の角部に該当することがわかる。象嵌はいずれも白象嵌である。a面では並行する2重界線とそれにぶつかる2重界線が、b面では並行する2重界線とそれに直角にぶつかる2重界線が認められる。その直線に並行する形で直径4.5mmの凹角が2個確認される。屈曲部はやや湾曲している。a面は長さ3.1cm、幅3.5cm、b面は長さ2.2cm、幅3.0cmを残し、厚さ0.7~0.9cmを測る。28も広面と状面の屈曲部の破片である。屈曲部はやや湾曲し、鈍角に広がる。灰色の胎土にぶい緑灰色の軸がわかる。a面の表面にはピンホールが多くみられざらつく。象嵌はいずれも白象嵌である。a面は27のa面と同様であるが、27のb面のみれた凹角がひとつ確認された。b面は2重界線が認められる。29は樽片か。灰色の胎土に透明度が高い緑軸がわかる。外面には白象嵌で剣先連弁文をあらわす。内面は露胎で横ナテを施す。部分的に緑軸が垂れている。長さ6.0cm、幅2.7cm、厚さ0.8cmの小片である。30は樽板の一部か。灰色の胎土に黄緑軸をかける。内面は無軸である。外面は白象嵌・黒象嵌で花卉をあらわす。長さ3.0cm、幅3.0cm、厚さ0.5mmの小片である。

第54図1は丸形で浅鉢形の土製火鉢である。口縁部は内側へ強く湾曲し、その上端は面をなす。比較的丁寧に作られており、湾曲部の角は鋭い。一辺4.0cm程度の小片であるため、口径は類例から求めている。

2・3は土師器である。2は底部を欠くが、口径12.8cm、器高2.8cmに復元される。口縁部部をすこし外反させる。3は坏部のみの破片で、口径11.6cmに復元される。口縁部部は薄く底である。4~8は土師皿である。4は約1/2の破片である。底部から直線の広がる口縁部をもつ。底部は回転糸切り痕を残す。口径9.4cm、器高1.7cmを測る。5は口径9.4cmに復元される土師皿で、内面底部は黒色化している。底部は回転糸切り痕を残す。6は回転糸切り痕と板状圧痕を残す土師皿で口径は10.0cmに復元される。7は口径8.5cmの土師皿で口縁部を一部打ち欠く。底部は回転糸切り痕を残し、やや湾曲しながら立ち上がる。8は口径9.5cmに復元される土師皿で、底部にクメメタの痕跡をのこす。9・10は手捏土器である。9は底部のみの破片で、ゆがみ大きい。10は鉢形で完形品である。表面にオサエ痕を残し、底部は丸底である。

11~13は黒色土器である。11は口径14.6cmに復元される黒色土器B類体である。内外面ともに横ミカキを施す。高台は八字状に付き、口縁部部は楕圓ですこし外反する。12・13は黒色土器A類の底部片である。13は高台部部を欠く。14は高台部の底部片。比較的長脚の高台を付ける。

15~21は瓦質の播鉢である。15は接続しないかおそらく同一個体と思われる白灰色の注口付播鉢である。口縁部部は傾き、上面に平坦面をもつ楠瀬D類である(楠瀬2009)。外面は基本的にナテや指オサエで整形し、所々にハケメカ確認される。内面は斜ハケを施したのち、4本1単位の播目を入れる。火を受けているのか剥離している箇所がある。16は楠瀬D類の播鉢口縁部片で口径27.6cmに復元される。口縁部部は断面方形で傾き、上面に平坦面をもつ。外面は横ハケとオサエで、内面は斜ハケを施したのち、5本1単位の播目を入れる。色調は白灰色である。17は口縁部部かや丸みをもつ播鉢口縁部片である。内外面ともに横ハケを施すが、剥離が著しく詳細不明。内面の播目はあるもの単位は確認できない。色調は白灰色を呈する。18は口縁部部かややM字になる播鉢口縁部片で口径32.6cmに復元される。外面はオサエと横ハケ、内面は斜ハケの

後に5本1単位の播目を施す。色調は白灰色である。19は口縁部部かやや肥厚する播鉢で、口径26.0cmに復元される。口縁部部は断面方形で傾く。外面はオサエと横ハケ、内面は横ハケを施すが、火を受けており内面の剥離が著しく播目が確認できない。色調はぶい橙色である。20は白灰色の注口付播鉢片である。小片であるため復元口径はやや不安がある。外面はハケとナテが確認されるが、剥離部分が多く詳細不明である。内面は横ハケの後に播目を入れるが3本のみ確認できる。21は播鉢の底部か。内外面ともにナテを施すが、剥離部分が多く詳細不明である。底部はオサエとナテを施す。

第55図1・2は備前焼の播鉢口縁部片である。1は口径32.0cmに復元される播鉢で、断面は明橙色、外面は青灰色、内面はぶい茶色を呈する。口縁部部は丸みを帯び、内面にやや張り出す。外面は横ナテとオサエを施し、内面は横ハケの後に4本1単位の播目を入れる。2はゆがみの大きい播鉢口縁部片である。径は類例から30.0cmで復元している。断面は橙色、内外面は灰色~赤茶色を呈する。内面は横ナテの後に4本1単位の播目を入れる。3は備前焼の甕口縁部片である。小片であるため口径は復元できない。口縁部部は頸部で屈曲したあと、広がりながら立ち上がり部部を丸く取める。

4・5は土鍋である。4は土鍋口縁部部の小片で、口径は22.0cmに復元される。外面は横ナテの後に縦ハケ、内面は横ハケを施す。外面にはススが付着する。5は耳付土鍋の口縁部片である。小片であるため、復元径は30.0cmとして図化している。外面はススが付着して黒色化するが、内面は淡橙色を呈する。

6は天目焼の上半部片である。灰色の胎土に黒軸を厚くかける。口径は13.4cmに復元される。7は褐釉陶器で壺か。黄灰色の胎土に褐釉が全面に薄くかかる。底部には白色土の跡が1箇所残る。8は不明土製品である。表面には格子目状の模様を有する。4個面とも目割れて結果的に菱形を呈する。裏面は薄く剥離し、調整不明である。9・10は脚部片である。三足鍋か。9は脚部部部片で、白灰色を呈する。胎土は瓦質で、ナテで調整している。断面は円形である。10は脚部上部の破片で、ぶい黄橙色を呈する。表面にナテの痕跡を残し、断面は円形である。11は瓦質土器の底部片である。外面は横ハケを施し、内面はナテで調整する。復元底径16.8cmで、全体的に肉厚である。

12~15は須臾器である。12は甕の口縁部部である。口縁部部は摘み上げ、頸部に向かいやや縮まる。口頸部内外面は横ナテ、体部外面は並行タタキ、内面にはオサエ痕を残す。口径は21.4cmに復元される。全体的に肉厚である。13・14は板状の底部片か。いずれも平底で直線に立ち上がる。15は高台付長頸壺の底部片である。底径は14.0cmに復元される。

第56図1~21は鉄器類である。1は東側段落ち包含層から出土した鉄滓で長さ6.6cm、幅6.7cm、厚さ2.4cm、重さ177.1gを測る。2は包含層出土の鉄滓で長さ5.3cm、幅4.7cm、厚さ3.1cm、重さ80.56gである。3は東側段落ち包含層出土の板状鉄片である。長さ5.5cm、幅4.5cm、厚さ1.0cm、重さ83.02gを測る。4は包含層出土の鉄滓で、長さ6.5cm、幅4.3cm、厚さ2.8cm、重さ97.9gを測る。5は包含層から出土した鉄滓で長さ4.7cm、幅3.5cm、厚さ3.1cm、重さ60.61gを測る。6は東側段落ち包含層から出土した肉厚の板状鉄器である。上下部部は折れるが、側面は残っており、断面長方形を呈する。刀の茎か。現存長さ4.0cm、幅2.3cm、厚さ0.8cmである。7は包含層から出土した鉄滓で長さ5.7cm、幅4.3cm、厚さ2.9cm、重さ76.6gを測る。8

は包含層から出土した鉄滓で、長さ2.2cm、幅1.7cm、高さ1.1cm、重さ8.49gを測る。9は包含層から出土した鉄滓で長さ4.9cm、幅3.4cm、厚さ2.1cm、重さ50.02gを測る。10は包含層から出土した鉄滓で長さ3.2cm、幅3.4cm、厚さ2.3cm、重さ40.67gを測る。11は包含層から出土した鉄滓で長さ2.6cm、幅2.3cm、厚さ1.7cm、重さ18.65cmを測る。12は東側段落ち包含層から出土した扁平な鉄滓である。長さ4.5cm、幅3.3cm、厚さ1.1cm、重さ19.64gを測る。13は東側段落ち包含層から出土した鉄滓で、長さ3.8cm、幅2.9cm、厚さ2.4cm、重さ22.32gを測る。14は包含層から出土した鉄滓で長さ2.8cm、幅2.8cm、厚さ1.8cm、重さ21.63gを測る。15は東側段落ち包含層から出土した鉄滓で、長さ3.4cm、幅2.6cm、厚さ1.8cm、重さ19.88gを測る。16は包含層から出土した鉄滓で長さ2.6cm、幅2.3cm、厚さ1.9cm、重さ16.13gを測る。17は包含層から出土した鉄釘である。長さ3.5cm、幅0.8cmを測り、断面は方形である。重さは4.12gである。18は包含層から出土した大型の釘で、頭をL字形に曲げる。先端部を欠くが、現存長5.2cm、幅0.85cm、厚さ0.75cmを測る。重さは16.2gである。19は包含層から出土した鋳状の鉄器である。長さ4.6cm、幅1.2cm、厚さ6.5mmを測る。断面は隅丸長方形である。

20は刀子柄もしくは鞘先端部で青銅板を加工して作っている。土圧等で変形が著しく、背の部分はめくり上がる。現存長5.2cm、幅1.5cm、厚さ4.0mm、重さ6.71gを測る。

21は当十銭の崇寧重寶で1103年初鋳である。崇寧重寶は今帰仁城跡（沖縄県）や博多、太宰府、草戸千軒町遺跡45次調査、堺、勝山館跡（北海道）などから出土しており、2002年の集成で200例ほど確認されている（永井2002）。また、珍しい例として本市に所在する森田遺跡では土壇墓から崇寧重寶が出土している（村上編2000）。

22はガラス製の小玉である。直径6.5mm×5.7mm、厚さ4.1mmを測り、色調はコバルトブルーである。23もガラス製の小玉で直径4.9mm×5.1mm、厚さ2.7mmを測り、色調はコバルトブルーである。24はガラス製の連玉で、直径5.6mm、厚さ5.3mmを測る。連玉の表面が風化のため白色化していることから、鉛ガラス製と思われる。ガラス玉類の詳細については福岡市埋蔵文化財センターの田上勇一郎氏による分析結果があるので、参照願いたい。

第57図1は縄文時代の打製石斧である。上端部に新しい欠損部をもつが、全長11.7cm、幅5.4cm、厚さ2.3cm、重さ227.9gを測る。2は東側段落ち包含層から出土した砥石である。全長13.6cm、幅9.2cm、厚さ3.6cmを測る。断面は長方形で、すべての面を砥石として用いている。3は形態的には小型の九州型石錘である。丸味を帯びた長楕円形の自然石に穿孔し施溝を施して、石錘としたため、全体的にゆがみをもつ。上端部を欠くが、現存長6.5cm、幅3.1cm、厚さ2.3cm、重さ90.15gを測る。4・5は石包丁の破片である。4は穿孔部を中心とする長さ4.2cm、幅4.8cm、厚さ5.5mmを測る輝緑凝灰岩製の石包丁で両面穿孔を施す。5は輝緑凝灰岩製の石包丁で穿孔部を中心に長さ3.3cm、幅3.7cm、厚さ6.0mm残存する。穿孔は片面穿孔である。6～7は滑石製石鍋の破片である。6は長さ6.8cm、幅5.2cm、厚さ1.2cmの石鍋胴部片である。外面はケズリ痕を明瞭に残すが、全面にススが付着する。内面はケズリ痕を残す。7は石鍋の小片で、長さ5.9cm、幅3.3cm、厚さ2.0cmを測る。8は石鍋の底部片で、反転して復元している。底径12.0cmを測る。内外面ともにケズリ痕を残す。9・10は投擲である。9は完形の投擲で、長さ3.8cm、直径2.2cmを測る。10は約1/2残る投擲片である。11は管状土錘片である。下部を欠くが長さ2.9cm、直径1.0cmを測る。12は球状の土製品で、上部に孔を施す。権の一種か。高さ

2.6cm、最大径2.4cmを測る。13は羽口片である。全体的に被熱のために表面が荒れている。外面は基部から先端に向かって、淡褐色→白灰色→赤褐色+灰色へと変化する。内面は褐色を呈する。現存長9.0cm、直径7.5～8.2cmである。

【参考文献】

- 福岡正宏・影山純夫・金巴里・谷見編2003『高麗茶碗—論考と資料』河原書店
- 今尾文昭1992『花かたにやぐら火鉢・考』『考古学と生活文化』同志社大学考古学シリーズV
- 小野正敏1982『15、16世紀の宋付茶碗。皿の分類とその年代』『貿易陶磁研究』2
- 橋本慶太2009『日用雑器類から見た中世博多の土器様相』『中世史の基礎研究』22
- 佐伯弘次1996『博多出土土器陶磁器をめぐる諸問題』『博多遺跡群出土土器資料集』
- 佐藤浩司2006『スタンプ文を有する瓦質土器の展開』『吉岡康暢先生古稀記念論集 陶磁器の社会史』
- 茶道資料館1990『遺跡出土の朝鮮王朝陶磁一名称と考古学—』平成二年秋季特別展
- 永井久美男2002『中世出土土器の分類図説』古志書院
- 降矢哲男2002『韓半島産陶磁器の流通—高麗時代の青磁を中心に—』『貿易陶磁研究』22
- 村上 敦編2000『森田遺跡』二史町文化財調査報告書第24集

II 潤古屋敷遺跡

1 調査の概要

試掘調査の結果、遺構が検出され、遺物が多量に出土したため糸島市潤4丁目568-1,569-1,585番地の発掘調査を実施した。調査面積は1,176.5㎡である。

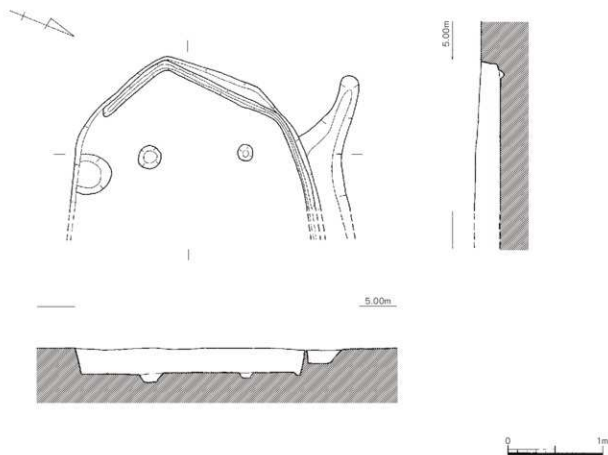
当地は水田（一部畑）で、耕作土層のすぐ下で遺構面が確認された。重機を用いた表土剥ぎの際に長さ約70m、幅約8mの南北方向に直線状に延びる大溝らしき遺構を検出したため、一部試掘を実施した結果、深さ約1.5～2.0mを測る断面形がV字形を呈する大溝であることが判明した。さらに、その周辺にも柱穴等の遺構群も多数確認されたため、そのレベルで水平に表土を除去し、あとは人力で土の除去を行った。その結果、中世の方形居館の区画溝（濠）の確認へとつながった。

潤古屋敷遺跡では方形居館の大溝（濠）のほかに、住居跡2棟、土坑2基、溝3条、柱穴群多数を確認している。以下、個別に遺構ならびに出土遺物を報告する。

2 遺構と遺物

(1) 住居跡

1号住居跡（第58図） 調査区の北側で確認された住居跡で、調査区の制約のため、全体の約



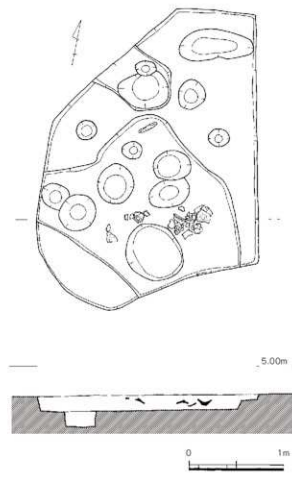
第58図 潤古屋敷遺跡1号住居跡実測図（1/40）

2分の1程確認している。南北1.94m、東西2.8m、深さ28cmを測り平面楕円形を呈する。遺構の周辺端部には幅10cmの溝が廻り、中央部には2個の柱穴、そして南端部には1個の柱穴を確認している。出土遺物から弥生時代中期から弥生時代後期にかけての住居跡と考える。

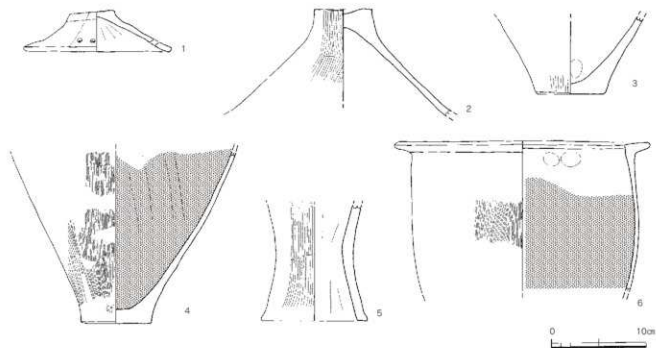
出土遺物 1号住居跡からは弥生時代中期から弥生時代後期にかけての土器片が多数出土した。が、細片のため図示しえなかった。

2号住居跡（第59図） 調査区の南側で確認された住居跡である。南北3.1m、東西2.3m、深さ10cmを測り楕円形を呈する。遺構は2段からなり、中央部は1段落ちとなっている。遺構内部には柱穴群が確認され、土器が遺構の中央部南側から出土した。弥生時代中期の住居跡か。

出土遺物（第60図） 2号住居跡からは弥生時代中期の土器が出土した。1は蓋である。頂径4.7cm、裾径15.5cm、器高4.4cmを測る。焼成は良好であり、胎土には白色砂粒を多量に含む。色調としては内・外面ともに黄灰褐色を呈する。外面裾部には焼成前に穿孔を施している。頂部にゆがみがみられる。2



第59図 潤古屋敷遺跡2号住居跡実測図（1/40）



第60図 潤古屋敷遺跡2号住居跡出土遺物実測図（1/4）

は蓋である。頂径6.0cm、残存器高9.8cmを測る。

焼成は良好であり、胎土には白色砂粒を多量に含む。色調は内・外面ともに明橙色を呈する。外面全体にわたりハケが明瞭に残る。頂部にへこみがみられる。3は甕の底部である。底径7.1cm、残存器高8.0cmを測る。焼成はあまり良くなく、胎土には白色砂粒を多量に含む。色調として内面は褐灰色、外面は橙色を呈する。調整等は風化のため不明瞭である。4は甕の底部である。底径7.6cm、残存器高19cmを測る。焼成は良好であり、胎土には白色砂粒を多量に含む。色調として内面は黒褐色、外面にはぶい橙色を呈する。外面全体にわたりハケが明瞭に残る。6と同一個体の可能性がある。5は甕台である。底径11.2cm、残存器高12.2cmを測る。焼成は良好であり、胎土には白色砂粒を多量に含む。色調として内面は黄褐色、外面にはぶい橙色を呈する。外面全体にわたりハケが明瞭に残る。6は甕の口縁部と体部の一部である。口径26.9cm、残存器高15.9cmを測る。焼成は良好であり、胎土には白色砂粒を多量に含む。色調として内面にはぶい橙色、外面にはぶい橙色を呈する。外面全体にわたりハケが明瞭に残る。4と同一個体の可能性がある。

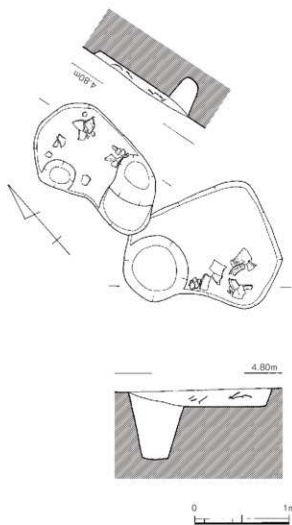
(2) 土坑

1号土坑 (第61図) 調査区の北側で確認された土坑である。南北3.1m、東西1.2m、深さ20cmを測る。遺構は2つの土坑からなり、各土坑内には柱穴が確認される。柱穴に関連する遺構の可能性もあるが、ここでは土坑として報告する。土器は各土坑から出土した。

出土遺物 1号土坑からは弥生時代中期の土器が出土した。甕の口縁部・底部などの土器片が多量に出土した。しかし、細片のため図示しえなかった。

2号土坑 (第62図) 調査区の南側で確認された土坑である。南北81cm、東西1.0m、深さ60cmを測る。断面形は逆台形を呈する。埋土層からは弥生時代中期から弥生時代後期にかけての土器片が数多く出土した。中層から下層にかけて、土器片の出土量は激減するものの、中層からは土製の勾玉が出土した。弥生時代中期から弥生時代後期にかけての土坑か。

出土遺物 (第63図) 2号土坑の埋土中層から土製の勾玉が出土した。長さ5.0cm、幅1.5cm、厚さ1.5cmを測る。この土製の勾玉はほぼ水平に横たえられた状態で出土した。出土状況から、単に破壊されて埋没したとは考えられず、意図的に埋納された



第61図 湖古屋敷遺跡1号土坑実測図 (1/40)

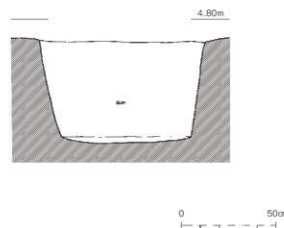
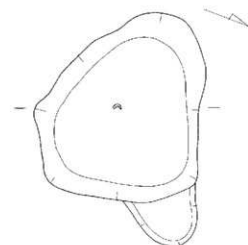
のであろう。祭祀的な意味合いがあると考えられる。なお、土器については細片のため図示しえなかった。

(3) 井戸

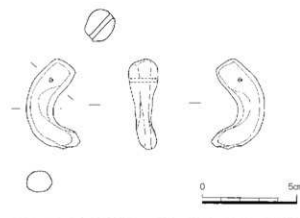
1号井戸 (第64図) 調査区中央部の東端部に位置する素掘りの井戸である。検出面で南北方向に2.3m、東西方向に2.1m、深さ2.5mを測る。検出面は不正五角形を呈し、井戸本体は楕円形を呈する。出土遺物は弥生時代中期から弥生時代後期にかけての土器片、土師皿、陶磁器片などが出土した。遺物の出土状況から14世紀代にこの井戸は機能したと考える。

出土遺物 (第66図6・9) 1号井戸からは弥生時代中期から弥生時代後期にかけての土器片、土師皿、陶磁器片などが出土した。6は土師皿である。復元口径12.5cm、器高3.4cm、底径8.4cmを測る。焼成は良好であり、胎土には1mm前後の白色砂粒を若干含む。底部は板状圧痕と回転糸切り痕を残す。口径、器高、底部の調整から、山本分類XX型式で14世紀中頃(山本1989)と考える。9は播鉢の底部である。復元底径10cmを測る。焼成は良好であり、胎土には1mm前後の白色砂粒を若干含む。調整としては、内面にハケが施され、外面には指頭痕が残る。なお、弥生時代中期から弥生時代後期にかけての土器、陶磁器については細片のため図示しえなかった。

2号井戸 (第65図1) 調査区中央部に位置し、大溝と3号溝との間で確認された素掘りの井戸である。検出面で南北方向に1.8m、東西方向に2.6m、深さは2.2mを測る。検出面は楕円形を呈し、井戸本体も楕円形を呈する。出土遺物は弥生時代中期から弥生時代後期にかけての土器片、土師皿、陶磁器片、木製品などが出土した。遺物の出土状況から13世紀から14世紀代にこの井戸は機能したと考える。



第62図 湖古屋敷遺跡2号土坑実測図 (1/20)

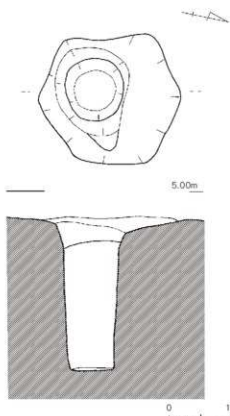


第63図 湖古屋敷遺跡2号土坑出土勾玉実測図 (1/2)

出土遺物 (第66図1～5、7・8、10～15)

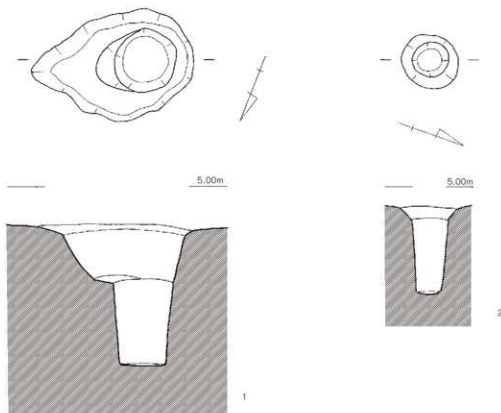
2号井戸からは弥生時代中期から弥生時代後期にかけての土器片、土師皿、陶磁器片、木製品などが出土した。

第66図1～5は土師皿である。1は口径10cm、器高1.3cm、底径8.4cmを測る。底部は回転系切り痕を残す。口径、器高、底部の調整から、XVI型式で13世紀前半～14世紀前後と考える。2は口径9.4cm、器高1.2cm、底径8.4cmを測る。底部は回転系切り痕を残す。口径、器高、底部の調整からXVI型式で13世紀前半～14世紀前後と考える。3は口径12.6cm、器高2.6cm、底径9.4cmを測る。底部は回転系切り痕を残す。口径、器高、底部の調整からXVI型式で13世紀前半～14世紀前後と考える。4は口径12.4cm、器高3.0cm、底径10.5cmを測る。底部は板状圧痕と回転系切り痕を残す。口径、器高、底部の調整から、XIX型式で13世紀中頃～14世紀前後と考える。5は土師皿である。口径12.2cm、器高3.8cm、底径9.7cmを測る。底部は板状圧痕と回転系切り痕を残す。口径、器高、底部の調整から、XIX型式で13世紀中頃～14世紀前後と考える。7は陶器の壺の底部である。復元底径8cmを測る。胎土は明灰色で緻密である。内面と外面体部に軸が施されている。軸は黄色味を帯びた灰色を呈す。耳壺VI類で13世紀代と考える(宮崎編2000)。8は白磁碗の底部である。復元高台径7.4cmを測る。胎土は淡灰色で緻密である。軸はわずかに水色を帯びる白色を呈し、内面には施されるが、体部外面下位から高台外面には施されていない。この白磁碗の見込には沈線があり、この径が広い。また、高台髷付は外面端部が若干浮いている。白磁碗XI類で10世紀後半～11世紀中頃と考える。10は白磁皿の口縁部である。復元口径10.4cmを測る。胎土は灰白色で緻密である。軸は口縁端部のみ欠く「口禿げ」になっており、空色を帯びた灰白色を呈す。白磁皿IX類で13世紀後半～14世紀前半と考える。11は青磁碗の口縁部である。復元口径16.2cmを測る。胎土は灰白色で緻密である。軸は全体に施されており、軽くかすんだ緑色を呈す。龍泉窯系青磁碗IX類で14世紀初頭～14世紀後半と考える。12は白磁碗の底部である。復元底径6.8cmを測る。胎土は灰白色で緻密である。軸は乳白色を呈し、内面に施され、体部外面下位から高台外面には施されていない。この白磁碗の見込には沈線があり、この径が広い。白磁碗II類で11世紀後半～12世紀前半と考える。13は染付皿の底部である。復元高台径7.6cmを測る。胎土は灰白色で緻密である。軸は乳白色を呈し、高台髷付部を除き、全体に施されている。14は青磁皿の底部である。復元底径6.0cmを測る。胎土は灰色を呈し、緻密である。軸は黄色味を帯びた緑色を呈し、内面と体部外面に施されている。底部の軸は掻き取られている。内面には篋による文様とジグザグ状の柳点描文がある。

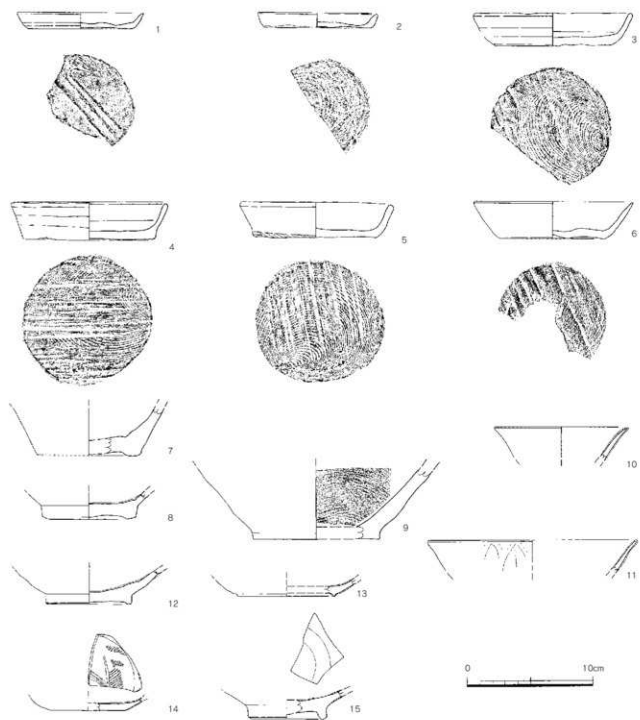


第64図 洞古屋敷遺跡1号井戸実測図 (1/60)

第64図 洞古屋敷遺跡1号井戸実測図 (1/60)

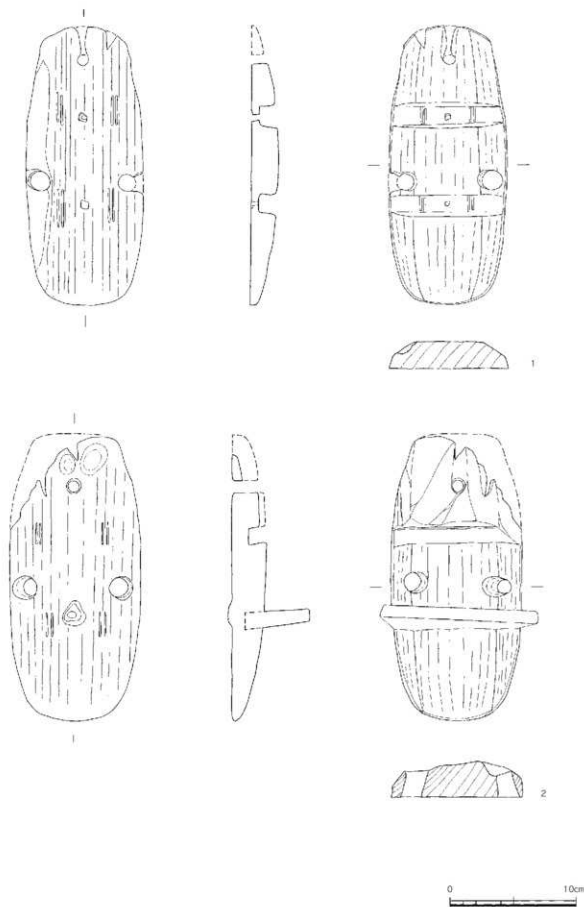


第65図 洞古屋敷遺跡2～4号井戸実測図 (1/60)

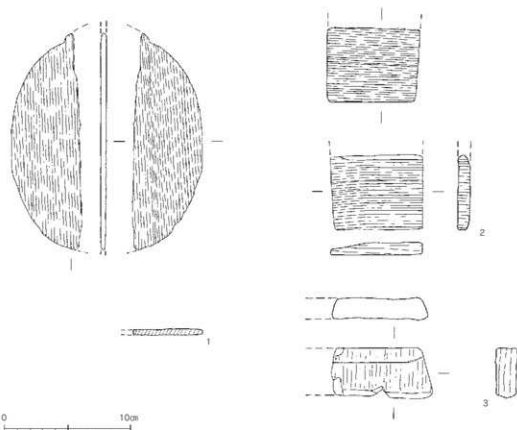


第66図 洞古屋敷遺跡井戸出土遺物実測図 (1/3)

同安室系青磁皿Ⅰ類で12世紀中頃～12世紀後半と考える。15は陶磁器（白磁椀）の底部である。復元高台径5.5cmを測る。胎土は灰色を呈し、緻密である。軸は黄色味を帯びた緑色を呈し、内面に施されるが、体部外面下位から高台外面には施されていない。また、内面見込の軸を環状に掻き取っている。調整としては体部外面下位から高台外面にかけてハケが施されている。白磁椀Ⅷ類で12世紀中頃～12世紀後半と考える。なお、弥生時代中期から弥生時代後期にかけ



第67図 洞古屋敷遺跡井戸出土土製品実測図1 (1/3)



第68図 瀬古屋敷遺跡井戸出土木製品実測図2 (1/3)

ての土器は細片のため図示しえなかった。

第67図1は下駄である。全長22.2cm、幅9.4cm、厚さ2.2cmを測る。下駄の歯（2個）を欠くが、本体部はほぼ完全品である。大人用の下駄と考える。表面には下駄の歯を止めるための釘跡などが残っている。使用痕が明瞭に残っていないために、左右どちらの下駄か不明であるが破損状況から判断すると、右足用の下駄であろう。2は全長22.8cm、幅10.4cm、厚さ2.6cmを測る。下駄の歯（1個）を欠くが、本体部はほぼ完全品である。大人用の下駄と考える。表面には下駄の歯を止めるための釘跡などが残っている。使用痕から判断すると、左足用の下駄であったと考える。

第68図1は曲物の一部である。残存長17.2cm、残存幅5.4cm、厚さ6.2mmを測る。曲物の底部の一部と考える。2はクサビ状木製品である。現存長7.2cm、残存幅5.8cm、厚さ1.2mmを測る。用途は不明である。3は下駄の歯の一部である。残存長8.4cm、残存幅4.2cm、厚さ1.8mmを測る。下駄の歯の先端部に使用痕を確認できる。この他に多数の木片などが出土したが、細片のため図示しえなかった。

3号井戸（第65図2）調査区の南部に位置し、2号住居跡の西側で確認された素掘りの井戸である。検出面で南北方向に0.9m、東西方向に0.8m、深さは1.45mを測る。検出面は楕円形を呈し、井戸本体も楕円形を呈する。出土遺物は弥生時代中期から弥生時代後期にかけての土

器片、土師皿、陶磁器片などが出土した。遺物の出土状況から13世紀から14世紀にかけてこの井戸は機能したと考える。

出土遺物 弥生時代中期から弥生時代後期にかけての土器片、土師皿、陶磁器片などが出土した。しかし、細片のため図示しえなかった。

4号井戸（第65図3）調査区の南端部で確認された素掘りの井戸である。検出面で南北方向に1.1m、東西方向に1.7m、深さは1.8mを測る。検出面は楕円形を呈し、井戸本体も楕円形を呈する。出土遺物は弥生時代中期から弥生時代後期にかけての土器片、土師皿、陶磁器片などが出土した。遺物の出土状況から13世紀から14世紀にかけてこの井戸は機能したと考える。

出土遺物 弥生時代中期から弥生時代後期にかけての土器片、土師皿、陶磁器片などが出土した。しかし、細片のため図示しえなかった。

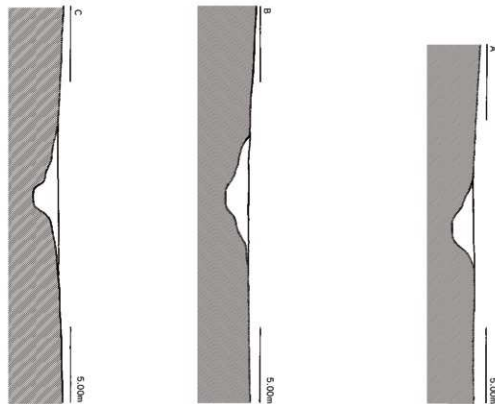
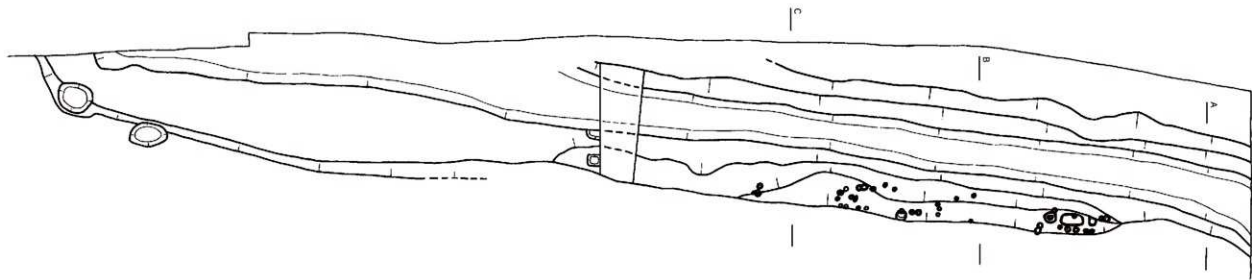
（4）大溝（第69・70図）

調査区の中央部から北側にかけて確認された南北方向に延びる大溝である。調査区の制約のため、大溝全体を検出できなかった。この大溝は今回の調査区の北側にさらに続く想定される。今回の調査で確認できた大溝は長さ64m、幅7m、深さ1.2mを測る。主軸は北から西方向に15°傾く。

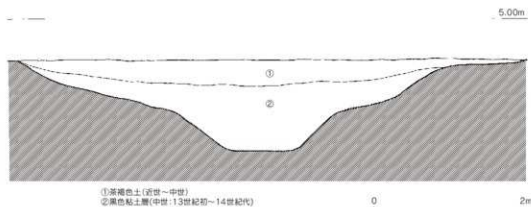
断面形はV字形を呈し、層位としては2層に分かれる。上層は茶褐色土であり、遺物として弥生時代中期から後期にかけての土器片、土師皿、17世紀代の陶磁器などが出土している。下層は黒色粘質土であり、遺物としては弥生時代中期から後期にかけての土器片、土師皿、10世紀から14世紀代にかけての陶磁器、木製品などが出土している。

遺物の出土状況から、弥生時代の遺構面を削平して、まず10世紀から12世紀にかけて遺構面が構築された可能性が高い。次に10世紀から12世紀にかけての遺構面を削平して大溝が掘削されたのであろう。この大溝は土師皿などの生活雑器と輸入陶磁器の出土状況から13世紀から14世紀代にかけて機能し、15世紀代にかけてその役割を終えて埋没したと考える。なお、調査区の水位が比較的の高いことから、この大溝は空堀（堀）ではなく水堀（溝）の可能性が高い。

大溝出土弥生土器（第71図）大溝は弥生時代の2号溝を切っており弥生時代中期から後期にかけての土器片が多量に出土している。1はミニチュア土器である。口径3.1cm、器高3.8cm、底径2.6cmを測る。焼成は良好で、1mmほどの白色砂粒を含む。大溝南部の東側の柱穴からも同様のミニチュア土器が出土していることから、大溝が掘削される以前、この周辺で祭祀行為が行われていたと考えられる。2は鉢である。復元口径8.6cm、器高4.3cm、底径4cmを測る。焼成は良好で、1mmほどの白色砂粒を含む。器形は若干の歪みがあり、底部の角にスガが付着している。3は器台である。口径7.7cm、器高14.4cm、底径9cmを測る。焼成は良好で、1mmほどの白色砂粒を含む。ほぼ完形品である。調整は明瞭であり、体部外面全体にわたり縦のハケが残る。4は器台である。口径10.6cm、器高15.5cm、底径11cmを測る。焼成は良好で、1mmほどの白色砂粒を含む。ほぼ完形品であるが、胴部の一部を欠損する。調整は明瞭であり、体部外面全体にわたり縦のハケが残る。5は高坏である。口径20.8cm、器高19.2cmを測る。焼成は良好で、1mmほどの白色砂粒を含む。調整は明瞭であり、全体的に丁寧な調整が施されている。6は甕の底部である。復元底径7.8cm、残存器高14cmを測る。焼成は普通で、1～3mmほどの



第69回 湖古屋敷遺跡大溝実測図 (1/200)

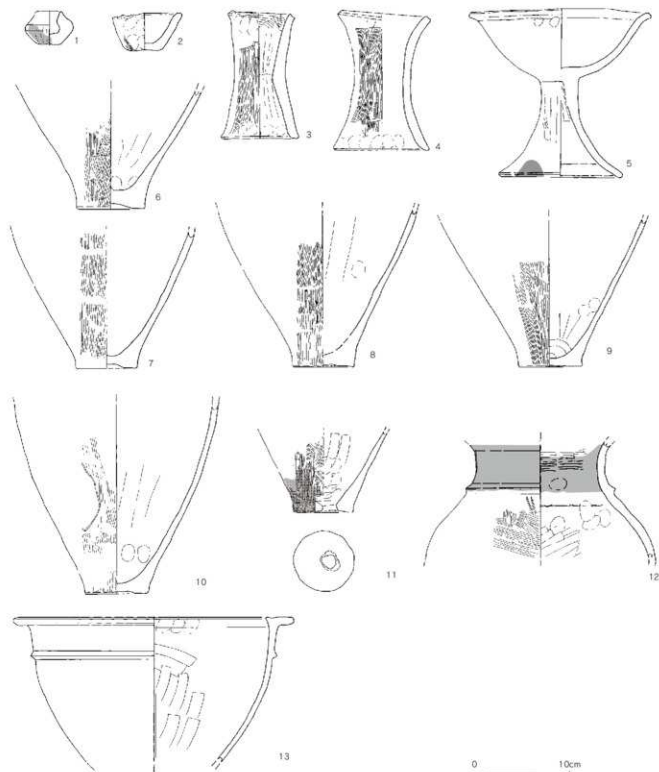


第70図 瀬古屋敷遺跡大溝土層図 (1/50)

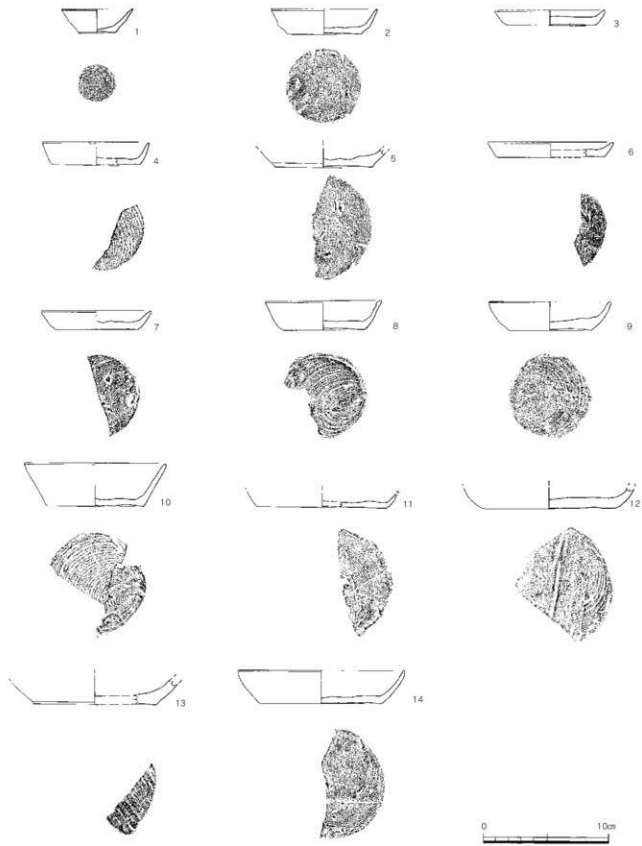
白色砂粒を含む。調整は風化のため不明瞭であるが、体部外面全体にわたり丁寧なハケが施されている。7は甕の底部である。復元底径7.2cm、残存器高15cmを測る。焼成は良好で、1mmほどの白色砂粒を含む。調整は風化のため不明瞭な部分があるものの、体部外面全体にわたり丁寧なハケが施されている。8は甕の底部である。復元底径6.9cm、残存器高17.8cmを測る。焼成は良好で、1~3mmほどの白色砂粒を含む。調整は風化のため不明瞭な部分があるものの、体部外面全体にわたり丁寧なハケが施されている。9は甕の底部である。底径7cm、残存器高16.4cmを測る。焼成は良好で、1~3mmほどの白色砂粒を含む。調整は明瞭であり、体部外面全体にわたり縦のハケが残る。10は甕の底部である。底径7.2cm、残存器高22cmを測る。焼成はやや不良で、1~3mmほどの白色砂粒を含む。調整は不明瞭であり、器面の風化や剥離がはげしい。11は甕の底部である。底径6.9cm、残存器高9.3cmを測る。焼成は普通で、1~3mmほどの白色砂粒を含む。調整は明瞭であり、体部外面全体にわたり縦のハケが残る。また、底部には外側から内側に敲打されてきた穿孔がある。12は壺の頸部である。焼成は良好で、1~3mmほどの白色砂粒を含む。調整は明瞭であり、突帯下に2本のヘラ描き記号文が施されている。このヘラ描き記号文は器面のハケ、ナデ調整後に行われている。また、体部外面には丹塗りも施されている。祭祀用の壺であったと考えられる。13は甕の口縁部である。復元口径32cm、残存器高16.4cmを測る。焼成は良好で、1~3mmほどの白色砂粒を含む。調整は明瞭であり、指ナデの後、全体的に丁寧な横ナデなどの調整が施されている。

大溝出土生活雑器 (第72~75図) 大溝下層から土師皿などの日常生活用土器が多量に出土した。

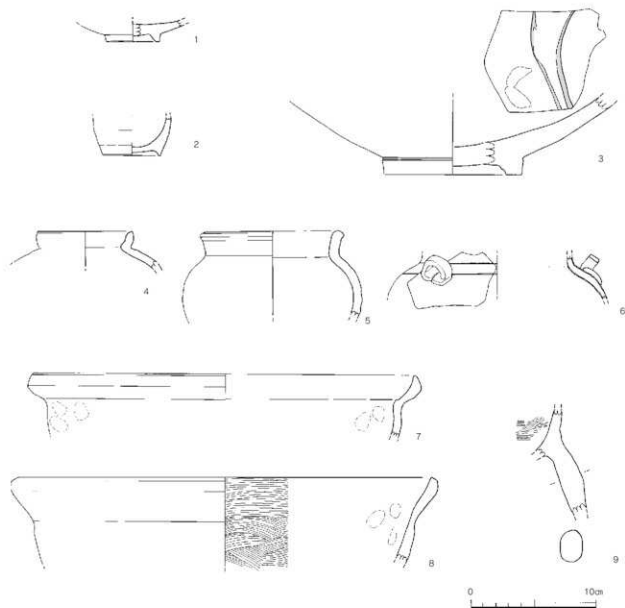
第72図1~14は土師皿である。1は口径5.6cm、器高1.9cm、底径3cmを測る。焼成は良好であり、胎土には1mm以下の白色砂粒を含む。完形品であり、底部は回転糸切り痕を残す。口径、器高、底部の調整から、XX型で14世紀中頃と考える。2は復元口径11.0cm、器高2cm、底径7.6cmを測る。焼成は良好であり、胎土には1mm以下の白色砂粒を含む。底部は回転糸切り痕を残す。口径、器高、底部の調整からXVII型で13世紀中頃~14世紀前後と考える。3は土師皿である。復元口径8.4cm、復元器高1.2cm、復元底径7cmを測る。焼成は良くない。胎土には1mm以下の白色砂粒を含む。底部は回転糸切り痕を残す。口径、器高、底部の調整から、XVIII型で



第71図 瀬古屋敷遺跡大溝出土土師皿実測図 (1/4)

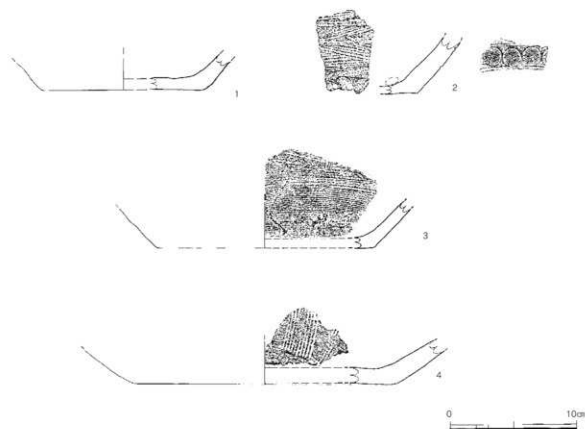


第72図 洞古屋敷遺跡大溝出土生活雑器実測図1 (1/3)



第73図 洞古屋敷遺跡大溝出土生活雑器実測図2 (1/3)

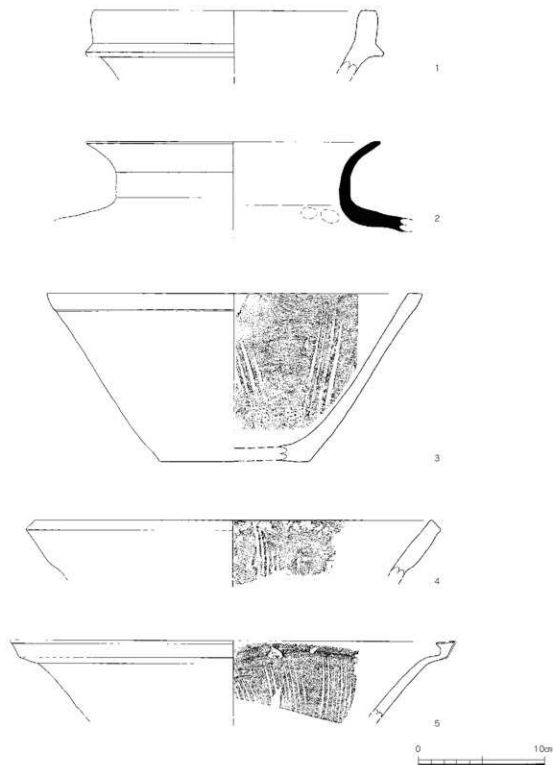
13世紀中頃～14世紀前後と考える。4は復元口径8.3cm、復元器高1.7cm、復元底径7cmを測る。焼成は良好である。胎土には1mm以下の白色砂粒を含む。底部は回転系切り痕を残す。口径、器高、底部の調整から、XIX型式で13世紀中頃～14世紀前後と考える。5は残存器高1.5cm、底径7.2cmを測る。焼成は良好であり、胎土には1mm以下の白色砂粒を含む。底部は回転系切り痕を残す。底径、底部の調整から、XVIII型式で13世紀中頃～14世紀前後と考える。6は復元口径9.7cm、器高1.2cm、復元底径8.4cmを測る。焼成は良好である。胎土には1mm以下の白色砂粒を含む。底部は回転系切り痕を残す。口径、器高、底部の調整から、XVI型式で13世紀中頃～14世紀前後と考える。7は土師皿である。復元口径9.7cm、器高1.5cm、復元底径7.6cmを測る。焼成は良好である。胎土には1mm以下の白色砂粒を含む。底部は回転系切り痕を残す。口径、



第74図 洞古屋敷遺跡大溝出土生活雑器実測図3 (1/3)

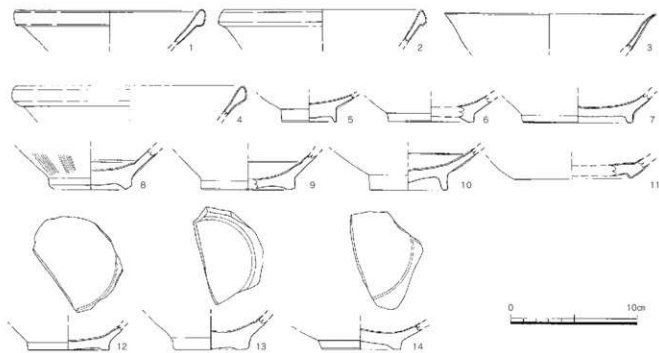
器高、底部の調整から、XVIII型で13世紀中頃～14世紀前後と考える。8は復元口径9.1cm、器高2.3cm、復元底径6.4cmを測る。焼成は良好である。胎土には1mm以下の白色砂粒を含む。底部は回転系切り痕を残す。口径、器高、底部の調整から、XVIII型で13世紀中頃～14世紀前後と考える。9は口径9.6cm、器高2.3cm、復元底径7.5cmを測る。焼成は良好である。胎土には1mm以下の白色砂粒を含む。底部は回転系切り痕を残す。口径、器高、底部の調整から、XVIII型で13世紀中頃～14世紀前後と考える。10は口径11cm、器高3.4cm、底径7.7cmを測る。焼成は良好であり、胎土には1mm以下の白色砂粒を含む。底部は回転系切り痕を残す。口径、器高、底部の調整から、XX型で14世紀中頃と考える。11は土師皿である。残存器高1.2cm、復元底径10cmを測る。焼成は悪く、胎土には1mm以下の白色砂粒を含む。底部は回転系切り痕を残す。底径、底部の調整から、XVI型で13世紀中頃～14世紀前後と考える。12は残存器高1.6cm、復元底径10cmを測る。焼成は悪く、胎土には1mm以下の白色砂粒を含む。底部は回転系切り痕を残す。底径、底部の調整から、XVI型で13世紀中頃～14世紀前後と考える。13は残存器高2.2cm、復元底径9.7cmを測る。胎土には1mm以下の白色砂粒を含む。底部は回転系切り痕を残す。底径、底部の調整から、XVI型で13世紀中頃～14世紀前後と考える。14は口径13cm、器高2.6cm、底径9.6cmを測る。焼成は良好であり、胎土には1mm以下の白色砂粒を含む。底部は回転系切り痕を残す。口径、器高、底部の調整からXVIII型で13世紀中頃～14世紀前後と考える。

第73図1は陶器の高台部分である。残存器高1.8cm、復元高台径4.2cmを測る。胎土は灰色を



第75図 洞古屋敷遺跡大溝出土生活雑器実測図4 (1/3)

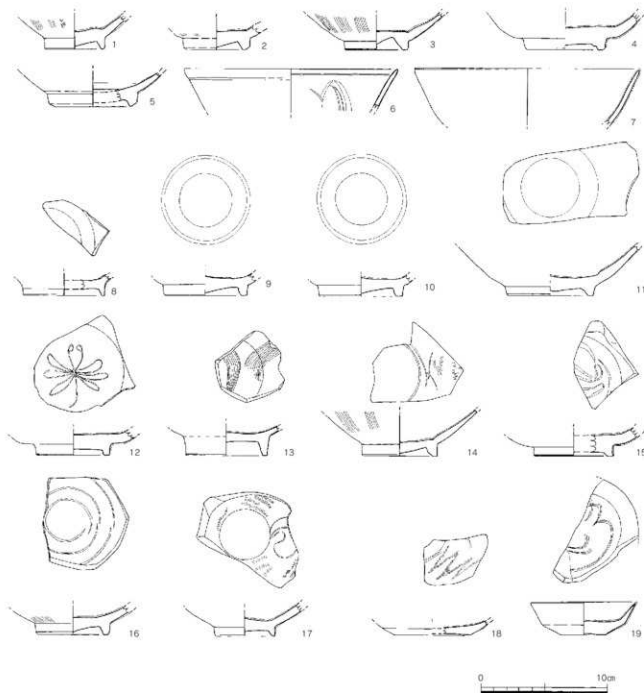
呈し、緻密である。軸は内面に施されるが、体部外面下位から高台外面には施されていない。2は耳垂の底部である。残存器高3cm、復元底径4.6cmを測る。胎土は白灰色を呈し、緻密である。軸は白灰色を呈し、高台畳付部分を除く外面全面に施される。耳垂VI類で13世紀代と考える。3は陶器の高台部分である。残存器高2.2cm、復元高台径10.8cmを測る。胎土は灰色を呈し、緻



第76図 瀬古屋敷遺跡大溝出土陶磁器実測図1 (1/3)

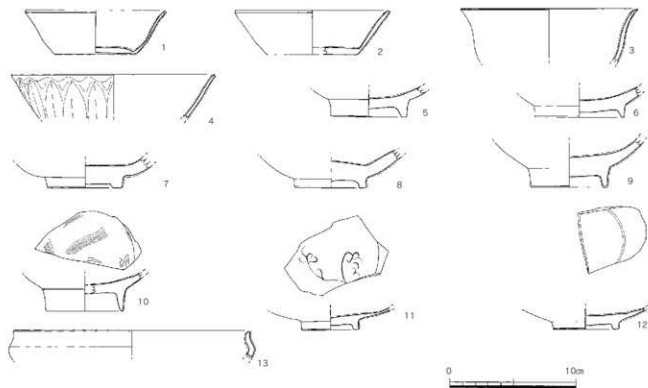
密である。軸は内面に施されるが、体部外面には施されていない。内面には目跡と文様がある。4は陶器の壺の口縁部である。残存器高3cm、復元口径7.4cmを測る。胎土は灰色を呈し、緻密である。軸は内側については光沢のない暗茶褐色、外側については光沢のない暗茶褐色を呈し、口縁部から体部にかけて内外ともに施されている。5は陶器の壺の口縁部である。残存器高7cm、復元口径10.4cmを測る。胎土は灰色を呈し、緻密である。軸は内側については赤茶色、外側については明茶褐色を呈し、口縁部から体部にかけて内外ともに施されている。陶器壺Ⅳ類で13世紀～14世紀前後と考える。6は陶器の耳壺の口縁部である。胎土は暗茶褐色を呈し、緻密である。軸は光沢のある暗茶褐色を呈し、口縁部から体部にかけて内外ともに施されている。陶器壺Ⅳ類で13世紀～14世紀前後と考える。7は土鍋の口縁部である。復元口径30cmを測る。焼成は良好で、胎土には1mm以下の白色砂粒を含む。足鍋の口縁部の可能性がある。14世紀代のものか。8は土鍋の口縁部である。復元口径32.4cmを測る。焼成は良好で、胎土には1mm以下の白色砂粒を含む。14世紀代のものか。9は足鍋の一部である。焼成は良好で、胎土には1mm以下の白色砂粒を含む。

第74図の1は鍋の底部か。復元底径12.6cmを測る。焼成は良好で、胎土に1mm以下の白色砂粒を含む。底部には板状圧痕が残る。2は火鉢の底部である。細片のため、底径などは不明である。焼成は良好で、胎土には1mm以下の白色砂粒を含む。調整としては内面にはハケが施され、体部外面に菊花文を押捺されている。奈良火鉢Ⅰ類で14世紀代と考える（立石1995）。3は播鉢の底部である。復元底径16.8cmを測る。焼成は悪く、胎土には1mm以下の白色砂粒を含む。調整としては内面にはハケが施されている。4は播鉢の底部である。復元底径22cmを測る。焼成は悪く、胎土には1mm以下の白色砂粒を含む。調整としては内面にはハケが施されている。



第77図 瀬古屋敷遺跡大溝出土陶磁器実測図2 (1/3)

第75図の1は滑石製石鍋の口縁部である。復元口径22cmを測る。鈔の断面は正台形を呈し、鈔は下がる。口縁部が直立し、口径より底径が小さい。滑石製石鍋Ⅲ類で13世紀～14世紀代と考える（木戸1995）。2は中世須恵器の口縁部である。復元口径23cmを測る。焼成は良好で、胎土には1mm以下の白色砂粒を含む。軸は透明でガラス質であり、口縁部から体部にかけて内外ともに施されている。13世紀代のものか。3は播鉢である。口径29.5cm、器高13.3cm、底径11.8cmを測る。焼成は良好で、胎土には1mm以下の白色砂粒を含む。調整としては内面にハケ

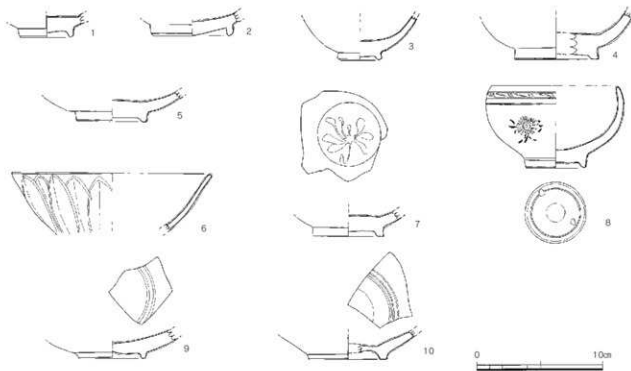


第78図 瀾古屋敷遺跡大満出土陶磁器実測図3 (1/3)

が施され、挿目が放射状に上端部5～6cm間隔で刻まれている。4は挿鉢の口縁部である。復元口径31.2cmを測る。焼成は悪く、胎土には1mm以下の白色砂粒を含む。調整としては内面のハケの上に挿目が放射状に刻まれている。13世紀代のものか。5は挿鉢の口縁部である。復元口径35cmを測る。胎土は赤茶色を呈し、緻密である。調整としては内面に挿目が放射状に刻まれている。挿鉢古瀬戸Ⅳ期で13世紀後半と考える(藤澤1995)。

大満出土陶磁器(第76～80図)大満からは陶磁器が多量に出土した。

第76図の陶磁器は大満下層から出土した。1は白磁碗の口縁部である。復元口径15cmを測る。胎土は淡灰色を呈し、緻密である。軸は淡緑白色を呈し、全体に施されている。白磁碗Ⅹ類で10世紀後半～11世紀中頃と考える。2は白磁碗の口縁部である。復元口径15.8cmを測る。胎土は灰白色を呈し、緻密である。軸は灰白色を呈し、全体に施されている。白磁碗Ⅱ類で11世紀後半～12世紀前後と考える。3は白磁碗の口縁部である。復元口径16.6cmを測る。胎土は灰白色を呈し、緻密である。軸は灰白色を呈し、全体に施されている。白磁碗Ⅴ類で11世紀後半～12世紀前半と考える。4は白磁碗の口縁部である。復元口径17.8cmを測る。胎土は灰白色を呈し、緻密である。軸は灰白色を呈し、全体にやや厚めに施されている。白磁碗Ⅳ類で11世紀後半～12世紀前半と考える。5は白磁碗の高台部である。高台径4.4cmを測る。胎土は灰白色を呈し、緻密である。軸は乳白色を呈し、内面には施されるが、体部外面下位から高台外面には施されていない。白磁碗Ⅹ類で11世紀後半～12世紀前半と考える。6は白磁碗の高台部である。復元高台径6.8cmを測る。胎土は灰白色を呈し、緻密である。軸は灰白色を呈し、内面には施されるが、体部外面下位から高台外面には施されていない。白磁碗Ⅳ類で11世紀後半～12世紀前半と考える。12は白磁碗の高台部である。復元高台径6.4cmを測る。胎土は淡黄灰色を呈し、多少粗い。軸は茶黄色を呈し、内面には施されるが、体部外面下位から高台外面には施されていない。底部内面と高台外面斜行部に三角形状の目跡がある。越州窯系青磁碗Ⅰ類で8世紀末～10世紀中頃と考える。8は白磁碗の高台部である。復元高台径5.6cmを測る。胎土は青灰色を帯びる白色を呈し、緻密である。軸はわずかに水色を帯びる白色を呈し、内面には施されるが、体部外面下位から高台外面には施されていない。内面に沈線が施され、体部外面下位から高台外面にかけてハケが施される。また、高台置付の外側端部が若干浮いているのも特徴である。白磁碗Ⅹ類で10世紀後半～11世紀中頃と考える。9は白磁碗の高台部である。高台径7.5cmを測る。胎土は淡灰色を呈し、緻密である。軸は黄色を帯びた灰色を呈し、内面には施されるが、体部外面下位から高台外面には施されていない。内面に沈線が施される。白磁碗Ⅹ類で10世紀後半～11世紀中頃と考える。10は白磁碗の高台部である。高台径6cmを測る。胎土は灰白色を呈し、緻密である。軸は透明であり、内面には施されるが、体部外面下位から高台外面には施されていない。内面に沈線が施される。白磁碗Ⅴ類で11世紀後半～12世紀前半と考える。11は青磁皿の底部である。復元底径9.2cmを測る。軸は透明であり、ほぼ全体に施されている。内面に沈線状の段がある。越州窯系青磁小坏Ⅲ類で10世紀後半～11世紀中頃か。12は白磁碗の高台部である。復元高台径6.4cmを測る。胎土は灰白色を呈し、緻密である。軸は灰色を帯びた白色を呈し、内面には施されるが、体部外面下位から高台外面には施されていない。内面に沈線が施される。白磁碗Ⅳ類で11世紀後半～12世紀前半と考える。13は白磁碗の高台部である。復元高台径5.8cmを測る。胎土は灰白色を呈し、緻密である。軸は灰色を帯びた白色を呈し、内面には施されるが、体部外面下位から高台外面には施されていない。内面に沈線が施される。白磁碗Ⅳ類で11世紀後半～12世紀前半と考える。14は白磁碗の高台部である。復元高台径6.4cmを測る。



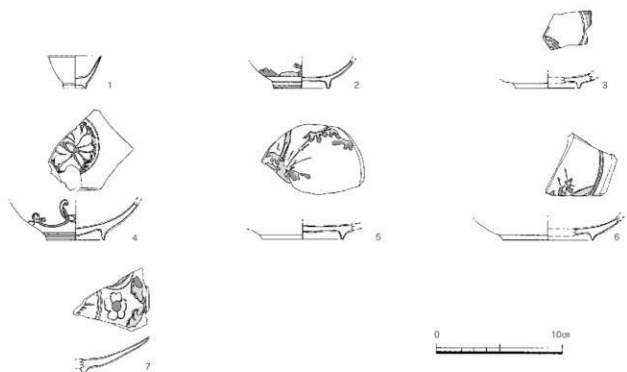
第79図 瀾古屋敷遺跡大満出土陶磁器実測図4 (1/3)

紀前半か。7は青磁碗の高台部である復元高台径8.6cmを測る。胎土は淡黄灰色を呈し、多少粗い。軸は茶黄色を呈し、内面には施されるが、体部外面下位から高台外面には施されていない。底部内面と高台外面斜行部に三角形状の目跡がある。越州窯系青磁碗Ⅰ類で8世紀末～10世紀中頃と考える。8は白磁碗の高台部である。復元高台径5.6cmを測る。胎土は青灰色を帯びる白色を呈し、緻密である。軸はわずかに水色を帯びる白色を呈し、内面には施されるが、体部外面下位から高台外面には施されていない。内面に沈線が施され、体部外面下位から高台外面にかけてハケが施される。また、高台置付の外側端部が若干浮いているのも特徴である。白磁碗Ⅹ類で10世紀後半～11世紀中頃と考える。9は白磁碗の高台部である。高台径7.5cmを測る。胎土は淡灰色を呈し、緻密である。軸は黄色を帯びた灰色を呈し、内面には施されるが、体部外面下位から高台外面には施されていない。内面に沈線が施される。白磁碗Ⅹ類で10世紀後半～11世紀中頃と考える。10は白磁碗の高台部である。高台径6cmを測る。胎土は灰白色を呈し、緻密である。軸は透明であり、内面には施されるが、体部外面下位から高台外面には施されていない。内面に沈線が施される。白磁碗Ⅴ類で11世紀後半～12世紀前半と考える。11は青磁皿の底部である。復元底径9.2cmを測る。軸は透明であり、ほぼ全体に施されている。内面に沈線状の段がある。越州窯系青磁小坏Ⅲ類で10世紀後半～11世紀中頃か。12は白磁碗の高台部である。復元高台径6.4cmを測る。胎土は灰白色を呈し、緻密である。軸は灰色を帯びた白色を呈し、内面には施されるが、体部外面下位から高台外面には施されていない。内面に沈線が施される。白磁碗Ⅳ類で11世紀後半～12世紀前半と考える。13は白磁碗の高台部である。復元高台径5.8cmを測る。胎土は灰白色を呈し、緻密である。軸は灰色を帯びた白色を呈し、内面には施されるが、体部外面下位から高台外面には施されていない。内面に沈線が施される。白磁碗Ⅳ類で11世紀後半～12世紀前半と考える。14は白磁碗の高台部である。復元高台径6.4cmを測る。

測る。胎土は灰白色を呈し、緻密である。軸は淡いオリーブ色を呈し、内面には施されるが、体部外面下位から高台外面には施されていない。内面に沈線が施される。白磁碗Ⅳ類で11世紀後半～12世紀前半か。第77図の陶磁器は大溝下層から出土した。1は青磁碗の高台部である。高台径4.6cmを測る。胎土は灰色を呈し、緻密である。軸はガラス質で光沢があり、内面には施されるが、体部外面下位から高台外面には施されていない。内面に沈線が施される。体部外面下位から高台外面にかけて櫛目文が施される。同安溪系青磁碗Ⅲ類で12世紀中頃～12世紀後半と考える。2は青磁碗の高台部である。高台径5.2cmを測る。胎土は灰色を呈し、緻密である。軸は黄色を帯びたオリーブ色を呈し、内面には施されるが、体部外面下位から高台外面には施されていない。内面に沈線が施される。体部外面下位から高台外面にかけて櫛目文が施される。同安溪系青磁碗Ⅲ類で12世紀中頃～12世紀後半と考える。3は青磁碗の高台部である。高台径5cmを測る。胎土は灰色を呈し、緻密である。軸は黄色を帯びたオリーブ色を呈し、内面には施されるが、体部外面下位から高台外面には施されていない。内面に沈線が施される。体部外面下位から高台外面にかけて櫛目文が施される。同安溪系青磁碗Ⅲ類で12世紀中頃～12世紀後半と考える。4は青磁碗の高台部である。高台径6cmを測る。胎土は灰色を呈し、緻密である。軸は青色を帯びた緑色を呈し、内面と体部外面から高台外面にかけて施されている。内面に沈線が施される。龍泉窯系青磁碗Ⅰ類で12世紀中頃～12世紀後半と考える。5は白磁碗の高台部である。高台径6.8cmを測る。胎土は灰色を呈し、緻密である。軸は灰白色を呈し、内面には施されるが、体部外面下位から高台外面には施されていない。内面見込み部分の軸を環状に掻き取る。また、内面に沈線が施される。白磁碗Ⅶ類で12世紀中頃～12世紀後半と考える。6は青磁碗の口縁部である。復元口径16.8cmを測る。胎土は灰色を呈し、緻密である。軸は青色を帯びた緑色を呈し、全体に施されている。内面に蓮花文がある。龍泉窯系青磁碗Ⅰ類で12世紀中頃～12世紀後半と考える。7は青磁碗の口縁部である。復元口径17.6cmを測る。胎土は灰色を呈し、緻密である。軸は青色を帯びた緑色を呈し、全体に施されている。龍泉窯系青磁碗Ⅰ類で12世紀中頃～12世紀後半か。8は白磁碗の高台部である。高台径6.5cmを測る。胎土は灰色を呈し、緻密である。軸は灰白色を呈し、内面には施されるが、体部外面下位から高台外面には施されていない。内面見込み部分の軸を環状に掻き取る。白磁碗Ⅶ類で12世紀中頃～12世紀後半と考える。9は白磁碗の高台部である。高台径6.6cmを測る。胎土は灰色を呈し、緻密である。軸は灰白色を呈し、内面には施されるが、体部外面下位から高台外面には施されていない。内面見込部分の軸を環状に掻き取る。白磁碗Ⅶ類で12世紀中頃～12世紀後半と考える。10は白磁碗の高台部である。高台径6.6cmを測る。胎土は灰色を呈し、緻密である。軸は灰白色を呈し、内面には施されるが、体部外面下位から高台外面には施されていない。内面見込部分の軸を環状に掻き取る。白磁碗Ⅶ類で12世紀中頃～12世紀後半と考える。11は白磁碗の高台部である。高台径7cmを測る。胎土は灰白色を呈し、緻密である。軸は灰白色を呈し、内面には施されるが、体部外面下位から高台外面には施されていない。内面見込部分の軸を環状に掻き取る。白磁碗Ⅶ類で12世紀中頃～12世紀後半と考える。12は青磁碗の高台部である。高台径5.8cmを測る。胎土は灰色を呈し、緻密である。軸は青色を帯びた緑色を呈し、内面と体部外面から高台外面にかけて施されている。内面に蓮花文がある。龍泉窯系青磁碗Ⅰ類で12世紀中頃～12世紀後半と考える。13は白磁碗の高台部である。高台径6.4cmを測る。胎土は灰白色を呈し、緻密である。軸は灰白色を呈し、内面に

は施されるが、体部外面下位から高台外面には施されていない。内面にハケの花文がある。白磁碗Ⅶ類で12世紀中頃～12世紀後半と考える。14は青磁碗の高台部である。復元高台径6cmを測る。胎土は灰色を呈し、緻密である。軸は茶色を帯びた緑色を呈し、内面には施されるが、体部外面下位から高台外面には施されていない。内面にハケと櫛による文様がある。また、体部外面下位から高台外面にかけて櫛目文が施される。同安溪系青磁碗Ⅲ類で12世紀中頃～12世紀後半と考える。15は青磁碗の高台部である。復元高台径6.2cmを測る。胎土は灰色を呈し、緻密である。軸は青色を帯びた緑色を呈し、内面は体部外面から高台外面にかけて施されている。内面に櫛による花文がある。龍泉窯系青磁碗Ⅰ類で12世紀中頃～12世紀後半と考える。16は青磁碗の高台部である。高台径5.8cmを測る。胎土は灰色を呈し、緻密である。軸は青色を帯びた緑色を呈し、内面には施されるが、体部外面下位から高台外面には施されていない。内面に櫛による円状文様があり、体部外面下位から高台外面にかけて櫛目文がある。同安溪系青磁碗Ⅶ類で12世紀中頃～12世紀後半か。17は青磁碗の高台部である。高台径4.6cmを測る。胎土は灰色を呈し、緻密である。軸は青色を帯びた緑色を呈し、内面には施されるが、体部外面下位から高台外面には施されていない。内面には片切彫で草花状ないし雲文状の文様を施し、空白部に櫛目文を埋める。龍泉窯系青磁碗Ⅰ類で12世紀中頃～12世紀後半と考える。18は青磁碗の底部である。復元底径6cmを測る。胎土は灰色を呈し、緻密である。軸は青色を帯びた緑色を呈し、内面には施されるが、体部外面下位から高台外面には施されていない。内面にはハケと櫛による文様がある。同安溪系青磁碗Ⅰ類で12世紀中頃～12世紀後半と考える。19は青磁碗の底部である。底径3.8cmを測る。胎土は灰色を呈し、緻密である。軸は青色を帯びた緑色を呈し、内面から体部外面にかけて施されているが、底部は軸を掻き取られている。内面に櫛による花文がある。龍泉窯系青磁碗Ⅰ類で12世紀中頃～12世紀後半と考える。

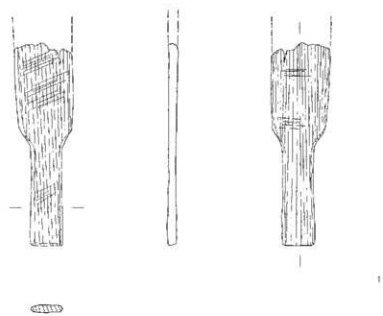
第78図の陶磁器は大溝下層より出土した。1は白磁皿である。口径11cm、器高3.5cm、底径6.4cmを測る。胎土は明白色を呈し、緻密である。軸はオリーブ色を呈し、内面から体部外面にかけて施されているが、底部（平底）は掻き取られている。白磁皿Ⅳ類で13世紀前半～14世紀前半と考える。2は白磁皿である。口径12cm、器高3.5cm、底径7.2cmを測る。胎土は灰白色を呈し、緻密である。軸は灰白色を呈し、内面から体部外面にかけて施されているが、底部（平底）は掻き取られている。白磁皿Ⅳ類で13世紀後半～14世紀前半と考える。3は白磁碗の口縁部である。復元口径13.8cmを測る。胎土は灰白色を呈し、緻密である。軸は灰白色を呈し、内面から体部外面にかけて施されているが、口縁部端部のみ欠く「口壳」となっている。白磁碗Ⅳ類で13世紀前後～13世紀前半と考える。4は青磁碗の口縁部である。復元口径16cmを測る。胎土は灰白色を呈し、緻密である。軸は青色を帯びた緑色を呈し、全面に施されている。外面に蓮弁文様がある。龍泉窯系青磁碗Ⅱ類で13世紀前後～13世紀前半と考える。5は白磁碗の高台部である。高台径6cmを測る。胎土は灰白色を呈し、緻密である。軸は灰白色を呈し、内面には施されるが、体部外面下位から高台外面には施されていない。白磁碗Ⅳ類で13世紀中頃～14世紀初頃か。6は白磁碗の高台部である。復元高台径7cmを測る。胎土は灰白色を呈し、緻密である。軸は灰白色を呈し、内面には施されるが、体部外面下位から高台外面には施されていない。白磁碗Ⅳ類で13世紀中頃～14世紀初頃か。7は青磁碗の高台部である。復元高台径7cmを測る。胎土は灰白色を呈し、緻密である。軸は灰白色を呈し、内面に



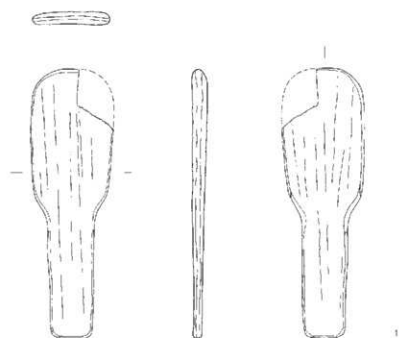
第80図 洞古屋敷遺跡大溝出土陶磁器実測図5 (1/3)

8は青磁椀の高台部である。復元高台径7cmを測る。胎土は灰白色を呈し、緻密である。軸は青色を帯びた緑色を呈し、内面から高台外面まで施されている。龍泉窯系青磁椀Ⅱで13世紀前後～13世紀前半と考える。9は青磁椀の高台部である。高台径6cmを測る。胎土は灰白色を呈し、緻密である。軸は軽くかすんだ緑色を呈し、内面から高台外面まで施されている。龍泉窯系青磁椀Ⅲ類で13世紀中頃～14世紀初頭と考える。10は青磁椀の高台部である。高台径6cmを測る。胎土は灰白色を呈し、緻密である。軸は軽くかすんだ緑色を呈し、内面から高台外面まで施されている。内面にハケによる文様がある。龍泉窯系青磁椀Ⅲ類で13世紀中頃～14世紀初頭と考える。11は白磁皿の高台部である。復元高台径4.4cmを測る。胎土は灰白色を呈し、緻密である。軸は空色を帯びた灰白色を呈し、内面から高台外面まで施されている。内面に花文がある。白磁皿Ⅲ類で13世紀後半～14世紀前半と考える。12は白磁椀の高台部である。高台径5.2cmを測る。胎土は灰白色を呈し、緻密である。軸は空色を帯びた灰白色を呈し、内面には施されるが、体部外面下位から高台外面には施されていない。内面に沈線あり。白磁椀Ⅲ類で13世紀中頃～14世紀初頭と考える。13は青磁椀（曲口椀）の口縁部である。復元口径18.8cmを測る。胎土は灰白色を呈し、緻密である。軸は青色を帯びた緑色を呈し、全面に施されている。龍泉窯系青磁椀（曲口椀）Ⅱ類で13世紀初頭～13世紀前半か。

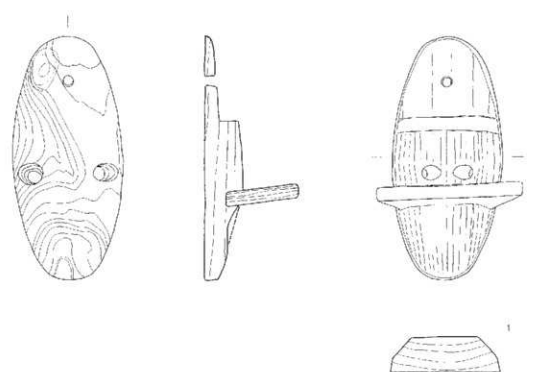
第79図の陶磁器は大溝下層から出土した。1は青磁椀の高台部である。高台径6cmを測る。胎土は灰白色を呈し、粗い。軸は青色を帯びた緑色を呈し、内面から高台外面まで施されている。内面に沈線がある。龍泉窯系青磁椀Ⅳ類で14世紀初頭～14世紀後半と考える。2は青磁椀の高台部である。復元高台径6cmを測る。胎土は灰白色を呈し、緻密である。軸は青色を帯びた緑色



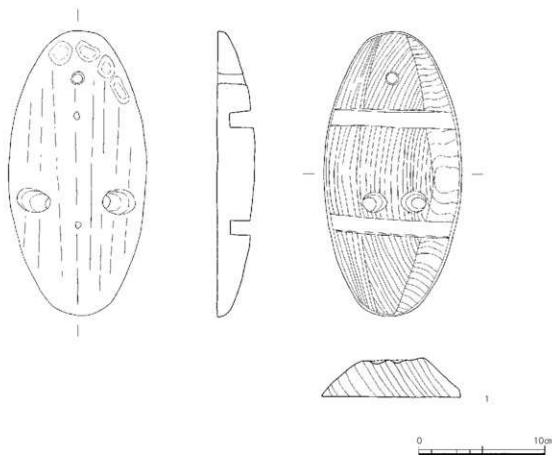
第81図 洞古屋敷遺跡大溝出土木製品実測図1 (1/3)



第82図 洞古屋敷遺跡大溝出土木製品実測図2 (1/3)

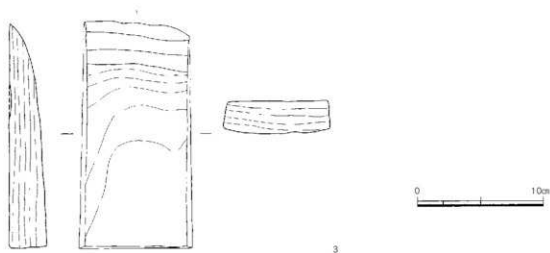
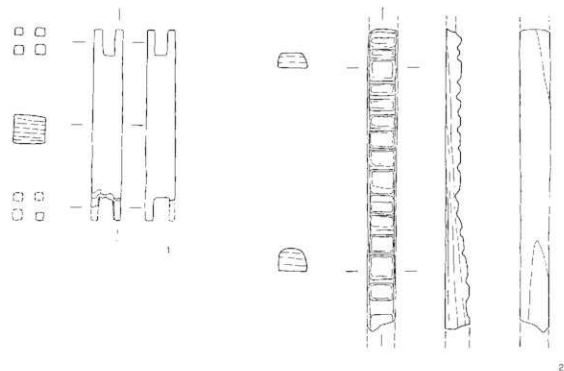


第83図 洞古屋敷遺跡大溝出土木製品実測図3 (1/3)



第84図 瀬古屋敷遺跡大溝出土木製品実測図4 (1/3)

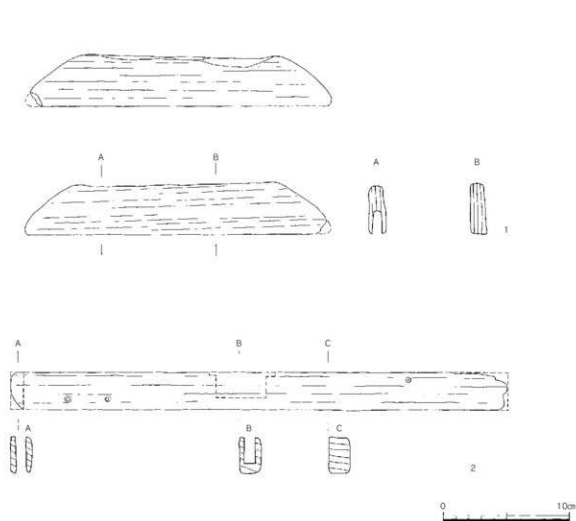
を呈し、内面から高台外面まで施されている。内面に沈線がある。龍泉窯系青磁椀 IV 類で14世紀初頭～14世紀後半と考える。3は青磁椀の高台部である。高台径3.5cmを測る。胎土は灰白色を呈し、緻密である。軸は青色を帯びた緑色を呈し、内面から高台外面まで施されている。龍泉窯系青磁小椀 IV 類で14世紀初頭～14世紀後半と考える。4は青磁椀の高台部である。高台径6.8cmを測る。胎土は灰白色を呈し、緻密である。軸は青色を帯びた緑色を呈し、内面から高台外面まで施されている。内面に沈線がある。龍泉窯系青磁椀 IV 類で14世紀初頭～14世紀後半と考える。5は青磁椀の高台部である。復元高台径5.6cmを測る。胎土は灰白色を呈し、緻密である。軸は青色を帯びた緑色を呈し、内面から高台外面まで施されている。龍泉窯系青磁椀 I V 類で14世紀初頭～14世紀後半か。6は青磁椀の口縁部である。復元口径15.6cmを測る。胎土は灰白色を呈し、緻密である。軸は青色を帯びた緑色を呈し、全面に施されている。外面に略化された蓮弁文がある。龍泉窯系青磁椀 IV 類で14世紀初頭～14世紀後半か。7は青磁椀の高台部である。復元高台径5.6cmを測る。胎土は灰色を呈し、緻密である。軸は青色を帯びた緑色を呈し、内面から高台外面まで施されている。内面に花文と沈線がある。8は象嵌青磁椀である。口径10cm、器高6.4cm、底径4.7cmを測る。胎土は淡灰色を呈し、緻密である。軸は黄色を帯びた灰色を呈し、ほぼ全体に施されている。外面には象嵌が施される。底部には胎土目か2



第85図 瀬古屋敷遺跡大溝出土木製品実測図5 (1/3)

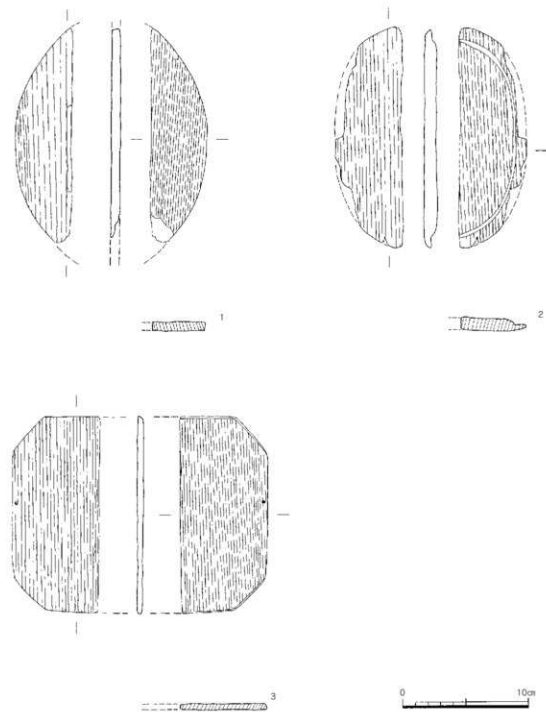
カ所ある。14世紀代のものか。9は象嵌青磁椀の高台部である。復元高台径5.4cmを測る。胎土は灰色を呈し、緻密である。軸は青色を帯びた緑色を呈し、ほぼ全体に施されている。内面に2条の環状象嵌がある。14世紀代のものか。10は象嵌青磁椀の高台部である。復元高台径6cmを測る。胎土は灰色を呈し、緻密である。軸は青色を帯びた緑色を呈し、ほぼ全体に施されている。内面に3条の環状象嵌がある。14世紀代のものか。

第80図の陶磁器は大溝上層より出土した。1は白磁小杯である。口径4.2cm、器高2.6cm、高



第86図 洞古屋敷遺跡大溝出土木製品実測図6 (1/3)

台径1.7cmを測る。胎土は明白色を呈し、緻密である。軸は透明であり、全面に施され、高台置付には砂目地が残る。15世紀代のものか。2は染付皿の高台部である。高台径4.4cmを測る。胎土は明白色を呈し、緻密である。軸は透明であり、全面に施され、高台置付には砂目地が残る。外面に花文様がある。3は染付皿の高台部である。復元高台径5.2cmを測る。胎土は明白色を呈し、緻密である。軸は透明であり、全面に施され、高台置付には砂目地が残る。内面に花文様がある。4は染付皿の高台部である高台径4.4cmを測る。胎土は明白色を呈し、緻密である。軸は透明であり、全面に施され、高台置付には砂目地が残る。内面には蓮花の絵柄、外側には花文様がある。5は染付皿の高台部である。高台径6.4cmを測る。胎土は明白色を呈し、緻密である。軸は透明であり、全面に施され、高台置付には砂目地が残る。内面に竹の絵柄がある。6は染付皿の高台部である。復元高台径7.2cmを測る。胎土は明白色を呈し、緻密である。軸は透明であり、全面に施され、高台置付には砂目地が残る。内面に絵柄がある。7は染付皿の高台部である。胎土は明白色を呈し、緻密である。軸は透明であり、全面に施され、高台置付には砂目地が残る。内面に花の絵柄がある。

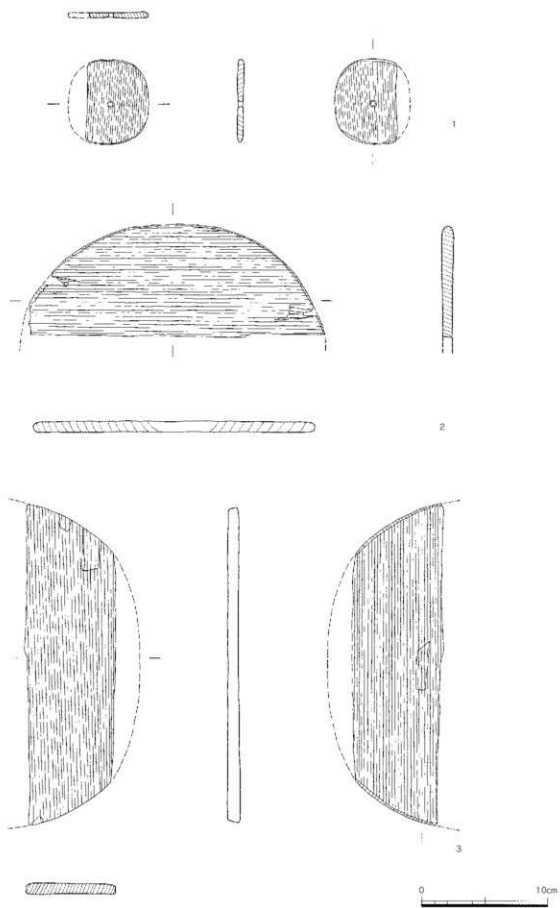


第87図 洞古屋敷遺跡大溝出土木製品実測図7 (1/3)

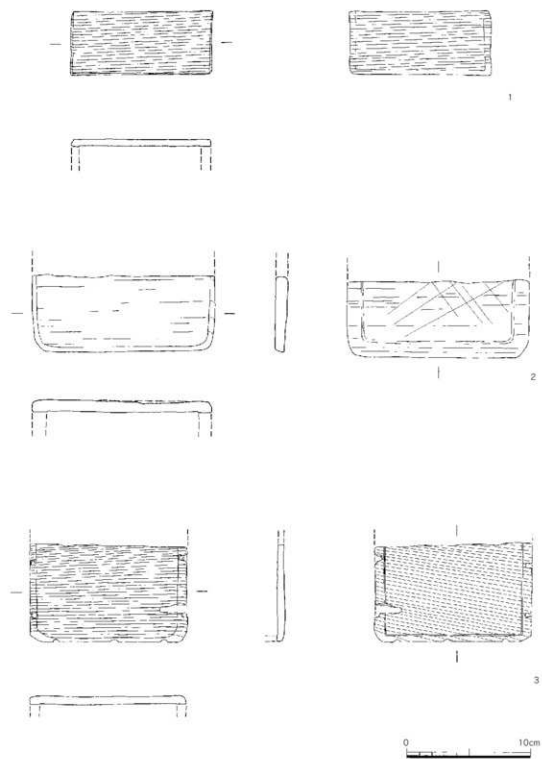
大溝出土木製品 (第81~91図)

第81図の木製品は大溝下層から出土した。1は杓文字である。残存長16cm、幅4.7cm、厚さ8mmを測る。2は杓文字である。全長27cm、幅8.6cm、厚さ8mmを測る。

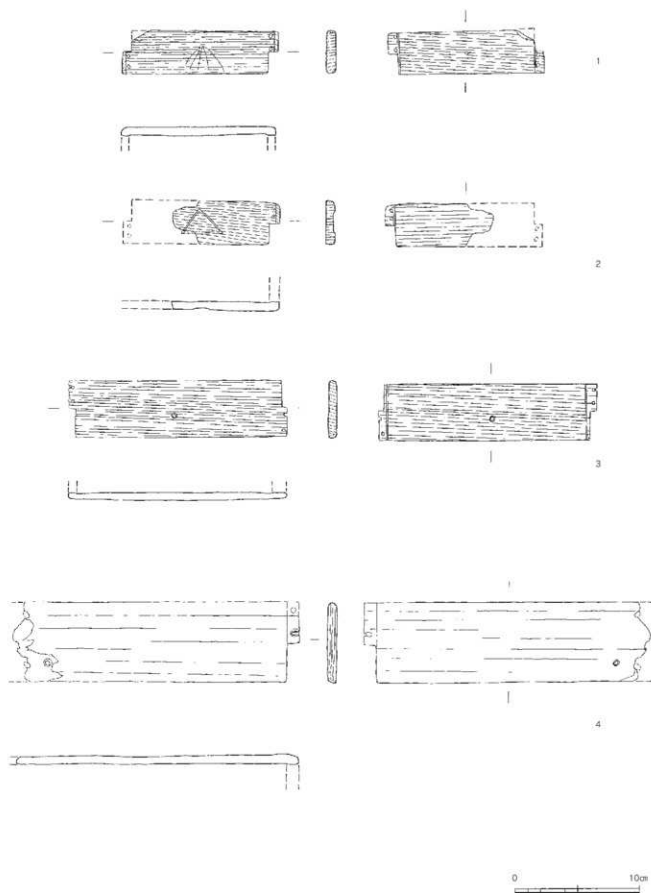
第82図の木製品は大溝下層から出土した。1は杓文字である。残存長21cm、幅6cm、厚さ1.2cmを測る。2は羽子板状木製品である。全長26cm、復元幅8.8cm、厚さ6mmを測る。



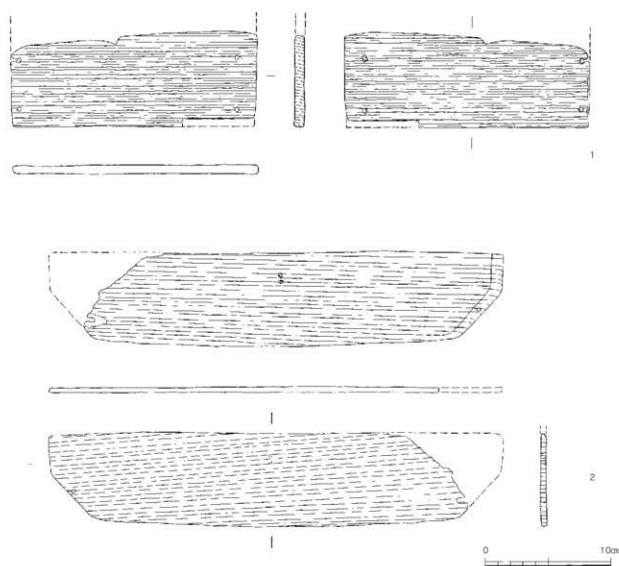
第88图 洞古屋敷遺跡大溝出土木製品実測図8 (1/3)



第89图 洞古屋敷遺跡大溝出土木製品実測図9 (1/3)



第90図 瀬古屋敷遺跡大溝出土木製品実測図10 (1/3)



第91図 瀬古屋敷遺跡大溝出土木製品実測図11 (1/3)

第83図の木製品は大溝下層から出土した。1は下駄である。全長19.4cm、幅8.8cm、厚さ2.9cmを測る。下駄の歯（1個）を欠くが、本体部はほぼ完全品である。大人用の下駄と考える。使用痕から右足用の下駄と考える。2は下駄である。復元全長22.6cm、復元幅11cm、厚さ2.5cmを測る。下駄の歯（2個）を欠くが、本体部はほぼ完全品である。大人用の下駄と考える。使用痕から右足用の下駄か。

第84図の木製品は大溝下層から出土した。1は下駄である。全長22.4cm、幅10.8cm、厚さ2.9cmを測る。下駄の歯（2個）を欠くが、本体部はほぼ完全品である。大人用の下駄と考える。使用痕から右足用の下駄と考える。

第85図の木製品は大溝下層から出土した。1は全長15cm、幅2.5cm、厚さ2.5cmを測る。用途は不明である。2は残存長24cm、幅2.2cm、厚さ2cmを測る。祭祀に使用する道具の一部か。3はクサビ状木製品である。全長17.6cm、幅8.6cm、厚さ3cmを測る。用途は不明である。

第86図の木製品は大溝下層から出土した。1は全長24cm、幅4cm、厚さ1.5cmを測る。蓋の

取手部分か。2は全長39.2cm、幅3cm、厚さ1.6cmを測る。膳穴などの加工痕がある。何らかの部材か。

第87図の木製品は大溝下層から出土した。1は曲物の一部である。残存長17cm、残存幅4.5cm、厚さ8mmを測る。外周部に釘跡がある。曲物の底部か。2は曲物の一部である。残存長17cm、残存幅5.8cm、厚さ1cmを測る。曲物の蓋部か。3は曲物の一部である。残存長15cm、残存幅7cm、厚さ5mmを測る。外周部に釘跡がある。曲物の底部か。

第88図の木製品は大溝下層から出土した。1は残存長6.7cm、残存幅5cm、厚さ5mmを測る。用途は不明である。2は曲物の一部である。残存長24cm、残存幅8.8cm、厚さ9mmを測る。外周部に釘跡がある。曲物の底部か。3は曲物の一部である。残存長25cm、残存幅7.2cm、厚さ8mmを測る。外周部に釘跡がある。曲物の底部か。

第89図の木製品は大溝下層から出土した。1は残存長11.4cm、残存幅5.5cm、厚さ5mmを測る。内面に板材を立方体状に組んだ痕跡がある。枱状木製品か。2は残存長14.6cm、残存幅6.2cm、厚さ9mmを測る。内面に板材を立方体状に組んだ痕跡がある。枱状木製品か。3は残存長12.4cm、残存幅7.8cm、厚さ7mmを測る。内面に板材を立方体状に組んだ痕跡がある。枱状木製品か。

第90図の木製品は大溝下層から出土した。1は全長12.4cm、幅3.5cm、厚さ8mmを測る。端部に釘穴があり、中央部に三角形の文様が線刻されている。家具の一部か。2は復元長12.4cm、幅3.5cm、厚さ8mmを測る。端部に釘穴があり、中央部に三角形の文様が彫られている。家具の一部か。3は全長16.6cm、幅4.5cm、厚さ8mmを測る。中央部に穴を穿つ。家具の一部か。4は残存長23cm、幅6.2cm、厚さ8mmを測る。端部に釘穴がある。家具の一部か。

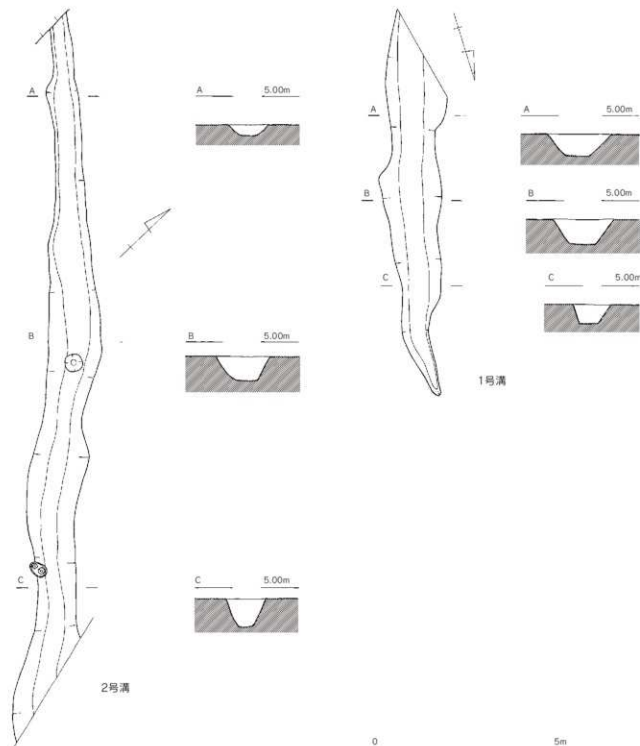
第91図の木製品は大溝下層から出土した。1は残存長19cm、残存幅7.1cm、厚さ8mmを測る。端部に釘穴がある。家具の一部か。2は曲物の一部である。復元全長35.6cm、幅7.5cm、厚さ5mmを測る。曲物の側板か。

(5) 溝

1号溝 (第92・93図) 調査区の北側の東端部で確認された南北方向に延びる溝である。調査区の制約のため、溝全体を検出できなかった。この溝は調査区の南側にさらに続き、2号溝と接続すると想定される。北側については、中世の大溝に削平され消滅し、その全容については不明である。今回の調査で確認できた1号溝は南北方向に長さ10m、東西方向に幅1.6m、深さ0.7mを測る。主軸は北から東方向に10°傾く。

断面形は逆台形を呈する。埋土は黒灰色土であり、遺物として弥生時代中期から後期にかけての土器片などが多量に出土しているが細片が多く図示しえなかった。出土物から、弥生時代中期から後期にかけて機能したと考えられる。この溝と渠道を挟んで東側に隣接する潤地頭給遺跡との関連を指摘できることから、潤地頭給遺跡の最西端を示す溝であったと考える。

2号溝 (第92、94図) 調査区の中央部で確認された北西方向から南東方向に延びる溝である。調査区の制約のため、溝全体を検出できなかった。この溝の西側については中世の大溝



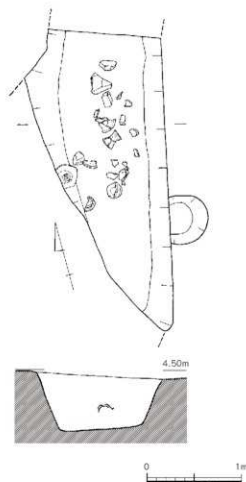
第92図 潤古屋敷遺跡1・2号溝実測図(1/100)

に削平され消滅しているが、調査区の西側にさらに続き、1号溝と接続すると想定される。東側については、県道を挟んで東側に隣接する潤地頭給遺跡にこの2号溝と接続すると考えられる同規模の溝を確認しており、潤地頭給遺跡との関連を指摘できる。今回の調査で確認できた2号溝は長さ18m、幅1.5m、深さ0.7mを測る。主軸は北から西方向に50°傾く。断面形は1号溝と同様に逆台形を呈する。埋土は黒灰色土であり、遺物として弥生時代中期から後期にかけての土器片などが多量に出土している。土器の残存状況は良く、完形品もしくはそれに近いものが多量に出土している。また、イノシシなどの動物の骨なども出土している。

出土遺物から、弥生時代中期から後期にかけて機能したと考えられる。この溝と1号溝はともに潤地頭給遺跡の最西端を示す溝と考えられ、祭祀が行われた可能性がある。

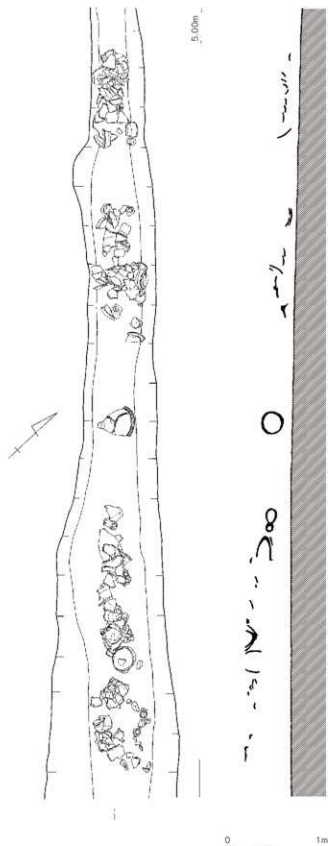
出土遺物（第95～98図）2号溝からは弥生時代中期から後期にかけての土器が多量に出土した。土器の残存状況は良く、完形品もしくはそれに近いものが多量に出土している。

第95図の土器は2号溝中央部から北端部にかけて出土した。1は鉢である。口径7.1cm、器高4.6cm、底径4.1cmを測る。焼成は良好であるが、白色砂粒をやや多く含む。色調としては内外ともに橙色を呈する。全体的に丁寧な調整が施されており、内側底部に指頭痕が残る。2は鉢である。口径10.8cm、器高4.9cm、底径2.6cmを測る。焼成は良好であるが、白色砂粒をやや多く含む。色調としては内外ともに橙褐色を呈する。全体的に丁寧な調整が施されており、内側底部に指頭痕が残る。口縁部2箇所、上から下への打欠きが施される。祭祀用の土器か。3は壺の体部である。残存器高10cm、底径4.8cmを測る。焼成はやや不良で、白色砂粒を多く含む。色調としては内外ともに橙褐色を呈する。調整としては器面風化のため不明瞭である。外面については底部から体部中央部にかけて、下から上方向にミガキが施される。4は壺である。口径14.6cm、器高13.6cm、底径7.8cmを測る。焼成は良好であるが、白色砂粒をやや多く含む。色調としては内外ともに茶褐色を呈する。全体的に丁寧な調整が施されており、内側底部に指頭痕が残る。口縁部に若干のゆがみが見られる。5は壺の体部である。残存器高12.8cm、底径6cmを測る。焼成は良好であるが、白色砂粒をやや多く含む。全体的に丁寧な調整が施されており、内側底部に指頭痕が残る。外面については底部から体部中央部にかけて、下から上方向にミガキが施される。6は壺の体部である。残存器高

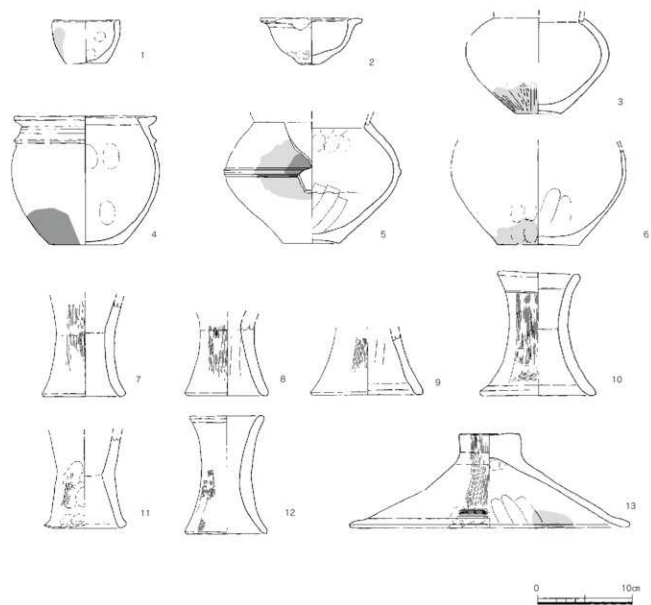


第93図 潤地頭給遺跡1号溝土器群実測図(1/40)

10.1cm、底径8.6cmを測る。焼成はやや不良で、白色砂粒を多く含む。色調としては内外ともに淡灰色を呈する。調整としては器面風化のため不明瞭である。口縁部は故意的に打欠いたか。祭祀用の土器か。7は器台である。残存器高10.2cm、底径8.8cmを測る。焼成は普通で、白色砂粒を多く含む。色調としては内外ともに淡褐色を呈する。全体的に丁寧な調整が施されており、外面についてはハケが残る。8は器台である。残存器高8cm、底径8.8cmを測る。焼成は良好であるが、白色砂粒を多く含む。色調としては内外ともに淡褐色を呈する。全体的に丁寧な調整が施されており、外面についてはハケが残る。9は器台である。残存器高7cm、底径11.6cmを測る。焼成は良好であるが、白色砂粒を多く含む。色調としては内外ともに淡褐色を呈する。全体的に丁寧な調整が施されており、外面についてはハケが残る。10は器台である。完形品である。口径8.7cm、器高12.9cm、底径12.3cmを測る。焼成は良好であるが、白色砂粒を多く含む。色調としては内外ともに淡褐色を呈する。全体的に丁寧な調整が施されており、外面についてはハケが残る。11は器台である。残存器高10cm、底径8.7cmを測る。焼成は普通であり、白色砂粒を多く含む。色調としては内外ともに淡褐色を呈する。全体的に丁寧な調整が施されており、外面についてはハケが残る。底部に若干のゆがみがある。12は器台である。完形品である。口径7.9cm、器高12.4cm、底径8.7cmを測る。焼成は普通であり、白色砂粒を多く含む。全体的に丁寧な調整が施されており、内面には縦方向のナデ、外面についてはハケが残る。13は蓋である。頂径6.5cm、器高9.9cm、幅径29.6cmを測る。焼成は普通であり、白色砂粒を多く含む。色調としては内外ともに淡褐色を呈する。全体的に丁寧な調整が施されており、内面には指頭痕が残る、外面についてはハケが残る。

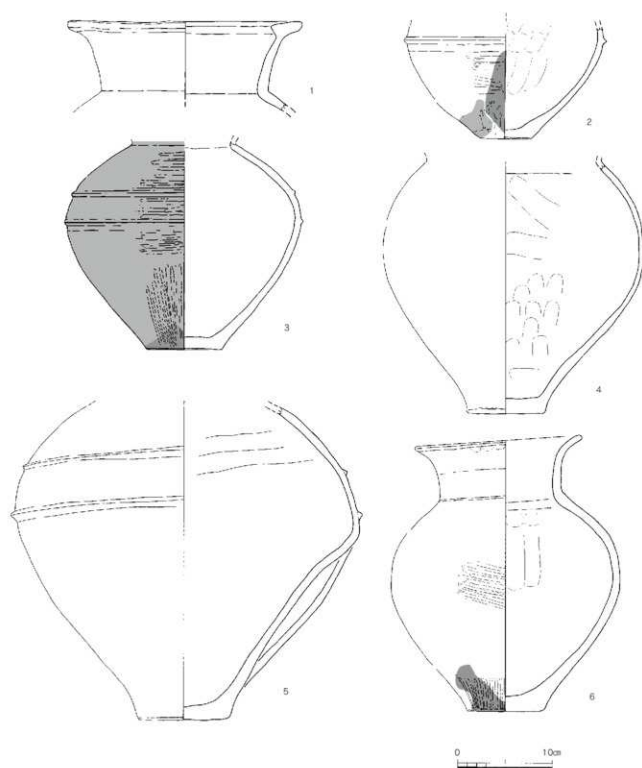


第94図 潤地頭給遺跡2号溝土器群実測図(1/40)



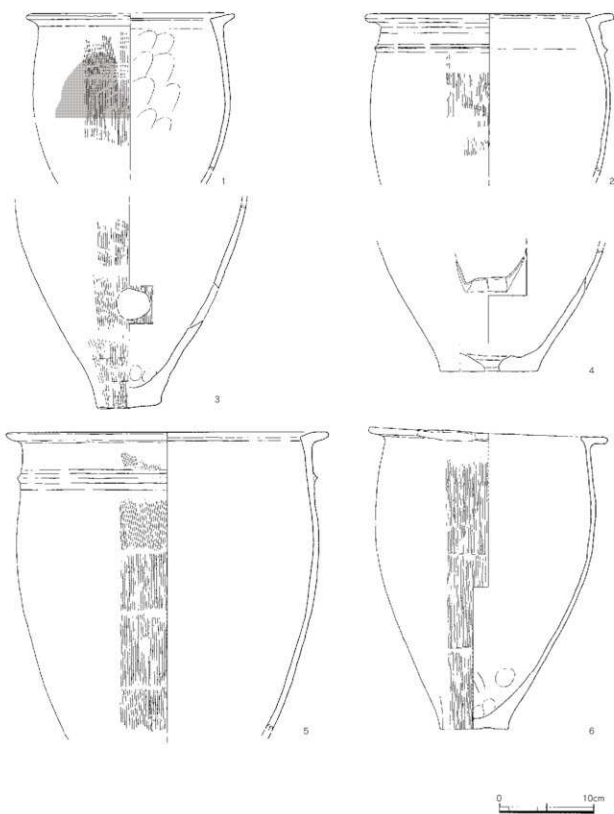
第95図 瀬古屋敷遺跡2号溝土器群出土遺物実測図1(1/4)

第96図の土器は2号溝中央部から北端部にかけて出土した。1は壺の口縁部である。口径24.6cm、残存器高9.4cmを測る。焼成はやや不良で、白色砂粒を多く含む。全体的にひずみがみられる。色調としては内外ともに灰褐色を呈する。調整としては器面風化のため不明瞭である。5と同一個体と考えられる。2は壺の体部の一部と底部である。底径5.4cm、残存器高11.8cmを測る。焼成は普通で、白色砂粒を多く含む。全体的にひずみがみられる。色調としては内外ともに灰褐色を呈する。全体的に丁寧な調整が施されており、底部から体部外面にかけて朱が施されている。祭祀用の土器か。3は壺の体部である。口縁部は欠損する。胴部最大径25.2cm、底径8cm、残存器高21.7cmを測る。焼成は良好であるが、白色砂粒を多く含む。色調としては内外ともに淡褐色を呈する。全体的に丁寧な調整が施されており、底部から体部外面にかけて朱が施されている。祭祀用の土器か。4は壺の体部である。口縁部は欠損する。胴部最大径27cm、底径8.3cm、残存器高26.4cmを測る。焼成は比較的に良好であるが、白色砂粒を多く含む。色調としては内外ともに淡灰褐色を呈



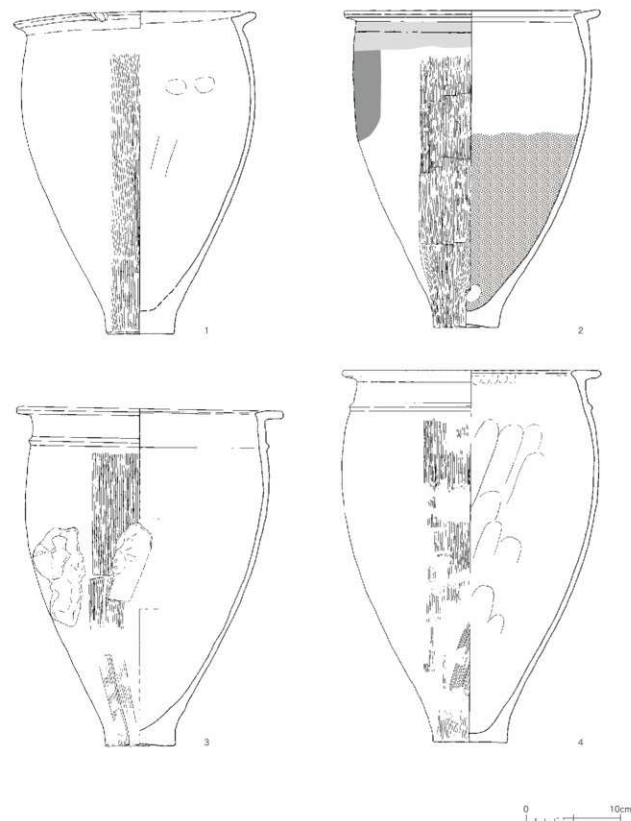
第96図 瀬古屋敷遺跡2号溝土器群出土遺物実測図2(1/4)

する。調整としては風化のため不明瞭である。器面は剥離が著しく、器形に若干のゆがみがある。5は壺の体部である。口縁部は欠損する。胴部最大径36.9cm、底径9.4cm、残存器高33.4cmを測る。焼成は比較的に良好であるが、白色砂粒を多く含む。色調としては内外ともに淡灰褐色を呈する。調整としては風化のため不明瞭である。器面は剥離が著しく、器形に若干のゆがみがある。1と同一個



第97図 洞古屋敷遺跡2号溝土器群出土遺物実測図3(1/4)

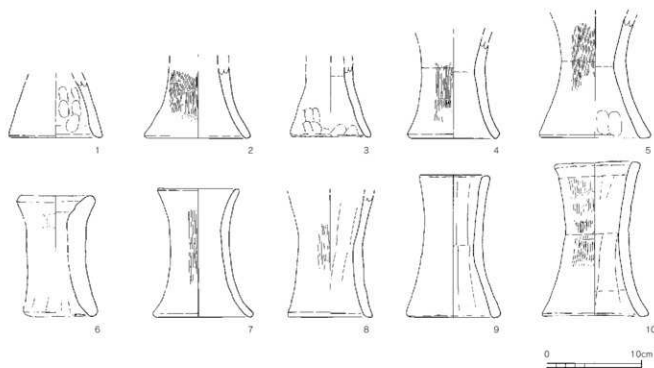
個体と考えられる。6は壺である。口径17.7cm、器高29.2cm、底径8cmを測る。焼成は良好であるが、白色砂粒をやや多く含む。色調としては内外面ともに淡灰橙色を呈する。全体的に丁寧な調整が施されており、内外面ともにナデ、ミガキが施されている。器面の一部に剥離があり、器形



第98図 洞古屋敷遺跡2号溝土器群出土遺物実測図4(1/4)

に若干のゆがみがある。

第97図の土器は2号溝中央部から北端部にかけて出土した。1は甕の口縁部である。口径22cm、残存器高16.7cmを測る。焼成は良好であるが、白色砂粒を多く含む。色調としては内外面



第99図 洞古屋敷遺跡2号溝埋土出土遺物実測図1(1/4)

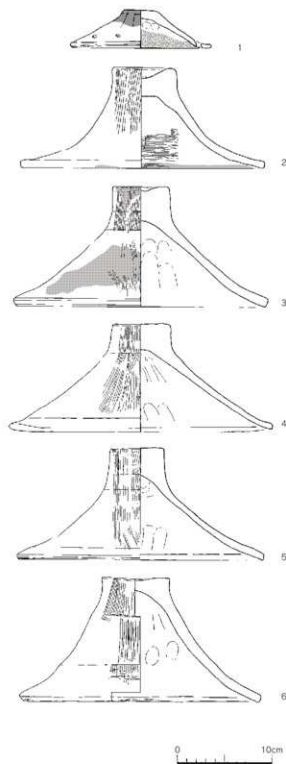
ともに淡灰褐色を呈する。全体的に丁寧な調整が施されており、内外面ともにナデが施されている。器形に若干のゆがみがある。2は甕の口縁部である。口径26.2cm、残存器高17.1cmを測る。焼成は良好であるが、白色砂粒を多く含む。色調としては内外面ともに淡灰褐色を呈する。全体的に丁寧な調整が施されており、器面外面に縦のハケが残る。3は甕の底部である。底径6.5cm、残存器高21.1cmを測る。焼成はやや不良であるが、白色砂粒を多く含む。色調としては内外面ともに淡灰褐色を呈する。全体的に丁寧な調整が施されており、器面外面に縦のハケが残る。また、体部中心部に穿孔が施されている。祭祀用土器か。4は甕の底部である。底径10.3cm、残存器高13cmを測る。焼成はやや不良であるが、白色砂粒を多く含む。色調としては内外面ともに淡褐色を呈する。調整としては器面の風化のため不明瞭である。ただし、体部中心部と底部中心部に穿孔が施されている。祭祀用土器か。5は甕の口縁部である。口径34cm、残存器高31.7cmを測る。焼成は良好であるが、白色砂粒を多く含む。色調としては内外面ともに淡褐色を呈する。全体的に丁寧な調整が施されており、器面外面に縦のハケが残る。6は甕である。口径25.2cm、器高31.2cm、底径7.2cmを測る。焼成はやや不良であるが、白色砂粒を多く含む。色調としては内外面ともに淡褐色を呈する。調整としては器面の風化のため不明瞭である。体部外面にハケが残り、口縁部に打欠きがある。祭祀用土器か。

第98図の土器は2号溝中央部から北端部にかけて出土した。1は甕である。口径25.6cm、器高34.1cm、底径7.2cmを測る。焼成は良好であるが、白色砂粒を多く含む。色調としては内外面ともに淡褐色を呈する。全体的に丁寧な調整が施されており、器面外面に縦のハケが残る。口縁部には焼成前に指で押えてへこんでいるところがある。2は甕である。口径27cm、器高

33.5cm、底径6.8cmを測る。焼成は良好であるが、白色砂粒を多く含む。色調としては内外面ともに淡灰褐色を呈する。全体的に丁寧な調整が施されており、器面外面に縦のハケが残る。3は甕である。口径28.2cm、器高35.3cm、底径7.4cmを測る。焼成は良好であるが、白色砂粒を多く含む。色調としては内外面ともに淡灰褐色を呈する。全体的に丁寧な調整が施されており、器面外面に縦のハケが残る。4は甕である。口径27.4cm、器高39.4cm、底径7.8cmを測る。焼成は普通であり、白色砂粒を多く含む。色調としては内外面ともに淡灰褐色を呈する。調整としては器面の風化のため不明瞭な部分が多いものの、器面外面には縦のハケが残る。

埋土内出土遺物 (第99~104図) 2号溝埋土内からは弥生時代中期から後期にかけての土器が多量に出土した。図示しえたものを器種別に報告する。

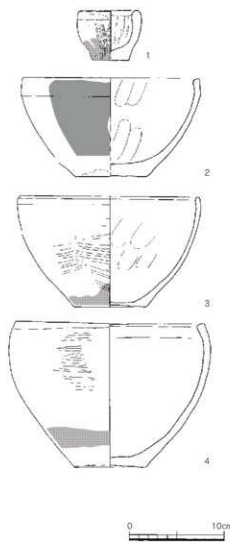
第99図の上器は2号溝埋土内から出土した。1~10は器台である。1は底径9.8cmを測る。焼成は良好であるが、白色砂粒を多く含む。全体的に丁寧な調整が施されている。2は底径11.2cmを測る。焼成は良好であるが、白色砂粒を多く含む。全体的に丁寧な調整が施されている。3は底径8.4cmを測る。焼成はやや不良で、白色砂粒を多く含む。調整は器面風化のため不明瞭である。4は底径8.4cmを測る。焼成は良好であるが、白色砂粒を多く含む。全体的に丁寧な調整が施されている。5は底径11.7cmを測る。焼成はやや不良で、白色砂粒を多く含む。調整は器面風化のため不明瞭である。6は口径8.3cm、器高12.7cm、底径7.8cmを測る。断面は厚みがあり、つくりも粗い。7は口径8.7cm、器高13.5cm、底径10cmを測る。焼成はやや不良で、白色砂粒を多く含む。調整は器面風化のため不明瞭である。8は底径8.5cmを測る。焼成は良好であるが、白色砂粒を若干含む。全体的に丁寧な調整が施されている。9は口径7.4cm、器高15cm、底径10cm



第100図 洞古屋敷遺跡2号溝埋土出土遺物実測図2(1/4)

を測る。調整は不明瞭で、つくりも粗い。10は口径9.0cm、器高16.3cm、底径11.2cmを測る。完形品である。焼成は良好であるが、白色砂粒を若干含む。全体的に丁寧な調整が施されている。

第100図の土器は2号溝埋土内から出土した。1～6は蓋である。1は器高3.9cm、最大径14.8cmを測る。焼成は良好であるが、白色砂粒を若干含む。全体的に丁寧な調整が施されている。外面にハケが残る。穿孔が4箇所ある。外面から内面に向けて穿孔されている。2は器高10.6cm、最大径25.6cmを測る。焼成は良好であるが、白色砂粒を若干含む。全体的に丁寧な調整が施されている。外面にハケが残る。3は器高12.6cm、最大径26.8cmを測る。焼成は良好であるが、白色砂粒を若干含む。全体的に丁寧な調整が施されている。外面にハケが残る。4は器高11.4cm、最大径27.6cmを測る。焼成は良好であるが、白色砂粒を若干含む。全体的に丁寧な調整が施されている。外面にハケが残る。5は器高11.9cm、最大径26cmを測る。焼成は良好であるが、白色砂粒を若干含む。全体的に丁寧な調整が施されている。外面にハケが残る。6は器高13.1cm、最大径25.5cmを測る。焼成はやや良好である。白色砂粒を若干含む。全体的に丁寧な調整が施されている。外面にハケが残る。



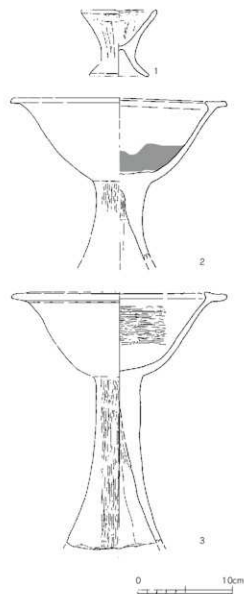
第101図 洞古屋敷遺跡2号溝埋土出土遺物実測図3(1/4)

第101図の土器は2号溝埋土内から出土した。1～4は鉢である。1は口径6.5cm、器高5.2cm、底径4cmを測る。完形品である。焼成は良好であるが、白色砂粒を若干含む。全体的に丁寧な調整が施されている。外面にハケが残る。2は口径18.8cm、器高10.3cm、底径7.6cmを測る。焼成はやや不良であり、白色砂粒を多く含む。調整は器面風化のため不明瞭である。3は口径19.4cm、器高16.6cm、底径7.6cmを測る。焼成はやや不良であり、白色砂粒を多く含む。調整は器面風化のため不明瞭である。4は口径19.9cm、器高15.3cm、底径7.3cmを測る。焼成は良好であるが、白色砂粒を若干含む。全体的に丁寧な調整が施されている。外面にミガキが残る。

第102図の土器は2号溝埋土内から出土した。1～3は高坏である。1は口径8cm、器高6.9cm、底径6.2cmを測る。焼成は良好であるが、白色砂粒を若干含む。全体的に丁寧な調整が施されている。2は口径22.6cm、残存器高17.2cmを測る。焼成は良好であるが、白色砂粒を若干

含む。全体的に丁寧な調整が施されている。脚部外面にミガキが残る。3は口径22.5cm、残存器高27cmを測る。焼成は良好であるが、白色砂粒を若干含む。全体的に丁寧な調整が施されている。坏部内面に横方向のミガキ、脚部外面にミガキが残る。

第103図の土器は2号溝埋土内から出土した。1～5は壺である。1は脚台付小壺である。残存器高10.9cm、最大径10.4cm、底径8.6cmを測る。焼成は良好であるが、白色砂粒を若干含む。全体的に丁寧な調整が施されている。坏部外面に横方向のミガキ、脚部外面に縦方向のミガキが残る。口縁部は打欠きが施されている。祭祀用の土器か。2は口縁部である。口径21.1cm、残存器高6.4cmを測る。焼成は良好であるが、白色砂粒を若干含む。全体的に丁寧な調整が施されている。3は口縁部である。口径24.9cm、残存器高15cmを測る。焼成はやや不良で、白色砂粒を多く含む。調整は器面風化のため不明瞭である。体部外面に剥離がみられる。4は口縁部である。口径27cm、残存器高14.5cmを測る。焼成は良好であるが、白色砂粒を若干含む。全体的に丁寧な調整が施されている。口縁部外面にハケが残る。5は底部を欠損する。口径26.7cm、残存器高34.5cm、脚部最大径37.5cmを測る。焼成は良好であるが、白色砂粒を若干含む。全体的に丁寧な調整が施されている。体部中央部にスガが付着している。



第102図 洞古屋敷遺跡2号溝埋土出土遺物実測図4(1/4)

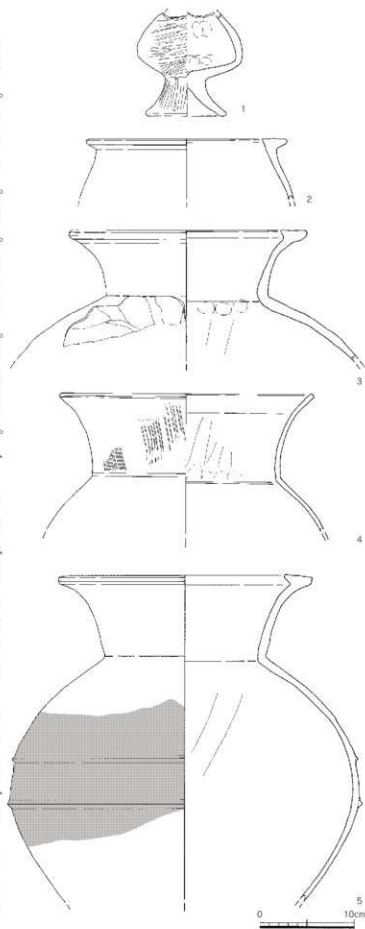
第104図の土器は2号溝埋土内から出土した。1～6は甕である。1は口径25.6cm、器高19.6cm、底径9.4cmを測る。完形品である。焼成は良好であるが、白色砂粒を多く含む。全体的に丁寧な調整が施されており、内面に縦ナデ、外面にミガキが残る。また、底部外面にスガが付着する。2は口縁部と体部であり、底部を欠損する。口径28.4cm、残存器高24.7cmを測る。焼成は良好であるが、白色砂粒を多く含む。全体的に丁寧な調整が施されており、内面に縦ナデ、外面にハケが残る。また、口縁部内面にスガが付着する。3は口径27.3cm、器高34.9cm、底径7cmを測る。ほぼ完形品である。焼成は良好であるが、白色砂粒を多く含む。全体的に丁寧な調整が施されており、内面に縦ナデ、外面にハケが残る。また、底部外面から体部外面に

かけてススが附着する。4は体部と底部であり、口縁部を欠損する。残存器高28.5cm、底径7.5cmを測る。焼成は良好であるが、白色砂粒を多く含む。全体的に丁寧な調整が施されており、内面に縦ナデ、外面にハケが残る。底部には穿孔が施される。祭祀用の土器か。5は復元口径28.5cm、器高30cm、底径6.6cmを測る。焼成は良好であるが、白色砂粒を多く含む。全体的に丁寧な調整が施されており、内面に縦ナデ、外面にハケが残る。底部には穿孔が施される。祭祀用の土器か。6は口縁部と体部であり、底部を欠損する。口径27.3cm、残存器高31.9cmを測る。焼成は良好であるが、白色砂粒を多く含む。全体的に丁寧な調整が施されており、内面に縦ナデ、外面にハケが残る。

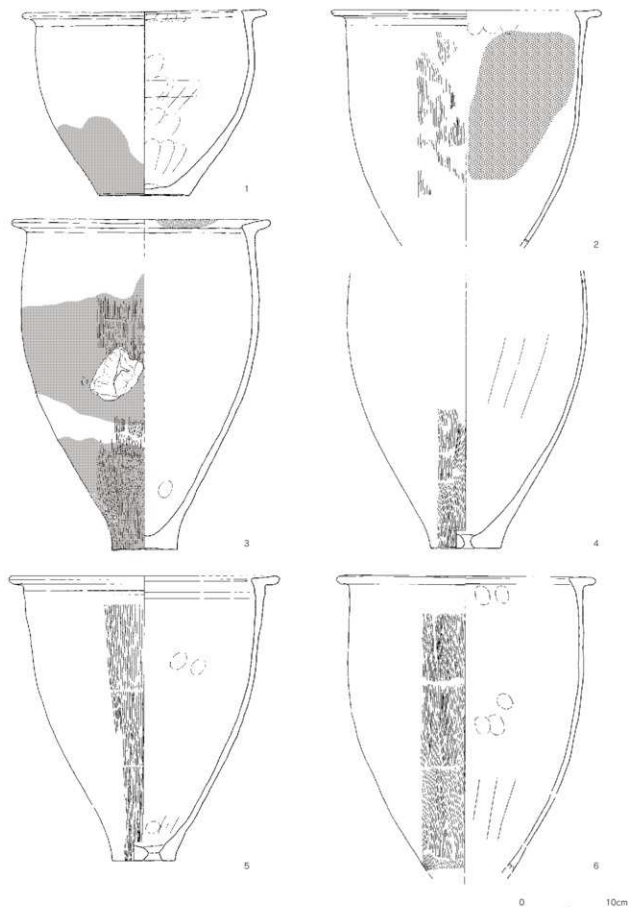
3号溝 (第105図) 調査区の中央部において確認された東西方向に延びる溝である。調査区の制約のため、溝全体を検出できなかった。この溝は今回の調査区の東西方向にさらに続くと想定される。今回の調査で確認できた溝は長さ11.5m、幅1.5m、深さ0.4mを測る。主軸はほぼ東西方向をしめす。

断面形は逆台形を呈し、埋土は黒灰色粘質土の単一層である。埋土においては、遺物として弥生時代中期から後期にかけての土器片、土師皿、耳皿、12世紀から15世紀にかけての陶磁器片などが出土している。

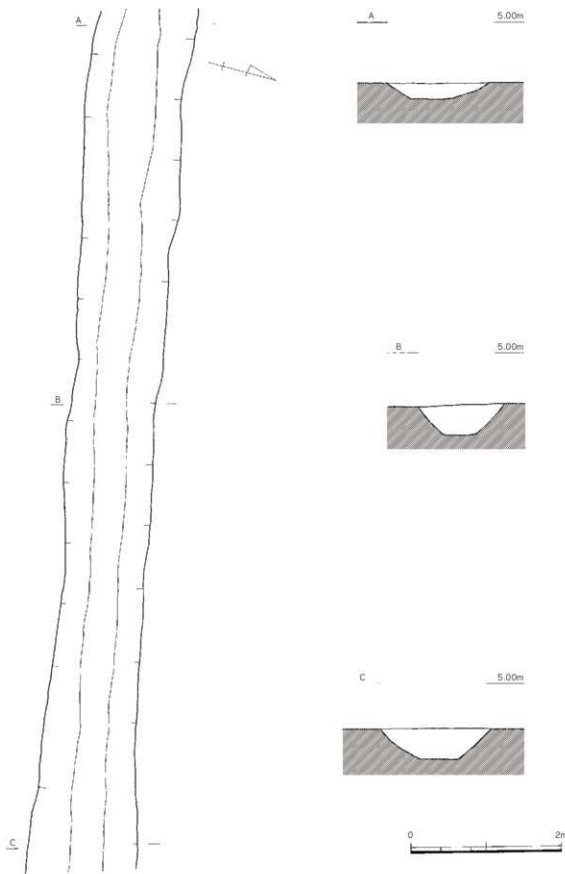
遺物の出土状況から、弥生時代の遺構面を削平して、まず10世紀から12世紀代にかけて遺構面が形成された可能性が高い。次に10世紀から



第103図 洞古屋敷遺跡2号溝埋土出土遺物実測図5(1/4)



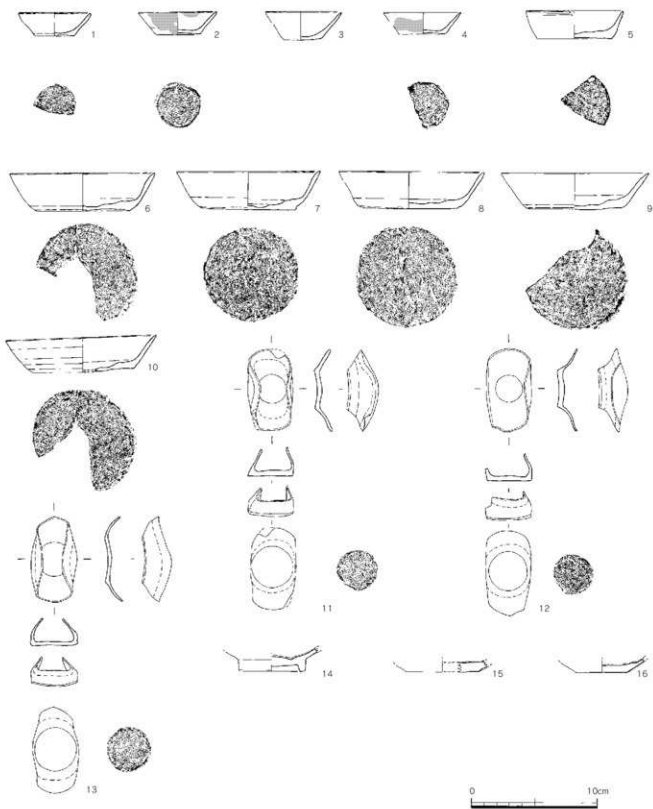
第104図 洞古屋敷遺跡2号溝埋土出土遺物実測図6(1/4)



第105図 濁古屋敷遺跡3号溝実測図(1/50)

12世紀代にかけての遺構面を削平して溝が掘削されたのであろう。この溝は土師皿や陶磁器の出土状況から13世紀から14世紀代にかけて機能し、15世紀代にかけてその役割を終えて埋没したと考える。なお、中世の大溝とほぼ同時期に機能していることから、大溝の南側の外堀(溝)であったと考える。

3号溝出土遺物実測図(第106図) 1は土師皿である。口径5.8cm、器高1.8cm、底径3cmを測る。焼成は良好であるが、胎土には1mm以下の白色砂粒を含む。底部は回転糸切り痕を残す。口径、器高、底部の調整から、XX型式で14世紀中頃と考える。2は土師皿である。口径6.2cm、器高1.8cm、底径3.5cmを測る。焼成は良好であるが、胎土には1mm以下の白色砂粒を含む。底部は回転糸切り痕を残す。口径、器高、底部の調整から、XX型式で14世紀中頃と考える。3は土師皿である。口径6cm、器高2.2cm、底径3cmを測る。焼成は良好であるが、胎土には1mm以下の白色砂粒を含む。底部は回転糸切り痕を残す。口径、器高、底部の調整から、XX型式で14世紀中頃と考える。4は土師皿である。口径6.1cm、器高1.8cm、底径3.8cmを測る。焼成は良好であるが、胎土には1mm以下の白色砂粒を含む。底部は回転糸切り痕を残す。口径、器高、底部の調整から、XX型式で14世紀中頃と考える。5は土師皿である。口径8cm、器高2.2cm、底径6cmを測る。焼成は良好であるが、胎土には1mm以下の白色砂粒を含む。底部は回転糸切り痕を残す。口径、器高、底部の調整から、XVII型式で13世紀前半～14世紀前後と考える。6は土師皿である。口径11.5cm、器高3cm、底径7.2cmを測る。焼成は良好であるが、胎土には1mm以下の白色砂粒を含む。底部は回転糸切り痕を残す。口径、器高、底部の調整から、XVIII型式で13世紀前半～14世紀前後と考える。7は土師皿である。口径11.2cm、器高3.1cm、底径7.6cmを測る。焼成は良好であるが、胎土には1mm以下の白色砂粒を含む。底部は回転糸切り痕を残す。口径、器高、底部の調整から、XVIII型式で13世紀前半～14世紀前後と考える。8は土師皿である。口径11.2cm、器高3cm、底径8cmを測る。焼成は良好であるが、胎土には1mm以下の白色砂粒を含む。底部は回転糸切り痕を残す。口径、器高、底部の調整から、XVIII型式で13世紀前半～14世紀前後と考える。9は土師皿である。口径11.6cm、器高2.9cm、底径7.6cmを測る。焼成は良好であるが、胎土には1mm以下の白色砂粒を含む。底部は回転糸切り痕を残す。口径、器高、底部の調整から、XVIII型式で13世紀前半～14世紀前後と考える。10は土師皿である。口径11.9cm、器高3cm、底径8cmを測る。焼成は良好であるが、胎土には1mm以下の白色砂粒を含む。底部は回転糸切り痕を残す。口径、器高、底部の調整から、XVIII型式で13世紀前半～14世紀前後と考える。11は耳皿である。ほぼ完形品である。最大長6.4cm、器高2.5cm、底径3.2cmを測る。焼成は良好であるが、胎土には1mm以下の白色砂粒を含む。底部は糸切り底である。12は耳皿である。口縁部の一部を欠損する。最大長6.4cm、器高2.3cm、底径3.0cmを測る。焼成は良好であるが、胎土には1mm以下の白色砂粒を含む。底部は糸切り底である。13は耳皿である。完形品である。最大長6.4cm、器高2.3cm、底径3.5cmを測る。焼成は良好であるが、胎土には1mm以下の白色砂粒を含む。底部は糸切り底である。14は白磁碗の高台部である。高台径5cmを測る。胎土は灰白色を呈し、緻密である。軸は空色をおびた灰白色を呈し、内面から体部外面下位まで施されている。内面に沈線がある。白磁碗X類で13世紀中頃～14世紀初頭と考える。15は白磁皿の底部である。復元底径5.6cmを測る。胎土は灰白色を呈し、緻密である。軸は空色をおびた灰白色を呈し、内面から体部外面下位まで施されている。底部の軸は掻き取られ



第106図 湖古屋敷遺跡3号溝出土遺物実測図(1/3)

ている。白磁皿Ⅰ類で13世紀中頃～14世紀初頭と考える。16は青磁皿の底部である。復元底径4cmを測る。胎土は灰色を呈し、緻密である。釉は青色をおびた緑色を呈し、内面から体部外面下位まで施されている。底部の軸は抜き取られている。龍泉窯系青磁皿Ⅰ類で12世紀中頃～12世紀後半と考える。

(6) その他の遺構

調査区からは、住居跡、土坑、井戸、大溝、溝のほかにも多数の柱穴群を確認しており、掘立柱建物の存在が想定されるが、今回の報告では割愛する。ただし、ミニチュア土器などが出土しているため、その出土遺物については報告する。

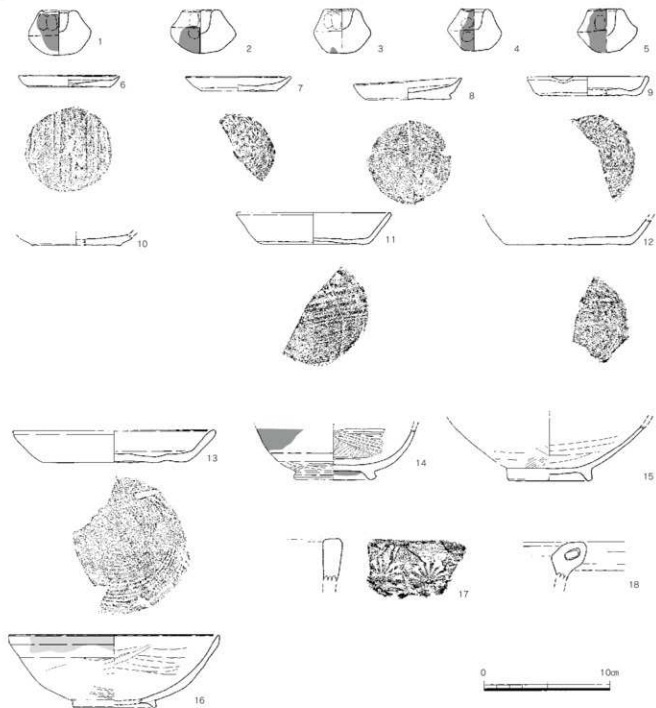
柱穴群出土遺物 (第107図) 1はミニチュア土器である。口径3cm、器高3.5cm、最大径4.9cmを測る。祭祀用の土器か。2はミニチュア土器である。口径3.2cm、器高3.4cm、最大径5.1cmを測る。祭祀用の土器か。3はミニチュア土器である。口径2.6cm、器高3.5cm、最大径4.1cmを測る。祭祀用の土器か。4はミニチュア土器である。口径2.2cm、器高3.3cm、最大径4.2cmを測る。祭祀用の土器か。5はミニチュア土器である。口径2.6cm、器高3.4cm、最大径4.2cmを測る。祭祀用の土器か。1から5について焼成は良好であるが、白色砂粒を若干含む。また、全体的に丁寧な調整が施されている。

6は上師皿である。口径8cm、器高0.9cm、底径6.5cmを測る。底部には板状圧痕と回転切り痕が残る。7は上師皿である。口径8.4cm、器高1.2cm、底径6cmを測る。底部には回転切り痕が残る。8は上師皿である。口径8.5cm、器高1.8cm、底径6.7cmを測る。底部には回転切り痕が残る。9は上師皿である。口径9.6cm、器高1.5cm、底径8cmを測る。底部には回転切り痕が残る。10は上師皿である。底径7cmを測る。11は上師皿である。口径12.2cm、器高2.5cm、底径8cmを測る。底部には回転切り痕が残る。12は上師皿である。復元底径10cmを測る。底部には板状圧痕と回転切り痕が残る。13は上師皿である。口径16cm、器高2.4cm、底径11.4cmを測る。底部には回転切り痕が残る。6から13について焼成は良好であるが、白色砂粒を若干含む。また、全体的に丁寧な調整が施されている。

14は瓦器椀である。底径6.5cmを測る。焼成は良好であるが、白色砂粒を若干含む。全体的に丁寧な調整が施されており、内面に細かいミガキが残る。15は瓦器椀である。底径6.5cmを測る。焼成は良好であるが、白色砂粒を若干含む。全体的に丁寧な調整が施されており、内面に不定方向のミガキが残る。16は瓦器椀である。口径16.6cm、器高5.7cm、底径6.5cmを測る。焼成は良好であるが、白色砂粒を若干含む。全体的に丁寧な調整が施されており、内面に不定方向のミガキが残る。

17は火鉢の口縁部である。残存器高3cmを測る。焼成は良好であるが、白色砂粒を若干含む。口縁部外面に花卉状のスタンブ文様がある。18は耳鍋の一部である。残存器高3cmを測る。焼成は良好であるが、白色砂粒を若干含む。

表探、その他の出土遺物 (第108図) 1は投擲である。最大長4.4cm、最大幅2.2cm、厚さ2.2cmを測る。焼成は良好である。表土採集遺物である。2は投擲である。最大長4.4cm、最大幅2.2cm、厚さ2.2cmを測る。焼成は良好である。表土採集遺物である。3は土鏝か。最大長4.1cm、最大幅1.8cm、厚さ1.8cmを測る。焼成は良好である。表土採集遺物である。4は翡翠製の



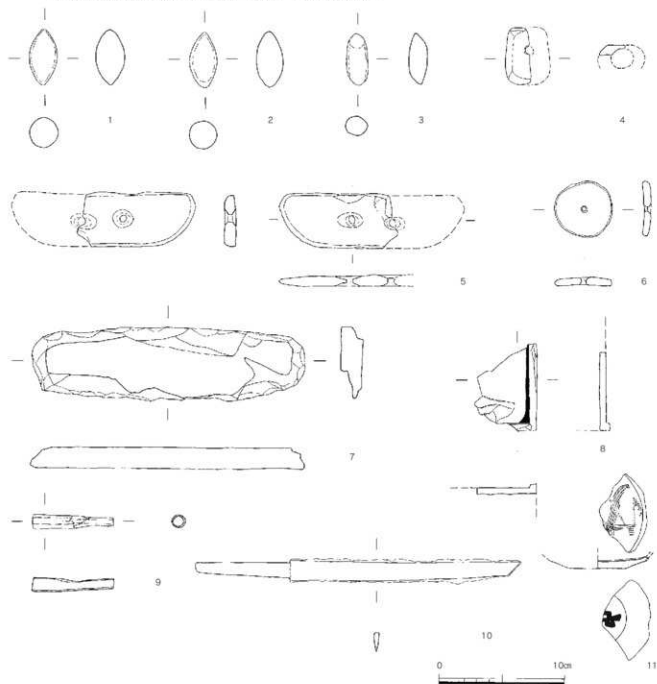
第107図 洞古屋敷遺跡跡穴群出土遺物実測図(1/3)

楕形勾玉の一種か。2号溝の検出の際に採集したものである。5は石包丁である。残存長9.5cm、幅4.2cm、厚さ8mmを測る。使用痕はない。製作途中で破棄されたと考える。2号溝の検出の際に採集したものである。6は紡錘車である。最大長4.4cm、最大幅4.4cm、厚さ7mmを測る。焼成は良好である。大溝の検出の際に採集したものである。7は石製品である。最大長21cm、最大幅5.6cm、厚さ1.7mmを測る。未完成品か。2号住居跡の中央部で採集されたものである。8は碗の一部である。残存長6.9cm、残存厚さ8mmを測る。使用痕があり、一部に墨が附着している。3号溝の検出の際に採集したものである。9は金属製品である。最大長6.6cm、最大幅1cm、厚さ1cmを測る。煙管の一部である。大溝の検出の際に採集したものである。10は刀子であ

る。全長25.6cm、関幅1.7cm、最大厚さ0.4cmを測る。大溝の検出の際に採集したものである。11は青磁皿の底部である。復元底径4.4cmを測る。胎土は灰色を呈する。釉は黄色を帯びた緑色を呈し、内面から体部外面下位まで施されている。底部の釉は掻き取られている。内面には隠による文様とジグザク状の櫛点描文がある。底部には「中」と考えられる墨書がある。同安窯系青磁皿1類で12世紀中頃～12世紀後半と考える。大溝の検出の際に採集したものである。

【土器編年に関する参考文献】

- 山本信夫 1989「統計上の土器—歴史時代土器の編年研究によせて—」 乙益重隆先生古希記念論文集
- 宮崎亮一編 2000「大平町茶臼跡 XV」 大平町教育委員会
- 森田勉 1985「北都九州出土の高麗陶磁器—編年試案—」『貿易陶磁器研究 No.5』 貿易陶磁器研究会
- 藤澤良祐 1995「吉瀬戸」『概説 中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会編
- 立石啓志 1995「奈良火鉢」『概説 中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会編
- 木戸雅寿 1995「石編」『概説 中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会編



第108図 洞古屋敷遺跡表探・その他の出土遺物実測図(1/3)

第4章 まとめ

I 潤番田遺跡出土象嵌青磁方枕について

1 象嵌青磁方枕について

高麗青磁とは青灰色の胎土に鉄分を含んだ釉をかけて焼き締められたものである。国内では11世紀後半から12世紀前半にかけて出現し始める。一般的に高麗青磁として想起される象嵌青磁は12世紀後半からみられるが、この時期、博多から出土する象嵌青磁は激減し、京都や鎌倉で梅瓶などの優品の出土量が増加する。博多で再び出土量が増加するのは、14世紀後半に入ってからである。その後の朝鮮王朝陶磁になるとさらに増加していき、15世紀から16世紀の遺構や包含層からは数多く出土している（佐藤2008）。このように象嵌を施す青磁は高麗→朝鮮王朝期にかけて数多く製作されていることから、本稿では一括して象嵌青磁と称する。

以上のような出土傾向をもつ象嵌青磁であるが、方枕の出土例は非常に限られていることが高正龍氏によって指摘されている（高1996）。なお、方枕の各部名称は高氏に従う。方枕の前後面を広面、上下面を狭面とし、その両面の総称として主面を用い、側面と区別する。側面の平面は長方形であることが多く、長辺を高さ、短辺を幅と表記する。広面・狭面・側面はそれぞれ2面ずつあり、同じ紋様を施すことが一般的である。紋様の表現には内区・外区を用い、円圏内の紋様を主紋様という（高1996）。これらをまとめたものが第109図である。

なお、日本で出土する方枕は細片の場合が多く、湾曲の有無で主面と側面の区別は容易であるが、広面か狭面かの判断は難しいことが多い。

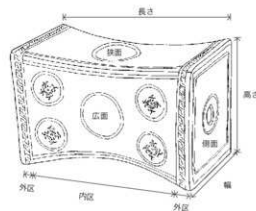
2 国内出土高麗青磁方枕との比較

象嵌青磁方枕は現在のところ中国・韓国・日本で確認されている（高1996）。このうち、韓国出土例は出土遺構や経緯が不明なものが多かったが、近年の開発に伴う発掘調査の増加に伴い、伏龍洞遺跡など遺跡から出土する例も散見され、遺構や時期も確認できる資料も出てきている（嶺南文化財研究院2008）。一方、日本出土例は大半が発掘調査に伴うものである。国内で確認されている方枕は表1に示している。この表は高正龍氏と降矢哲男氏の集成（高1996、降矢2002）を元にその後の事例を追加したものであるが、現在のところ、遺跡出土品は13例に限られる。表にはこれに加え、出土品ではないものの新安沈没船引揚品と大徳寺伝世品を加えている。

以下、日本出土例を西から順にみていく。

・潤番田遺跡出土例（福岡県糸島市）（第110・111図）

本書で報告したものである。潤番田遺跡からは7片の方枕片が出土しており、7号井戸、34号・35号土坑、包含層からバラバラに出土した。これらは互いに接合しないが、器壁の厚さや釉薬の色、象嵌で表現された紋様など



第109図 象嵌青磁方枕各部名称

から、おそらく1個体分の陶枕片であると思われる。

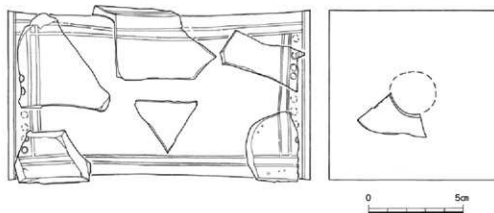
個々の破片については、各遺構の項で報告しているが、復元した図面に出土品を配置したものが第110図である。縦9.0cm、横16.0cmという大きさは、高麗美術館所蔵方枕を参考にしているが、この面が方枕の広面、狭面のどちらに該当するのか出土品だけでは判断できない。

模様構成は側面から3.0mmのところに界線を、主面屈曲部から5.0~7.0mmの箇所に2重の界線を施す。その後、界線の内側に直径4.0mmの珠文を並べる。この珠文はスタンプ文で、スタンプが浅かったせいか象嵌の線が非常に狭いことが特徴である。珠文と珠文の間は1.5~2.0mmほどあり、ここから復元すると11個の珠文が配置されるが詳細は不明である。その後、珠文の内側に2重の界線が施され、先の2重界線にぶつかる。出土した破片を観察するかがり、2重界線より内側には象嵌は認められず、施された象嵌も白象嵌のみの単色である。参考資料として新安沈没船引揚品の方枕と比較すると潤番田例が非常に装飾性に乏しいことがわかる。国内出土例を含めても方枕は基本的に装飾性が高いことが特徴であることから、本例の質素さが際立つ。

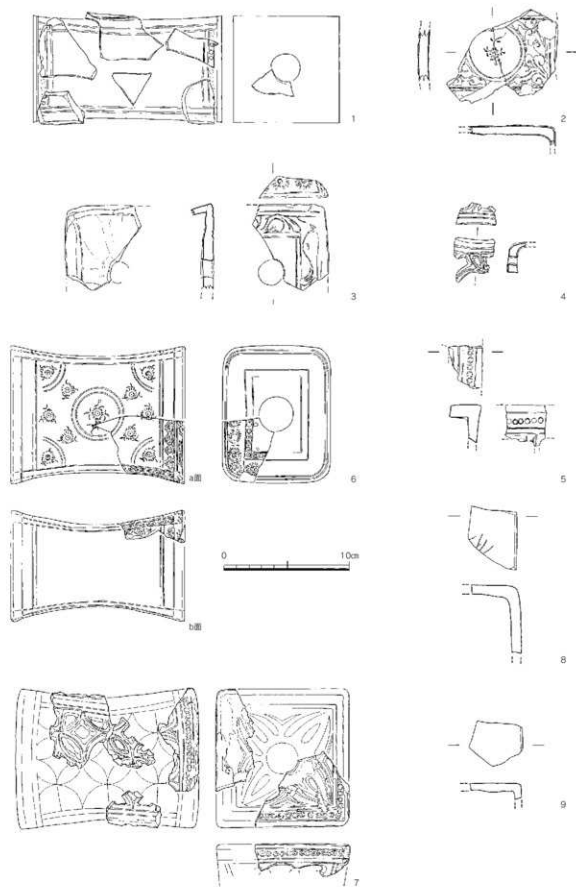
しかし、判例が少ないため製作時期の特定が難しい。方枕が出土した7号井戸の時期は瓦質楕鉢の出土などから15世紀代に位置付けられる。なお、方枕片の一部には欠縁の痕跡が残っており、一度壊れた方枕を修復して用いていたことが確認されることなどから遺構と方枕そのものの時期は乖離すると思われる²¹⁾。

・御笠川南条坊遺跡4次調査出土例（福岡県太宰府市）（第111図2）

御笠川南条坊遺跡は福岡市博多区東比恵1丁目から筑紫野市永岡に至る福岡南バイパス関連の調査が行われた遺跡で、古代から中世にかけての井戸と溝が確認されている（前川・新原編1976）。方枕は暗黒褐色粘質土（包含層）から出土するが、包含層という性格から報告書では時期の記載はない。しかし、西谷正氏の論考では13世紀に位置づけられている（西谷1983）。方枕の残存部分は主面で、現存長8.7cm、幅6.7cmを残すが、復元すると長さ10.0cm程度になる。主面の中央部分には直径4.7cmの2重の円圏を置き、その中に菊花文を配する。菊花文の茎と葉を黒象嵌で表し、花を白象嵌で表現する。円圏から外区の界線までは逆象嵌の唐草文を充填する。広面と狭面が接する箇所は接縁痕がみられず折り曲げである。また、屈曲部はほぼ直角であるが、丸みをもつ。灰白色の胎土に、青味を帯びた緑釉が厚くかかる。九州歴史資料館所蔵。



第110図 潤番田遺跡方枕実測図、想定復元図（1/2）



第111図 象嵌青磁方枕集成 (1/3)

・観世音寺120次調査出土例 (福岡県太宰府市) (第111図3)

観世音寺120次調査地点の灰茶色土層から出土した方枕の側面片である。中央部に透孔を施し、内側から外に向かって界線・唐草文・界線を配す。本来は象嵌が施されていたのであろうが、被熱のためか、釉は非常に薄く、象嵌も線刻状に残るのみである。また、外区には目跡を残す。主面側も若干残り、界線の内側にスタンプで菊花文を施す。側面と主面は鋭角に接合されるものの、屈曲部はやや丸みを帯びる。内面は主面が外れた痕跡が残る。また、釉が外面よりよく残る。現存長6.7cm、現存幅6.0cmを測る。九州歴史資料館所蔵。

・観世音寺111次調査出土例 (福岡県太宰府市) (第111図4)

観世音寺の111次調査地点の黒色砂質土から出土した方枕の屈曲部小片である (岡寺編2010)。屈曲部は湾曲し、丸みをもつ。主面はいずれも透彫を施し、それに沿って白象嵌を配す。現存長3.15cm、幅3.45cmを測る。九州歴史資料館所蔵。

・大内氏館跡13次調査出土例 (山口県山口市) (第111図5)

13次調査区1・2号竈で出土した方枕片である。主面の外区片で透彫にそって白象嵌を施す (北島編2010)。その他、2点の象嵌青磁方枕片が出土している²²⁾。

・平安京左京四条三坊出土例 (京都府京都市) (第111図6)

1979年に実施された発掘調査で、室明時代の灰褐色泥土層から出土した。本資料は方枕の角部分の破片で、最大残存長7.5cm、厚さ0.7cm～1.3cmである。胎土は灰色で、釉の色は緑灰色～明緑灰色を呈し、貫入も認められる。本資料は3面ともそれぞれ異なる紋様をもち、広面と狭面の屈曲部が面取りされていることが特徴である。紋様は界線・弧線・雷文などはヘラ・コンパスを用いて描き、菊花文・珠文・如意頭文はスタンプ施文である。象嵌は白象嵌と黒象嵌である。a面は二重の弧線と菊花文を主文とする。側面と接する外区には外側から雷文帯・如意頭紋帯・界線を配し、b面と接する外区 (面取部分) には主文と界線を配する。b面は残りか悪いいため詳細は不明であるが、側面と接する外区はa面と同じである。主文は珠文が確認されるのみである。側面は円形透かしを中心に配し、内側から珠文帯・菊花文帯・二重界線を配する (高1996)。

・堺環濠都市遺跡出土例 (大阪府堺市)

未報告資料であるが、堺市堺区宿院町西1丁SKT214地点第5次整地層から方枕片が出土している。この層から斜め掘目をもつ備前焼の榑鉢が出土していることから、廃棄時期は16世紀第4四半期に位置づけられる。方枕の詳細は不明であるが、紋様は全て陰刻で表現されており、方枕そのものは古い段階に位置づけられる²³⁾。

・一乗谷朝倉氏遺跡59次調査出土例 (福井県福井市) (第111図7)

方枕は5片に別れ出し、全体の復元は難しいが報告書によると長さ20cm、側面11cm×11cmの正方形に復元し、側面の透孔の直径を2.5cm前後とする。主面は七宝繫紋を透彫し、その紋様に沿って白象嵌を施す。外区は珠文帯を廻らす。側面は円形透かしの周りに4枚の花弁を配し、透彫するもので、主面同様、紋様に沿って白象嵌を施す。外区は珠紋帯である。釉薬は厚めにかかれ、透明感のある青緑色を呈する。なお、実測図は高正龍氏の復元案である (高1996)。

・若宮大路周辺遺跡群出土例 (神奈川県鎌倉市) (第111図8)

方枕の主面屈曲部片である。陰刻で紋様を表すが、写真ではうまく観察できず、どのような紋

様かはわからない。報告者の手塚直樹氏は杖状の文様が彫刻されているとするが、器面の傷の可能性も指摘する。内面の布目痕の存在から型造りを想定している（手塚1985）。遺構は柱穴・土坑・井戸・溝が確認され武家屋敷と推定されている。方枕は13世紀末～14世紀初頭の遺物と共伴している。

・**千葉地遺跡出土例**（神奈川県鎌倉市）（第111図9）

方枕の主面屈曲部で、内面に布目があることから型造りとされる。紋様は確認されない。この方枕は火を受け、軸が不透明な灰青色を呈する。時期は13世紀末頃に位置づけられる（手塚1985）。

・**熊野堂大館跡**（宮城県名取市）

熊野堂大館跡は中世の山城跡である。この遺跡の包含層より、方枕が出土していることが、降矢哲男氏の高麗青磁集成に記されている。時期は14世紀～15世紀後半に位置づけられている（降矢2002）。

このほかに出土品ではないが、新安沈没船から引き揚げられたものと、大徳寺に伝わるものがある。

・**大徳寺伝世品**（京都府京都市）

大徳寺は宗峰妙超が正中2（1325）年に創建した寺で、京都市北区に所在する。至徳3（1386）年には京都十刹の第九位に位置づけられた。享徳2（1453）年の火災と応仁の乱で伽藍が焼失したものの、すぐに復興し今日まで至る。方枕は伝世品として大徳寺に伝わっていたもので、現在は大阪市立東洋陶磁美術館に所蔵されている。方枕は長さ21.7cm、高さ10.6cm、幅8.6cmを測るもので、側面の片方を四角く削り取り、花生けとして用いられていたとされる。高正龍氏によると文様は広面の中央に円圈を配し、その中に双鶴文を描く。主面・側面の内区四隅には菊花系の文様を配し、その外区に雲紋帯を廻らせている。文様はいずれも彫刻で表す。側面には4個の目跡が残る。製作時期は12世紀とされる（高1996）。

・**新安沈没船引揚品**（韓国全羅南道新安郡）

1323年頃に沈没した日本向けの船から出土した完形品の方枕である。この方枕は多くの中国陶磁に混じって出土した7点の象嵌青磁のうちの1点である。広面に中央部に円圈を置き、その中に2羽の雲鶴文を配す。外区に接する内区の四隅にもそれぞれ1羽の鶴文を配し、その間に雲気文を充填する。狭面と接する外区には二重の界線、側面と接する外区には内区側から逆弁文帯・界線を置く。狭面は中央寄りの箇所に2つの円圈を置き、その中に菊花文を配す。円圈の外側は逆象嵌で唐草紋を描く。外区は広面と同じである。側面は中央に透孔を設けるがそれぞれ大きさが異なる。小さいほうの透孔をもつ側面に目跡を4つ残す。透孔の周りは逆象嵌で唐草文を充填し、外区は界線を廻らす。象嵌は白象嵌を主とするが、円圈や鶴や菊花文に黒象嵌を効果的に用いる。色調は淡緑色である。時期は12世紀後半とされる。韓国国立中央博物館に所蔵される。

| NO | 遺跡名 | 出土遺構 | 遺構の時期 | 性格 | 都道府県 | 市町村 | タイプ | 大きさ | 出典 | 備考 |
|----|----------|--------|-----------|-------|------|------|-----|---------------|-----|---------------------------------------------------------------|
| 1 | 渡瀬田遺跡 | 7号井戸 | 15c | 城館 | 福岡県 | 糸島市 | 象嵌 | 小片 | 本報告 | 図録少ない(浮城・浮文)。託内、奥が低い。 |
| 2 | 平安寺と弥生三石 | 新時代古墳群 | 13c末-14c | 都市 | 京都府 | 京都市 | 象嵌 | 7.5cm | 1 | 浮城・遺跡・書文・菊花文・珠文・知照 |
| 3 | 大徳寺 | 伝世品 | 12c | 寺院 | 京都府 | 京都市 | 彫刻 | 21.7×10.6×8.6 | 2 | 浮城品 花巻に配用。東洋陶磁美術館蔵 |
| 4 | 新安沈没船引揚品 | 沈没船 | 14c前半 | 一 | 全羅南道 | 新安郡 | 象嵌 | 15.9×11.7×9.2 | 3 | 1323年沈没。遺文・浮文・書文。多色象嵌の浮城。船跡が確認。船跡の中心に2羽の鶴と菊花文・唐草文・唐草文。時期は西台後半 |
| 5 | 観世音寺111次 | 包舎層 | 12c中-13c初 | 集落 | 福岡県 | 太宰府市 | 象嵌 | 8.8×6.7 | 4 | 菊花文・唐草文・唐草文。時期は西台後半 |
| 6 | 観世音寺跡地区 | 包舎層 | 不明 | 寺院 | 福岡県 | 太宰府市 | 象嵌 | 6.7×6.0 | 5 | 唐草文・表面は彫刻化 |
| 7 | 観世音寺111次 | 包舎層 | 不明 | 寺院 | 福岡県 | 太宰府市 | 象嵌 | 小片 | 6 | 小片のため、文様不明。透彫。 |
| 8 | 一乗谷跡跡593 | 包舎層 | 13c末-14c | 都市 | 福井県 | 福井市 | 象嵌 | 14.6 | 7 | 七宝文・珠文。透彫。 |
| 9 | 大内氏館跡13次 | 1-2号堀 | 不明 | 城館 | 山口県 | 山口市 | 象嵌 | 小片 | 8 | 遺跡。透彫。 |
| 10 | 大内氏館跡 | — | 不明 | 城館 | 山口県 | 山口市 | — | 不明 | 8 | |
| 11 | 熊野堂大館跡 | 包舎層 | 13c末-14c | 都市 | 神奈川県 | 鎌倉市 | 彫刻 | 小片 | 9 | |
| 12 | 熊野堂大館跡 | 包舎層 | 12c末-13c | 都市 | 神奈川県 | 名取市 | — | 不明 | 10 | |
| 13 | 千葉地遺跡 | 包舎層 | 13c末 | 城館・寺院 | 神奈川県 | 鎌倉市 | — | 小片 | 11 | |
| 14 | 唐羅津都市遺跡 | 包舎層 | 16c末 | 都市 | 大分県 | 唐市 | 彫刻 | 不明 | — | |

表1 日本出土 方枕出土地名表（伝世品・引揚品含む）

【表1の出典】

- 京都市文化観光局編1980「平安京左京東三条坊跡」平安京跡発掘調査概報 文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要 京都市観光局
- 大阪市立東洋陶磁美術館編1992「高麗青磁への誘い」
- 文化広報部文化財管理局1988「新安海底遺物（総合編）」
香本不吉治1989「新安海底遺物の高麗青磁について—その生産史の推論と時代—」貿易陶磁研究9
- 川内洋輔・新原正典編1976「福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告3」福岡県教育委員会
西谷正1983「九州・沖縄出土の朝鮮陶磁器に関する予察」九州文化史研究所紀要28
- 石松・横田・赤司・吉村編1990「大宰府史跡平城元年発掘調査概報」九州歴史資料館
岡本良樹2007「観世音寺」九州歴史資料館
- 岡本良樹2010「大宰府史跡発掘調査報告書Ⅵ」九州歴史資料館
- 福井市教育委員会・朝倉氏遺跡資料館編1988「一乗谷朝倉氏遺跡朝倉連絡道路遺跡に伴う発掘調査報告書」
- 北島大輔編2010「大内氏館跡」山口県埋蔵文化財調査報告第101集
- 手塚直樹1985「鎌倉出土の高麗青磁」三上次男博士古寿記念論文集
根津美術館1996「隠る鎌倉—遺跡発掘の成果と伝世の品名」
- 降矢哲男2002「曾手島発掘陶磁器の流通—高麗時代の青磁を中心に—」貿易陶磁研究22
- 手塚直樹1985「鎌倉出土の高麗青磁」三上次男博士古寿記念論文集

3 象嵌青磁方枕出土遺跡の分類と出土傾向

以上のとおり、日本国内では11例の方枕が遺跡から出土し、伝世品1点、日本向けの貿易船からの引揚品が1点存在する。これらが出土する遺跡を検討すると①都市（京都・鎌倉・堺）、②寺院（観世音寺・大徳寺【伝世】）、③城館（大内氏館跡・一乗谷朝倉氏遺跡・熊野堂大館跡）の大きく3種類に分類される。新安沈没船引揚品には東福寺と墨書された木簡も含まれおり、この船が沈没することなく博多に到着していたらば、この方枕は寺院に収蔵されていた可能性もある。また、御笠川南条坊4次調査包含層出土品について一覧表では集落出土としているが、こ

ような傾向から本来は都市もしくは寺院に伝わっていた可能性が高い。このように個々の遺跡から出土する象嵌青磁方枕の出土遺跡を概観すると普通の中世集落から出土するものではないことがわかる。

しかし、東アジアに開かれた一大貿易都市で、文献資料からも対朝鮮貿易の玄関口であった博多遺跡からは出土していない⁴¹⁾。これまでの調査における博多遺跡出土の高麗・朝鮮王朝陶磁器は日用雑器が主体で、茶陶などのいわゆる珍品は博多を介し、京都・鎌倉へ搬出されたことが想定されているが(小畑1993、森本・片山2000)、象嵌青磁方枕の分布を見ても親世音寺出土例(2点)、御笠川南条坊4次調査例(1点)に潤番田遺跡例を加えると福岡県内出土例は計4点を数えることから、国内出土例の3割強を占めることとなり、優品・珍品の類かすべて京都・鎌倉に搬出されたわけではないことがわかる。

高正龍氏の研究によると方枕は装飾技法により、鉄彩白雉(11世紀後半)→陸刺(11世紀末～12世紀後半)→象嵌(12世紀中葉～13世紀)と変遷し、象嵌透彫は13世紀後半以降に該当するが(高1996)、国内出土の方枕は大徳寺伝世品と若宮大路周辺遺跡群出土例、堺塚塚部遺跡出土例を除き、象嵌青磁で、透彫をもつものが多いことから、13世紀後半以降15世紀にかけて日本に請来されたと思われる。

4 おわりに

潤番田遺跡では方枕のほかに約30点の象嵌青磁が出土している。しかし、陶磁器全体の出土量はハンケース1箱に限られることから、象嵌青磁が占める割合はかなり高いといえる。ちなみに象嵌青磁30点という量は、これまでに糸島市内で調査された中世遺跡の中では突出した量であり、付近で確認された遺構の状況から潤番田遺跡を含む潤道跡群が多元性を特徴とする対朝鮮貿易のひとつの窓口になっていたことが想定される(註5)。今回紹介した方枕も普通の集落から出土しないことから、この貿易に深く関与した人物の所持品であったと考えている。

なお、高麗(朝鮮)との関係のみならず、『筑前國統風土記』にある記述が興味深い。潤番田遺跡群に所在する潤村には大友氏の尊崇を受けた臨濟宗の平等寺が存在し、境内には方一町あったという。文亀二(1502)年以前に朝鮮鐘が平等寺に寄進された(註6)、天文二(1533)年の大友・大内両氏の合戦で山口に奪い去られた(註7)、本願寺に納められたのち、天文六(1537)年に大内義隆により再び平等寺に寄進されたとある。その後、天正十七(1589)年に小早川隆景により聖福寺に寄進され、今日まで伝えられている(現在は重要文化財に指定)。なお、この朝鮮鐘は刻銘によると、連年の兵革を憂い、安穩を祈って制作されたものであり、この兵革の時期は高麗顯宗即位後の10年間(1010～1019年)に該当する。

このように聖福寺蔵の朝鮮鐘が元をたどると潤村に所在した平等寺への寄進品であることは、潤道跡群と高麗(朝鮮)との高い関連性を示すものといえ、潤番田遺跡における象嵌青磁の量の多さならびに方枕が出土する理由の一つともいえる。

以上のように、象嵌青磁方枕の国内出土傾向をふりかえりつつ、潤番田遺跡出土例の位置づけを行なった。しかし、潤道跡の調査は今後も継続される予定であり、遺構の配置等、遺跡の全容が明らかにされた段階で、他の出土品と合わせて検討を改めて行いたい。(平尾和久)

【註】

- 九州歴史資料館小田和利・岡寺良氏御教示。
 - 山口市教育委員会北島大輔氏御教示。
 - 立命館大学高正龍氏御教示。
 - 福岡市教育委員会大庭康時・田上勇一郎氏御教示。
 - もちろん日本における東アジアの玄関口と称される博多遺跡とは貿易の規模・体制とにも比較できないほど小さなものであると思われるが、糸島地域では比較的等視されていた分野であるため今後の調査の進展に期待される。
 - 朝鮮半島を中心に製作された鐘を朝鮮鐘という。朝鮮鐘は王冠に勳勢がある龍頭と獣脚を備え、鐘扉部に華麗な装飾帯を巡らすものや、飛天像を陽刻するものもある。高麗時代の鐘は新羅時代のものと比べたが低い。なお、聖福寺所蔵の朝鮮鐘は総高99.5cm、胴身高76.8cm、口径61.3cmで、鐘扉の周辺に舞鳳の夫女と奏樂の天人を表現する。
 - 大友氏は弘安九(1286)年の弘安の役の遺棄として、幕府より怡土庄方摩方三百町忽地頭職を与えられたことで、糸島地域に遷出する。その後、大友氏は志摩郡に郡代を置き(志摩郡代)、郡内の新詔など当地の実務を行なった。特に注目されるのは、1550年代以前、博多に駐在する博多代官は志摩郡代の指揮下にあったことである。そのため志摩郡代は博多律内の新詔、朝鮮貿易、寺社の再興等をつかさどり、大友氏の命令を律内に伝達する役割も担っていた(堀本1997)。
- 今後の検討が必要であるが、このような性格をもつ大友氏の志摩郡代は潤番田遺跡出土の方枕の所有者の可能性があり、反社に象嵌青磁方枕が博多遺跡から出土しない所以かもしれない(今後、博多遺跡から出土しないとはいえない)。なお、現段階では大友氏関連遺跡から象嵌青磁の方枕は出土していない。
- 本稿をまとめるにあたり、下記の方から御教示を賜りました。記して感謝申し上げます。
高正龍・小田和利・岡寺良・大庭康時・小田富土雄・武木純一・桃崎祐輔・安武進史・藤島志孝・主税英徳・田上勇一郎・堀本一繁・高山英剛

【参考文献】

- 大阪市立東洋陶磁美術館編1992『高麗青磁への誘い』
石松好雄・横田賢次郎・赤司善彦・吉村晴雄編1990『大宰府史跡平成年発掘調査概報』九州歴史資料館
岡寺 良編2007『親世音寺』九州歴史資料館
岡寺 良編2010『大宰府史跡発掘調査報告書』九州歴史資料館
小畑弘己1983『博多における16世紀から17世紀初めの陶磁器組成—博多第60次調査の成果から—』『博多研究会誌』2
北島大輔編2010『大内氏跡跡X』山口市埋蔵文化財調査報告第101集
高 正龍1996『京都出土の高麗青磁象嵌方枕について』『研究紀要』2 財団法人京都市埋蔵文化財研究所
片山まゆみ2005『日本出土の「初期高麗」について—北九州地区の出土資料を中心に—』『貿易陶磁研究』25
京都市埋蔵文化財局編1980『平安京・京内三条三坊寺』『平安京発掘調査概報文化庁国庫補助事業による発掘調査の概況』
森本善治1989『新安海流遺跡の高麗白磁について—その生産史の推論と時代—』『貿易陶磁研究』9
佐藤一徳2008『朝鮮半島陶磁器』『中世都市博多を語る』海鳥社
手塚直樹1985『鎌倉出土の高麗青磁』『三上次男博多喜寿記念論文集』
西谷 正1983『九州・沖繩出土の朝鮮陶磁器に関する予報』九州文化史研究所紀要28
根津美術館1996『懸る鎌倉—遺跡発掘の成果と伝世の名品—』
福井県教育委員会・朝倉氏遺跡資料館編1988『一乗寺朝倉氏遺跡朝倉館連絡道路建設に伴う発掘調査報告書』
降矢有男2000『遺跡出土の高麗青磁』(南高古考)19
降矢有男2002『韓半島陶磁器の流通—高麗時代の青磁を中心に—』『貿易陶磁研究』22
文化庁館蔵文化財管理室1988『新安海流遺跡(総合編)』
堀本一繁1997『戦国期博多の防御施設について—「府城跡」考—』『福岡市博物館研究紀要』7
森川威洋・原正典編1976『福岡南ハバ島関係埋蔵文化財調査報告』3 福岡県教育委員会
森田誠1985『北部九州出土の高麗陶磁器—編年試案—』『貿易陶磁研究』5
森本朝子・片山まゆみ2000『博多出土の高麗—朝鮮陶磁器の分類試案—』『博多研究会誌』8
山本昌夫1985『九州地方出土の初期高麗青磁について—大宰府出土品を中心として—』『貿易陶磁研究』5
福岡文化財研究所2008『高州伏龍跡256番地遺跡1～N』福岡文化財研究所調査報告第148冊

II 潤古屋敷遺跡の大溝について

潤古屋敷遺跡では遺構として方形居館の大溝(濠)、住居跡2棟、土坑2基、溝3条、柱穴群多数他を確認している。そのなかでも、方形居館の大溝(濠)については当該遺跡の所在地の字名との関連を指定できる。このことを踏まえて、ここでは大溝について纏めて今回の調査報告の終わりとしたい。

大溝は潤古屋敷遺跡の調査区の中央部から北側にかけて確認され、南北方向に長さ64m、東西方向に幅7m、深さ1.2mを測る。主軸は北から西方向に15°傾く。断面形はV字形を呈し、層位としては2層に分かれる。調査区の制約のため、大溝全体を検出できなかった。今回の調査区の北側さらに続く想定され、一辺約70mをこえる規模の方形居館の大溝(濠)の一部であると考える。土師皿などの生活雑器と輸入陶磁器の出土状況から13世紀から14世紀代にかけて機能し、上層出土白磁小坏等より15世紀代にかけてその役割を終えて埋没したと考える。なお、調査区の水位が比較的が高いことから、この大溝は空堀(壕)ではなく水濠(濠)の可能性が高い。岡寺氏の分類では方形居館遺跡①類(13世紀後半を中心とし、南北朝期の内には廃絶するもの)に相当すると考える。

大溝が機能していた13世紀から14世紀代における糸島地域(怡土郡・志摩郡)には「怡土荘」が所在していた。怡土荘とは怡土郡・志摩郡に12世紀半ばから15世紀初めまで存続した仁和寺法金剛院の荘園である。その分布は史料に見える地名を地図の上に復原すると怡土・志摩郡の大半を示めし、怡土・志摩両郡の田地約64.6%を占めると推定されている。その怡土荘に潤古屋敷遺跡は包括されていた。大溝が13世紀から14世紀代にかけて機能し、15世紀代にかけてその役割を終えて埋没したと考えると、怡土荘の存続時期と重なり、同荘との関連を指摘できる。

その当該遺跡と怡土荘との関連を示す文献史料がある。嘉元三年(1305)八月二日付鎮西探題上総介(北条政顕)裁許状(「大友文書」)がそれである。この史料によると、元寇の後、恩賞として大友頼泰が怡土荘の総地頭職を鎌倉幕府より拝領するのであるが、孫の貞親の代になって37名の名主の抵抗にあい不知行の状態であったため、大友貞親が正安4年(1302)正月に鎌倉幕府に訴訟を起こしている。年貢・公事の息納だけではなく、地頭への加徴米を差し出す名主は全くなく地頭の悪口を言う者すらいたのであった。そのように大友氏に抵抗した37名の名主(小地頭)のなかに「潤氏」(潤孫三郎)の名を確認できるのである。

さらに、当該遺跡所在地の字名は「古屋敷」、県道を挟んだ東側には「地頭給」の字名が残る。今回の調査結果、嘉元三年八月二日付鎮西探題上総介(北条政顕)裁許状、そして字名の三者を照らし合わせると、潤一帯においては、地頭職として「潤氏」が任ぜられ、当該遺跡所在地にその「屋敷」(古屋敷)が構築され、東側隣接地には地頭としての職田もしくは給田(地頭給)が所在したと考えられる。その結果、当該遺跡所在地に「古屋敷」、県道を挟んだ東側には「地頭給」の字名が今日まで残ったと考えることができる。

ところで、このほかに『筑前國統風土記』には潤地区に関して興味深い記述がある。同書によると、潤村には臨濟宗の「平等寺」(所在地不明)が存在し、境内の規模は方一町あったと記されている。ここで平等寺の所在地を当該調査区一帯であったと仮定すると、今回確認できた大溝がその平等寺の方一町の寺域を示す「濠」の一部であったと考えることもできる。この理解に基づくと、平等寺の建物群が構築されていたために「古屋敷」、県道を挟んだ東側には地頭(氏名

等不明)の職田もしくは給田が所在したために「地頭給」の字名が今日まで残ったと考えることができる。

以上、大溝に関して様々な解釈が可能となるが、現時点においてその全容については不明な点が多いため、今回の報告では二通りの解釈の紹介に止めることにする。なお、今後の周辺における調査・研究によりその解釈が変更する可能性がある。その意味においても今後の周辺における調査・研究に期待するところが多く、このテーマについては新たな調査・研究を待ち別稿において再度考察したいと思う。(瓜生秀文)

【参考文献】

- 四寺 良 2009「北部九州の方形城館について—筑前の事例を中心に—」[「中世城郭研究」第23号 中世城郭研究会 新城第三・正木喜三郎 1963「筑前国怡土荘史料—九州荘園史料叢書4—」
正木喜三郎 2005「怡土荘」[講座 日本荘園史10—四国・九州地方の荘園 吉川弘文館

Ⅲ 糸島市潤番田遺跡出土のガラス小玉について

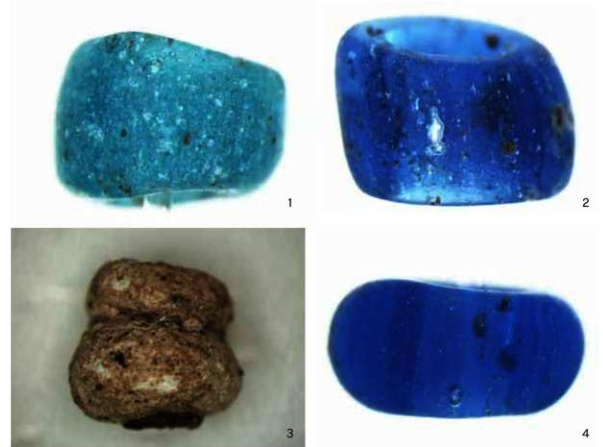
福岡市埋蔵文化財センター 田上勇一郎

潤番田遺跡から出土した4点のガラス小玉について実体顕微鏡観察による製作技法の調査と蛍光X線分析による材質分析をおこなったので報告する。

1は淡青色を呈する玉で、顕微鏡観察で孔に対して平行方向に気泡列が観察されたので、引き伸ばし法により製作されたことがわかる。蛍光X線分析の結果、ガラスの主成分であるケイ素(Si)のほかに、カリウム(K)のピークが見られ、カリガラスに分類された。また、銅(Cu)、鉛(Pb)のピークが見られることから、青銅による着色であることが確認された。

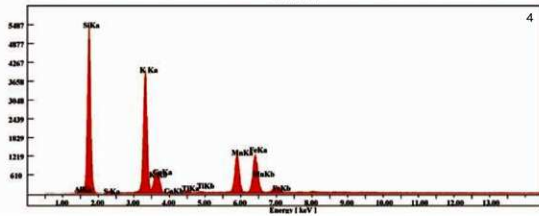
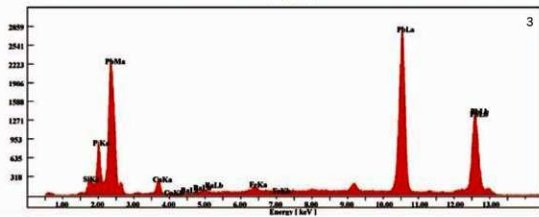
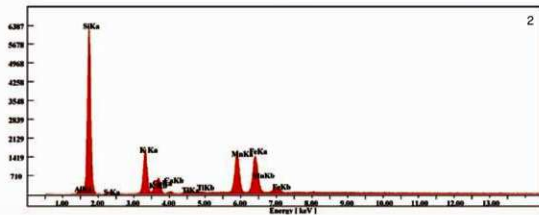
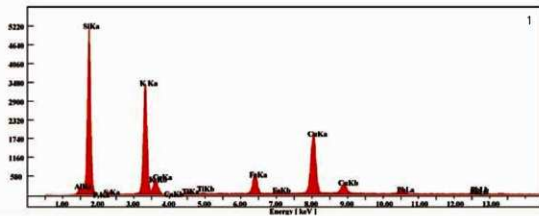
2と4は青紺色を呈する玉で、顕微鏡観察で孔に対して平行方向に気泡列が観察されたので、引き伸ばし法により製作されたことがわかる。蛍光X線分析の結果、ガラスの主成分であるケイ素(Si)のほかに、カリウム(K)のピークが見られ、カリガラスに分類された。コバルト(Co)のピークは明瞭ではないが、これに伴うとされるマンガン(Mn)のピークが認められるため、コバルトによる着色であると考えられる。

3は風化が進んだ玉で、2つが連なっている。蛍光X線分析の結果、ガラスの主成分であるケイ素(Si)のほかに、鉛(Pb)のピークが明瞭に認められた。また、バリウム(Ba)のピークは明瞭に認められなかった。よって鉛ガラスと確認された。



ガラス小玉の顕微鏡写真

写真図版



蛍光X線スペクトル



a. 洞番田遺跡調査区南側透景



b. 洞番田遺跡調査区南側全景

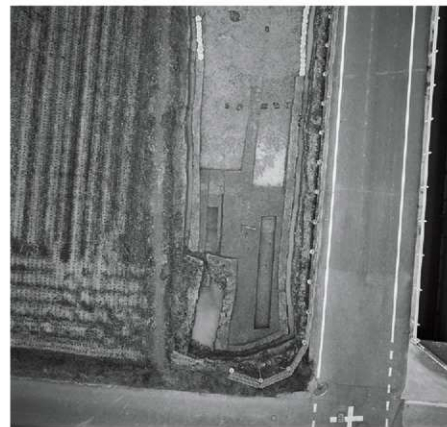


a. 洞番田遺跡調査区北側遠景



b. 洞番田遺跡調査区北側全景

图版2



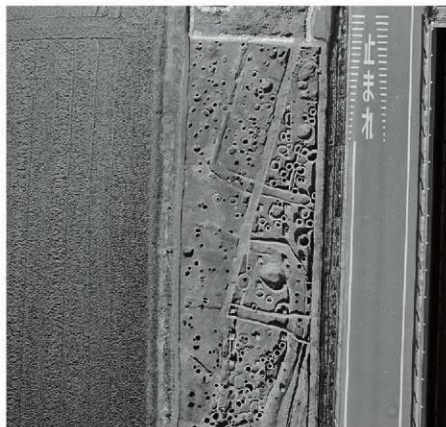
a. 洞番田遺跡調査区南側谷部全景



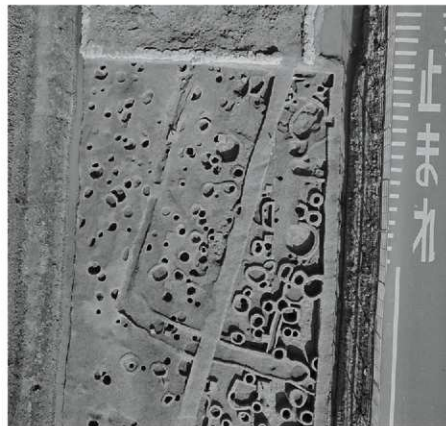
b. 2号溝、1・2号井戸全景

图版3

图版4

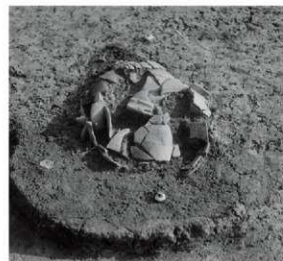


a. 4・5・8～10号掘立柱建物全景



b. 8～10号掘立柱建物全景

图版5



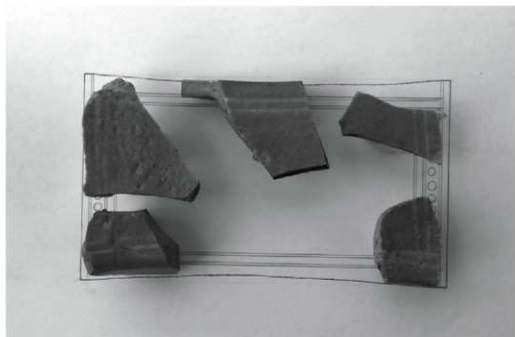
a. 夏棺検出状況



b. 24号土坑検出状況



c. 2号溝完掘状況



a. 洞番田遺跡出土象嵌青磁方枕



b. 洞番田遺跡出土象嵌青磁



26-9



26-8



28



27-2



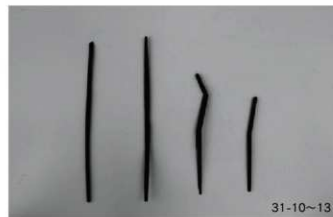
27-7



30-1

30-16

30-3



31-10~13



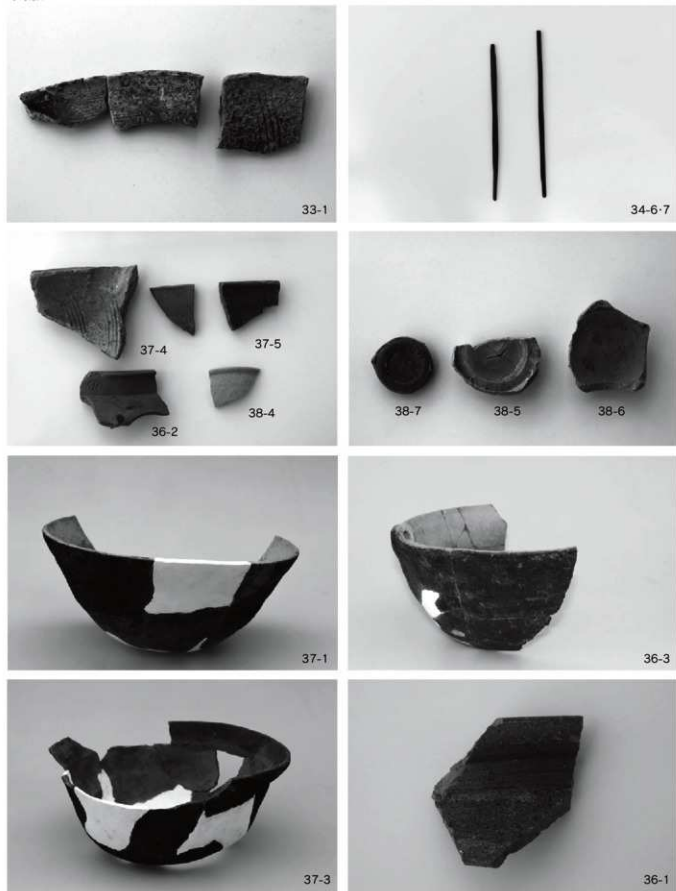
32-4

32-1

32-2

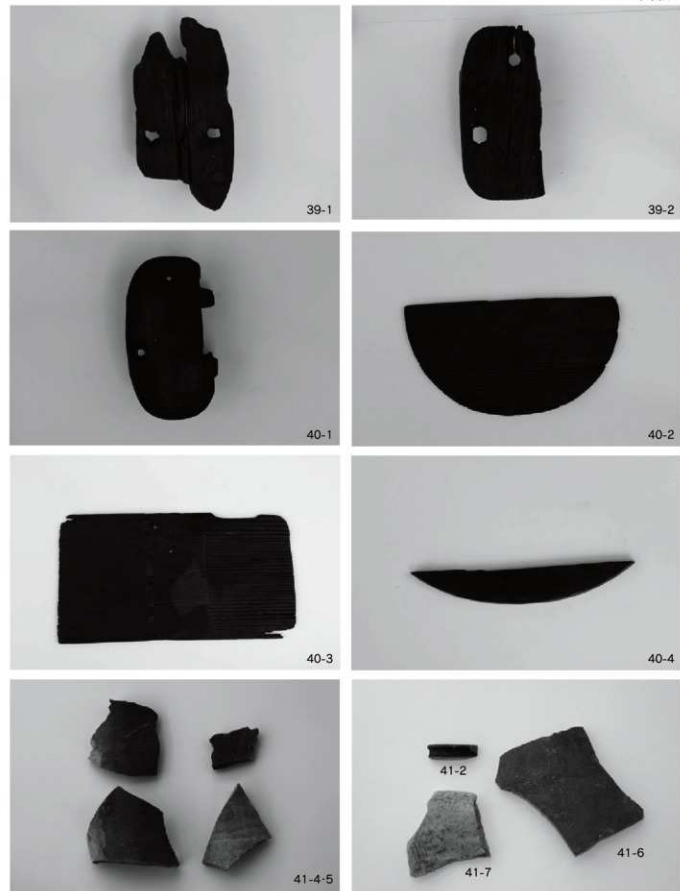
1~3号井戸出土遺物

图版8



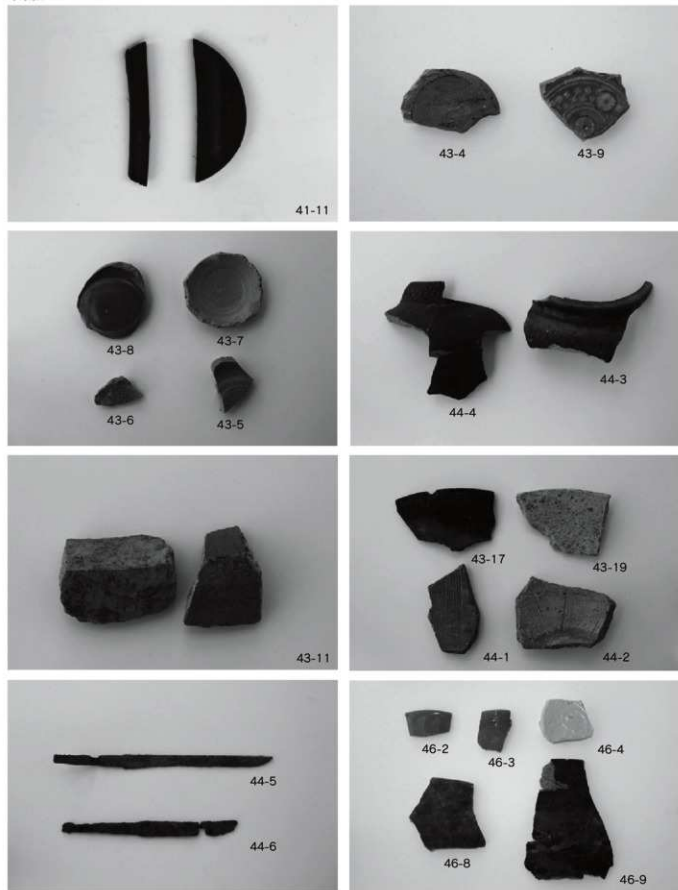
4~6号井戸出土遺物

图版9



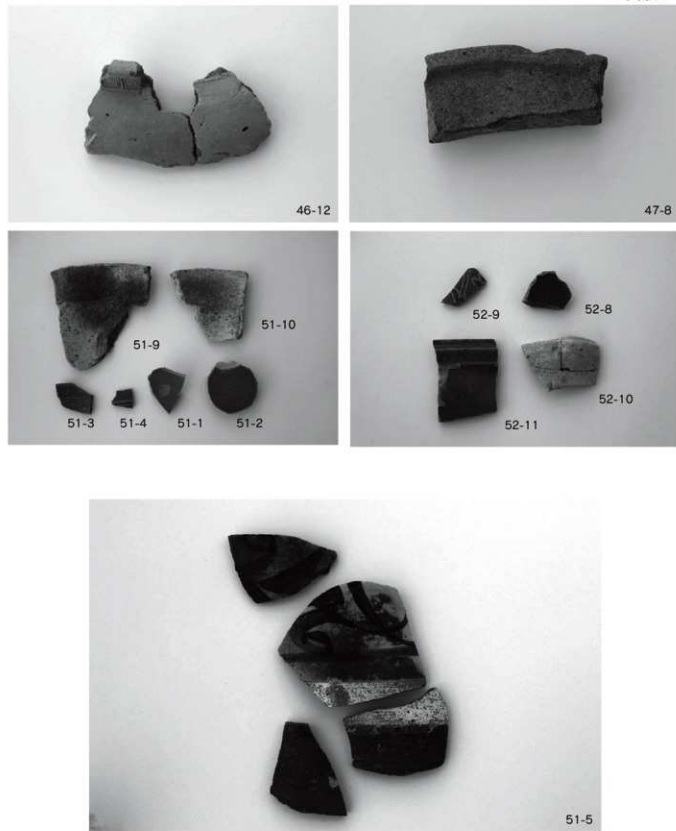
6-7号井戸出土遺物

图版10



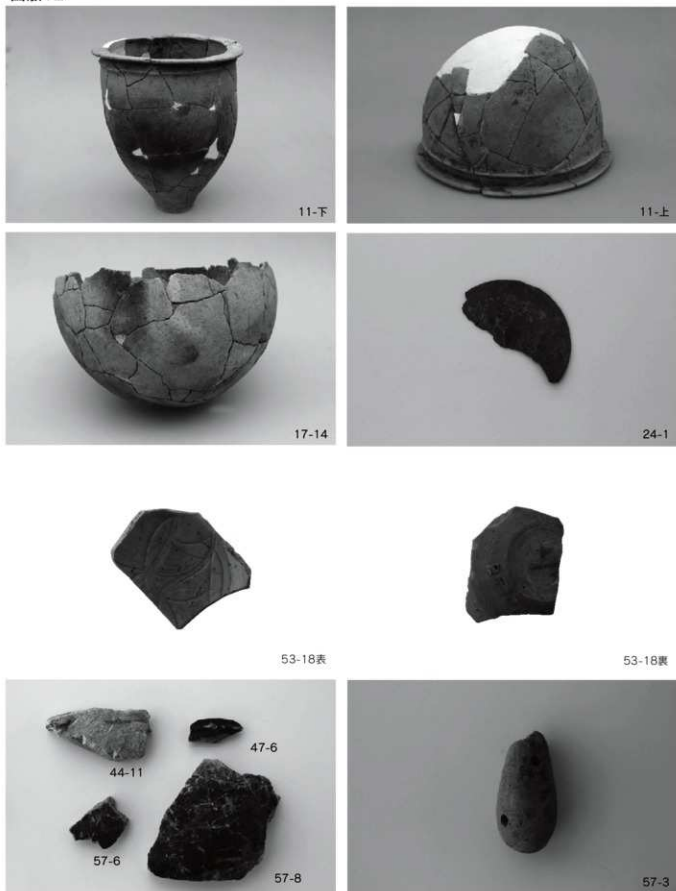
7号井戸・2号・5号溝出土遺物

图版11



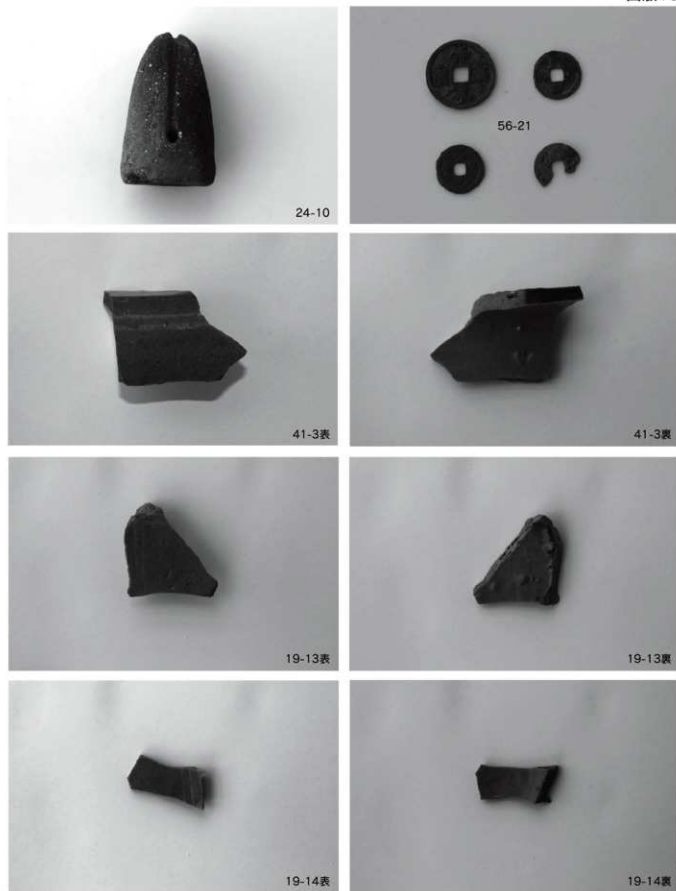
5号・6号・17号・24号溝出土遺物

図版12



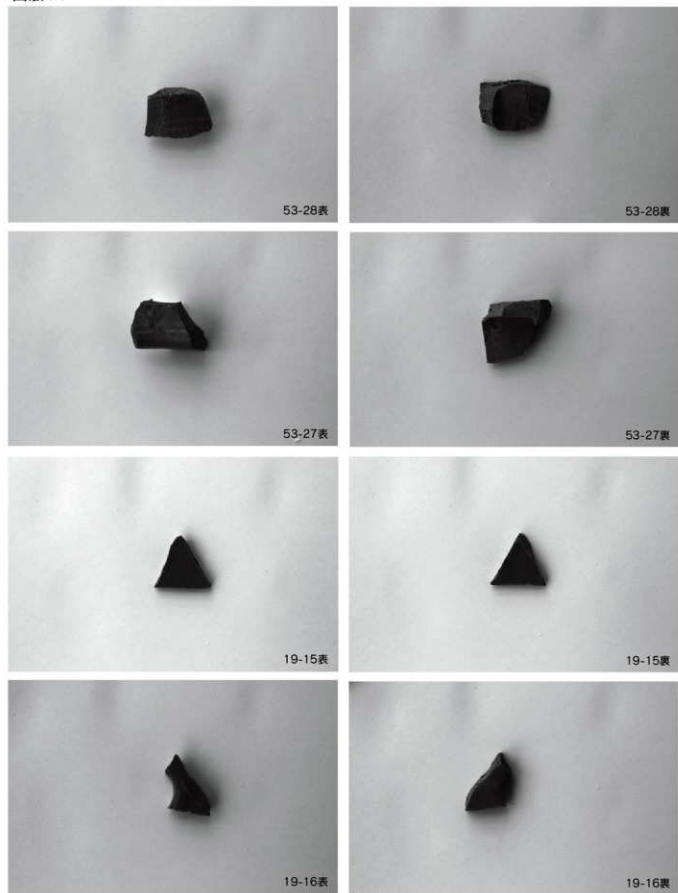
墓棺・土坑・包舎層出土遺物

図版13



ビット・包舎層出土遺物・各遺構出土象嵌青磁方杖

図版14



各遺構出土象嵌青磁方枕

図版15



a. 洞古屋敷遺跡調査区全景(南より)



b. 洞古屋敷遺跡調査区全景(西より)



a. 洞古屋敷道跡調査区北側全景



b. 洞古屋敷道跡調査区南側全景



a. 2号住居跡全景



b. 2号住居跡土器出土状況



c. 1号土坑全景



d. 1号土坑土器出土状況

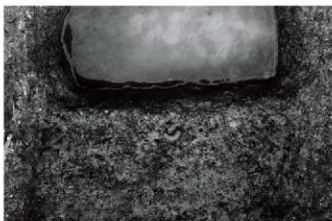


e. 1号土坑土器出土状況

图版18



a. 2号土坑全景



b. 2号土坑勾玉出土状况



c. 1号井戸全景



d. 2号井戸全景



e. 大溝全景

图版19



a. 大溝土層



b. 1号溝全景



c. 2号溝全景

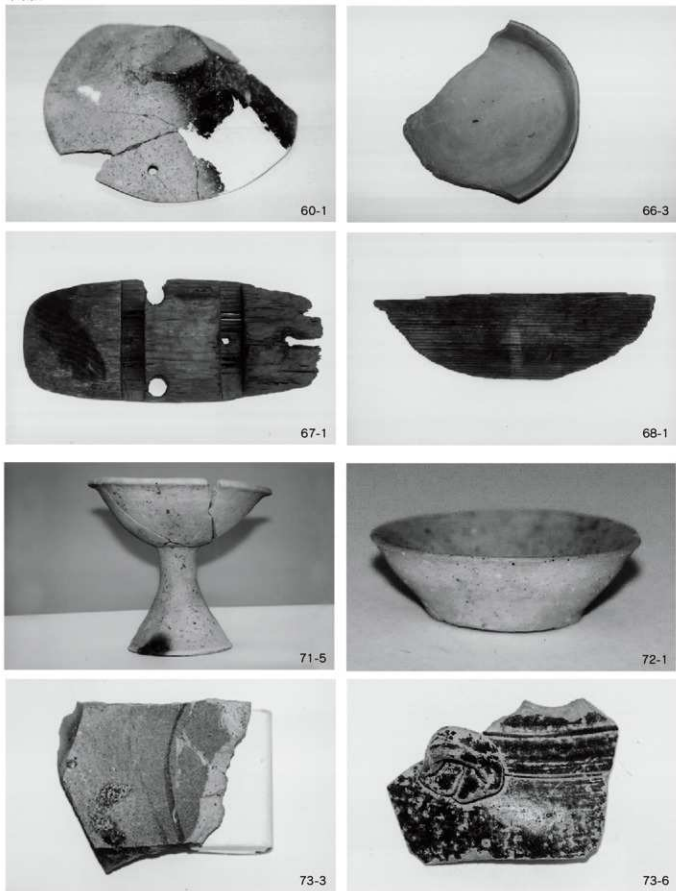


d. 2号溝土器出土状况



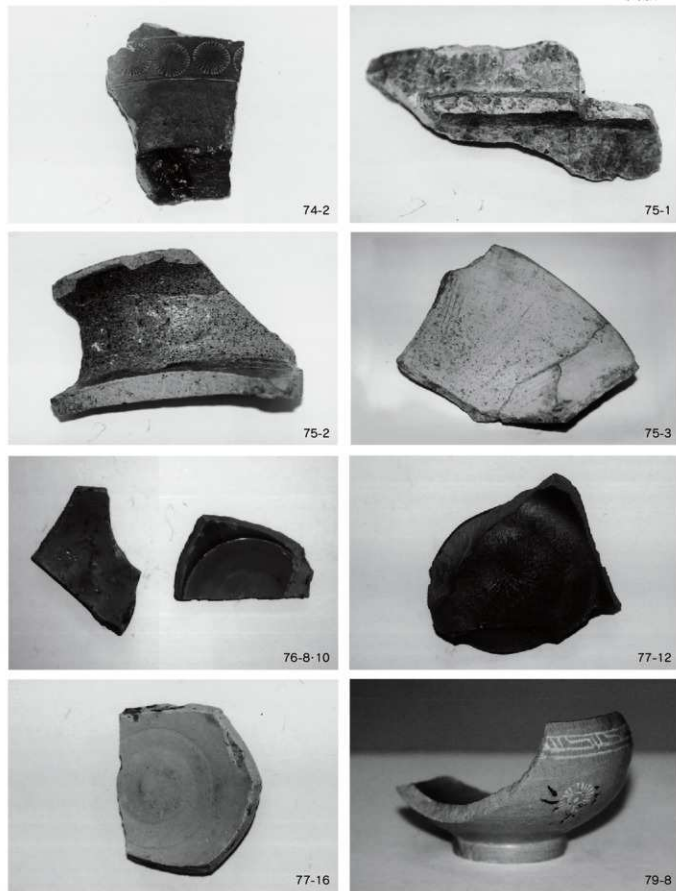
e. 3号溝全景

图版20



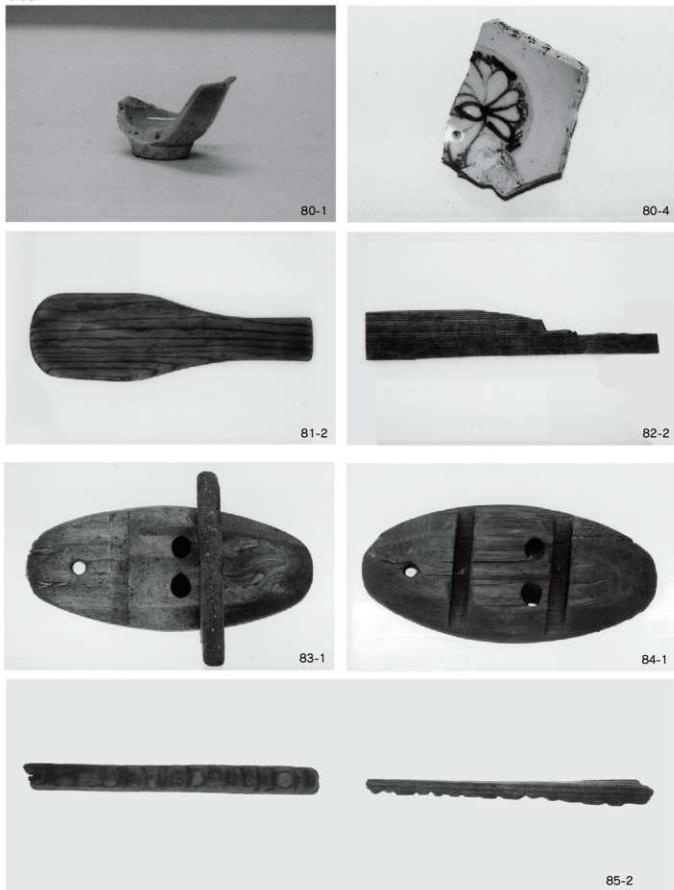
2号住居・井戸・大溝出土遺物

图版21



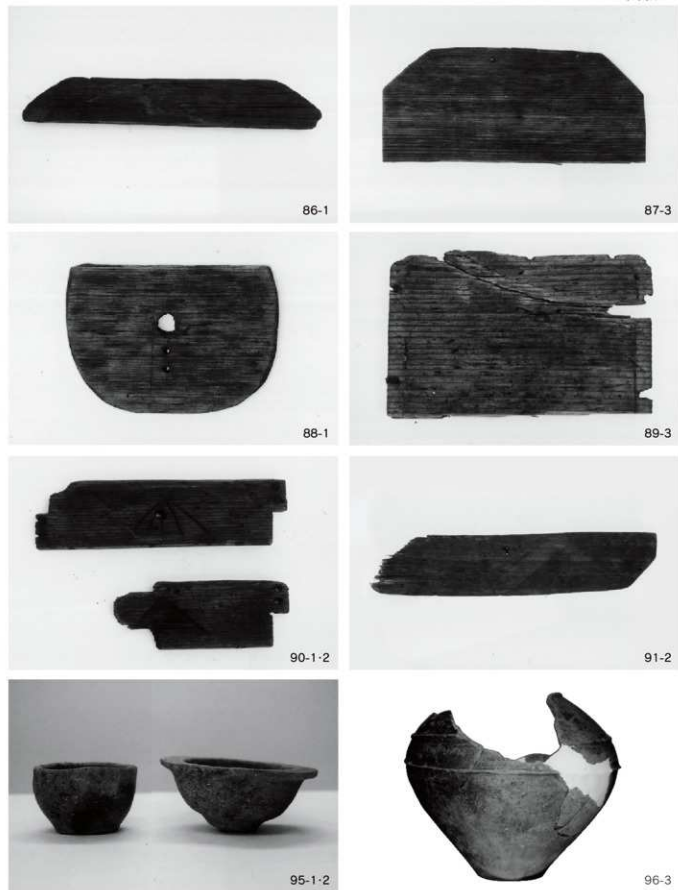
大溝出土遺物

图版22



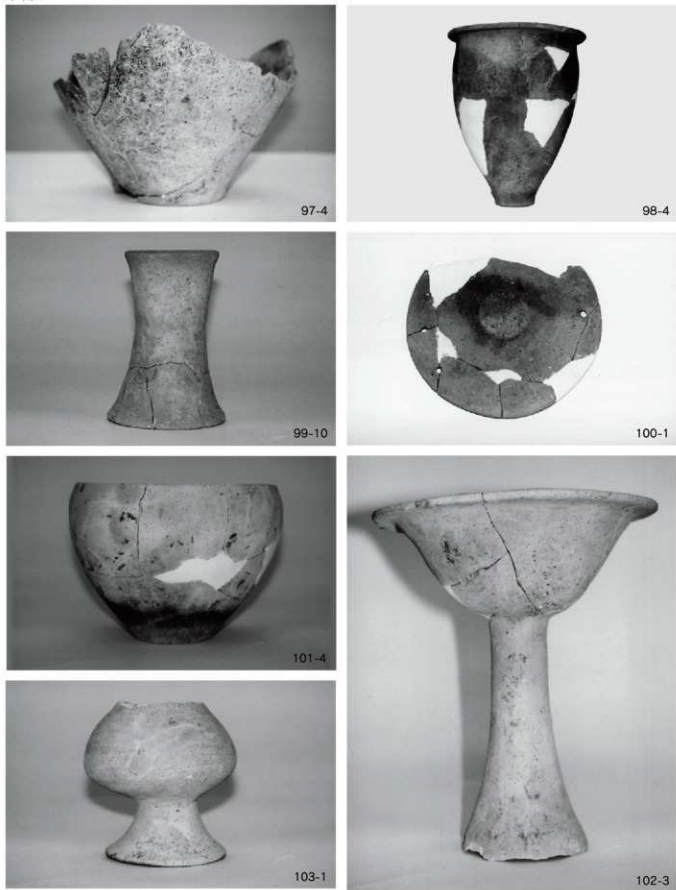
大溝出土遺物

图版23



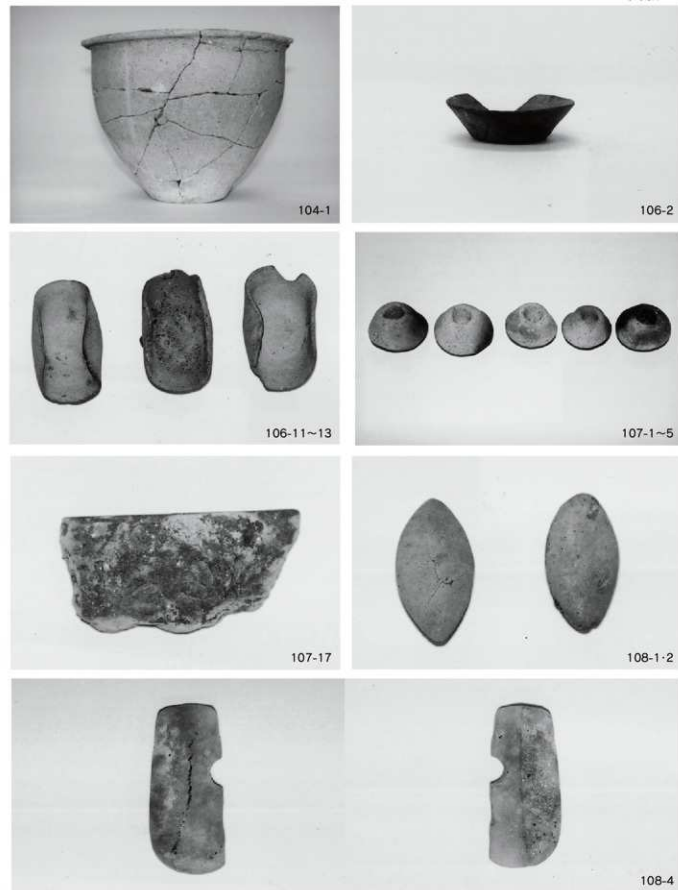
大溝・2号溝出土遺物

图版24

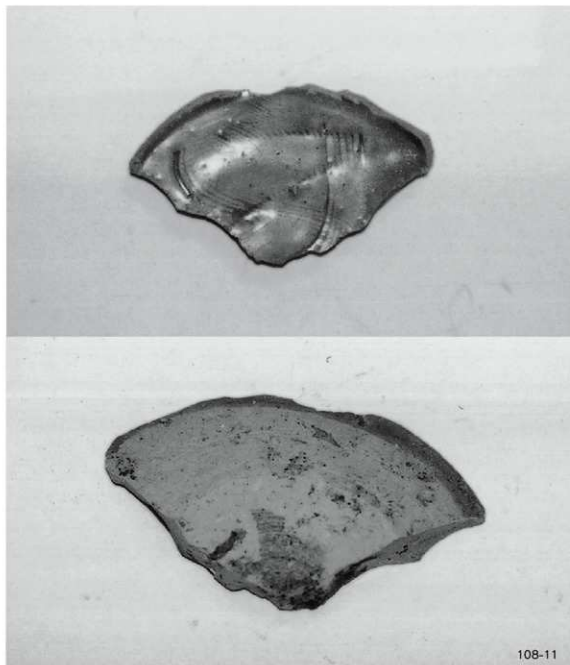
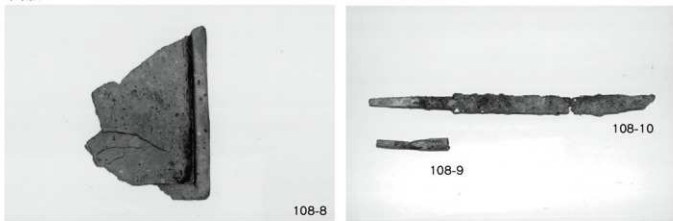


2号溝出土遺物

图版25



2号溝・3号溝・表探出土遺物



表採・その他の出土遺物

報告書抄録

| | | | | | | | |
|--------|---------------------------|---------|----------------------|--------------------------------------------------------------|---------------------------------------------|-------|------|
| ふりがな | うるういせきぐん2 | | | | | | |
| 書名 | 潤遺跡群II | | | | | | |
| 調査名 | 県道泊波多江線拡幅に伴う潤番田・潤古屋敷遺跡の調査 | | | | | | |
| 色次 | | | | | | | |
| シリーズ名 | 糸島市文化財調査報告書 | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第6集 | | | | | | |
| 編著者名 | 瓜生秀文・平尾和久(編)・田上勇一郎(科学分析) | | | | | | |
| 編修機関 | 糸島市教育委員会 | | | | | | |
| 所在地 | 〒819-1312 福岡県糸島市志摩初30番地 | | | | | | |
| 発行年月日 | 西暦2012(平成24)年3月31日 | | | | | | |
| ふりがな | ふりがな | コード | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
| 所収遺跡名 | 所在地 | 市町村 | 遺跡番号 | | | | |
| 潤番田遺跡 | 福岡県糸島市潤 | | | | 2009.11 ～ 2010.3 | 1500㎡ | 県道拡幅 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 | | |
| 潤番田遺跡 | 集落 | 弥生中期、中世 | 溝、土船塀、 掘立柱建物(屋敷地) | 白磁、青磁、象嵌青磁、 土師器、須恵器、黒色土器、 瓦器、瓦葺土器、瓦葺(5十程)、 石鏡、刀子、墨広 | 中世の屋敷地を確認。 方枕や筒系竈・櫓を 含む象嵌青磁が 多数出土。 | | |
| ふりがな | ふりがな | コード | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
| 所収遺跡名 | 所在地 | 市町村 | 遺跡番号 | | | | |
| 潤古屋敷遺跡 | 福岡県糸島市潤 | | | | 2009.11 ～ 2010.3 | 1500㎡ | 県道拡幅 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 | | |
| 潤古屋敷遺跡 | 集落 | 弥生中期、中世 | 区画溝、井戸、 居間の堀 | 白磁、青磁、象嵌青磁、 土師器、須恵器、黒色土器、 瓦器、瓦葺土器、瓦、石鏡 | 居間の堀を確認。 | | |

潤遺跡群II

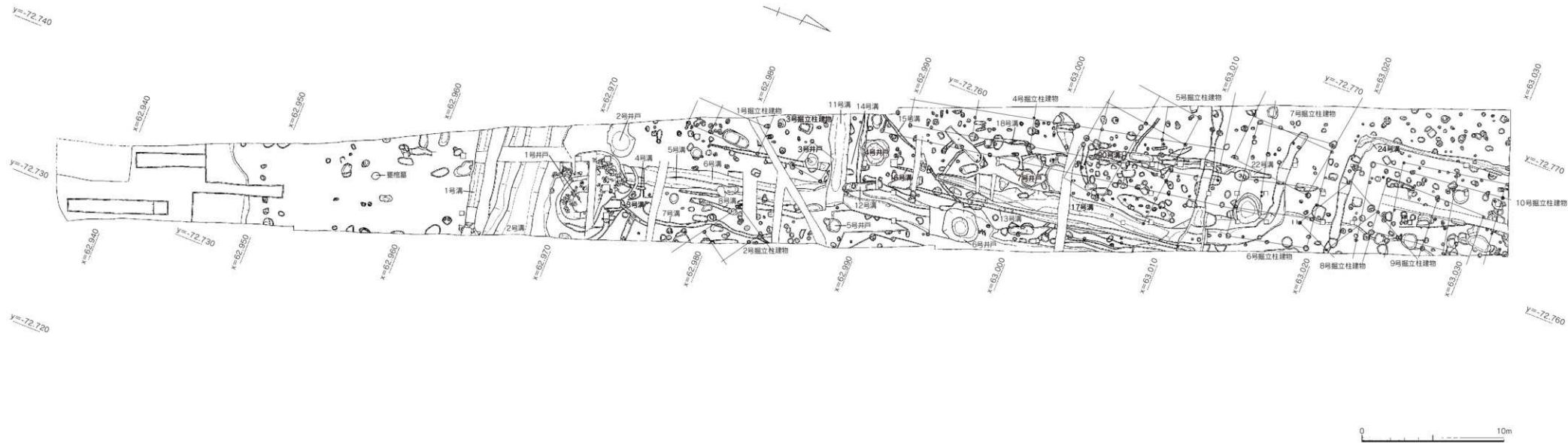
— 県道泊波多江線拡幅に伴う潤番田・潤古屋敷遺跡の調査 —

糸島市文化財調査報告 第6集

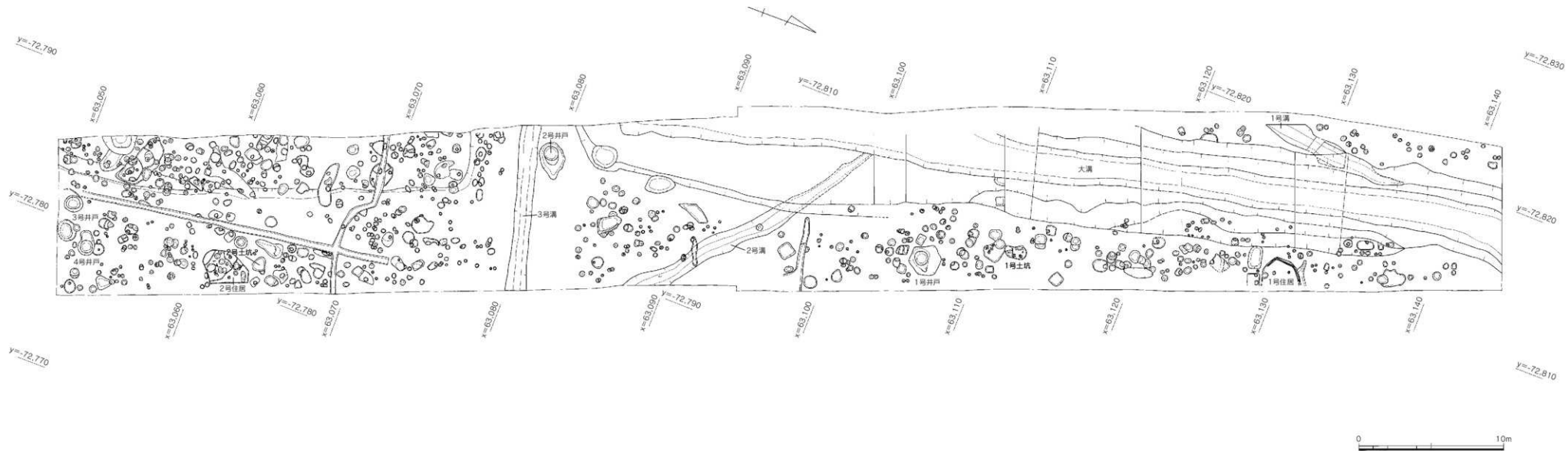
平成24(2012)年3月31日発行

発行 糸島市教育委員会
福岡県糸島市志摩初30番地
TEL 092-332-2093

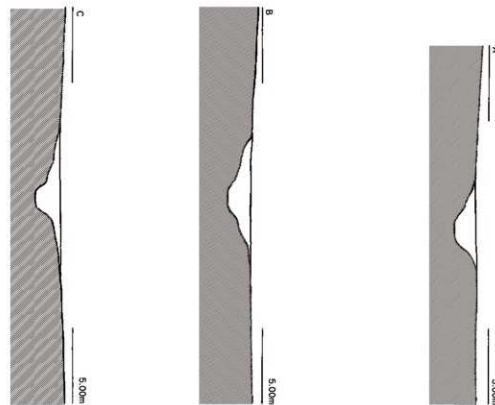
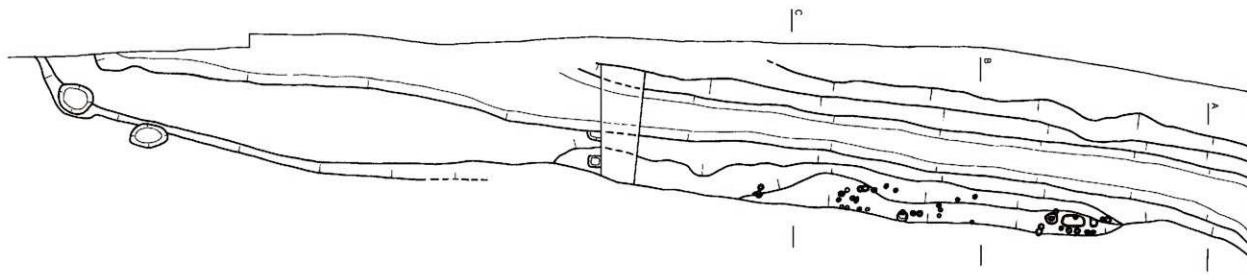
印刷 株式会社アイスジャパン
福岡市中央区大名一丁目9番30号
TEL 092-712-0431 FAX 092-761-3087



付図1 潤番田遺跡全体図 (1/200)



付図2 洞古屋敷遺跡全体図 (1/200)



付図3 洞古屋敷遺跡大溝実測図 (1/200)

